高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告　第11冊

西浦谷遺跡

2007年3月

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局

序　　文

西浦谷遺跡は、高松東道路の建設に伴って発掘調査が行われた、香川県木田郡三木町池戸に所在する遺跡です。

発掘調査は、香川県教育委員会からの委託で、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターによって平成７・８年度に実施され、弥生時代中期末の高地性集落跡と古墳時代後期の横穴式石室を持つ古墳が検出されました。なかでも弥生時代中期末の高地性集落跡からは大規模な掘立柱建物跡や焼失家屋跡、段状遺構などが見つかり、瀬戸内地方の高地性集落の一端を明らかにすることができました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、国土交通省四国地方整備局及び関係諸機関、地元関係者各位に多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年３月

香川県埋蔵文化財センター

所長　　渡　部　明　夫

例　　言

1．本報告書は、高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の第11冊で、香川県木田郡三木町池戸に所在する西浦谷遺跡（にしうらたにいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が国土交通省四国地方建設局（当時）から委託され、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は、以下のとおり実施した。

（平成７年度）

調査期間　　平成７年４月１日～平成８年３月31日

調査担当　　森下　友子　　吉田　　智　　森澤　千尋

（平成８年度）

調査期間　　平成８年10月１日～平成９年１月31日

森下　友子　　樋本　清輝　　三好　弘美

4．報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。
本書の執筆・編集は同センター文化財専門員山元素子が担当した。

5．調査に当っては、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
国土交通省四国地方整備局　　三木町教育委員会　　地元自治会　　地元水利組合

6．本報告書で用いる北は、旧国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高はＴ.Ｐ.を基準としている。
また、遺構の略号は以下のとおりである。
ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＥ：井戸跡　ＳＤ：溝状遺構　ＳＩ：段状遺構　ＳＫ：土坑
ＳＰ：柱穴跡　ＳＸ：性格不明遺構
また、遺構名の最後に記した大文字のアルファベットは調査地の以下の位置を表す。
Ａ：丘陵頂部　　Ｂ：丘陵南西部尾根上　　Ｃ：丘陵南斜面　　Ｄ：丘陵東斜面
Ｅ：丘陵北部谷部　Ｆ：丘陵北西部尾根上　　Ｇ：丘陵西斜面

7．石器実測図中、スクリーントーンの部分は摩滅痕を、輪郭線の回りの実線は潰れを表す。
なお、現代の折損は濃く黒で塗りつぶしている。

8．本報告に当っては、下記の機関に業務を委託した。

鉄製品保存処理……吉田生物研究所

遺物写真撮影……美巧社

9．遺構断面図及び土器観察表の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1998年度版』による。

10. 出土遺物観察表中の土器の残存率は図化のために径を計測した箇所の全体に対する割合で、完形品に対する割合ではない。

本 文 目 次

序文

例言

第１章　調査に至る経緯と経過……1

第２章　立地と環境
　第１節　地理的環境……5
　第２節　歴史的環境……5

第３章　調査の成果
　第１節　土層序……21
　第２節　遺構・遺物
　　1　弥生時代中期末～後期前半の遺構・遺物……21
　　2　古墳時代の遺構・遺物……126
　　3　近世以降・時期不明遺構……147

第４章　まとめ……155

挿 図 目 次

第１図　遺跡の位置（1）（1/600,000）　……1
第２図　遺跡の位置（2）（1/10,000）　……3～4
第３図　周辺の遺跡（1/40,000）　……6
第４図　調査区割図（1/1,000）　……8
第５図　Ⅱ-1・2区北壁土層断面図（1/80）　……9～10
第６図　Ⅲ-2区南壁土層断面図（1/80）　……11～12
第７図　Ⅳ区南壁土層断面図（1/80）　……13～14
第８図　Ⅰ-1・2区遺構配置図（1/300）　……15～16
第９図　Ⅲ-1・2区、Ⅳ・Ⅴ区遺構配置図（1/300）　……17～18
第10図　Ⅳ・Ⅴ区遺構配置図（1/300）　……19～20
第11図　SH02D平・断面図（1/60）　……22
第12図　SH02D出土遺物（1/4・1/2）　……23
第13図　SH03D平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4・1/2）　……24
第14図　SH04D平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4・1/2）　……26
第15図　SH05F・SD05F平・断面図（1/60）、SH05F出土遺物（1/2）　……27
第16図　SH06A平・断面図（1/60）　……28
第17図　SH07A平・断面図（1/60）　……30
第18図　SH07A、Ⅲ-1区SP05出土遺物（1/4・1/2）　……31
第19図　SH08A平・断面図（1/60）、Ⅱ-1区SP15出土遺物（1/2）　……32
第20図　SH09A平・断面図（1/60）　……33
第21図　SH11A平・断面図（1/60）　……35
第22図　SH12A平・断面図（1/60）　……35
第23図　SH13A平・断面図（1/60）　……36
第24図　SH14B平・断面図（1/60）、遺物出土状況平面図（1/20）　……37～38
第25図　SH14B断面図①～⑥（1/60）　……39
第26図　SH14B柱穴配置図（1/60）　……40
第27図　SH14B炭化材出土状況平面図・断面見通し図(1/40)、遺物出土状況平面図(1/20)　…41～42
第28図　SH14B炭・焼土の範囲（1/50）　……43
第29図　SH14B出土遺物（1/4・1/2）　……44
第30図　SH15B平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）　……45
第31図　SH16C平・断面図（1/60）、遺物出土状況平面図（1/20）、出土遺物（1/4）　……46
第32図　SH17C遺物出土状況平面図（1/20）、平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4・1/2）　……47
第33図　SH18C平・断面図（1/60）、遺物出土状況平面図（1/20）、出土遺物（1/4）　……48
第34図　SH19C平・断面図（1/60）、遺物出土状況平面図（1/20）　……49
第35図　SH19C出土遺物（1/4・1/2）　……50
第36図　SH21B・25B～27B、SD21B平・断面図（1/60）、遺物出土状況平面図（1/20）　……51～52

第37図　SH21B・25B・27B出土遺物（1/4・1/2）……53
第38図　SH22B平・断面図（1/60）、出土遺物（1/2）……54
第39図　SH23B平・断面図（1/60）……55
第40図　SH24C平・断面図（1/60）、遺物出土状況平面図（1/20）、出土遺物（1/4・1/2）……56
第41図　SB01A平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）……58
第42図　SB02A平・断面図（1/60）……59
第43図　SB03A平・断面図（1/60）……59
第44図　SB04B平・断面図（1/60）……60
第45図　Ⅳ区SP20遺物出土状況平・断面図（1/20）……61
第46図　Ⅳ区SP20出土遺物（1/4・1/2）……62
第47図　Ⅲ-2区SP30遺物出土状況平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）……63
第48図　ピット出土遺物（1/2・1/4）……63
第49図　SK004C、Ⅳ区SP22遺物出土状況平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4・1/2）……64
第50図　SI01C、SK001C～007C、Ⅳ区SP22平・断面図（1/40）……65～66
第51図　SK001C～003C・005C・007C断面図（1/40）、出土遺物（1/4）……67
第52図　SI01C出土遺物（1/4・1/2）……68
第53図　SI02C、Ⅳ区SP18出土遺物（1/4・1/2）……69
第54図　SI02C、SK008C～011C、Ⅳ区SP18・20・51平・断面図（1/20）……71～72
第55図　SI03C平・断面図（1/40）、遺物出土状況平面図（1/20）……73
第56図　SI03C出土遺物（1/4）……75
第57図　SI04C平・断面図（1/40）、遺物出土状況平面図（1/20）、出土遺物（1/4）……76
第58図　SI06C・07C平・断面図（1/40）、SI07C出土遺物（1/4）……77～78
第59図　SI05C、SK012C平・断面図（1/40）……79
第60図　SK013A～016A平・断面図（1/40）、SK013A出土遺物（1/4）……80
第61図　SK021A～024A平・断面図（1/40）、SK023A出土遺物（1/4）……82
第62図　SK031A・032A平・断面図（1/40）、SK032A遺物出土状況平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）…83
第63図　SK041～043A・044B平・断面図（1/40）……84
第64図　SK051A～053A平・断面図（1/40）……85
第65図　SK061A平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）……86
第66図　SK071B～075B平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）……87
第67図　SK072B・074B・075B出土遺物（1/4・1/2）……88
第68図　SK091B～094B平・断面図（1/40）、SK091B出土遺物（1/2）……90
第69図　SK101B～105B平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）……91
第70図　SK111B～117B平・断面図（1/40）、SK115B出土遺物（1/4）……93
第71図　SK121C～123C平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）……95
第72図　SK131C遺物出土状況平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）、SK132C・133C平・断面図（1/20）…96
第73図　SK141C平・断面図（1/40）、遺物出土状況平面図（1/20）、出土遺物（1/4・1/2）……97
第74図　SK151C～160C平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）……99～100
第75図　SK161C～164C平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）……103

第76図　SK171C平・断面図（1/40）……104
第77図　SK181C～185C平・断面図（1/40）、SK183C出土遺物（1/4）……105
第78図　SK191C～193C平・断面図（1/40）……106
第79図　SK201C・202C平・断面図（1/40）……107
第80図　SK211C～213C平・断面図（1/40）……108
第81図　SK221C～222C平・断面図（1/40）、SK221C出土遺物（1/4）……109
第82図　SK211C遺物出土状況平・断面図（1/20）……110
第83図　SK241C～246C平・断面図（1/40）……111
第84図　SK251C～253C平・断面図（1/40）……112
第85図　SK261D～263D平・断面図（1/40）……113
第86図　SK271D・272D平・断面図（1/40）……114
第87図　SK281D～283D平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）……115
第88図　SK291D～293D平・断面図（1/40）……116
第89図　SK301D～304D平・断面図（1/40）……117
第90図　SK311D～314D平・断面図（1/40）……119
第91図　SK321D～324D平・断面図（1/40）、SK322D出土遺物（1/4）……120
第92図　SK331D～336D平・断面図（1/40）……122
第93図　SK341E～344E平・断面図（1/40）……123
第94図　SK351F・352G平・断面図（1/40）……124
第95図　SK361G～364G平・断面図（1/40）……125
第96図　1号墳地形測量図（1/100）……127～128
第97図　1号墳平面図（1/80）……129～130
第98図　1号墳トレンチ土層断面図（1）（1/60）……131～132
第99図　1号墳トレンチ土層断面図（2）（1/60）……133～134
第100図　1号墳平・立・断面図（1/60）……135～136
第101図　1号墳羨道閉塞石平・断面図（1/40）……137
第102図　1号墳石室内遺物出土状況平面図（1/40）……139
第103図　1号墳石室内・羨道部出土遺物（1/4・1/2）……140
第104図　1号墳墳丘出土遺物（1）（1/4）……141
第105図　1号墳墳丘出土遺物（2）（1/4・1/2）……142
第106図　1号墳周溝出土遺物（1/4）……143
第107図　1号墳石室内撹乱・表土中出土遺物（1/4・1/2）……144
第108図　ST01出土遺物（1/4）……144
第109図　ST01平・断面図（1/20）……145～146
第110図　SX01D・02D平・断面図（1/40）……148
第111図　SX03D平・断面図（1/40）……149
第112図　SX04D平・断面図（1/40）、出土遺物（1/2）……150
第113図　SD01D・03D・08D～11D断面図（1/40）、出土遺物（1/4）……151
第114図　SD02F・04F・06D・21B断面図（1/40）、出土遺物（1/4）……152

第115図　Ⅰ～Ⅳ区包含層出土遺物（1/4・1/2）……153
第116図　Ⅴ区包含層出土遺物（1/4・1/2）……154

表　目　次

第１表　調査の体制……2
第２表　整理作業の工程……2
第３表　SH14B柱穴一覧表……40
第４表　竪穴住居跡一覧表……158
第５表　土坑一覧表……159

図　版　一　覧

遠景（北から三木町中心部を望む）
遠景（東から高松平野を望む）（図版１）
遠景（南から屋島を望む）
遠景（西から）
Ⅰ区全景（西から）
Ⅰ区全景（南から）（図版１）
Ⅱ区全景（北から）
Ⅳ区全景（東から）
Ⅰ-1区調査前風景（(北より)）
Ⅰ-1・2Ⅲ-1区東斜面全景（北より）（図版１）
Ⅰ-2区北斜面全景（東より）
Ⅲ-1区全景（西より）（図版１）
Ⅳ区全景（東より）
Ⅳ区全景南（西より）
Ⅰ-1・2区SH02D完掘状況北（東より）（図版１）
Ⅰ-2区SH03D完掘状況（西より）（図版１）
Ⅲ-1区SH03D畦土層断面（南より）
Ⅱ-1区SH05F完掘状況北（西より）（図版１）
Ⅳ区SH07A完掘状況（南より）（図版１）
Ⅳ区SH11A完掘状況（東より）（図版２）
Ⅳ区SH12A完掘状況北（西より）
Ⅳ区SH14B炭化材検出全景（南より）（図版２）
Ⅳ区SH14B炭化材検出状況（西より）
Ⅳ区SH14B北西区炭化材検出状況(北より)(図版２)
Ⅳ区SH14B北西区炭化材検出状況（北西より）
Ⅳ区SH14B南西区炭化材検出状況（南より）
Ⅳ区SH14B北西区炭化材検出状況(西より)(図版２)
Ⅳ区SH14B北西区炭化材検出状況（南より）
Ⅳ区SH14B北西区炭化材検出状況（東より）
Ⅳ区SH14B北西区炭化材検出状況（南より）
Ⅳ区SH14B全景（南より）（図版２）
Ⅳ区SH14B中央ピット時出土状況(c-c')(南より)
Ⅳ区SH14B北西区壁溝内土器出土状況(a-a'内)(東より)
Ⅳ区SH14Bc-c')北半分）土層断面（東より）
Ⅳ区SH14Bc-c')南半分）土層断面（東より）
Ⅳ区SH14BA-A')東半分）土層断面（北より）
Ⅳ区SH14B作業風景（西より）
Ⅳ区SH14BA-A')西半分）土層断面（北より）
Ⅳ区SH15B完掘状況南（西より）
Ⅳ区SH15B南北畦土層断面（東より）
Ⅳ区SH16C土器出土状況（東より）
Ⅲ-2区SH18C完掘状況（南東より）（図版２）
Ⅳ区SH19C完掘状況（南より）
Ⅳ区SH19C、SI03C完掘状況（東より）
Ⅴ区SH21B完掘全景(SH25B～27B含む)(北より)(図版２)
Ⅴ区SH21B・25B、SD21B①-①'土層断面(南より)
Ⅴ区SH25B南部土器出土状況(b-b'内)(西より)
Ⅴ区SH26B完掘全景（南より）
Ⅴ区SH22B全景（南より）
Ⅴ区SH22B畦土層断面（北より）

Ⅴ区SH23B全景（南より）
Ⅴ区SH24C全景（東より）
Ⅴ区SH24C土器出土状況（南より）
Ⅴ区SH24C土器出土状況(a-a'内･125)(東より)
Ⅴ区SH24CA-A'土層断面（東より）
Ⅱ-1区SB01A-１土層断面（西より）
Ⅱ-1SB01A-4土層断面（東より）
Ⅳ区SP20土器出土状況（南より）
Ⅳ区SK004C土層断面（東より）
Ⅳ区SP22土器出土状況南（西より）
Ⅳ区SK001C土層断面（東より）
Ⅳ区SI01C全景（東より）
Ⅳ区SI01C付近全景（西より）
Ⅳ区SI01C・02C付近完掘全景(東より)(図版３)
Ⅳ区SI01Ca-a'土層断面（東より）
Ⅳ区SI01C土器出土状況南（西より）
Ⅳ区SI01C・02C付近全景（東より）
Ⅳ区SI02C付近全景（西より）
Ⅲ-2区SP30土器出土状況南（東より）
Ⅳ区SI03C土器出土状況（a-a'内）（東より）
Ⅲ-2区SI03C2区土器出土状況(a-a'内)北(東より)
Ⅲ-2区SI03C（a-a'内）土器出土状況（西より）
Ⅲ-2区SI03C土層断面（西より）
Ⅲ-2区SI04C完掘状況南（西より）
Ⅲ-2区SI04C1区土器出土状況(c-c'内)南(東より)
Ⅲ-2区SI06C完掘状況南（西より）
Ⅳ区SK14A完掘状況北（東より）
Ⅱ-2区SK021A完掘状況（北西より）(図版３)
Ⅱ-1区SK032A土層断面（西より）
Ⅳ区SK051A土層断面（南より）
Ⅳ区SK072B土層断面（東より）
Ⅳ区SK091B土層断面（東より）
Ⅴ区SK101B土層断面（西より）
Ⅳ区SK122C土層断面（東より）
Ⅳ区SK131C土器出土状況（東より）
Ⅳ区SK141C土器出土状況（南より）
Ⅳ区SK151C土層断面（南より）
Ⅳ区SK155C土層断面（東より）
Ⅳ区SK156C土層断面（東より）
Ⅳ区SK159C土器・石出土状況南（東より）
Ⅳ区SK161C土層断面（東より）
Ⅳ区SK183C土層断面（東より）
Ⅲ-2区SK191C土層断面北（東より）
Ⅳ区SK221C土器出土状況（南より）
Ⅳ区SK221C土器出土状況（西より）
Ⅴ区SK253C土層断面（東より）
Ⅲ-1区SK261D完掘状況（南より）
Ⅰ-2区SK283D完掘状況（南より）
Ⅲ-2区SK302D土層断面（北より）
Ⅰ-1区SK342E完掘状況（北より）
Ⅰ-1・2区１号墳調査前風景北（東より）
Ⅰ-1・2区１号墳全景（南より）(図版３)
Ⅰ-1・2区１号墳全景（西より）
Ⅰ-1・2区１号墳石室検出状況(東より)(図版３)
Ⅰ-1・2区１号墳羨道部閉塞石検出状況南(西より)
Ⅰ-1・2区１号墳羨道部検出状況(南より)(図版３)
Ⅰ-1・2区１号墳羨道部検出･堤瓶出土状況(北より)
Ⅰ-1・2区１号墳羨道部検出･堤瓶出土状況(北西より)
Ⅰ-1・2区１号墳羨道部検出状況（北より）
Ⅰ-1・2区１号墳羨道部検出状況(南より)(図版３)
Ⅰ-1・2区１号墳羨道部検出状況（南より）
Ⅰ-1・2区１号墳羨道部検出状況（東より）
Ⅰ-1・2区１号墳羨道部検出状況北（西より）
Ⅰ-1・2区１号墳羨道部検出状況北（東より）
Ⅰ-1・2区１号墳石室検出状況北（東より）
Ⅰ-1・2区１号墳石室検出状況南（西より）
Ⅰ-1・2区１号墳石室検出状況（西より）
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘除去（東より）
Ⅰ-1・2区１号墳墓道検出状況北（西より）
Ⅰ-1・2区１号墳A-A'土層断面（東より）
Ⅰ-1・2区１号墳C-C'(南）土層断面（東より）
Ⅰ-1・2区１号墳E-E'(北）土層断面（西より）
Ⅰ-1・2区１号墳A-A'周溝部土層断面(東より)
Ⅰ-1・2区１号墳E-E'周溝部土層断面(南より)
Ⅰ-2区ST01須恵器出土状況（南より）(図版３)
Ⅰ-2区ST01須恵器出土状況（東より）
Ⅰ-2区ST01須恵器出土状況（北より）(図版３)
Ⅲ-2区南壁土層断面（北より）

Ⅲ-2区南壁土層断面（北より）
Ⅲ-2区南壁土層断面（北より）
Ⅲ-2区西壁土層断面（北より）
Ⅲ-2区西壁土層断面（東より）
Ⅳ区南壁土層断面（北より）

遺物写真図版
Ⅰ-1・2区SH02D（図版４）
Ⅰ-1・2区SH02D
Ⅲ-1・2区SH03D
Ⅲ-1区SH04D
Ⅲ-1区SH04D
Ⅱ-1区SH05F
Ⅳ区SH07A
Ⅳ区SH07A
Ⅳ区SH07A
Ⅲ-1区SP05
Ⅳ区SH14B（図版４）
Ⅳ区SH14B
Ⅳ区SH14B
Ⅳ区SH14B
Ⅳ区SH14B
Ⅳ区SH14B（図版４）
Ⅳ区SH14B
Ⅳ区SH14B
Ⅳ区SH14B
Ⅳ区SH15B
Ⅳ区SH16C
Ⅴ区SH16C（図版４）
Ⅳ区SH17C
Ⅳ区SH17C
Ⅳ区SH17C
Ⅳ区SH17C
Ⅲ-2区SH18C
Ⅲ-2区SH18C
Ⅲ-2区SH19C
Ⅲ-2区SH19C
Ⅲ-2区SH19C
Ⅲ-2区SH19C
Ⅲ-2区SH19C
Ⅲ-2区SH19C
Ⅴ区SH21B
Ⅴ区SH21B
Ⅴ区SH25B
Ⅴ区SH27B
Ⅴ区SH24C
Ⅴ区SH24C
Ⅱ-1区SB01A
Ⅳ区SP20
Ⅳ区SP20
Ⅲ-2SP30
Ⅳ区SK004C
Ⅳ区SK004C（図版４）
Ⅳ区SK004C、Ⅴ区SP22
Ⅳ区SK001C
Ⅳ区SK005C
Ⅳ区SI01C
Ⅳ区SI01C
Ⅳ区SI01C
Ⅳ区SI01C
Ⅳ区SI01C
Ⅳ区SI01C
Ⅳ区SI01C
Ⅳ区SI01C
Ⅳ区SI02C
Ⅳ区SP18
Ⅳ区SP18
Ⅳ区SP18
Ⅲ-2区SI03C
Ⅲ-2区SI03C
Ⅲ-2区SI03C
Ⅱ-2区SK023A
Ⅱ-1区SK032A
Ⅱ-1区SK032A
Ⅳ区SK071B付近
Ⅳ区SK072B
Ⅳ区SK121C
Ⅳ区SK121C

Ⅳ区SK131C
Ⅳ区SK131C
Ⅳ区SK141C
Ⅳ区SK141C
Ⅳ区SK152C
Ⅳ区SK153C
Ⅳ区SK161C（図版４）
Ⅳ区SK221C
Ⅳ区SK221C
Ⅳ区SK221C
Ⅳ区SK221C
Ⅰ-1区SK322D
Ⅰ-1・2区１号墳石室内
Ⅰ-1・2区１号墳石室内
Ⅰ-1・2区１号墳石室内
Ⅰ-1・2区１号墳石室内
Ⅰ-1・2区１号墳羨道部
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳墳丘
Ⅰ-1・2区１号墳周溝
Ⅰ-1・2区１号墳周溝
Ⅰ-1・2区１号墳石室内表土中
Ⅰ-2区ST01
Ⅰ-2区ST01（図版４）
Ⅰ-2区ST01
Ⅰ-2区ST01
Ⅰ-2区ST01
Ⅰ-2区ST01
Ⅰ-2区ST01
Ⅰ-2区ST01
Ⅰ-2区ST01
Ⅰ-2区ST01
Ⅰ-2区ST01
Ⅰ-2区ST01
Ⅰ-2区ST01
Ⅰ-2区包含層
Ⅲ-1包含層
１号墳出土須恵器（図版４）

付　　　図

付図１　西浦谷遺跡遺構図１（1/200）
付図２　西浦谷遺跡遺構図２（1/200）
付図３　西浦谷遺跡遺構図３（1/200）

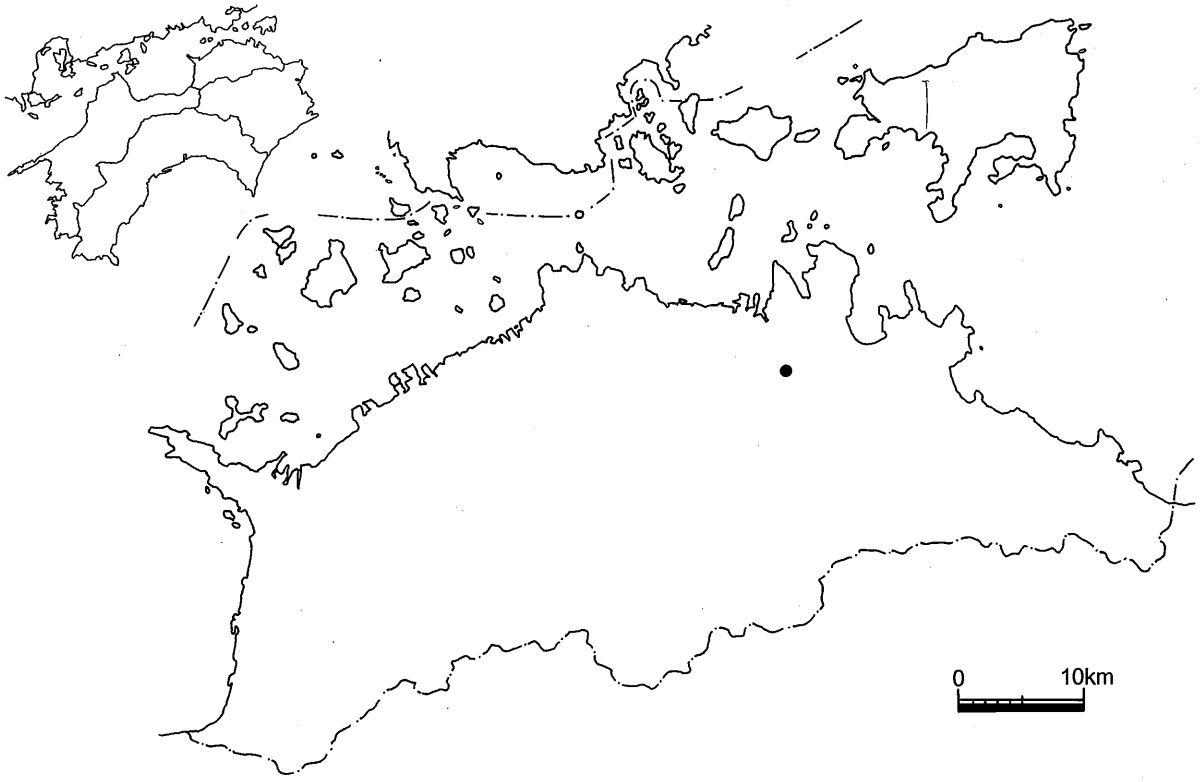
第１章　調査に至る経緯と経過

高松東道路は、国道11号バイパスのうち高松市上天神町からさぬき市津田（旧大川郡津田町）までの区間を指し、この道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業は、高松市内区間（上天神町～前田東町）と木田郡三木町～さぬき市津田区間に分かれる。このうち、高松市内区間については昭和63年度～平成５年度に発掘調査が行われ、平成３年度～平成７年度に順次報告書が刊行された。

木田郡三木町～さぬき市津田区間については、工事範囲がほぼ定まった平成元年度に、香川県教育委員会文化行政課が用地内全域の分布調査と一部の試掘調査を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地及び試掘の必要な箇所を事業主体である建設省四国地方建設局（現国土交通省四国地方整備局）に示した。ここで三木町池戸の池上神社近辺の古墳の所在（西浦谷遺跡の一部）が示された。

用地買収が進んだ平成６年度に西浦谷遺跡の試掘調査が県文化行政課によって実施され、弥生時代中期の集落が展開していることが判明した。これにより、丘陵中腹から頂部にかけての12,672㎡が調査対象となった。

発掘調査は平成７年度に10,400㎡、平成８年度に残り2,272㎡を実施した。



第１図　遺跡の位置（1）（1/600,000）

発掘調査						整理作業		
香川県教育委員会								
平成７年度			平成８年度			平成17年度		
総括	課長	高木　尚 (～10.23)	総括	課長	藤原　章夫	総括	課長	吉田　光成
		藤原　章夫 (10.24～)		課長補佐	高木　一義 (～５.31)		課長補佐	中村　禎伸
	課長補佐	高木　一義			北原　和利 (６.１～)	総務･芸術文化グループ	副主幹	河内　一裕
	副主幹	渡部　明夫		副主幹	渡部　明夫		主任	堀本　由紀
総務	係長	山崎　隆	総務	係長	山崎　隆		主任主事	八木　秀憲
	主査	星加　宏明		主査	星加　宏明	文化財グループ	課長補佐	藤好　史郎
	主事	高倉　秀子		主任主事	高倉　秀子 (～５.31)		主任	山下　平重
埋蔵文化財	主任技師	森下　英治					文化財専門員	信里　芳紀
	技師	塩崎　誠司		主事	打越　和美 (６.１～)			
			埋蔵文化財	文化財専門員	木下　晴一			
				技師	塩崎　誠司			
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター						香川県埋蔵文化財センター		
総括	所長	大森　忠彦	総括	所長	大森　忠彦	総括	所長	渡部　明夫
	次長	真鍋　隆幸		次長	小野　善範		次長	榊原　正人
総務	参事	別枝　義昭	総務	参事	別枝　義昭		(総務課長兼務)	
	係長	前田　和也		係長	前田　和也	総務	副主幹兼係長	松崎日出穂
	主査	西村　厚二		主査	西村　厚二 (～５.31)		主査	塩崎かおり
調査	参事	糸目　末男					主査	田中　千晶
	係長	大山　真允		主事	佐々木隆司 (６.１～)	資料普及課	課長	廣瀬　常雄
	文化財専門員	森下　友子					文化財専門員	山元　素子
	文化財専門員	吉田　智	調査	参事	近藤　和史			
	調査技術員	森澤　千尋		主任文化財専門員	廣瀬　常雄			
				文化財専門員	森下　友子			
				文化財専門員	樋本　清輝			
				調査技術員	三好　弘美			
整理作業員　朝田加奈子　磯崎　福子　猪木原美恵子　岡崎江伊子　長谷川郁子　三谷　和子　森澤千尋								

第１表　調査の体制

区分	工　程	4	5	6	7	8	9	10	11
職員	整理指導								
	原稿執筆								
遺物	接合・復元								
	実測・拓本								
	レイアウト								
	トレース								
	観察表								
	写真撮影								
	写真レイアウト								
遺構	レイアウト								
	トレース								
	写真レイアウト								
その他	編集								
	台帳類の作成								
	遺物収納								

第２表　整理作業の工程

第２図　遺跡の位置（2）（1/10,000）

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境（第１・２図）

西浦谷遺跡の所在する木田郡三木町は、香川県の東部に位置し、西は高松市、東はさぬき市、北は旧木田郡牟礼町（現高松市）に接する。三木町は北と南に山地を控え、阿讃山脈を源流とする鴨部川、新川、吉田川が中央部の平野を形成し、瀬戸内海へ注ぐ。南部は徳島県の県境をなす阿讃山脈から派生した、高仙山、大板山等500～600m級の山々が連なり、山地の南側には40～100m台の台地が形成される。北部には立石山（273m）をはじめとする100～200mの山塊が長尾・志度・牟礼・高松に接して広がり、標高203mの白山はこの山塊の南端部に位置する。西浦谷遺跡はこの山塊の、高松市に接する位置で、高松平野東端部よりやや標高の上がった、立石山から南へ延びる尾根の先端の、周囲を侵食により形成された谷状地形に囲まれた50mの小丘陵上に位置する。ここからは三木町中心部から白山までを見渡すことができ、西側は高松市街地が一望できる。

第２節　歴史的環境（第３図）

三木町の遺跡は近年の大規模開発を伴う発掘調査により、実態が明らかになりつつある。

旧石器時代の遺跡はあまり見られないが、池辺八幡神社内の小丘陵南裾部ではサヌカイト製ナイフ形石器が、また、七ツ塚４号墳の周溝ではサヌカイト製翼状剥片が出土した。

縄文時代の遺構を検出した遺跡も少ないが、十川東・平田遺跡では草創期の有舌尖頭器が出土している[1]。前田東・中村遺跡からは旧流路から後期前半の土器が出土した[2]。晩期では前田東・中村遺跡から土坑やピットが、また、南天枝遺跡からは流路中から土器が少量出土している[3]。

弥生時代に入ると遺跡数も増加する。前期では農学部構内遺跡[4]、福万遺跡[5]、鹿伏・中所遺跡[6]から前期末頃の土器が出土しており、農学部遺跡では当該期の集落が展開する可能性が指摘されている。また、鹿伏東古川堤防からは河川改修工事の際に遠賀川式の土器が発見されている[7]。中期後半では、平野部の鹿伏・中所遺跡で集落が確認できるほか、丘陵部で白山２・３遺跡[8]や、西浦谷遺跡、久米池南遺跡[9]で高地性集落が確認できる。また、白山１遺跡では扁平紐式銅鐸が出土した。後期になると、鹿伏・中所遺跡で拠点集落が営まれる。中期中葉から古墳時代前期までの竪穴住居跡、掘立柱建物跡を検出し、甕棺墓群も検出した。田中南原遺跡[10]でも拠点的集落が検出された。その他、砂入遺跡などで集落が確認されている[11]。墳墓の調査例では、北部丘陵部で石蓋土坑を検出した西尾遺跡[12]、配石土坑墓を検出した白山３遺跡[13]、方形台状墓、土坑墓群からなる西土居遺跡群[14]が挙げられる。

古墳時代前期～中期前半の古墳はあまりよくわかっていないが、前期初頭に池戸八幡神社１号墳[15]がある。中期後半の古墳としては、西浦谷遺跡の南側に広がる、古式群集墳として著名な権八原古墳群[16]が広がる。後期になると古墳の数は爆発的に増加する。北部丘陵の南麓では風呂谷古墳[17]、椿社古墳、塚谷古墳[18]などが単独で築造され、南部丘陵では蛇の角古墳群、諏訪カンカン山古墳群、西土居古墳群[19]など群集墳が形成される。

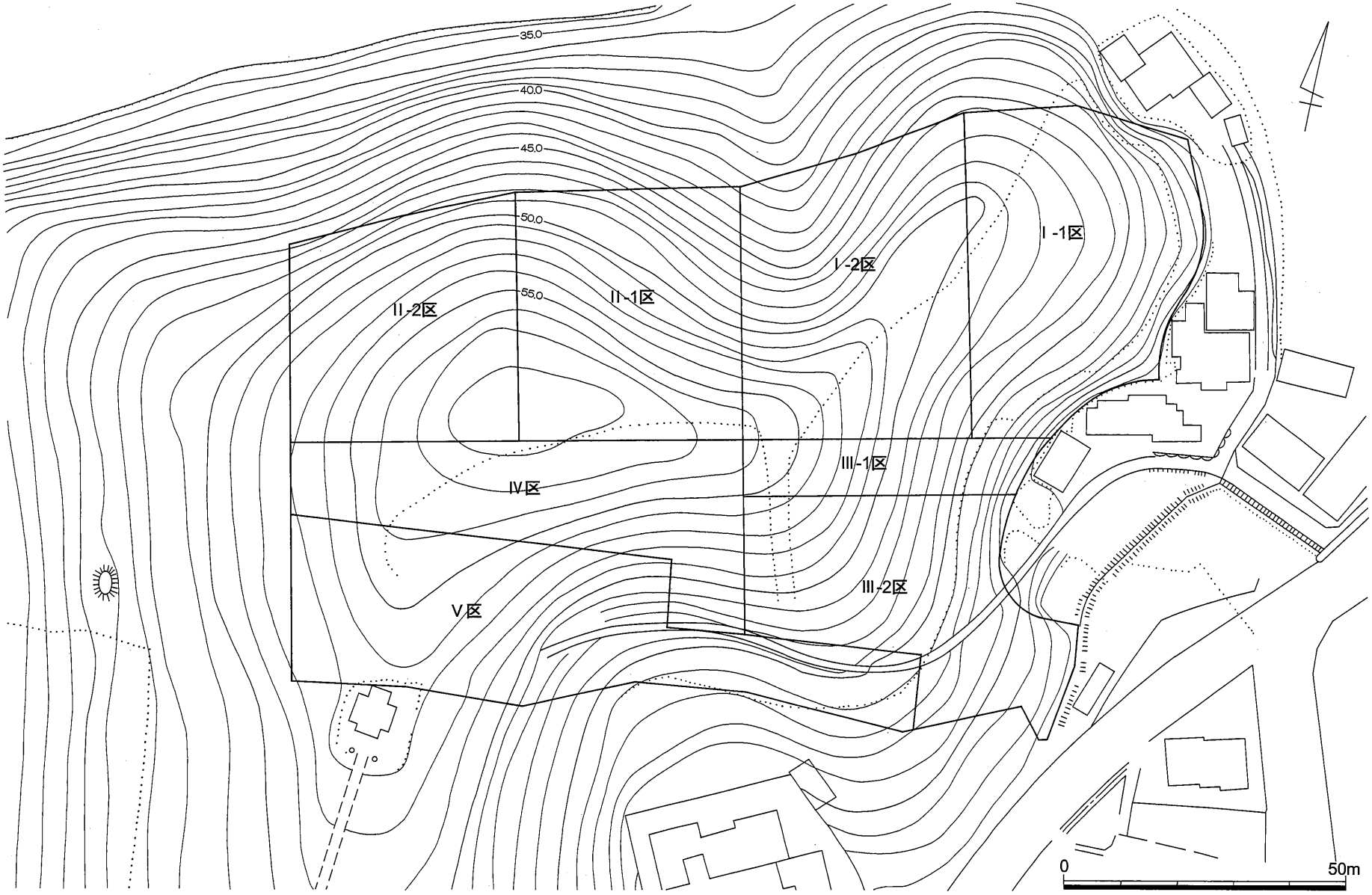
古代に入ると、白鳳期から奈良時代にかけて始覚寺、上高岡廃寺、長楽寺などの古代寺院が建立される[20]。集落では尾端遺跡で７世紀代の集落を検出している[21]。また、北部丘陵では小谷窯跡の調査が行われ、７世紀代の須恵器の生産が行われたことがわかっている[22]。

1　西浦谷遺跡
2　大空遺跡
3　小山・南谷遺跡
4　小山古墳
5　山下古墳
6　久本古墳
7　諏訪神社古墳
8　久米山遺跡群
　　久米山墓地地区
9　久山池南遺跡
10　高松茶臼山古墳
11　塚谷古墳
12　小谷窯跡
13　前田東・中村遺跡
14　権八原古墳群
15　始覚寺跡
16　池戸八幡社裏古墳
17　池戸八幡社古墳群
18　香川大学農学部遺跡
19　砂入遺跡
20　鹿伏・中所遺跡
21　天神山遺跡
22　白山１遺跡
23　白山２遺跡
24　白山３遺跡
25　旧長楽寺跡
26　西尾遺跡
27　十川東・平田遺跡
28　尾端遺跡
29　南天枝遺跡
30　福万遺跡
31　西尾天神社古墳
32　鰹宇神社経塚
33　十河城跡

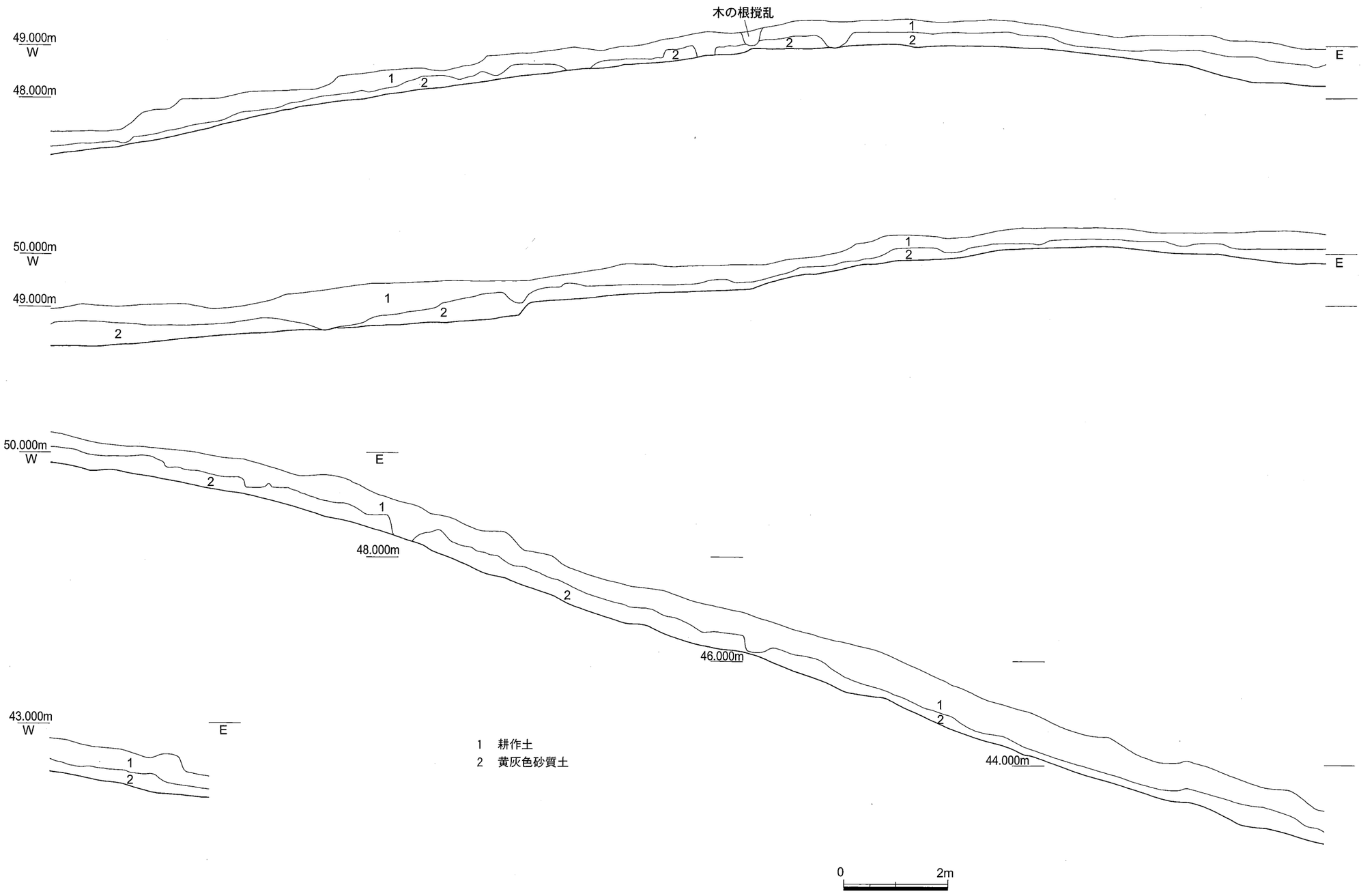
第３図　周辺の遺跡（1/40,000）

中世においては、三木町は守護の細川氏のもと、東讃の守護代の安富氏の統治下に置かれる。天正年間の長宗我部氏の侵攻の折には、安富氏は十河氏を中心とする反長宗我部勢力に与し、長宗我部氏による十河城攻めの際には白山は主戦場となった。そのため、三木町内には多くの中世城館が残っている。集落の調査例では、十川東・平田遺跡が挙げられる[23]。

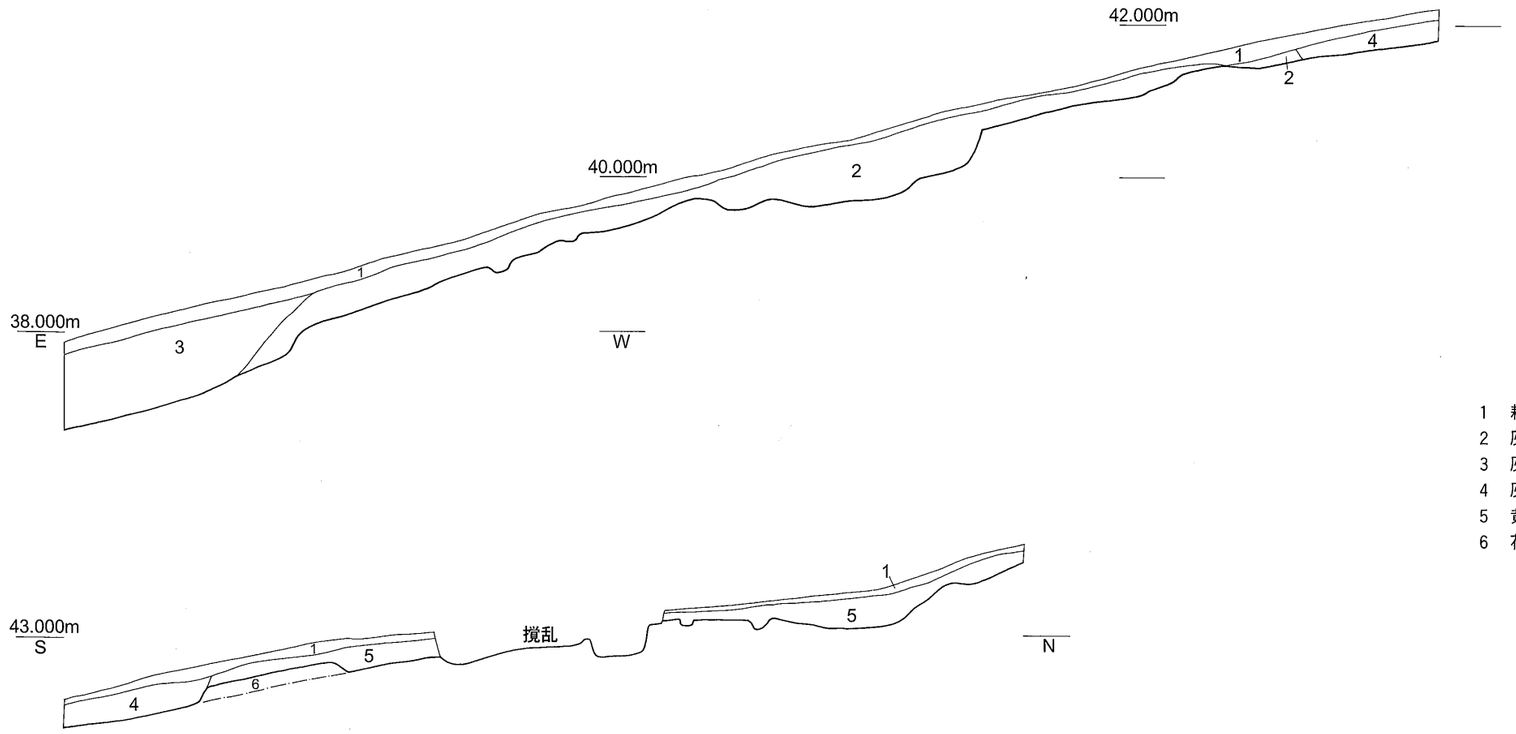
1）香川県教育委員会ほか「県道関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成６年度」1995.3
2）香川県教育委員会ほか「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財は掘調査報告　第三冊　前田東・中村遺跡」1995.3
3）香川県教育委員会「県道富田西志度線道路改良工事に伴う　県道高松長尾大内線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　寺田産宮通遺跡　南天枝遺跡」2003.3
4）四国新聞社「香川県史１　通史編 原始・古代」1988
5）香川県教育委員会「県道改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告集　福万遺跡　原中村遺跡」1995.3
6）香川県教育委員会ほか「高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成６年度　多肥松林遺跡　鹿伏中所遺跡」1995.3
香川県教育委員会ほか「高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成７年度　鹿伏・中所遺跡」1996.3
7）三木町史編纂委員会「三木町史」1988.3
8）香川県教育委員会「新編香川叢書　考古編」1983.3
三木町教育委員会「香川厚生年金健康福祉センター建設用地造成事業に伴う埋う増文化財発掘調査報告書　白山３遺跡」2001.3
9）高松市教育委員会「久米池南遺跡発掘調査報告書」1989.3
10）三木町教育委員会「田中南原遺跡　田中砂古遺跡」2004.3
11）香川県教育委員会ほか「池戸郵便局新設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　砂入遺跡」1996.3
12）香川県教育委員会ほか「平成５年度香川県土木部道路整備事業に伴う発掘調査報告集　五条遺跡　八丁地遺跡　仲善寺遺跡」1994.3
13）８）に同じ
14）三木町教育委員会「西土居遺跡群」2003.3
15）三木町教育委員会「池戸八幡神社１号墳ほか」1994.3
16）国立医科大学候補予定地内埋蔵文化財発掘調査団「権八原古墳群発掘調査概報」1975.6
17）風呂谷古墳発掘調査団「風呂谷古墳発掘調査報告書」1993.9
18）香川県教育委員会ほか「高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　小谷窯跡　塚谷古墳」2002.3
19）14）に同じ
20）高松市歴史資料館「讃岐の古瓦　第11回特別展」1996
21）香川県教育委員会ほか「県道長尾大内線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　尾端遺跡」2003.10
22）18）に同じ
23）１）に同じ



第4図　調査区割図（1/1,000）

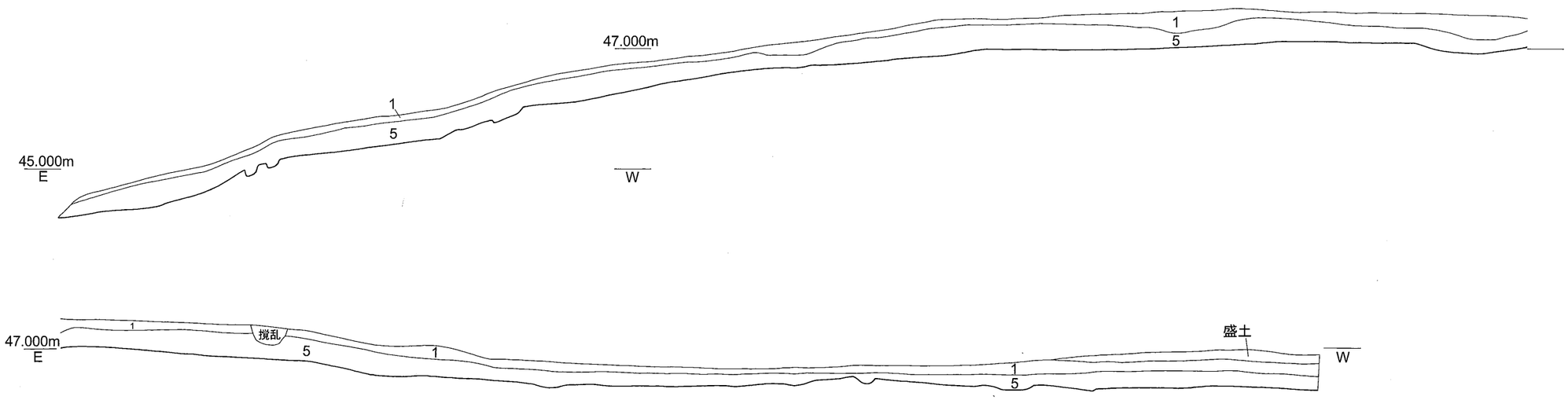


第５図　II-1・2区北壁土層断面図（1/80）

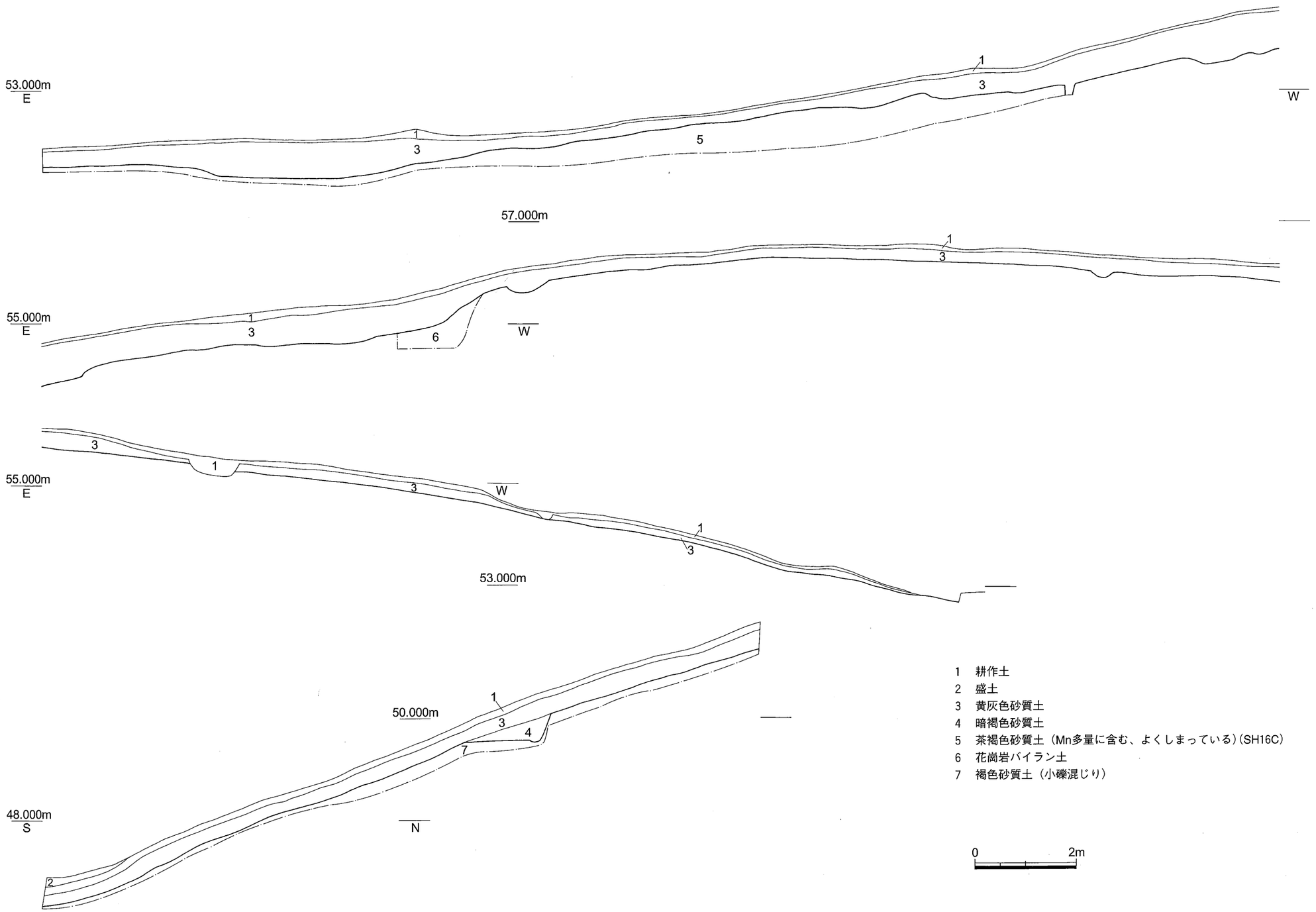


1　耕作土
2　灰黄色砂質土
3　灰色ブロック混じり灰黄色砂質土
4　灰色小礫混じり砂質土混じり黄灰色砂質土（撹乱）
5　黄灰色砂質土
6　花崗岩バイラン土

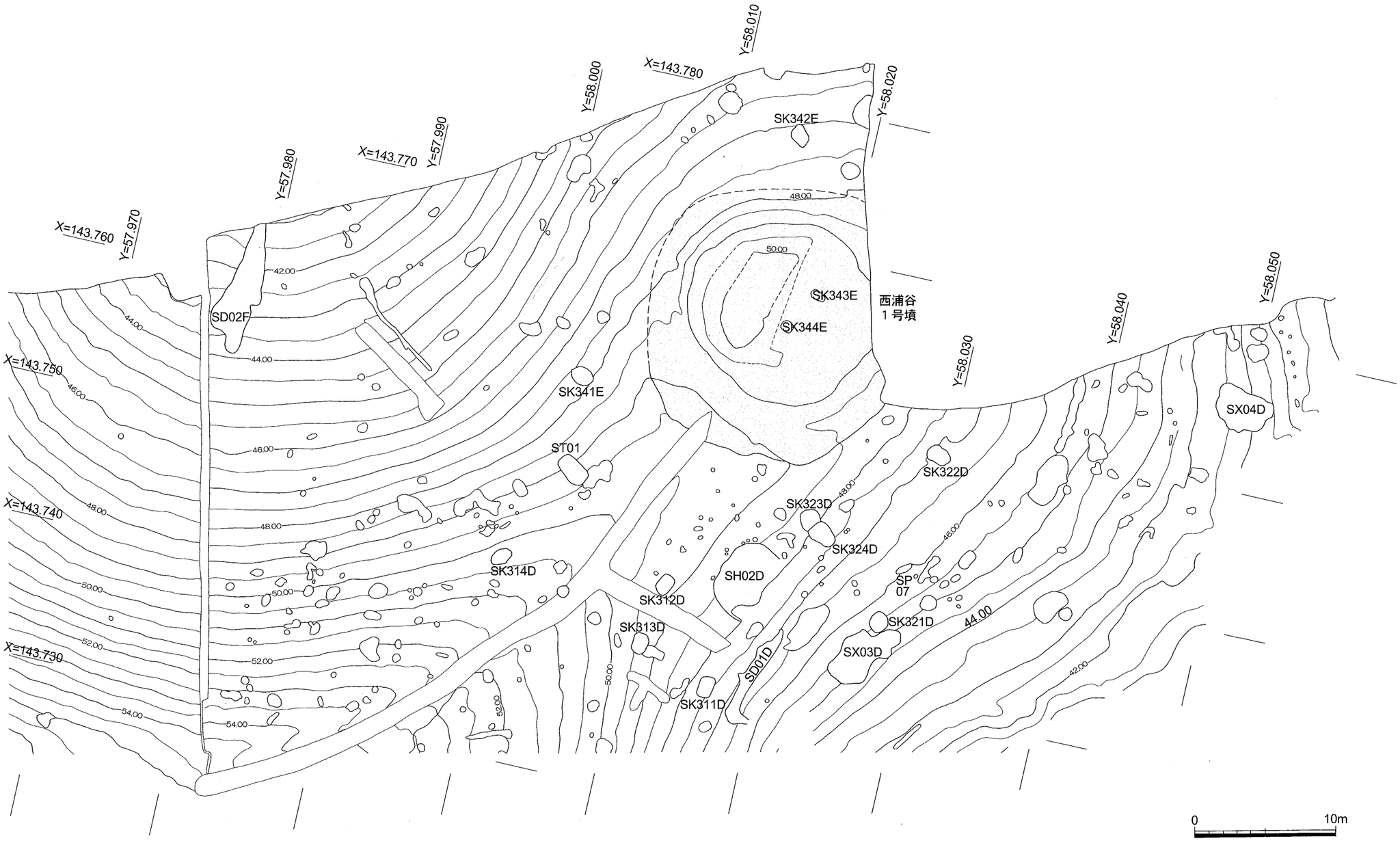
0　2m



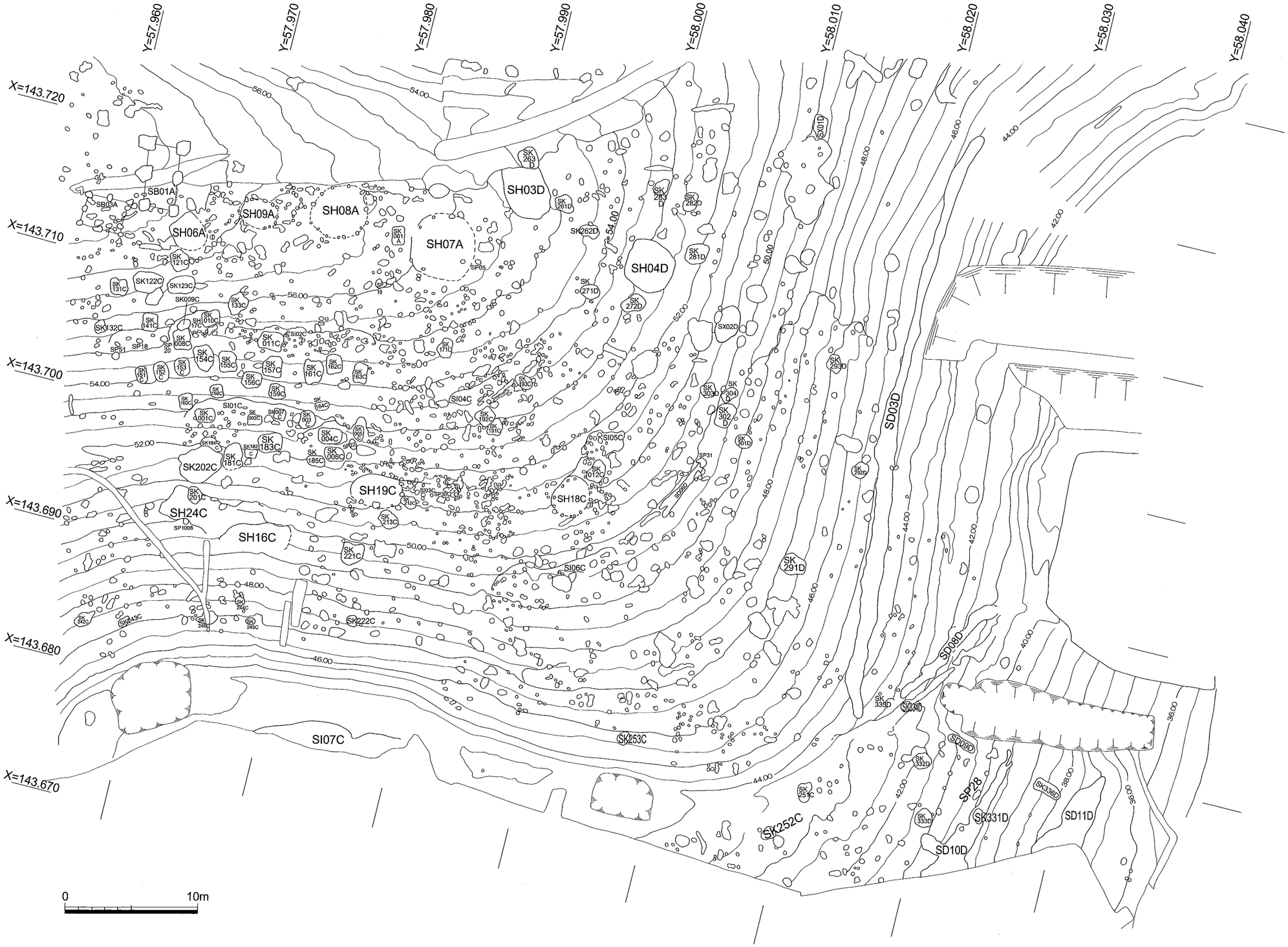
第 6 図　Ⅲ-2区南壁土層断面図（1/80）



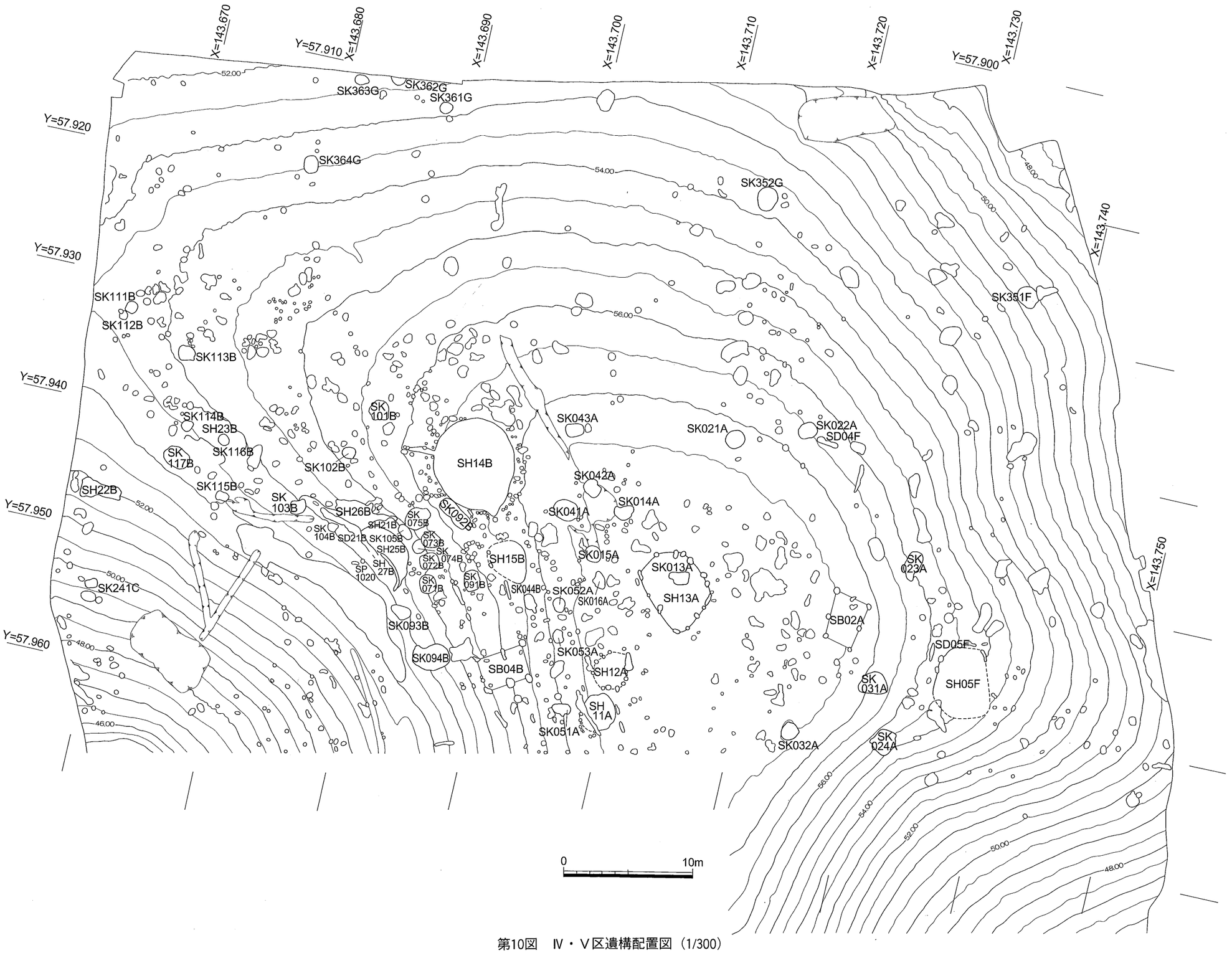
第７図　Ⅳ区南壁土層断面図（1/80）



第 8 図　Ⅰ-1・2区遺構配置図（1/300）



第９図　Ⅲ-1・2区、Ⅳ・Ⅴ区遺構配置図（1/300）



第10図　Ⅳ・Ⅴ区遺構配置図（1/300）

第３章　調査の成果

第１節　土層序

①Ⅱ区北壁土層（第５図）

丘陵北斜面の西側尾根線から谷筋へ下る部分で作成した断面図である。最も高い尾根線上で標高50.4ｍ、最も低い谷部分で標高42.0ｍである。層序は耕作土・黄灰色砂質土で、その下部は基盤土である。耕作土は厚さ40～60cm、黄灰色砂質土の包含層は厚さ16～40cmで、谷筋部分のほうがやや堆積土が厚い傾向にあるが、概して堆積土は薄い。

②Ⅲ区南壁土層（東半部）（第６図）

丘陵南斜面東側尾根線上の尾根の頂部から下った東側斜面で作成した断面図である。標高は東端部で約38ｍ、西端部で約42ｍを測る。厚さ22cm程度の耕作土の下部に灰黄色砂質土が20～40cm堆積し、その下部に基盤土がある。谷筋の方がやや堆積土は厚い。東端部ではSD11Dが黄灰色砂質土の包含層を切り込み、中程ではSD10Dの落ち込みが見られる。SD10Dの埋土は包含層の埋土と同じである。

③Ⅲ区南壁土層中央部付近屈曲部（第６図）

②の西端部から北へ尾根に斜交するように上がった位置で作成した断面図である。高低差は約２ｍである。厚さ15cmの耕作土の下部には厚さ20cm前後の黄灰色砂質土が堆積し、その下部に基盤土の花崗岩バイラン土がある。

④Ⅲ区南壁（西半）・Ⅳ区東端部南壁土層（第６図）

丘陵南斜面東側尾根線上の頂部から尾根の西斜面にかけて作成した断面図である。高低差は約３ｍであるが、尾根の頂部から西斜面の高低差はほとんどない。

⑤Ⅳ区南壁土層（第７図）

丘陵南斜面西側尾根線上を中心に西から東側の斜面にかけて作成した断面図である。尾根頂部が標高56.5ｍ、西側の斜面の最も低い部分は標高53ｍ、東側の斜面では標高51ｍである。耕作土の堆積は10～15cmで非常に薄く、黄灰色砂質土の堆積は西側斜面では20～70cmでやや厚いが、頂部から東側斜面では地表面から基盤土までが30cm程度と薄い。基盤土は茶褐色砂質土、花崗岩バイラン土である。

⑥Ⅴ区東壁土層（第７図）

⑤の東端部から南側へ延ばした土層である。谷筋の最も低い部分の等高線に直交する方向である。北端から南端までの高低差は５ｍで、耕作土の堆積は約15cm、黄灰色砂質土の堆積は約32cmである。その下部に基盤土がある。なお、SH16Cの断面が観察できるが、これは黄灰色砂質土の下部で検出した。

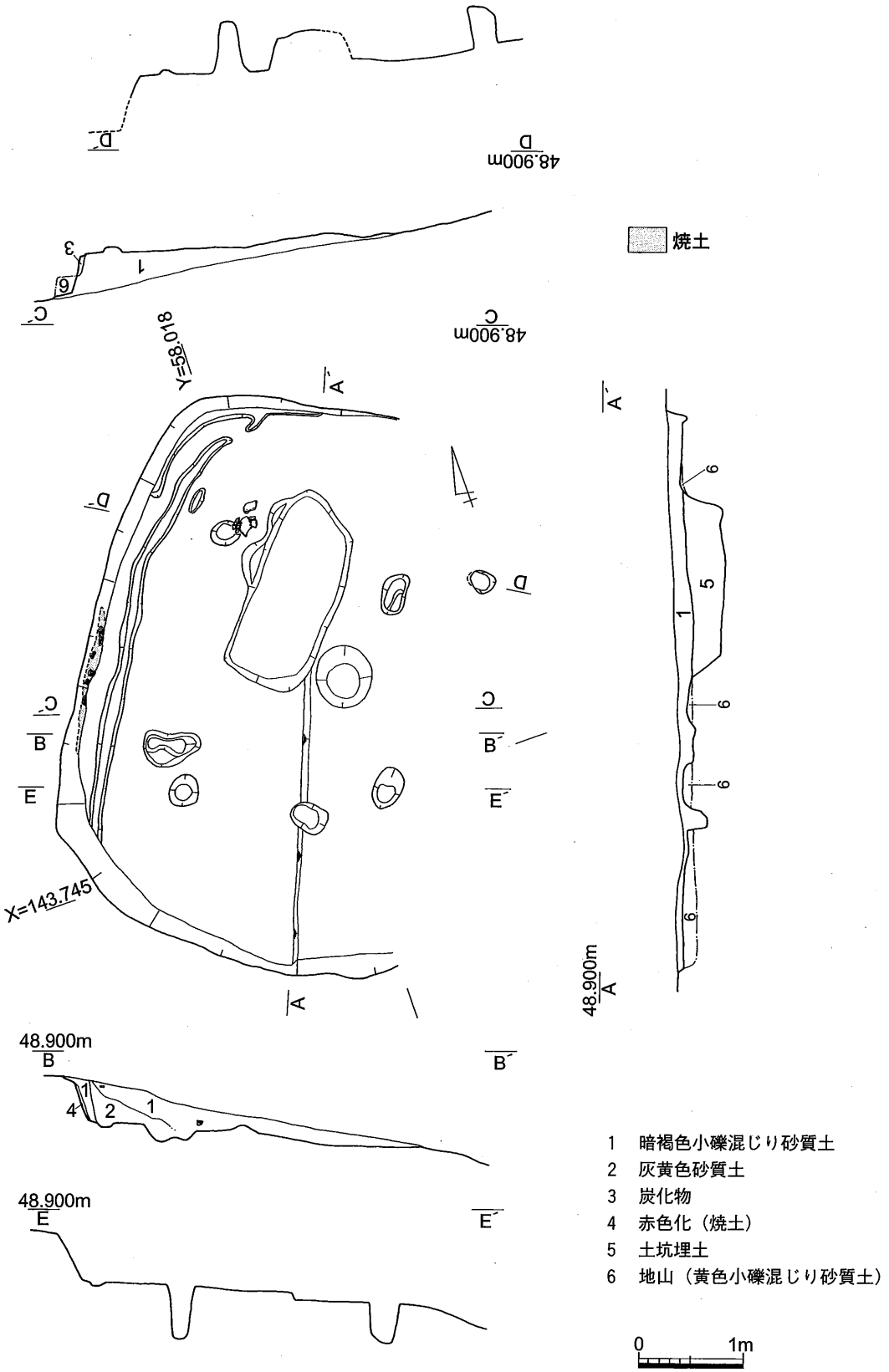
第２節　遺構・遺物

１　弥生時代中期末～後期前半の遺構・遺物

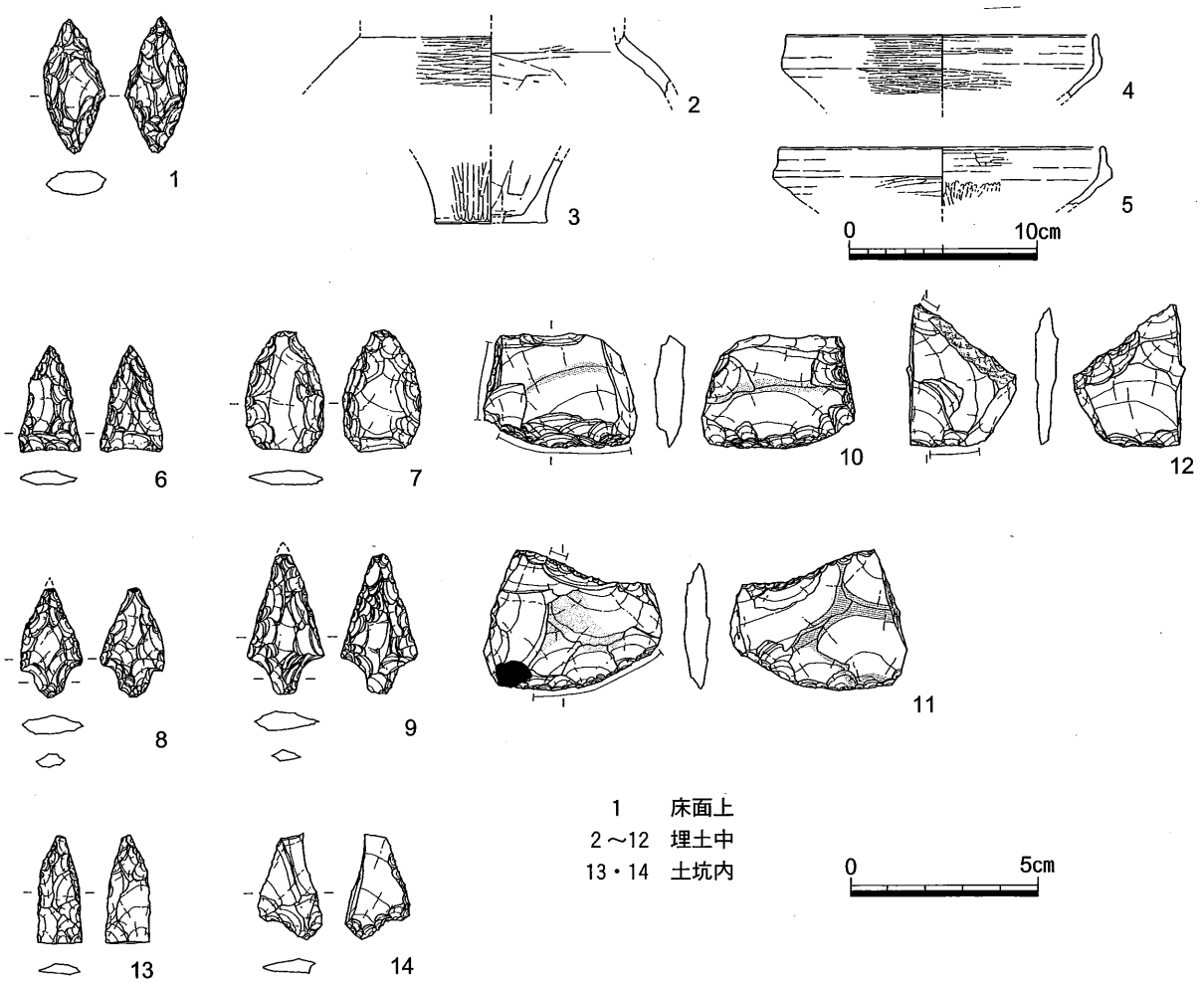
（１）竪穴住居跡

SH02D（第11・12図）

Ⅰ－２区で検出した竪穴住居跡である。丘陵北東部の尾根の南東斜面で検出した。東半部は竪穴



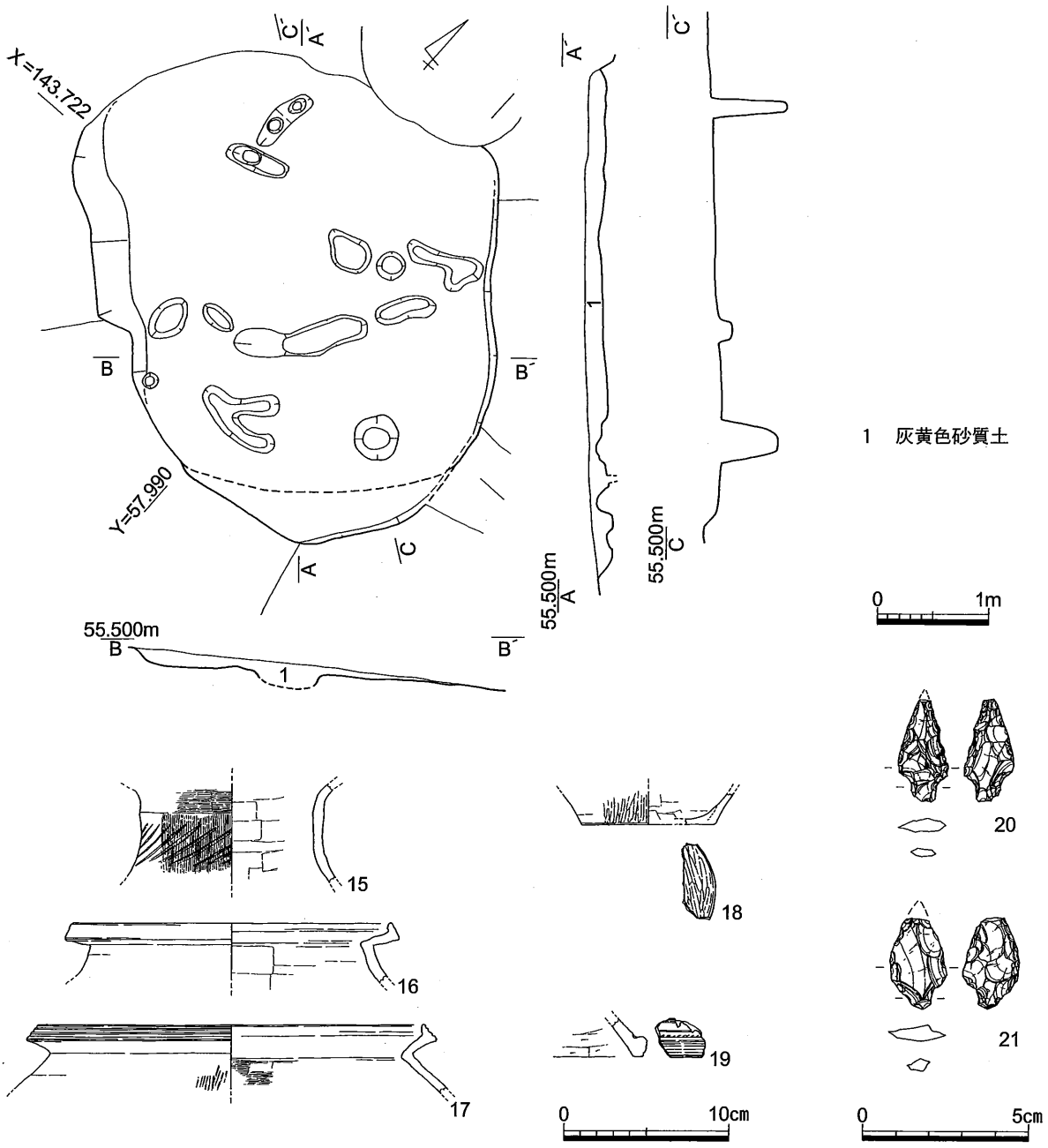
第11図　SH02D平・断面図（1/60）



第12図　SH02D出土遺物（1/4・1/2）

住居跡の掘り込みを検出していない。東半部は基盤土面が竪穴住居跡床面より低いことから、消失したと考えられる。平面形態は隅丸方形を呈すると考えられ、南北方向が5.43m、東西方向が3.6m以上の規模である。深さは、最も深い西端部分で40cmである。埋土は概ね暗褐色小礫混砂質土、床面の標高は48.2mである。西辺部では壁溝を検出した。北西隅では壁溝は二重になっており、外側の壁溝は、北側の竪穴住居跡の掘り込みが認められる付近まで続くことがわかった。柱穴跡は、床面において８穴を検出した。配置と深さから４穴が主柱穴になると考えられる。主柱穴の平面形態は概ね円形で、南東部の柱穴跡のみ楕円形を呈する。規模は直径24～27cmのものと、長軸42cm・短軸27cmのものがあり、深さは竪穴住居跡床面から51～56cmを測る。南西の主柱穴の北に隣接するピットは形状や深さから木の根の可能性が高い。また、北部で検出した土坑は、竪穴住居跡床面から検出しているが、竪穴住居に伴うものかどうかは不明で、調査時の所見によればそれより古い遺構の可能性もある。北西の主柱穴付近から土器がかたまって出土した。また、竪穴住居跡西辺部からは炭化材が出土し、壁面が赤色化していることから、焼失住居と考えられる。埋土中からは弥生土器、サヌカイト、焼土が出土した。

１は床面上から出土した遺物である。サヌカイト製の石鏃または尖頭器である。２～12は埋土中から出土した遺物である。２～５は弥生土器である。２は壺体部で外面はヘラミガキを施す。３は甕底部である。４・５は高杯で、口縁部は直立し、内外面ともヘラミガキを施す。６～12はサヌカイト製石器である。６～９は石鏃である。６・７は平基式、８・９は有茎式である。10～12は楔形石器



第13図　SH03D平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4・1/2）

である。13・14は竪穴住居跡内土坑から出土した遺物であるが、SH02Dとの関係は明確ではない。ともにサヌカイト製石鏃で、13は平基式、14は刃部の加工が不充分な凹基式の未製品と考えられる。

遺構の時期は、弥生時代中期末～後期初頭と考えられる。

SH03D（第13図）

Ⅰ－２区で検出した竪穴住居跡である。丘陵部頂部から東へ延びる尾根上の、西から東へ傾斜する場所に立地する。形状は隅丸方形で、南北方向は3.84m、東西方向は3.51m、深さは最も残存状況の良好な西側で15cm、床面の標高は55.2m、埋土は灰黄色砂質土である。北部はSK263D及び撹乱により消失する。床面からピット状及び小溝状遺構を検出しているが、竪穴住居跡に伴う可能性が高いのは南東部の１穴、その北西部に位置するピットで、中央部付近に位置するものは、掘り込

みの形状から木の根の可能性が高い。埋土中からは弥生土器、サヌカイト片が出土した。

15～19は弥生土器である。15は広口壺で、頸部にはハケの原体による斜め方向の刻み目を付ける。16・17は甕で、いずれも口縁部を上向きに拡張させるが、17は口縁部に凹線を３条巡らせ、16よりやや古い様相を呈する。18は甕底部で、体部外面から底部外面にヘラミガキが観察できる。19は高杯脚部で、端部に凹線３条を巡らせ、その直上にはヘラ状工具による刺突文を施す。20・21は有茎式のサヌカイト製石鏃である。21は先端部が欠損し、片面側の加工が不完全なことから、未製品と考えられる。

遺構の時期は概ね弥生時代中期末～後期初頭と考えられる。

SH04D（第14図）

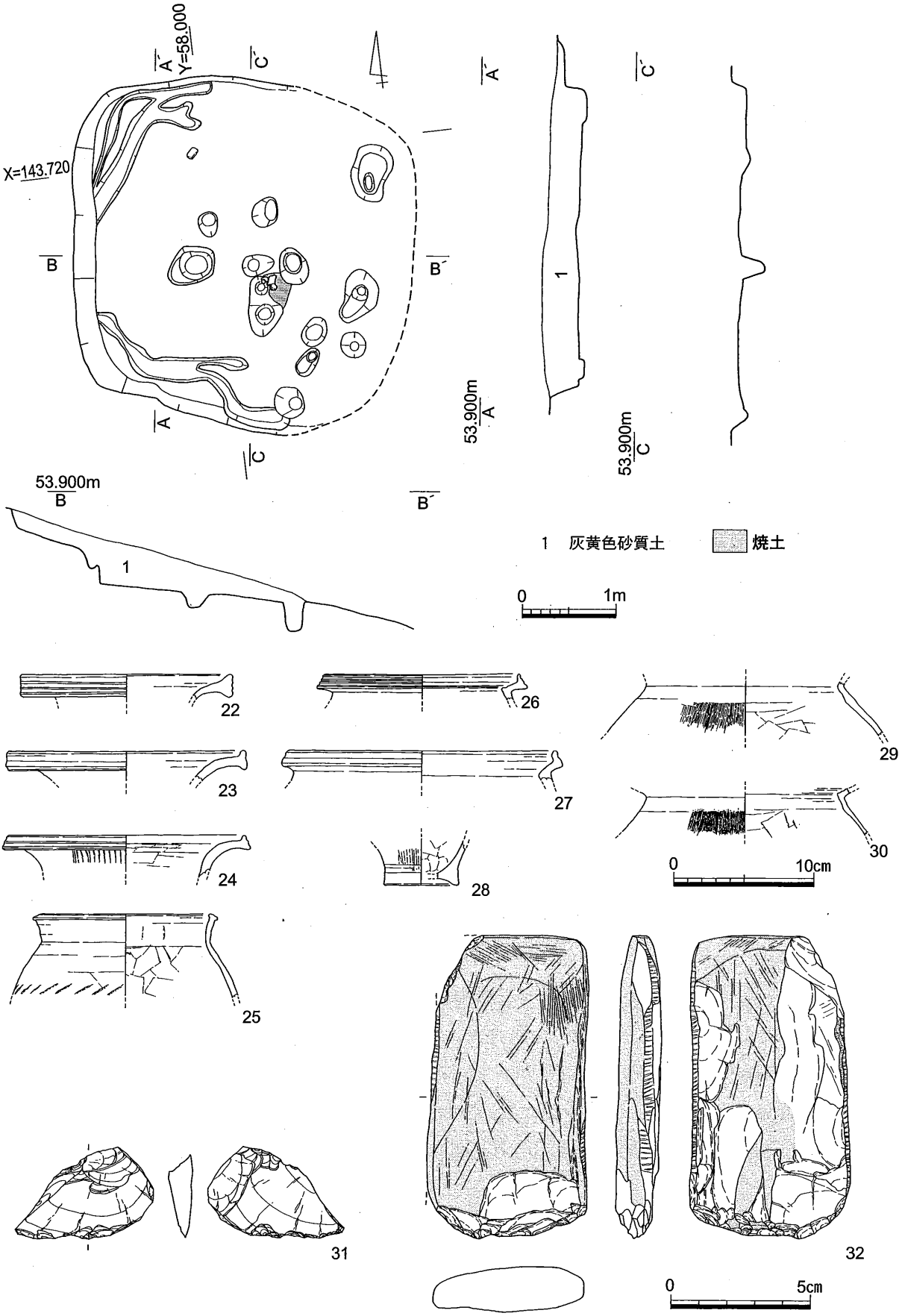
Ⅲ－１区で検出した竪穴住居跡である。丘陵頂部から東へ延びる斜面上の西から東へ傾斜する地形に立地する。東半部は竪穴住居跡の掘り方は検出できず、基盤土の上面が竪穴住居跡床面より低いことから、東半部は消失したと考えられる。隅丸方形を呈すると考えられ、規模は南北方向3.78m、東西方向3.2m以上、深さは最も深い西側で45cm程度である。床面の標高は約52.9m、埋土は灰黄色砂質土である。西側では壁溝を検出した。西辺部中央付近では、平面形では壁溝は認められないが、土層断面には壁溝の落ち込みが認められ、西辺全体に周っていたと考えられる。北西隅から北辺中央付近にかけてと南辺部中央付近では、壁溝が二重になっている。また、中央やや南寄りに焼土と炭化物の集中する部分があり、炉跡と考えられる。住居内からはピットを12穴検出しているが、竪穴住居跡に伴う可能性が高いのは焼土、炭化物の集中する部分の東・西及び中央に位置する３穴で、残りは判然としない。埋土中からは弥生土器、サヌカイト片が出土した。

22～30は弥生土器である。22～24は広口壺で、口縁端部を上部または上下に拡張させ、２～３条の凹線を巡らせる。23は凹線が緩い。25は直口壺で、体部に工具原体による刻み目を施す。26は甕で、口縁端部に凹線を３条施す。胎土にわずかに角閃石を含む。27は甕である。28は底部、29・30は甕体部である。31はサヌカイト製スクレイパーで、下部に刃を作り出す。32は結晶片岩製の扁平片刃石斧の未製品と考えられ、両側縁に敲打痕を残す。刃先、両面ともに剥離面を残す。

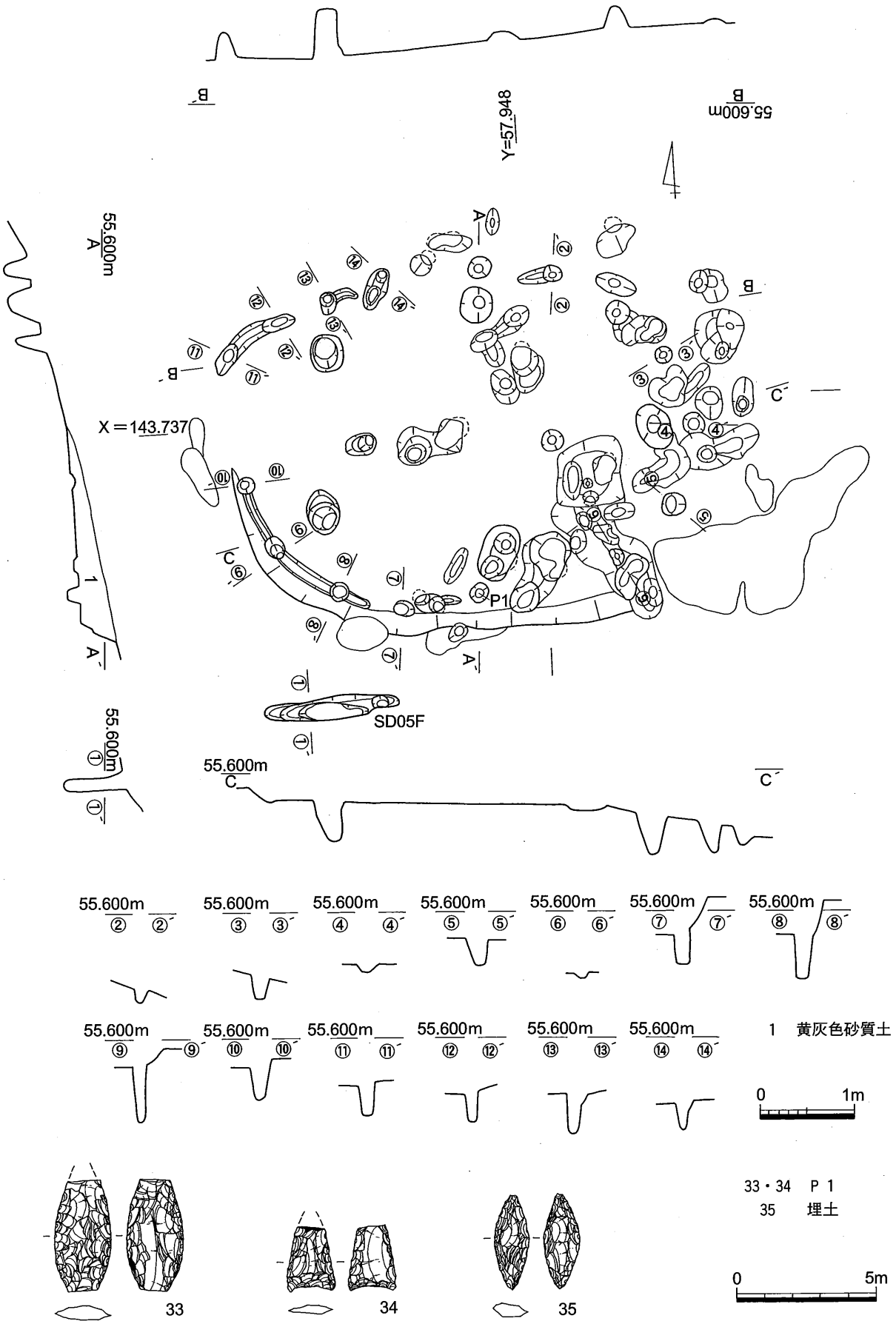
遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期末～後期初頭と考えられる。

SH05F（第15図）

Ⅱ－１区で検出した竪穴住居跡である。丘陵頂部から北へ延びる尾根上の南から北へ傾斜する場所に立地する。隅丸方形を呈すると考えられるが、北半部では竪穴住居跡の掘り方は検出できなかった。検出した基盤土の上面が床面より低く、北半部は消失したと考えられる。推定で南北方向は4.2m、東西方向は5.4m程度で、深さは最も深い南側部分で32cmである。床面の標高は55.3mである。埋土は黄灰色砂質土である。竪穴住居跡の南西部では幅13.5cm、深さ３～４cmの壁溝を検出し、壁溝内では直径20～25cm、深さ47～60cmの円形のピットを３穴検出した。北側でも同様の規模の小溝が途切れながら巡り、ピットをその小溝上で検出した。このラインが竪穴住居跡の外形線となる可能性が高いであろう。ピットは壁溝の中に掘られたと考えられ、板材を支えた痕跡と考えられる。住居跡内ではピットを多数検出したが、主柱穴となるのは６角形に配されたピットと、中央２穴の棟持柱になる柱と考えられる。円形を呈し、概ね直径は40～60cm、床面からの深さは標高の高い南半が40～45cm、低い北半が55cmである。炉跡等は検出できなかった。中央南部の主柱穴としたピッ



第14図　SH04D平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4・1/2）



第15図　SH05F・SD05F平・断面図（1/60）、SH05F出土遺物（1/2）

第16図　SH06A平・断面図（1/60）

トの南に隣接する直径24cm、深さ17cmの円形のピットからはサヌカイト製石鏃が出土した。埋土中からは弥生土器小片やサヌカイト片が出土した。

33～35はサヌカイト製石器であり、33・34はピットから出土した遺物である。33・35は尖頭器で、34は平基式石鏃である。

遺構の時期は、他の竪穴住居跡とほぼ同時期と考えられる。

SH06A（第16図）

Ⅳ区で検出した竪穴住居跡である。丘陵頂部からやや東へ下がった、西から南東へ傾斜する地形に立地する。方形と考えられ、規模は北東－南西方向が2.43m、北西－南東方向が約３m、深さが

約10cmである。床面の標高は57.1mである。埋土は灰黄色砂質土である。竪穴住居跡の南東部は消失する。住居内からは壁溝や炉跡等は見られなかったが、竪穴住居跡の立ち上がりに沿って直径15～21cmの円形、あるいは長径36cm、短径12cm程度の楕円形で、深さ15～58cm程度のピットが10～35cm間隔で並んでいる。このピット列の延長部分は直径10～24cm、深さ25～47cmの規模で、10～30cm間隔で、概ね北西－南東方向に2.85m分検出されており、壁面に沿ってピットが並ぶものと考えられる。これらは竪穴住居の壁を支える柱穴と考えられる。住居の北隅では土坑を検出しているが、竪穴住居跡との関連は不明である。主柱穴は、想定される竪穴住居跡の外形線の東・北・南部に直径約30cm、深さ47～70cmのピットを3穴検出したが、西隅のピットは未検出である。住居跡内で検出したピットの中には住居跡に伴わないものもあると考えられる。埋土中からは弥生土器小片やサヌカイト片が出土した。

遺構の時期は他の竪穴住居跡と同様の時期と考えられる。

SH07A（第17・18図）

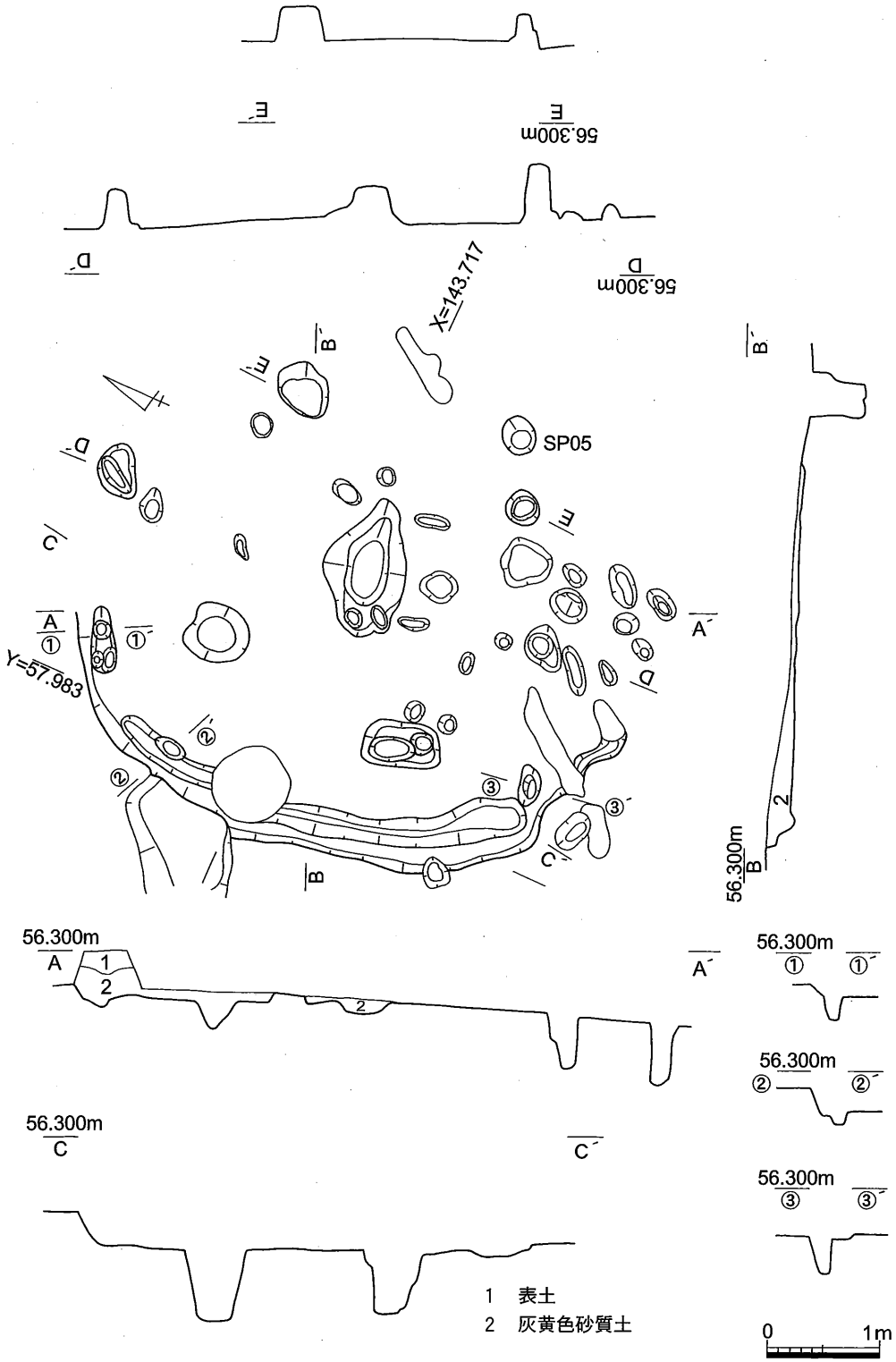
Ⅲ－1区とⅣ区に跨って検出した竪穴住居跡である。丘陵頂部から東側へ下がった尾根上の西から東へ傾斜する場所に立地する。隅丸方形と考えられ、1辺は5.3m程度と考えられる。東半部は消失する。深さは最も深い西側で18cm、床面の標高は55.9m、埋土は灰黄色砂質土である。西辺部と北辺の一部で幅20～26cm、深さ5cmの壁溝を検出した。住居跡内からピットを多数検出したが、主柱穴は4隅に位置する4穴が該当するものと考えられる。主柱穴は不整円形または長方形で、直径20～52cm、もしくは長辺68cm、短辺42cmの規模で、深さ23～62cmを測る。中央部には長軸1.20m、短軸0.74m、深さ13cmの規模で、埋土が竪穴住居跡埋土と同じくする楕円形の土坑を検出したが、中央土坑として捉えられるかどうかは不明である。埋土中からは弥生土器、サヌカイト片が出土した。

36～40は弥生土器である。36・37は広口壺で、口縁端部に凹線を2条施した後、37では縦方向の刻み目を施す。38は甕で、口縁端部には凹線2条巡らせる。39・40は高杯脚部で、端部に凹線2条を巡らせ、40には工具による刺突文が、39には山形のヘラ描き文と刺突文、3箇所の穿孔が認められる。41は緑泥片岩製の柱状片刃石斧である。上部は割れており、中心部分には擦れたような装着痕跡が残る。42は砥石で、5面に擦痕が残るが、使用による窪みは見られない。43・44はSH07A内で検出したピットから出土した遺物である。竪穴住居跡に伴う可能性もある。43は甕である。44は高杯で、杯部と脚部の接合部である。内外面とも密なヘラミガキを施す。

遺構の時期は、竪穴住居跡は弥生時代後期初頭、ピットも概ね同時期と考えられる。

SH08A（第19図）

Ⅱ－1区とⅣ区に跨って検出した。丘陵頂部から東側の尾根上の西から東へ緩く傾斜する斜面上立地する。床面の標高は56.8mである。竪穴住居跡の掘り込みは認められなかったが、南部から南東部にかけて断続的に幅10～35cm、深さ7cm程度の小溝が検出されたことから、壁溝と考えられる。他の竪穴住居跡と同様、壁溝中に直径20～31cm程度、深さ10～46cm程度の円形のピットが検出されており、同規模のピットを壁溝の想定線の延長上で拾い上げると、概ね直径4mの竪穴住居が想定できる。ピットは0.4～1.3m間隔に配され、ややばらつきがある。主柱穴には、やや歪んだ方形に配された長軸32～46cm、短軸25～30cm、深さ20～66cmの楕円形のピットが相当すると考えられる。

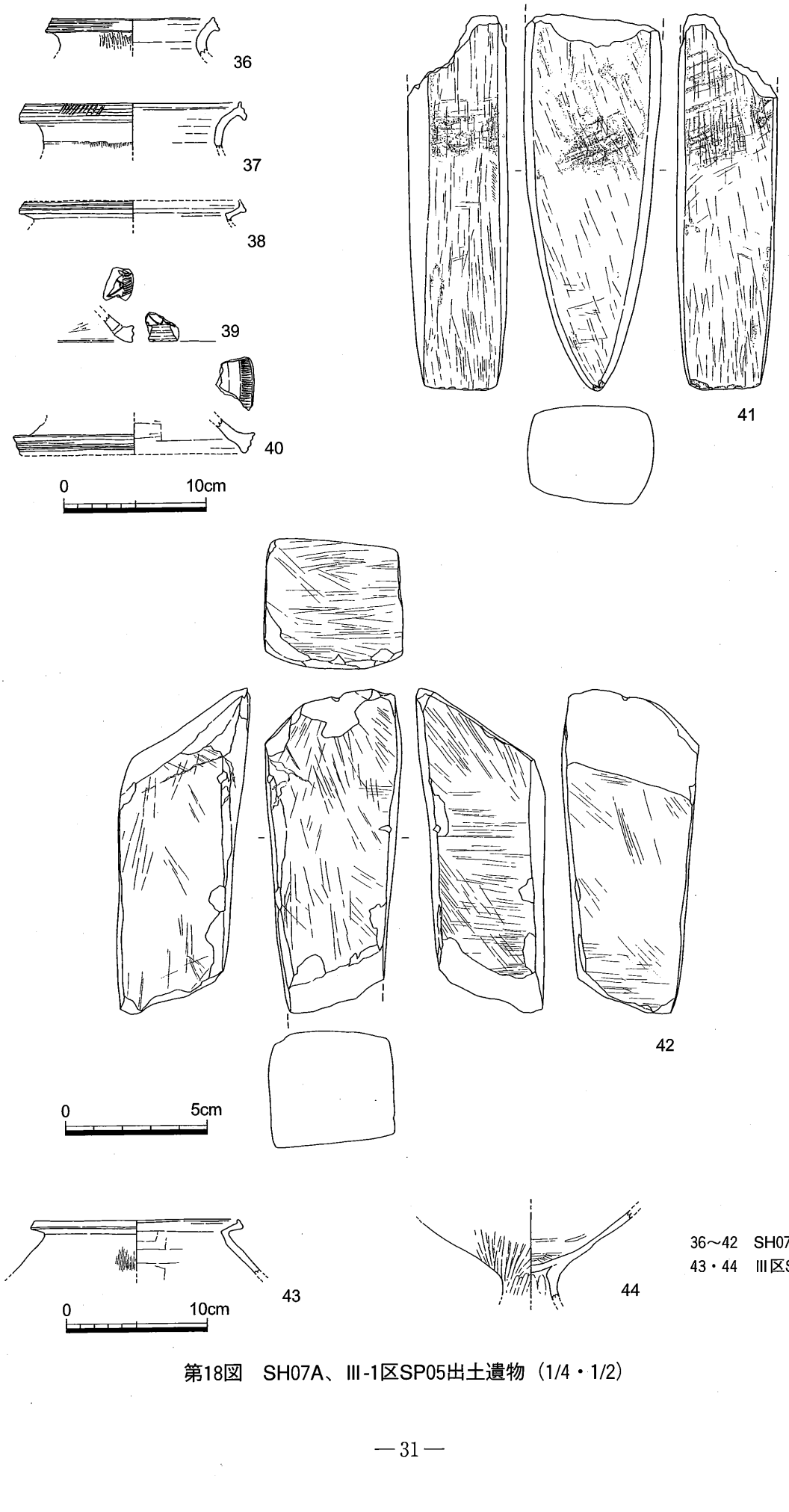


第17図　SH07A平・断面図（1/60）

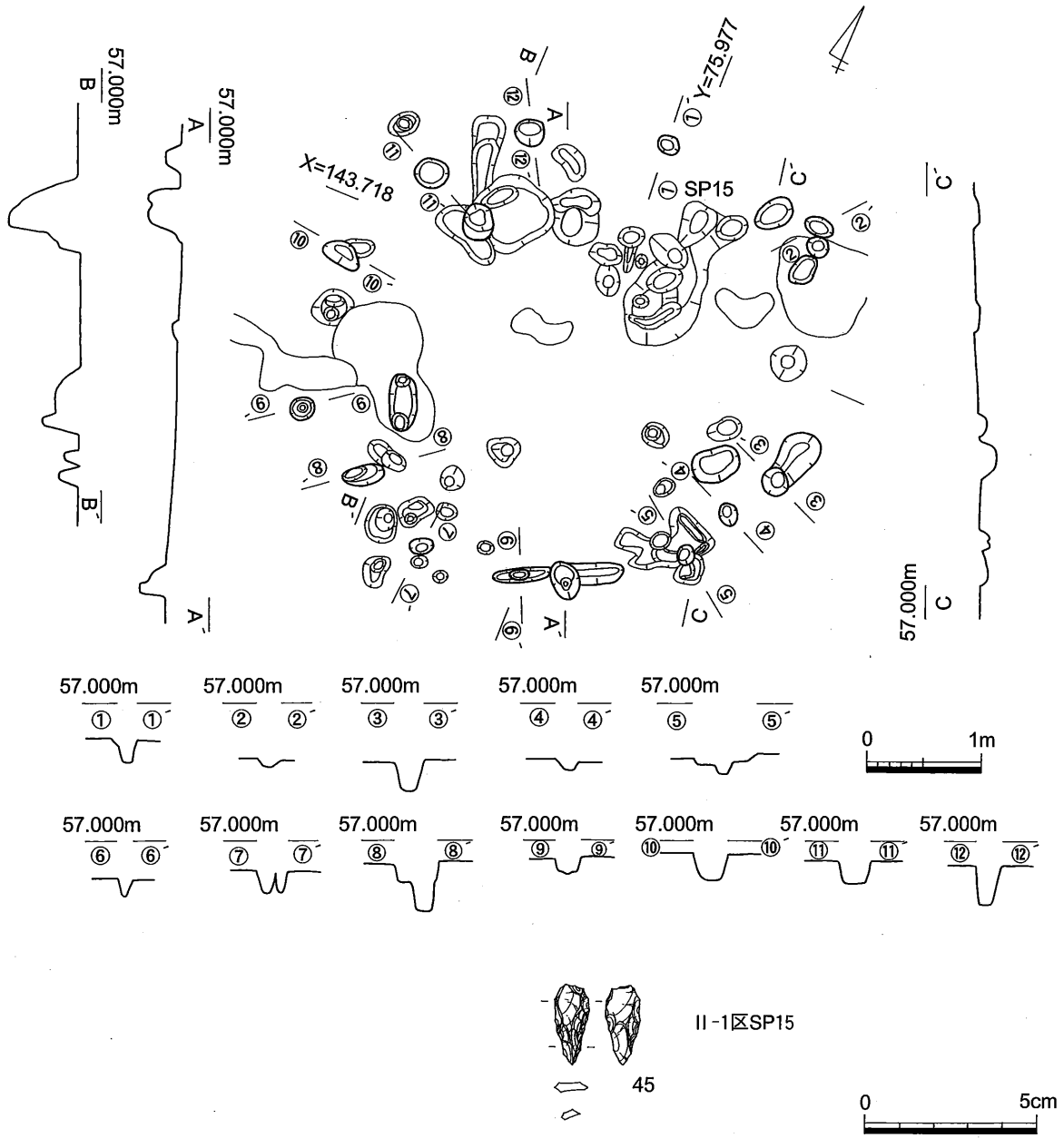
炉跡は不明である。

45はSP15から出土した遺物である。下端部を尖らせており、上端部は未成形であるが、石錐の未製品と考えられる。

時期は他の竪穴住居跡と概ね同時期と考えられる。



第18図　SH07A、III-1区SP05出土遺物（1/4・1/2）



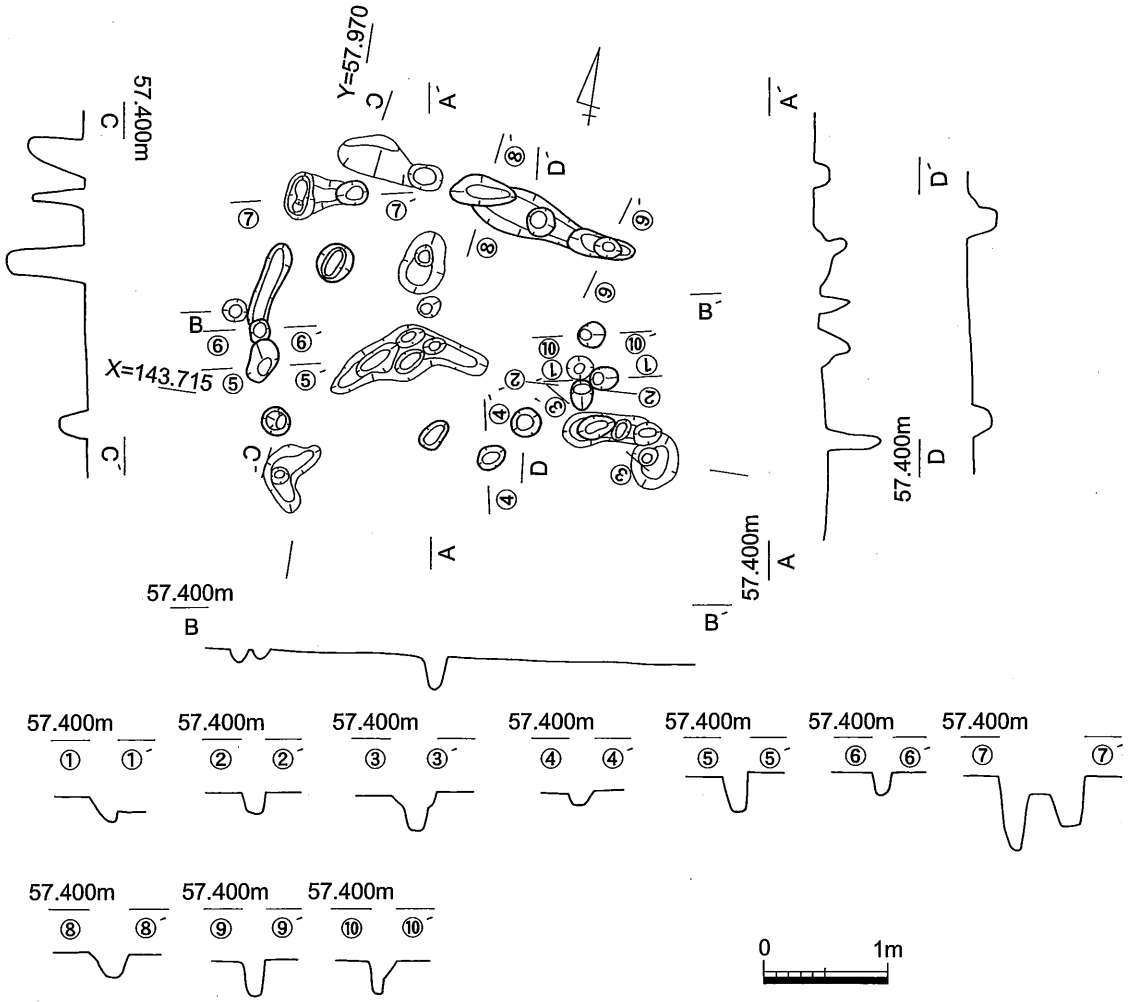
第19図　SH08A平・断面図（1/60）、II-1区SP15出土遺物（1/2）

SH09A（第20図）

Ⅱ－１区とⅣ区に跨って検出した。丘陵頂部から東側の尾根上の西から東へ傾斜する地形に立地する。床面の標高は57.1mである。竪穴住居跡の掘り込みは認められなかったが、北辺及び西辺で壁溝と考えられる幅18～38cm、深さ10cm程度の小溝を検出した。溝には直径24cm、深さ10～60cm程度の円形のピットが20～35cm前後の間隔で並ぶ。同様の規模のピットを、壁溝の想定ライン上で拾うと、住居の規模は東西方向が2.8m、南北方向が2.2mを測る。直径24～30cm、深さ19～62cmの円形のピットを北西隅と南東隅の２箇所で検出しており、この２穴が主柱穴になるか、未検出ではあるが４隅に主柱穴を配したかのどちらかと考えられる。出土遺物はなかった。

SH11A（第21図）

Ⅳ区で検出した竪穴住居跡である。丘陵頂部の南端付近で検出した。北から南へ傾斜する地形で



第20図　SH09A平・断面図（1/60）

ある。南端部では一部竪穴住居跡の掘り込みの認められない部分があった。ほぼ円形を呈し、直径３ｍ前後、深さは北側で６㎝程度、床面の標高は57.5ｍ程度と考えられる。北西部と北東部では幅16㎝、深さ２㎝の壁溝を検出した。壁溝内には直径16㎝前後、深さ22～55㎝のピットを検出している。おそらく住居跡の外形線に沿って配されたと考えられ、壁に利用した板材を支えたピットと考えられる。主柱穴は明確ではないが、他のピットに比べてやや大きめで深めのピットを拾うと、長軸30～40㎝、短軸20～30㎝、深さ40㎝程度の楕円形のピットを想定でき、方形に配されると考えられる。出土遺物はなかった。

SH12A（第22図）

Ⅳ区で検出した住居跡である。丘陵頂部の南端付近で、SH11Aの西側に隣接して検出され、ほぼ平坦な面に立地している。直径20～26㎝、深さ６～65㎝のピットが10～130㎝間隔で円形に巡っており、直径は2.6ｍ前後と考えられる。床面の標高は57.5ｍである。竪穴住居跡の掘り込みは認められず、後世の削平も考え難いことから、平地式住居であったと考えられる。住居跡の中央にピットを検出しているが、深さは16～18㎝と浅く、住居跡に伴うものかどうかは不明である。出土遺物はなかった。

SH13A（第23図）

Ⅱ－１・２区で検出した竪穴住居跡である。丘陵頂部で検出した。竪穴住居跡の掘り込みは認め

られなかったが、ピットの配置から平地式住居跡と考えられる。直径20～40cm、深さ12～67cmのピットが40～200cm間隔で並ぶことから、その柱穴列が竪穴住居跡の外形線と考えられる。北西－南東方向が4.2m、北東―南西方向が6.4mの隅丸方形を呈し、床面の標高は57.8mである。主柱穴は長方形に配する、直径40～60cm、深さ26～55cmの円形または楕円形のピットが相当すると考えられる。出土遺物はなかった。

SH14B（第24～29図）

Ⅳ区、丘陵頂部から南へ延びる尾根線上で検出した。西浦谷遺跡で最も大きい竪穴住居跡である。やや楕円形気味で、長径7.0m、短径6.4m、深さは最も深い北側で50cmである。埋土は上層が灰黄色小礫混砂質土、下層が黄灰色小礫混砂質土（焼土ブロック、炭化物を少量含む）、床面の標高は56.4mである。埋土中からは多量の焼土、炭化材が出土した。

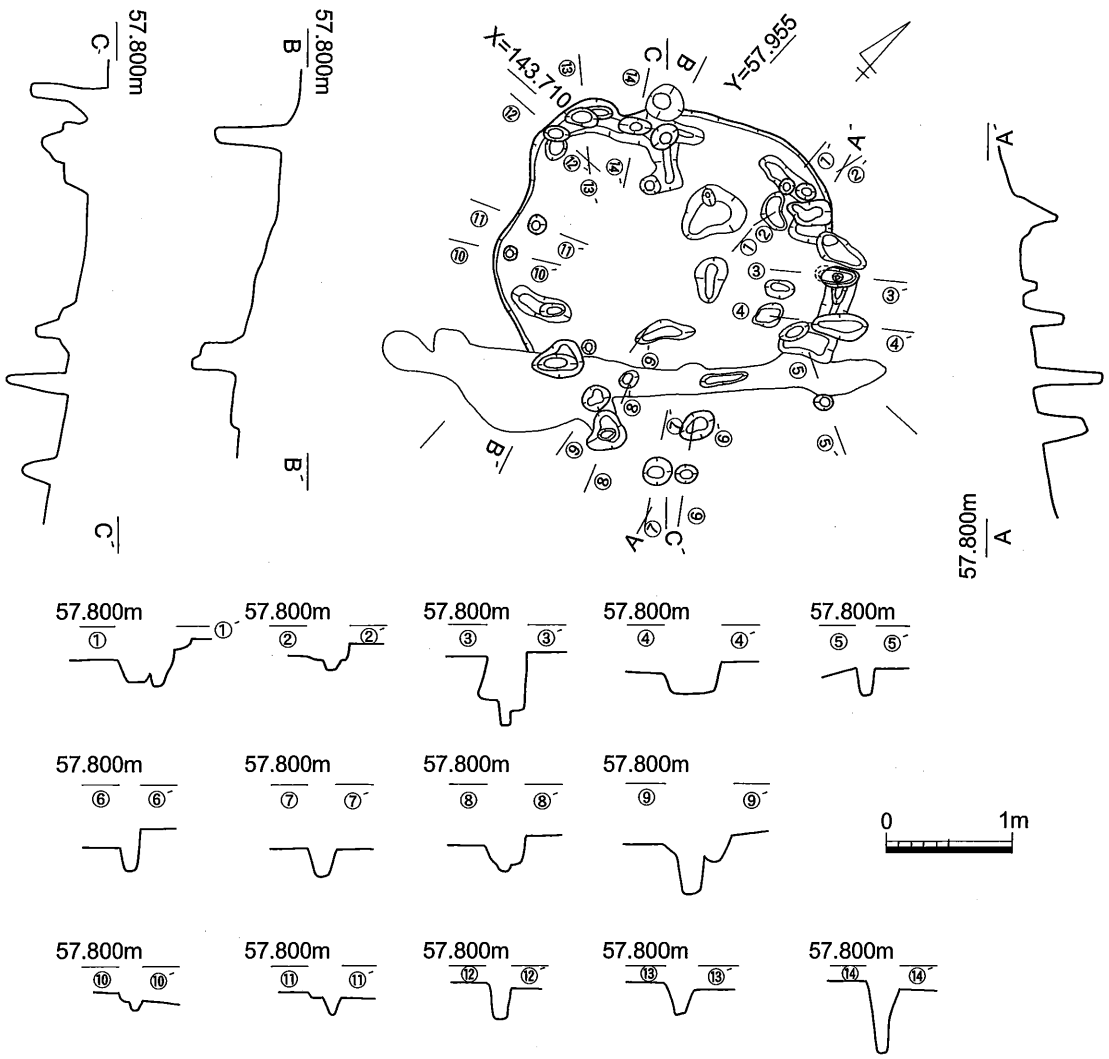
焼土は竪穴住居跡の周縁部、壁溝付近と竪穴住居跡埋土除去後の床面の北半部で検出され、焼土を検出しなかった部分は馬蹄形に残った。また、床面中央付近には特に焼土が固い部分があった。

焼土を除去した後は北西部を中心に南西から北東にかけて炭化材を検出した。炭化材は概ね垂木と住居の壁に打ち込まれた板留めの柱である。垂木には直径10cm程度の丸太が、壁に打ち込まれた板留めの柱は直径５～7.8cmの木を半分に割って使用していたようだ。そのほか板状の炭化物も検出した。壁際に使用した土留めの板材と考えられる。

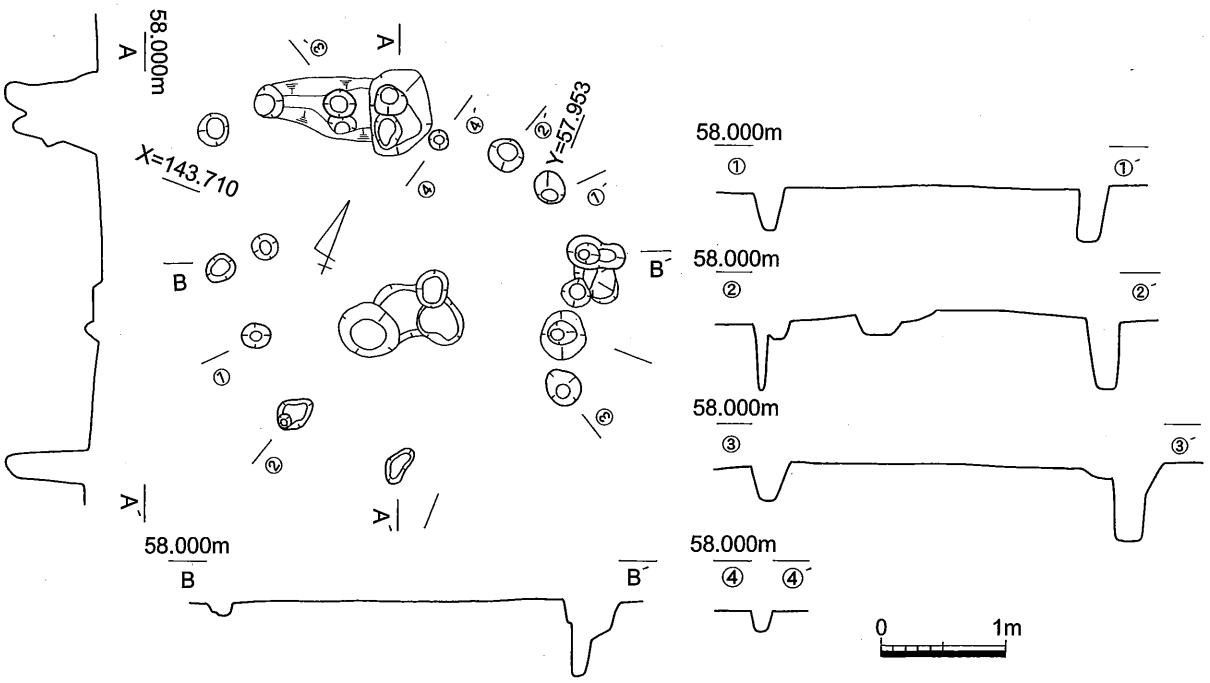
炭化材除去後には内部からは壁溝とピットを多数検出した。ほぼ全体に壁溝が巡るが、南東部のやや床面が高い部分と北東部で一部壁溝が消滅する。また、東部の一部で壁溝が二重になっている。壁溝中には直径10～15cmの小ピットが狭い箇所では10cm、広い箇所では60cm間隔で並ぶ。このピットの位置は出土した炭化材に位置とも概ね合致し、壁溝中に立てた杭のためのピットであることがわかる。また、竪穴住居跡の外形線上にも同規模のピットが位置しているが、これは垂木の下端部と考えられる。

ピットの大きさと深さから主柱穴と考えられるものは、概ね直径40～55cm、深さ60～90cmの８～９穴で、南西及び北西の辺がやや長い５角形に配置すると考えられる。出入り口は、周辺地形が北から南へ傾斜すること、南側の壁溝が途切れ、床面のやや窪む場所が踏み固めによるものと考えれば、南側に想定できる。また、竪穴住居跡の南側には幅52cm、深さ10cmの溝が取り付き、排水のための溝の可能性があると考えられる。

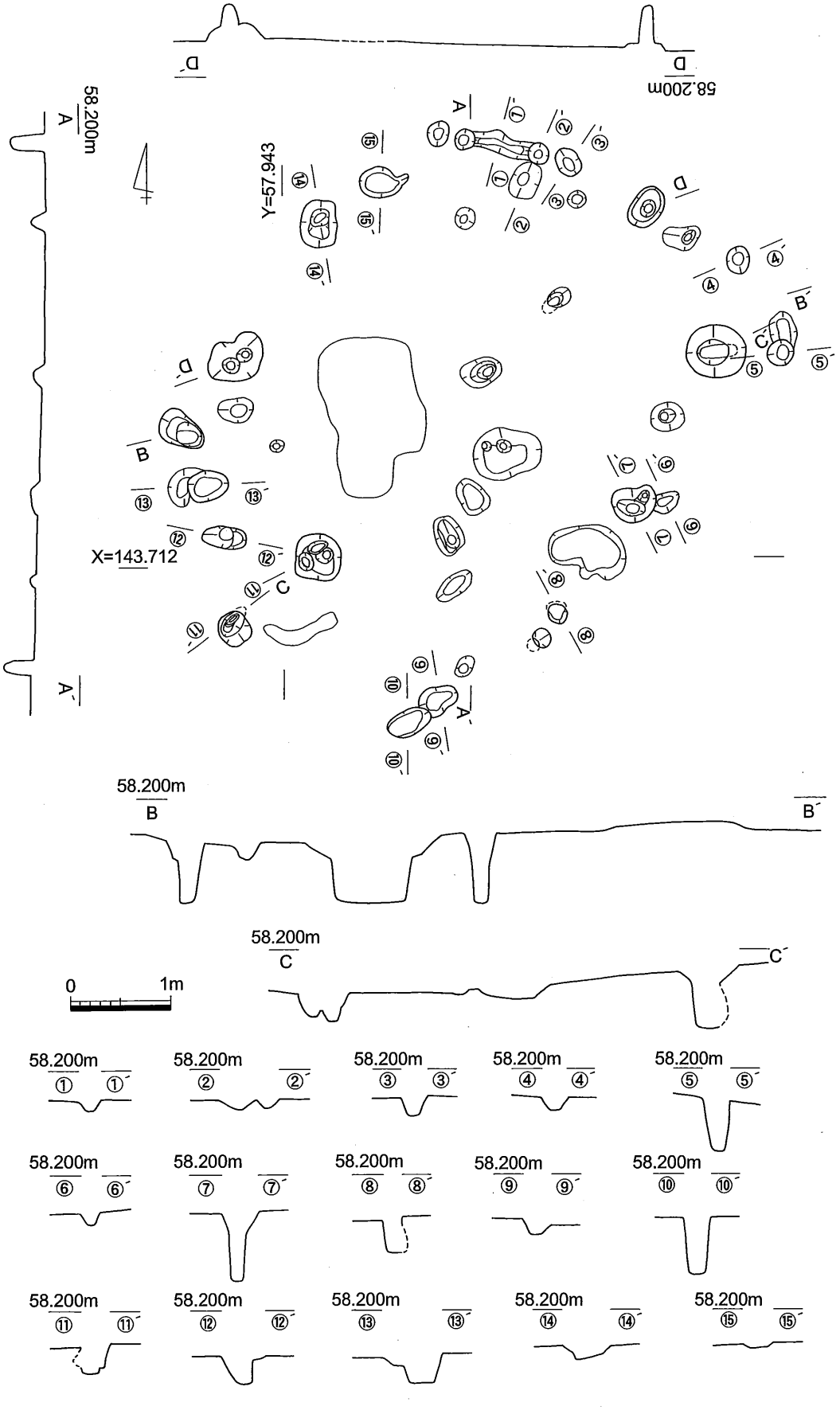
46～52は床面上から出土した遺物である。46～49の弥生土器のうち、46・47は壺で、同一個体の可能性がある。外面は丁寧にヘラミガキを施す。48は大型の甕で、口縁端部に緩い凹線文を施す。49は脚である。50～52はサヌカイト製石鏃で、50は有茎式である。51は先端部と下端部が欠損している。52は両面とも縁部のみを加工し、下端部は未加工である。53～74は埋土中から出土した。53～55は弥生土器である。53・54は甕で、いずれも口縁端部に２条の凹線を巡らせる。55は高杯脚部である。56～73はサヌカイト製石器で、56～58は尖頭器、59～64・70は有茎式石鏃である。70は下部が折損し、側縁部のうち片側は加工が施されていないことから未製品と考えられる。65は下部が折損するが、石鏃と考えられる。66は上部欠損している。67は一辺に加工痕を持つ剥片で、石鏃の未製品と考えられる。68・69は石錐、71～74は楔形石器である。71～73は下部に敲打痕があり、74は上・下部ともに敲打痕がある。74は結晶片岩製である。



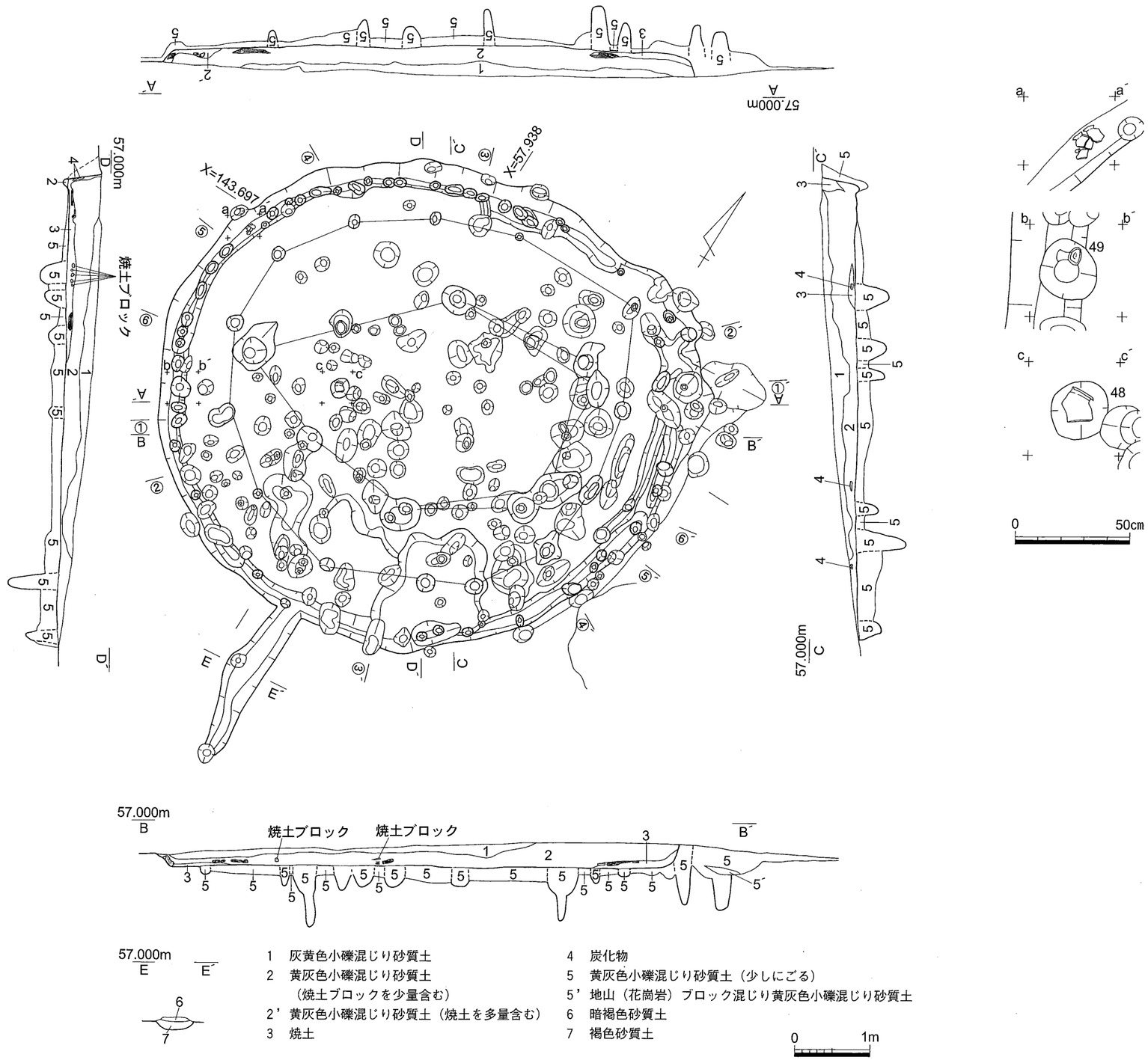
第21図　SH11A平・断面図（1/60）



第22図　SH12A平・断面図（1/60）

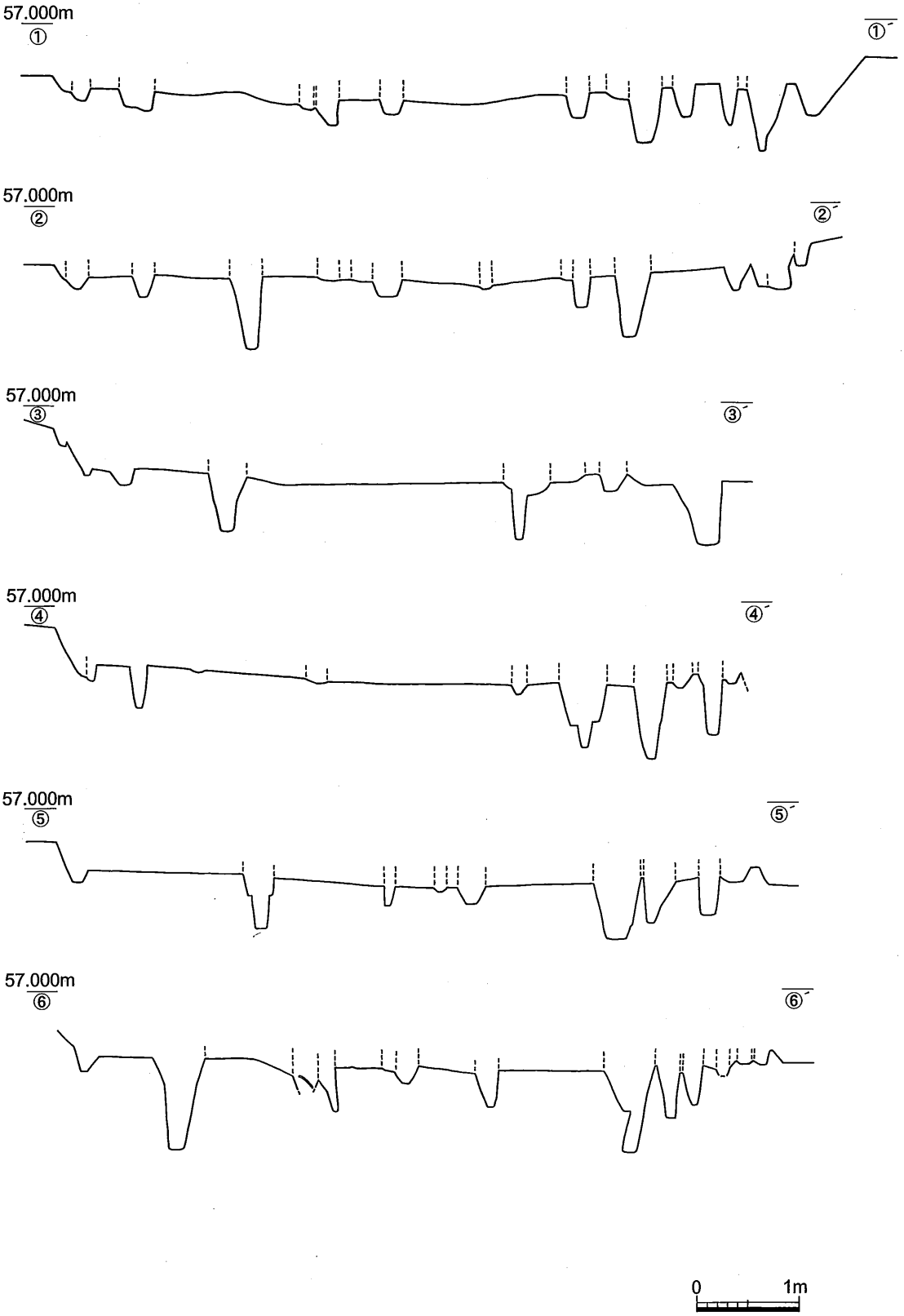


第23図　SH13A平・断面図（1/60）

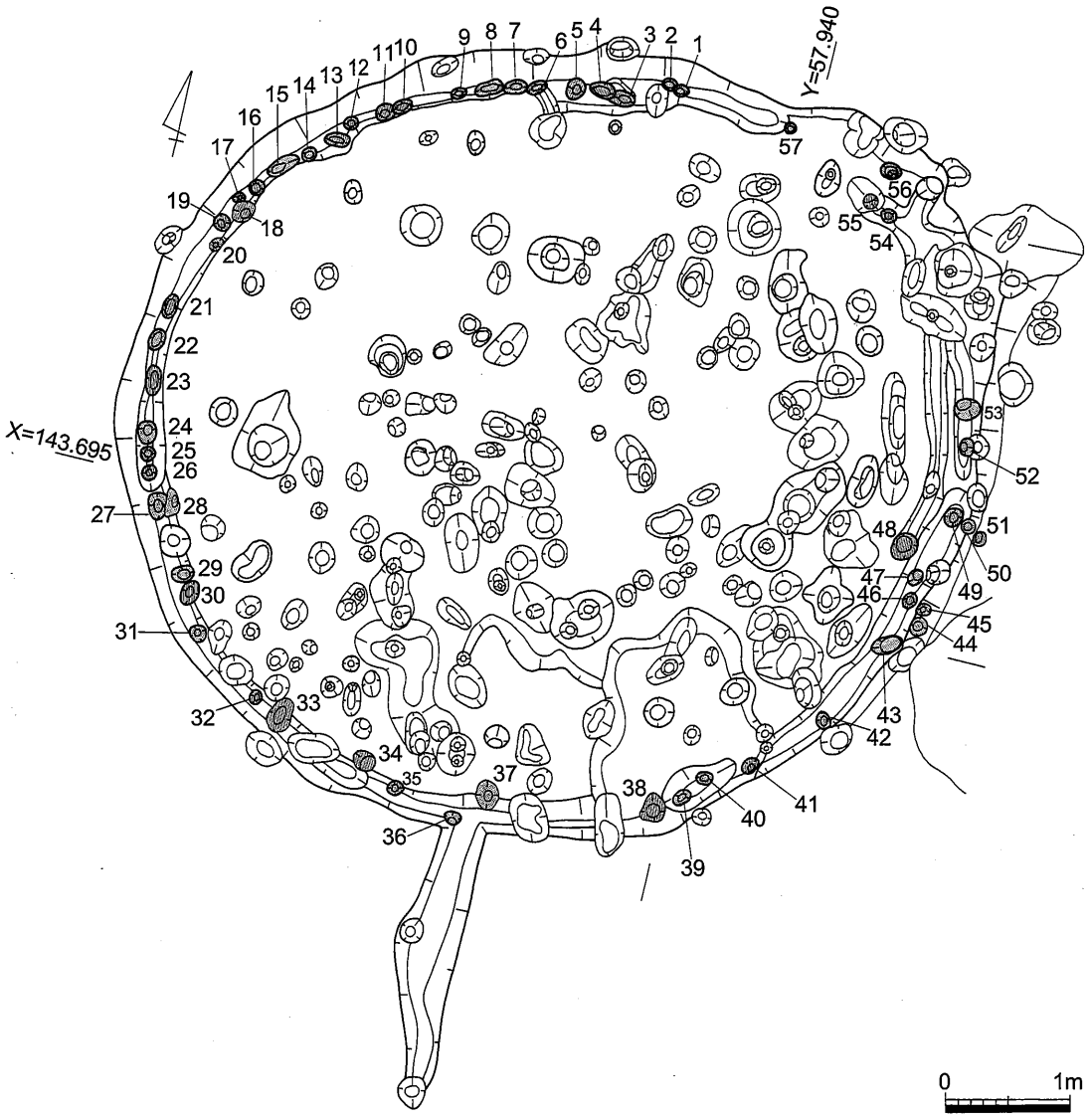


1　灰黄色小礫混じり砂質土
2　黄灰色小礫混じり砂質土
　（焼土ブロックを少量含む）
2’黄灰色小礫混じり砂質土（焼土を多量含む）
3　焼土
4　炭化物
5　黄灰色小礫混じり砂質土（少しにごる）
5’地山（花崗岩）ブロック混じり黄灰色小礫混じり砂質土
6　暗褐色砂質土
7　褐色砂質土

第24図　SH14B平・断面図（1/60）、遺物出土状況平面図（1/20）



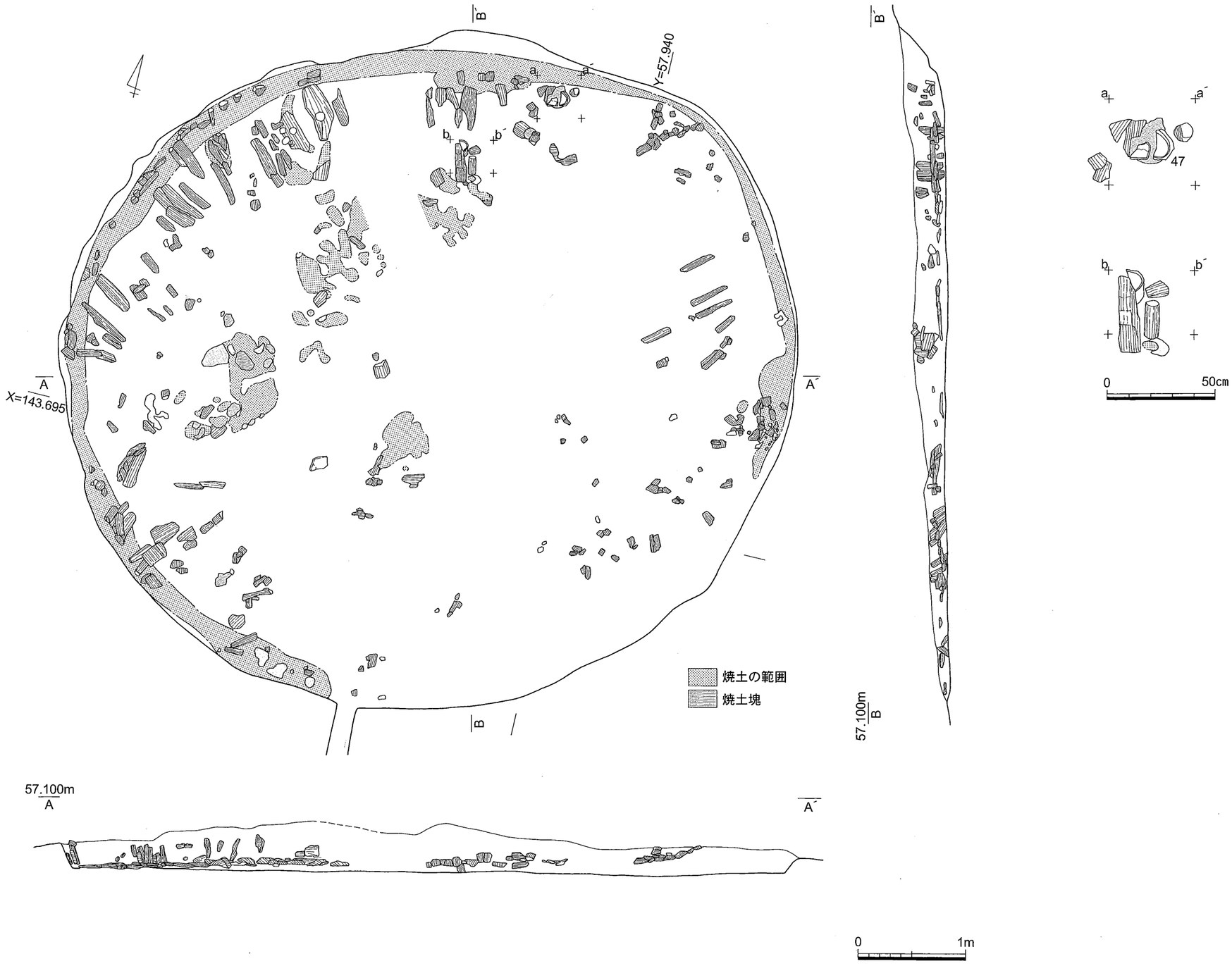
第25図　SH14B断面図①～⑥（1/60）



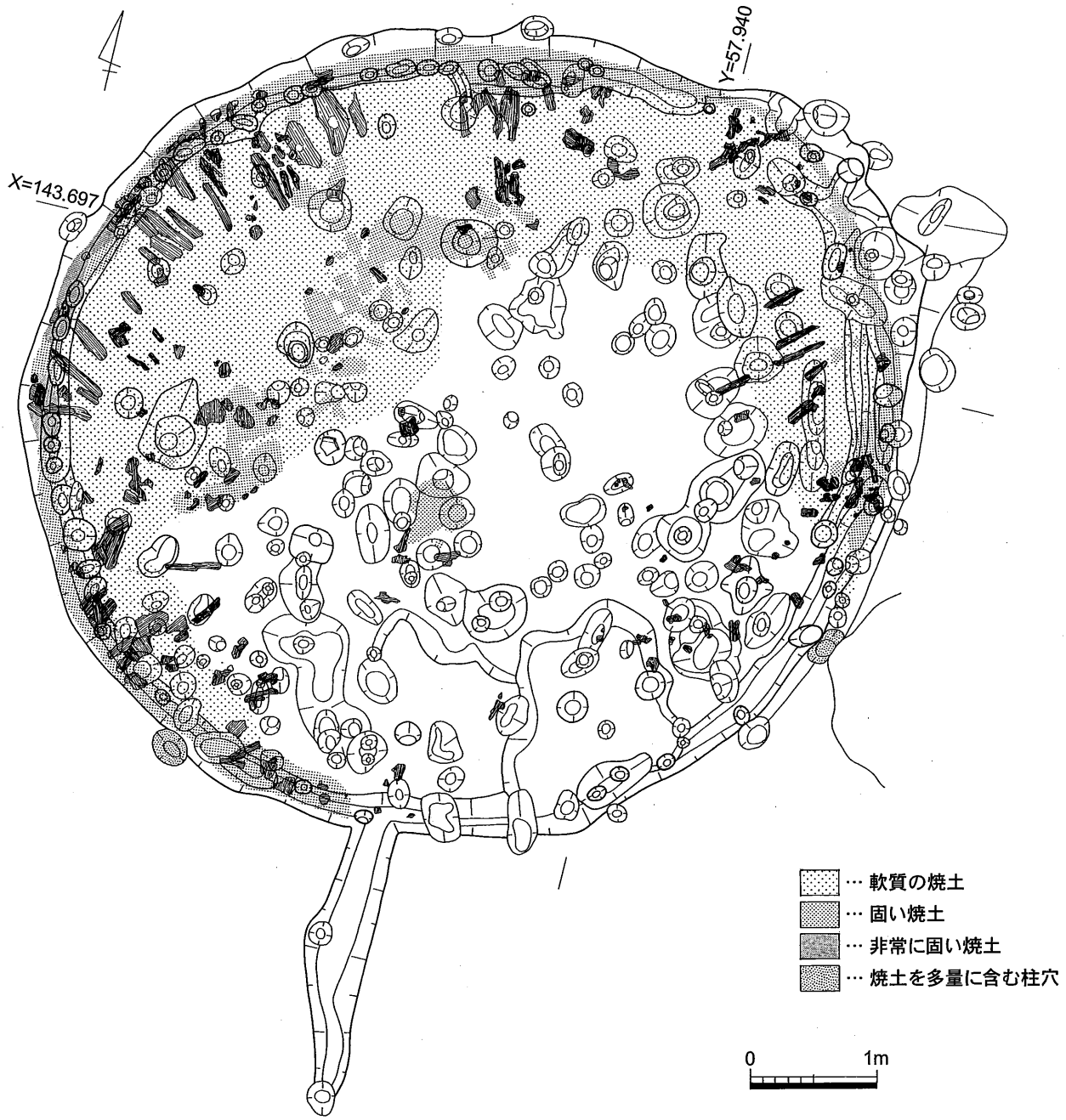
第26図　SH14B柱穴配置図（1/60）

ピット番号	形状	長軸(直径)(cm)	短軸(cm)	検出面のレベル(m)	底のレベル(cm)	検出面からの深さ(cm)
1	楕円	12	10	56.304	56.155	14.9
2	楕円	(12)	10	56.365	56.188	17.7
3	楕円	(22)	13	56.346	56.229	11.7
4	楕円	22	12	56.354	56.248	10.6
5	円形	17	-	56.354	56.171	18.3
6	楕円	16	10	56.366	56.319	4.7
7	楕円	18	12	56.334	56.303	3.1
8	楕円	23	10	56.334	56.272	6.2
9	楕円	12	9	56.341	56.274	6.7
10	楕円	16	12	56.346	56.273	7.3
11	楕円	16	14	36.373	56.249	12.4
12	円形	10	-	56.373	56.271	10.2
13	楕円	21	10	56.328	56.263	6.5
14	円形	10	-	56.328	56.292	3.6
15	楕円	28	6	56.448	56.116	33.2
16	円形	12	-	56.326	56.238	8.8
17	楕円	(10)	8	56.326	56.291	3.5
18	楕円	19	16	56.326	56.065	26.1
19	楕円	14	12	56.303	56.231	7.2
20	楕円	12	10	56.303	56.127	17.6
21	楕円	20	12	56.296	56.173	12.3
22	楕円	18	13	56.296	56.205	9.1
23	楕円	24	13	56.266	56.219	4.7
24	楕円	19	15	56.238	56.168	7.0
25	楕円	12	10	56.229	56.183	4.6
26	楕円	13	11	56.243	56.037	20.6
27	楕円	22	(14)	56.318	56.211	10.7
28	楕円	22	11	56.231	55.655	57.6
29	楕円	20	13	56.346	56.219	12.7
30	楕円	20	14	56.341	56.236	10.5
31	楕円	13	12	56.395	56.208	18.7
32	円形	12	-	56.313	56.259	5.4
33	楕円	28	18	56.286	56.169	11.7
34	楕円	18	16	56.205	56.056	14.9
35	楕円	13	11	56.278	56.179	9.9
36	楕円	14	10	56.261	56.085	17.6
37	楕円	23	16	56.218	56.165	5.3
38	楕円	23	18	56.104	55.634	47.0
39	楕円	15	11	56.051	55.898	15.3
40	楕円	14	12	56.051	55.771	28.0
41	楕円	14	11	56.133	56.056	7.7
42	楕円	16	11	56.170	55.984	18.6
43	楕円	26	15	56.194	55.704	49.0
44	円形	14	-	56.331	56.118	21.3
45	楕円	12	10	56.299	56.149	15.0
46	楕円	12	10	56.212	56.118	9.4
47	円形	13	-	56.219	55.520	69.9
48	楕円	22	21	56.278	55.912	36.6
49	楕円	16	15	56.287	55.596	69.1
50	円形	11	-	56.384	56.265	11.9
51	楕円	12	10	56.336	56.213	12.3
52	楕円	14	12	56.275	55.836	43.9
53	楕円	22	18	56.346	55.778	56.8
54	楕円	14	10	56.178	56.146	3.2
55	円形	12	-	56.159	55.956	20.3
56	楕円	17	14	56.391	56.129	26.2
57	楕円	9	8	56.356	56.241	11.5

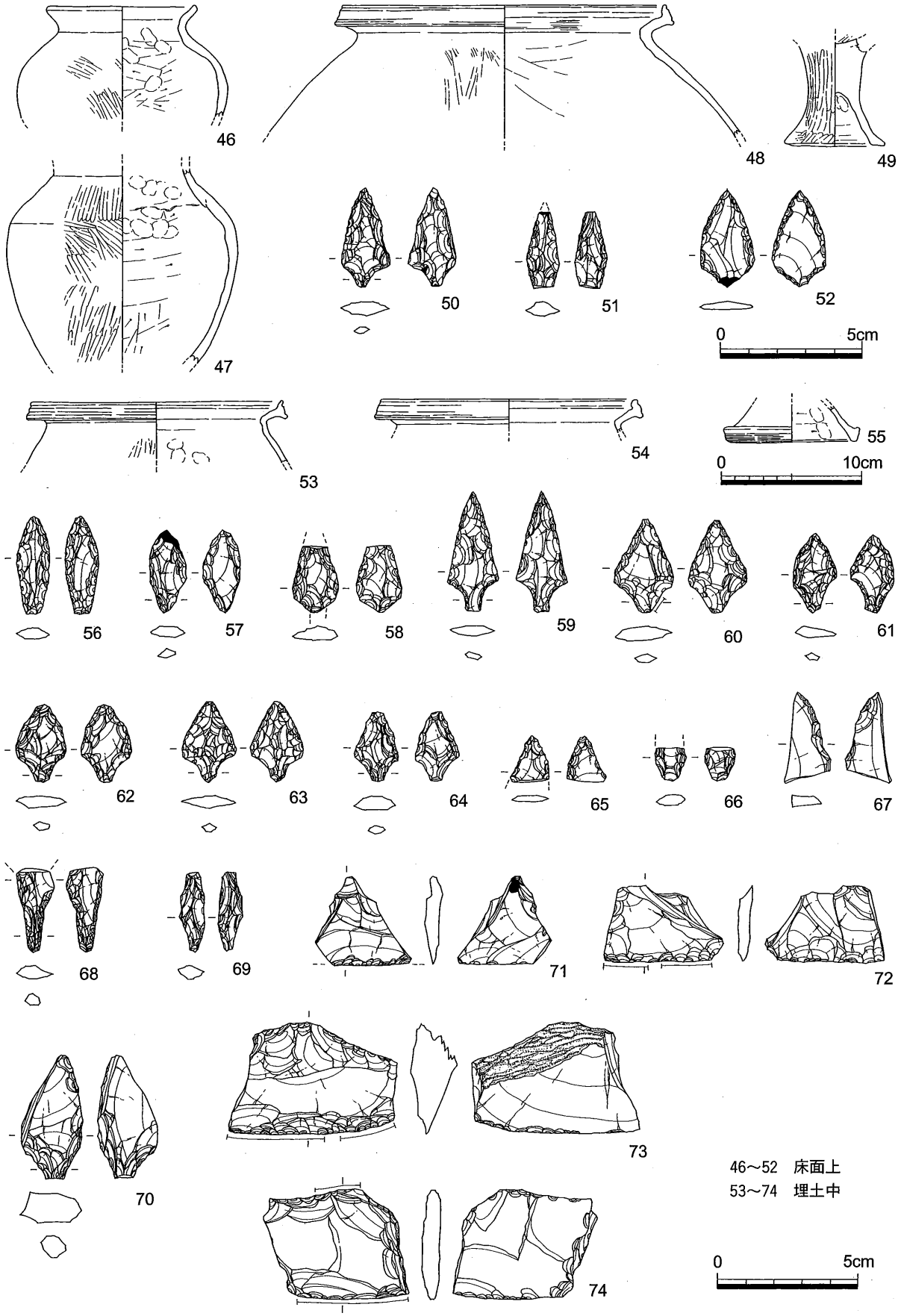
第３表　SH14B 柱穴一覧表



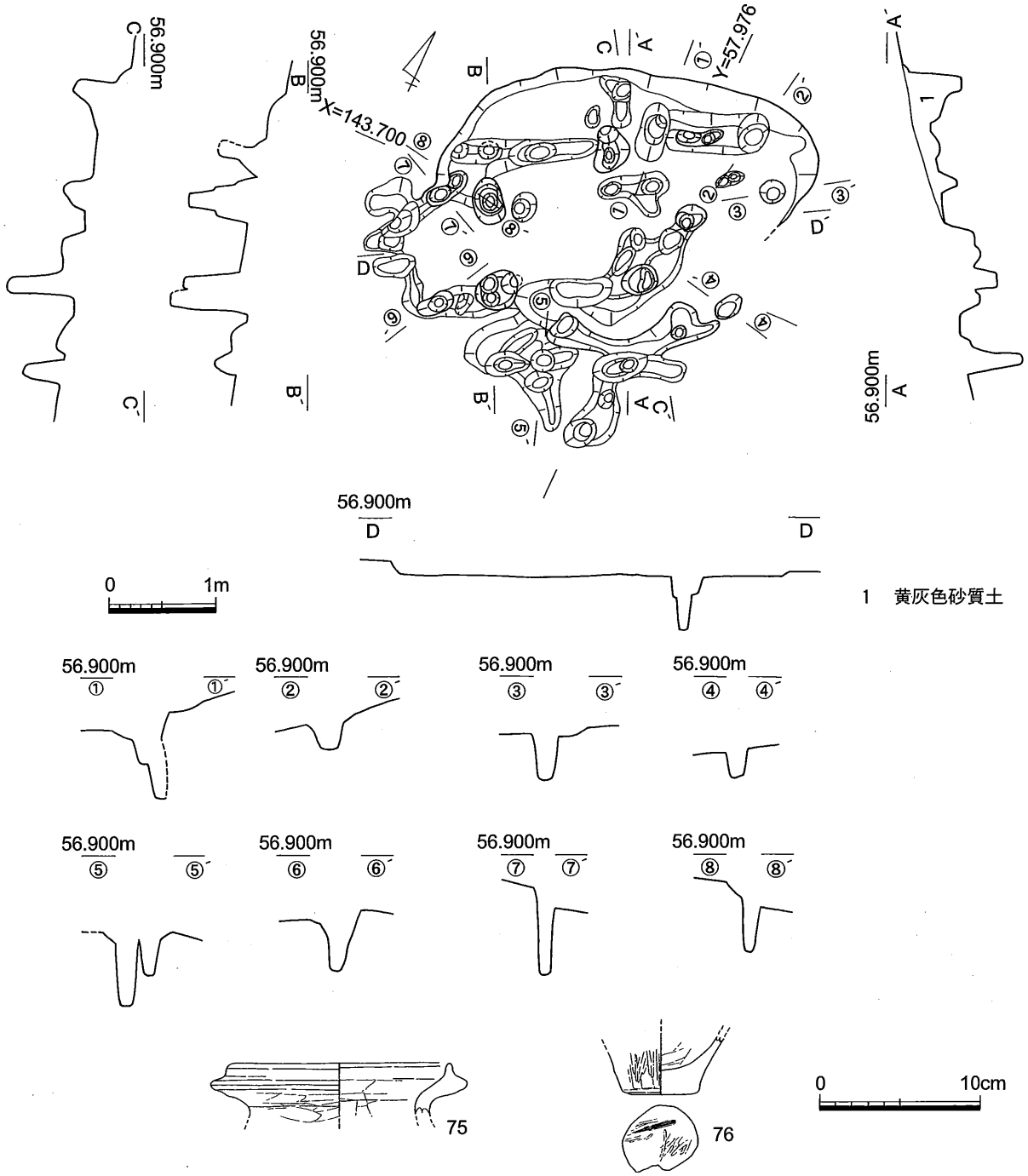
第27図　SH14B炭化材出土状況平面図・断面見通し図（1/40）、遺物出土状況平面図（1/20）



第28図　SH14B炭・焼土の範囲（1/50）



第29図　SH14B出土遺物（1/4・1/2）

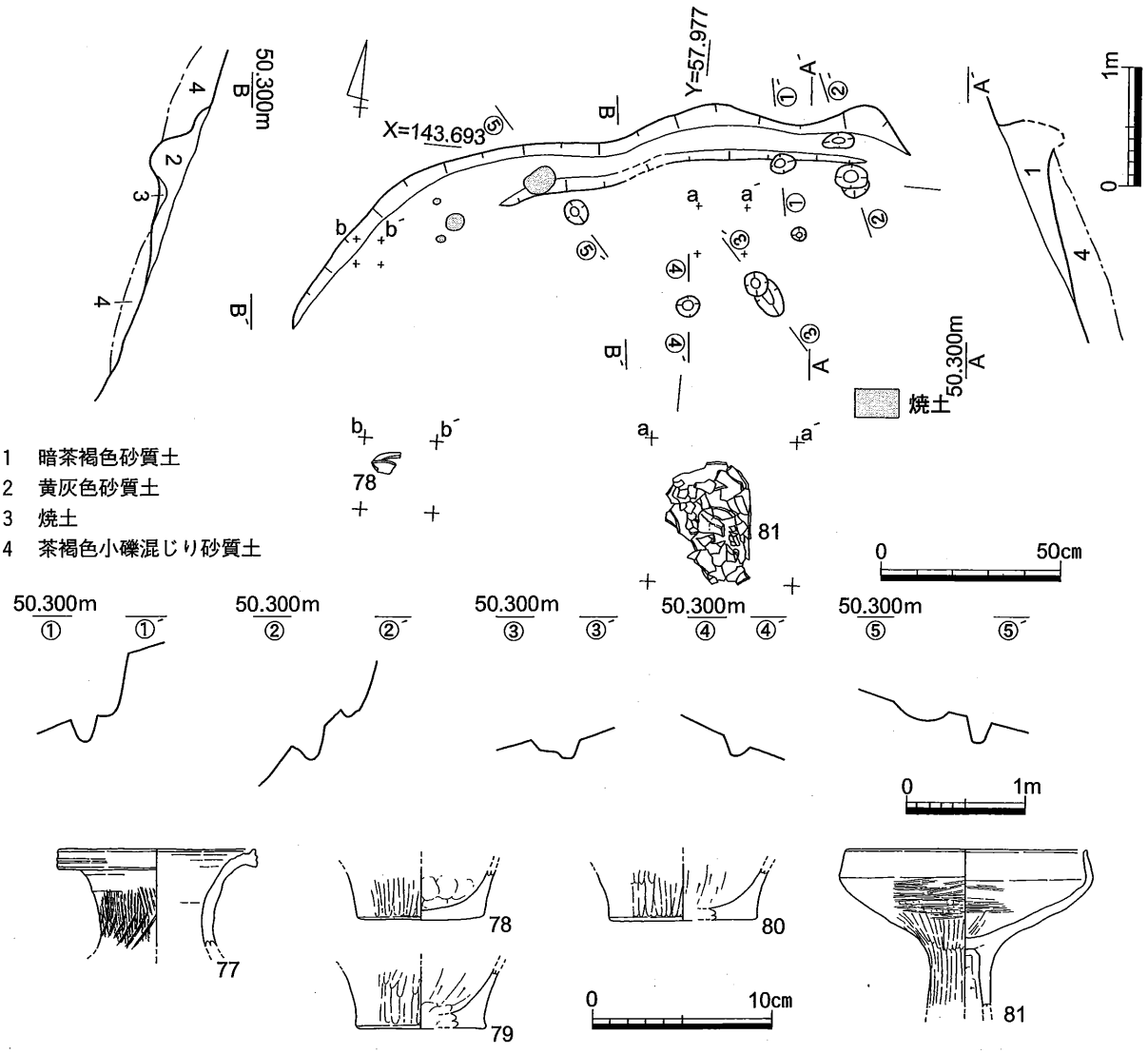


第30図　SH15B平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）

遺構の時期は弥生時代後期初頭である。

SH15B（第30図）

Ⅳ区で検出した竪穴住居跡である。丘陵頂部からやや南へ下がった地点で検出した。SH14Bの約４ｍ東側に隣接する。竪穴住居跡の掘り込みは北側でのみ検出され、南半部では消失する。隅丸方形を呈すると考えられ、東西方向は約3.3m、南北方向は３ｍ前後と思われる。床面の標高は56.4mである。埋土は黄灰色砂質土である。北側では竪穴住居跡の掘り込みのやや内側で幅25～40cmの小溝を検出し、その内部から直径14～20cm程度の小ピットを約15～40cm間隔で検出した。竪穴住居跡



第31図　SH16C平・断面図（1/60）、遺物出土状況平面図（1/20）、出土遺物（1/4）

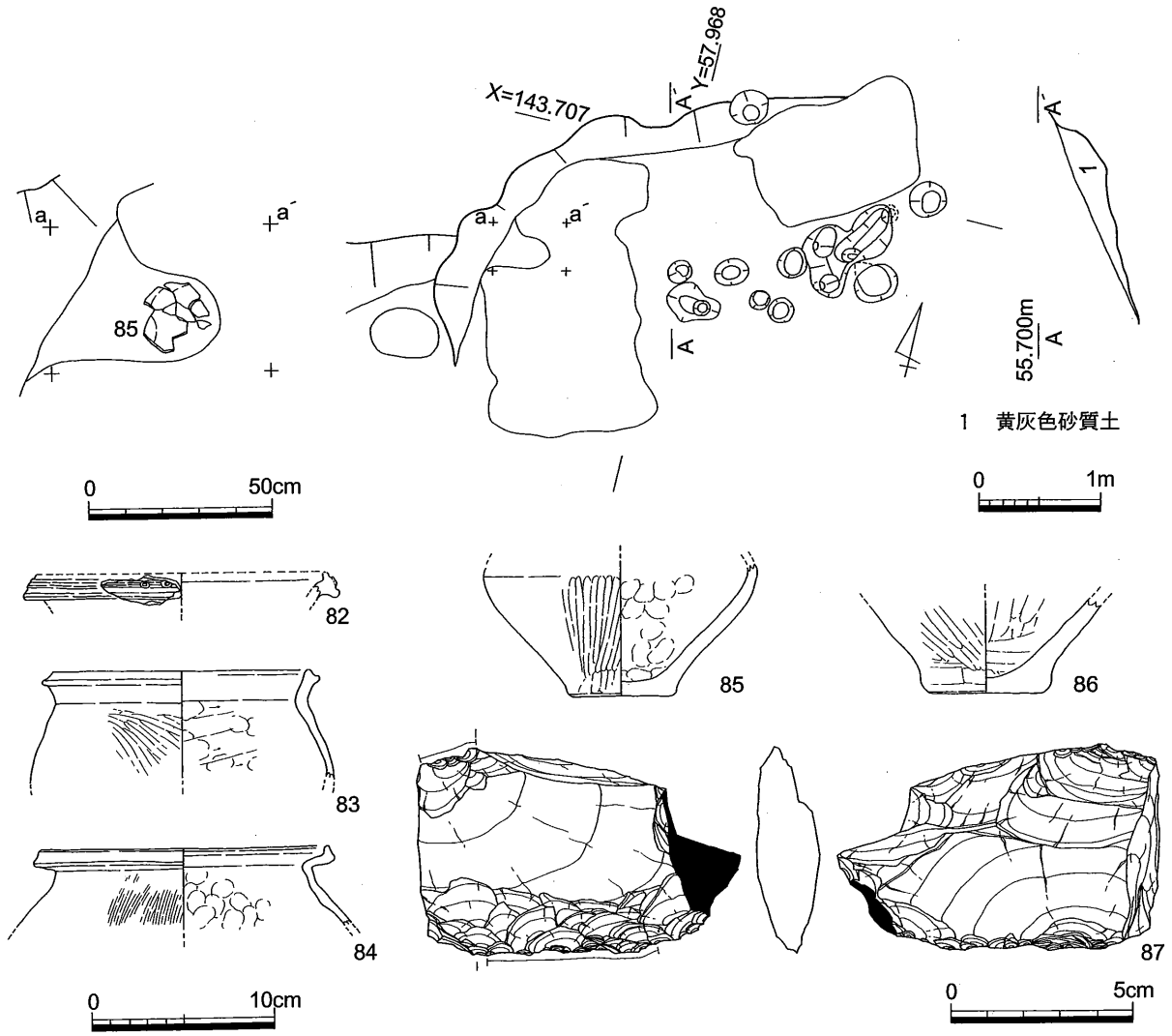
の掘り込みの位置とは若干異なるが、壁溝となっていた可能性が高い。この小溝の約1.8m南側で同様の小溝を検出しており、これが竪穴住居跡の南限となると考えられることから、南北の規模は３m程度と考えられる。主柱穴は長径約40cm、短径20～30cmの楕円形のピットを５穴検出しており、それらを想定することができる。

75・76は弥生土器で、75は壺口縁部である。76は底部外面にヘラ描きが残る。

遺構の時期は弥生時代後期初頭頃と考えられる。

SH16C（第31図）

Ⅳ区で検出した竪穴住居跡である。丘陵南斜面で検出した。北側の掘り込みを検出したのみで、東・南側の検出面は床面の標高より低いため消失している。西側はⅤ区へ延びる。東西方向は5.2m以上、南北方向は1.7m以上、深さは最も深い北側で34cm、埋土は暗茶褐色砂質土、床面の標高は49.6mである。北側の一部では幅35cm、深さ16cm程度の壁溝を検出した。竪穴住居跡の検出範囲が狭く、主柱穴等は明確ではないが、壁溝の内側にあるピットは壁板を留めた柱穴の一部と考えられる。北西部の一部では炭を、北部中央付近の床面上では焼土を検出しており、焼失家屋であったことがわかる。



第32図　SH17C遺物出土状況平面図（1/20）、平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4・1/2）

77～81は弥生土器である。77は広口壺で、頸部にはハケメの原体による刻み目を施す。78～80は甕の底部で、いずれも内面はヘラ削り、外面はヘラミガキを施す。81は高杯である。

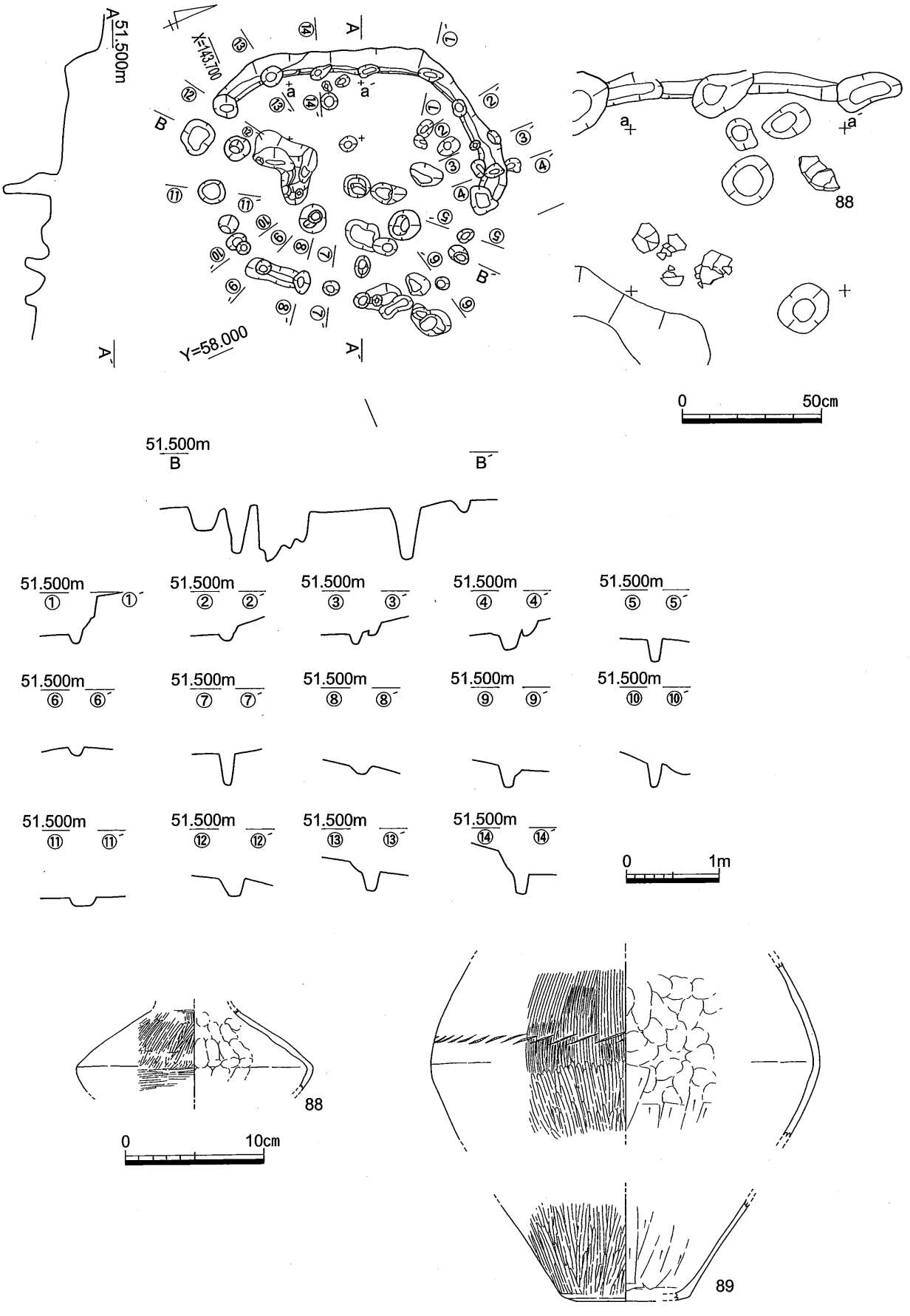
遺構の時期は弥生時代中期末頃と考えられる。

SH17C（第32図）

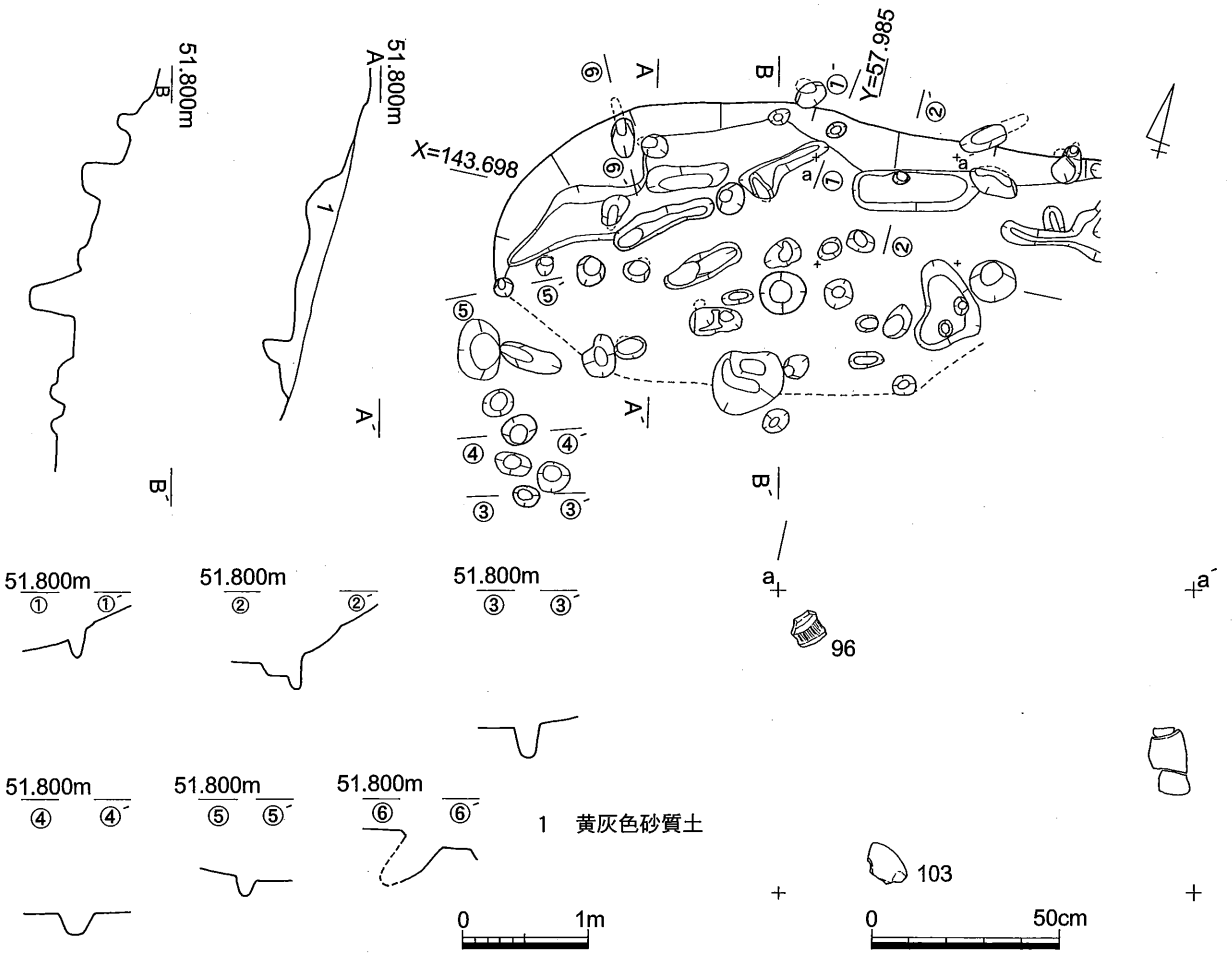
Ⅳ区で検出した竪穴住居跡である。丘陵南斜面、SI01Cの中央部で検出した。竪穴住居跡の掘り方の外形線は北側と西側の北半で検出し、残りは消失する。平面形状は隅丸方形と考えられ、規模は南北方向が２ｍ以上、東西方向が4.1ｍ以上、深さは北側で30㎝、床面の標高は55.2ｍである。土坑群との前後関係は明らかではない。主柱穴、壁溝等は不明である。丘陵斜面に立地するため、段状に地面を掘り窪めて平地に整えた後に竪穴住居跡をつくったと思われる。北西隅では土器がかたまって出土した。

82～86は弥生土器である。82は壺口縁部で、口縁端部は凹線を３条施した後２個の円形浮文を貼り付ける。83・84は甕である。85・86は壺底部である。87はサヌカイト製の楔形石器である。

遺構の時期は概ね弥生時代後期初頭と考えられる。



第33図　SH18C平・断面図（1/60）、遺物出土状況平面図（1/20）、出土遺物（1/4）



第34図　SH19C平・断面図（1/60）、遺物出土状況平面図（1/20）

SH18C（第33図）

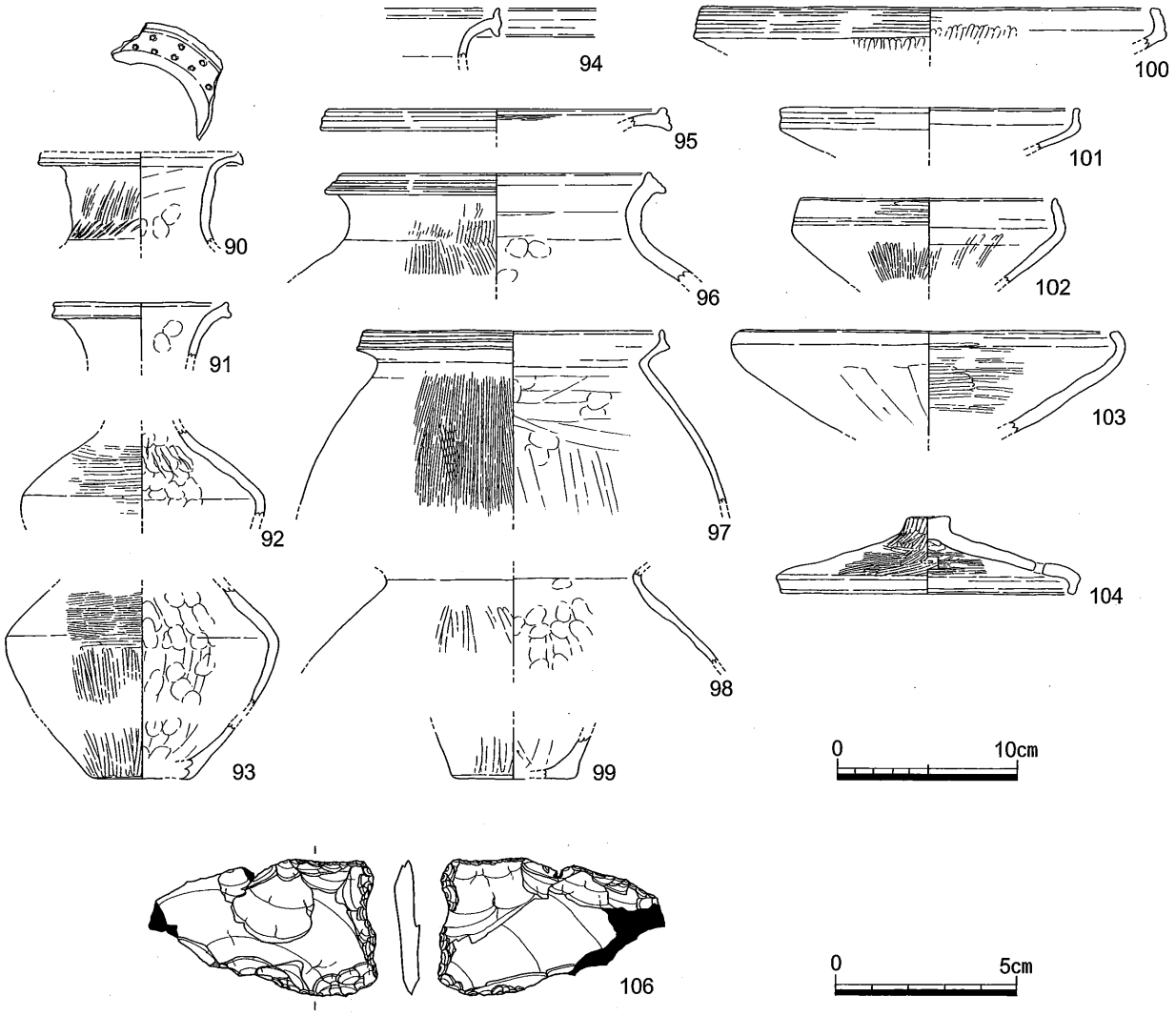
Ⅲ－２区で検出した竪穴住居跡である。丘陵南東側斜面に延びる尾根線上で検出した。平面形は円形または隅丸方形と考えられ、北東－南西方向は3.27m以上、深さは最も深い北西側で27cm、床面の標高は51.0mである。北西側の掘り込みに接して幅10cm、深さ３cmの壁溝が周り、壁溝内には直径10～25cm、深さ５～35cmの小ピットが20～40cm間隔で周る。このような小ピットは竪穴住居跡の掘り方の想定線上に並んでおり、これらは、SH14Bの例から類推すれば、竪穴住居跡の壁面に立てられた板止めの柱の穴と考えられる。したがって、竪穴住居跡の規模は北西－南東方向が2.8m程度に復元できる。主柱穴は五角形に配されたと考えられ、規模は直径20～35cm、深さ55cm程度と考えられる。床面東側付近では土器がかたまって出土した。

88・89は弥生土器である。88は細頸壺の算盤型の体部で、外面はヘラミガキを密にする。89は甕体部から底部にかけての部位で、胴部最大径よりやや上部では工具原体による刻み目を施す。底部とは直接接合はしなかったが、色調や胎土等から同一個体と考えられる。

弥生時代中期後半～後期初頭と考えられる。

SH19C（第34・35図）

Ⅳ区で検出した竪穴住居跡である。丘陵南東側斜面上の、SH18Cの約12m西側のSI03Cの東端で検出した。隅丸長方形を呈すると考えられ、南北方向は1.5m以上、東西方向は4.2m以上と考えられるが、東部はSI03Cとの境界が不明瞭である。深さは最も深い北側で16cm、埋土は黄灰色砂質土、床面の標高は51.20mである。住居跡内からは、小溝や小ピットを多数検出しているが、どれが竪



第35図　SH19C出土遺物（1/4・1/2）

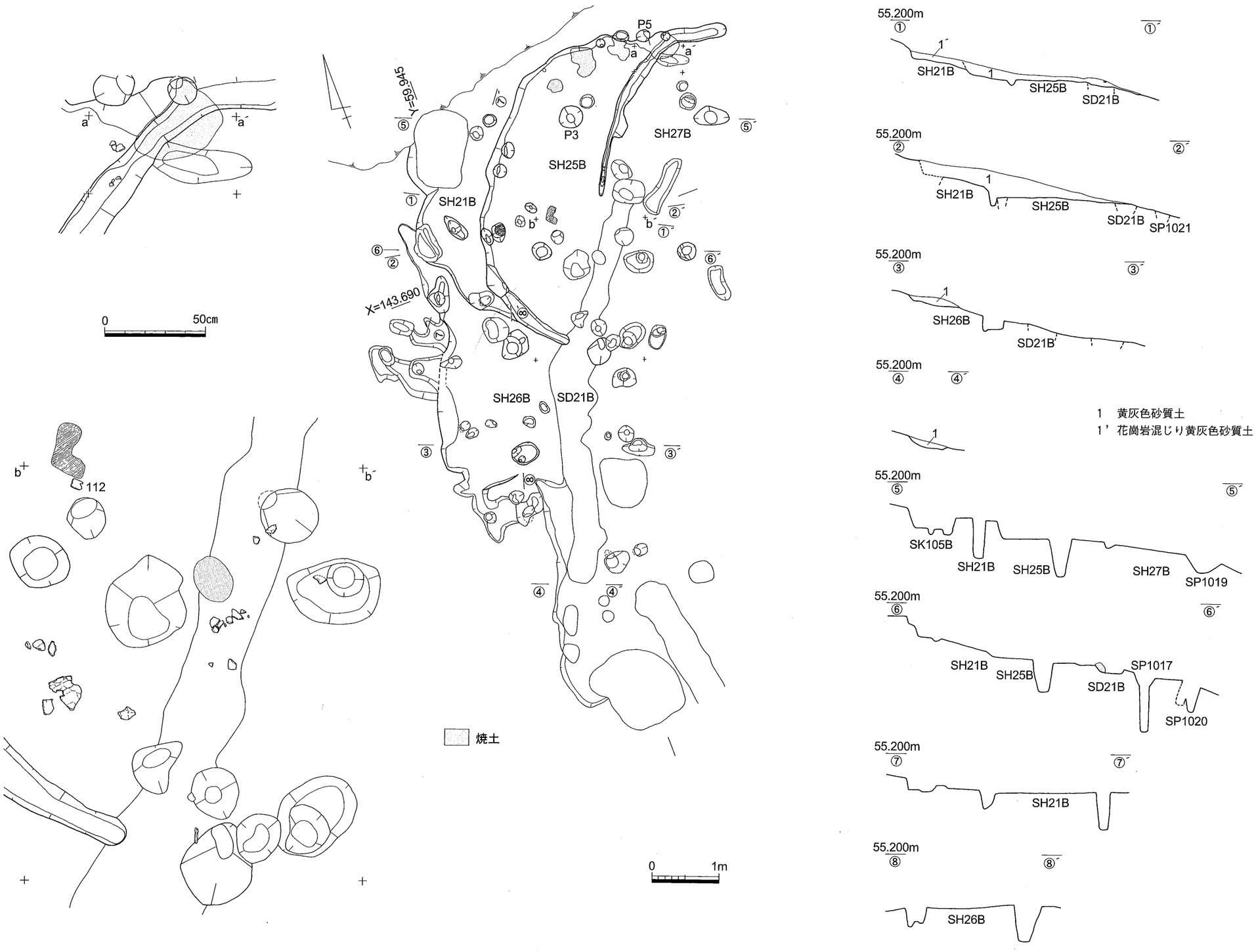
穴住居跡に伴うかは不明確である。

90～104は弥生土器である。90は広口壺で、頸部には工具による刻み目を施し、口縁部内面には２段の竹管文を施す。91は広口壺口縁部である。92・93は壺体部、94は広口壺口縁部小片、95は広口壺口縁部小片で端部には二重の凹線文が巡る。96は短頸壺で、口縁端部に二重の凹線文が巡る。97・98は甕で、97は口縁端部に三重の凹線文が巡る。98は体部、99は甕底部である。100～103は高杯である。100は３条の、101は２条の凹線文を巡らせる。102にも凹線文を巡らせているようであるが、磨滅のため不明瞭である。103は口縁端部が少し内傾する。104は蓋で、体部に円孔が１箇所残る。106はサヌカイト製石器である。上部に敲打痕が、側縁にはわずかに抉りが認められることから、打製石庖丁の未製品と考えられる。

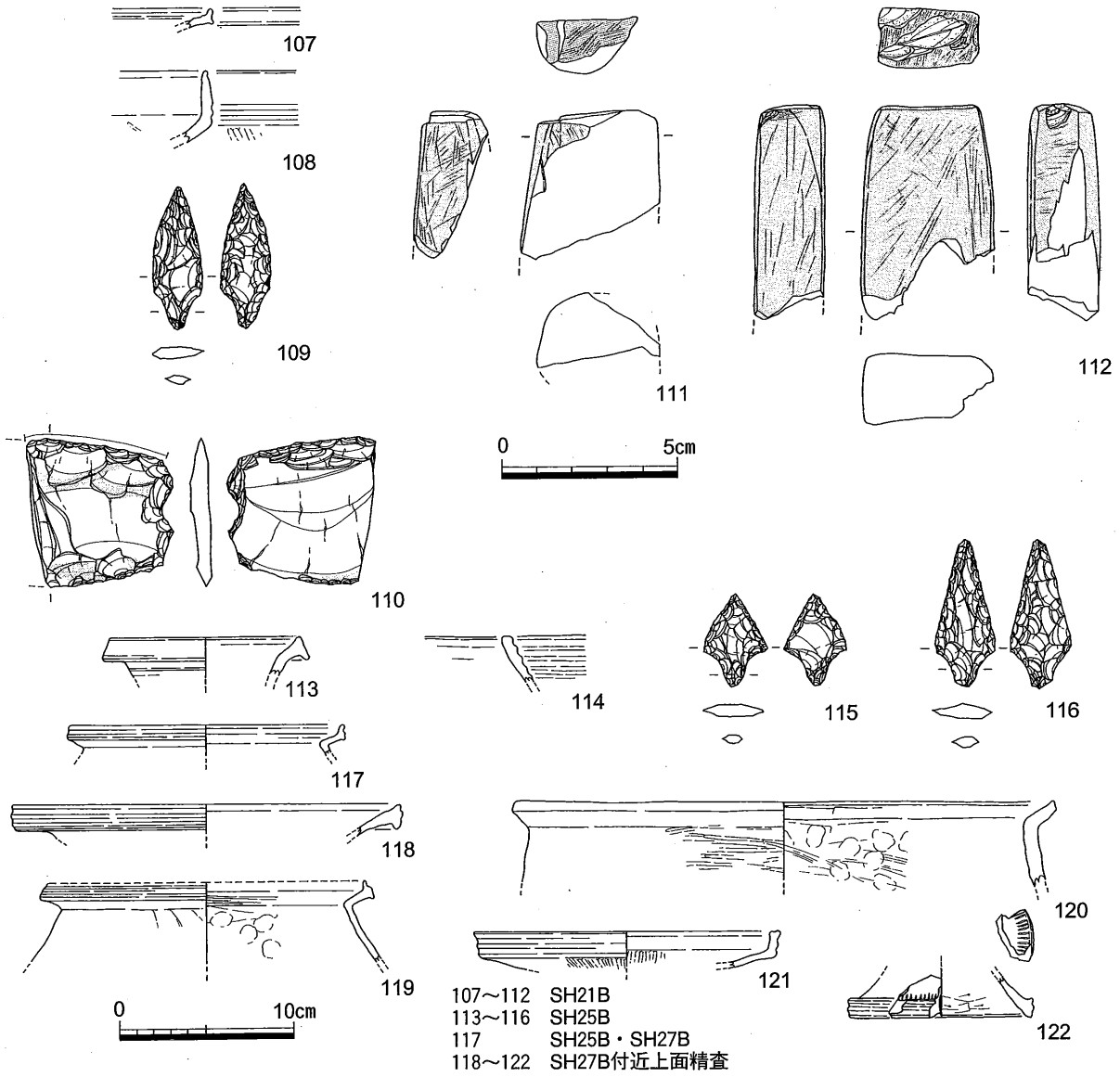
遺物は弥生時代中期末～後期初頭のもので、遺構の時期もその頃と考えられる。

SH21B（第36・37図）

丘陵から南西へ延びる尾根線上の東側斜面で、SH25B・26Bと重複して検出した。SH21B・25～27Bの中では最も標高の高い位置に立地する。土層断面からSH25Bより、平面の検出状況によりSH26Bより古いと考えられる。方形を呈すると考えられ、規模は等高線に平行する北東－南西方向は2.8m以上、等高線に直交する北西－南東方向は0.86m以上、深さは10cm、床面のレベルは54.6mで



第36図　SH21B・25B～27B、SD21B平・断面図（1/60）、遺物出土状況平面図（1/20）



第37図　SH21B・25B・27B出土遺物（1/4・1/2）

ある。埋土は花崗土混黄灰色砂質土である。壁際に壁溝は認められなかった。主柱穴の特定は難しいが、北西、南西隅にある直径20cm程度、深さ22～56cmの円形のピットがそのうちの２穴になると考えられる。

107・108は弥生土器である。107は広口壺口縁部小片で、体部外面に凹線を巡らせる。108は高杯杯部小片である。109～112は石器である。109・110はサヌカイト製石器で、109は有茎式石鏃、110は石庖丁である。後者は半分欠損しており、上部に敲打痕を残す。111・112は柱状片刃石斧で、111は安山岩製、112は緑泥片岩製である。

遺構の時期は弥生時代中期末頃と考えられる。

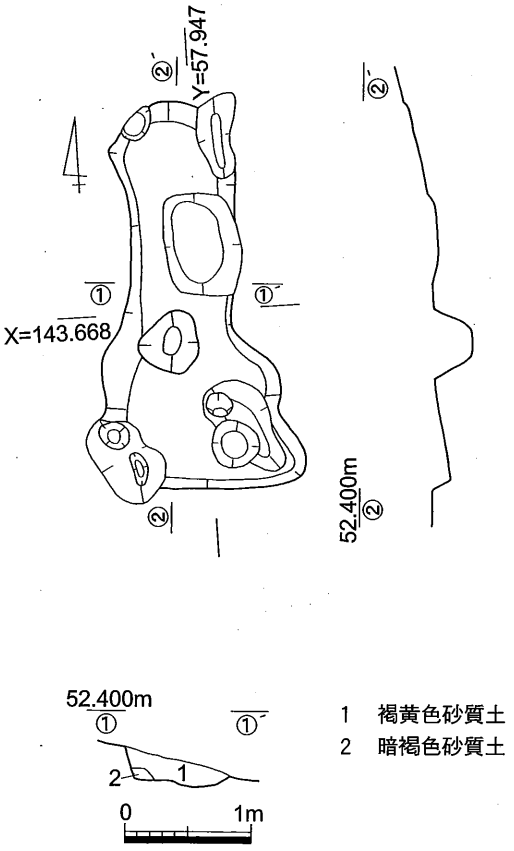
SH25B（第36・37図）

丘陵から南西へ延びる尾根線上の東側斜面で検出した竪穴住居跡である。SH21B・26B・27Bと重複し、土層断面からSH21Bより、平面の検出状況によりSH26Bより新しいと考えられる。また、SH25B出土の炭がSH27Bの上位にまで及んでいることから、SH27Bより新しいと考えられる。隅丸

方形で、等高線に平行する方向は4.66m、等高線に直交する方向は1.70m以上、深さは最も深い箇所で15cm程度である。床面の標高は54.4m前後、埋土は黄灰色砂質土である。南西部の一部で幅18cm、深さ5～9cmの壁溝を検出した。また、壁溝際では直径20cm程度の小ピットを5穴程度を検出しており、壁板を支えた柱穴の可能性がある。主柱穴は北西、南西に位置する、直径25～34cm、深さ65～83cmのピットが相当すると考えられ、等高線に直交する方向でその延長上にある、SH27Bで検出したピット2穴とあわせ、4穴で主柱穴を構成すると考えられる。竪穴住居跡の北東辺付近を中心に炭化物を検出した。焼失家屋と考えられる。

113・114は弥生土器である。113は広口壺、114は高杯口縁部で、4条の凹線文が残る。115・116はサヌカイト製の有茎式石鏃である。

遺構の時期は遺構の前後関係から弥生時代後期初頭頃と考えられる。



第38図　SH22B平・断面図（1/60）、出土遺物（1/2）

SH26B（第36図）

SH21Bの南西側で検出した。平面の検出状況からSH21Bより新しいと考えられる。隅丸方形と考えられ、規模は等高線に平行する方向では2.7m以上、等高線に直交する方向では1.7m以上、深さは最大で12cmである。埋土は黄灰色砂質土、床面の標高は54.5mである。壁溝は認められなかった。主柱穴は明確ではないが、直径32～34cm、深さ22～55cmのピット4穴が相当する可能性がある。

埋土中からは弥生土器小片が出土しただけであった。

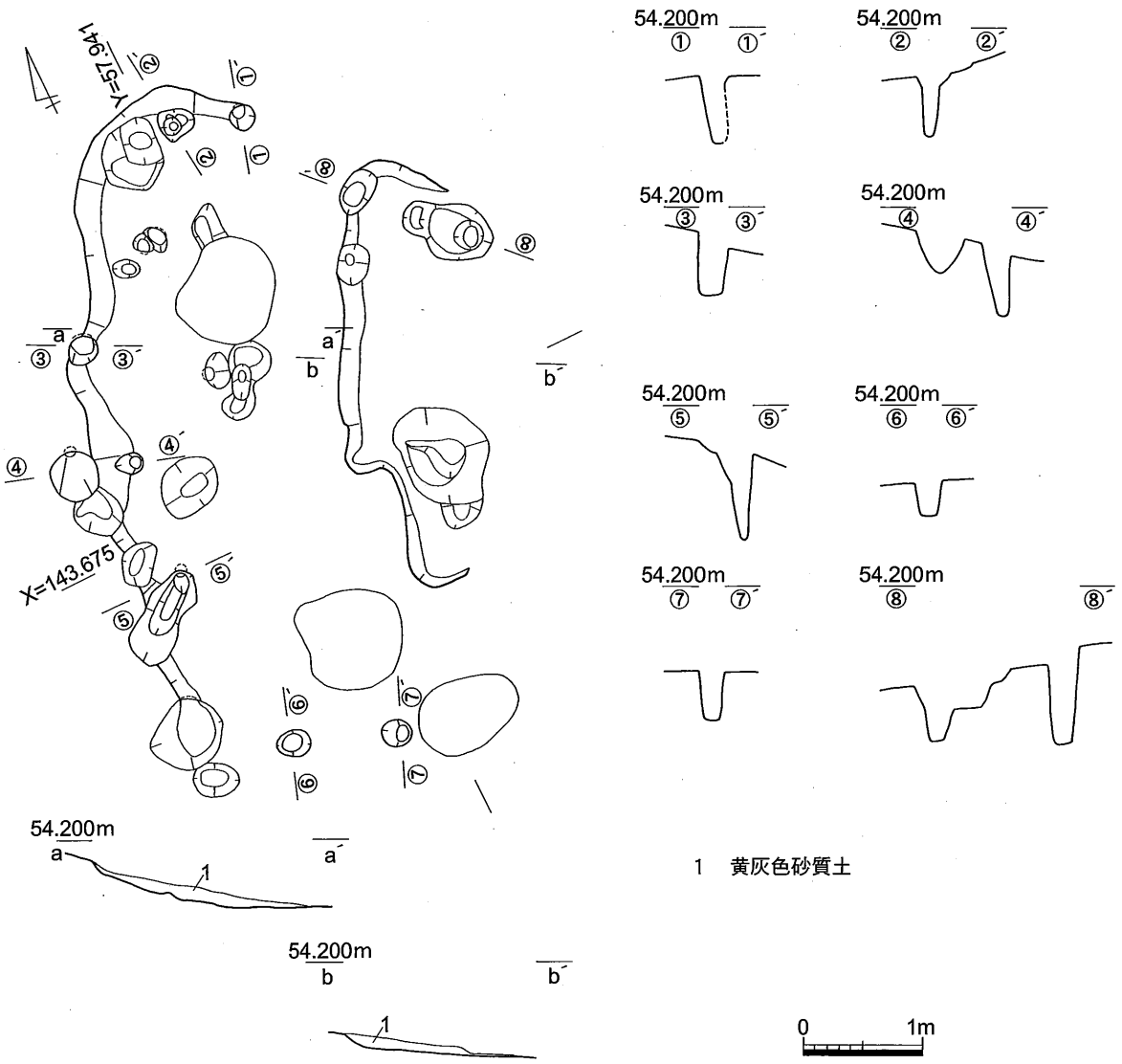
SH27B（第36・37図）

SH25Bの東側で検出した。SH25Bに関係すると考えられる炭化材がSH27B内で出土していることから、SH25Bより古いと考えられる。竪穴住居跡の立ち上がりは検出できず、北西側の壁溝を検出したのみである。規模は等高線に平行する方向では2.7m以上、直交する方向では1.7m以上、床面の標高は54.2m前後である。すでに床面は消失するようで、平坦な部分はなく、傾斜している。壁溝は幅12cm、深さ5～7cmであるが、主柱穴は明確ではない。

117はSH25B・27Bの重複部分から出土した弥生土器甕である。口縁端部に凹線文を巡らせる。

遺構の時期は弥生時代後期初頭頃と考えられる。

118～122はSH21B・23B～27Bの上面精査で出土した遺物である。すべて弥生土器である。118は広口壺口縁部、119・120は甕口縁部である。119は口縁端部に凹線文を施すもので、弥生時代後期



第39図　SH23B平・断面図（1/60）

初頭頃のものである。120は弥生時代中期中頃まで遡る。121は高杯杯部で、外面に凹線文を施す。122は高杯脚部で、脚端部に凹線文を施し、刺突文を巡らせる。

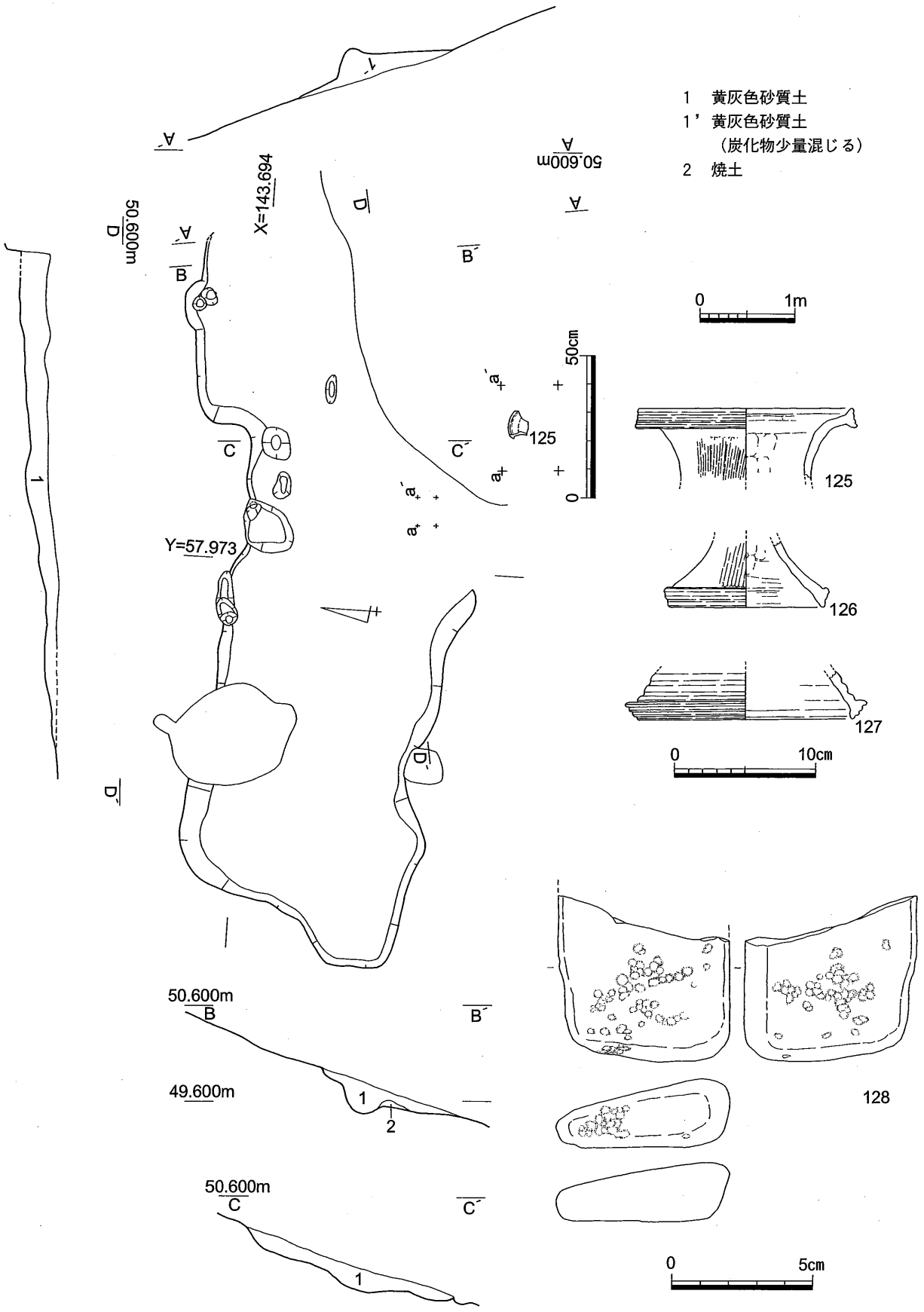
SH22B（第38図）

V区で検出した竪穴住居跡である。丘陵南西尾根上の東側斜面で検出した。方形を呈すると考えられるが、東半部は流出により消失したと考えられる。規模は南北方向が3.07m、東西方向が0.8m以上、最も深い西側では深さ21cmである。床面の標高は51.9m、埋土は褐黄色砂質土である。主柱穴を構成する可能性があるピットは直径50cm、深さ30cmの1穴であるが、他に主柱穴となりうるピットを検出することはできなかった。また、壁溝等も検出できなかった。

123・124は鉄器で、同一個体の可能性もある。

SH23B（西）（第39図）

V区で検出した竪穴住居跡である。丘陵南西尾根線上の東斜面で検出した。隅丸方形を呈すると考えられ、南北5.4m、東西1.3m以上、最も深い西側で深さ12cmである。床面の標高は53.6m、埋



第40図　SH24C平・断面図（1/60）、遺物出土状況平面図（1/20）、出土遺物（1/4・1/2）

土は黄灰色砂質土である。竪穴住居跡の壁際には直径25～30cm、深さ30～69cmのピットを0.45～1.80m間隔で検出した。壁溝や主柱穴等は検出できなかった。

SH23B（東）（第39図）

Ⅴ区で検出した竪穴住居跡である。丘陵南西尾根線上の東斜面にある。SH23B（西）の約1.7m東側で検出した。南北3.5m、東西1.5m以上、深さは約10cmである。床面の標高は53.5m、埋土は黄灰色砂質土である。竪穴住居跡内ではピットを数穴検出したが、竪穴住居跡に伴うものかどうかは不明である。その他壁溝等は検出できなかった。

SH24C（第40図）

SH16Cの北西に重複して検出した。南側は消失したと思われる。現存範囲では長軸7.6m、短軸は2.4m、深さ25cmの規模で、埋土は黄灰色砂質土である。埋土中からは弥生土器、石器が出土した。

125～127は弥生土器である。125は広口壺で、口縁端部に凹線文を巡らせる。126・127は高杯脚部で、いずれも脚端部には凹線文を巡らせる。128は上面精査で出土した砂岩製の叩き石で、下部と両面に敲打痕を残す。

遺構の時期は弥生時代後期初頭頃と考えられる。

（2）掘立柱建物跡

SB01A（第41図）

丘陵頂部東端部の、東側の尾根線への落ち際で検出した掘立柱建物跡である。概ね平坦な位置で、標高57.6mに立地し、等高線の方向に桁行を揃える。桁行2間（4.5～4.95m）、梁間1間（2.27～2.42m）で、桁行の柱間は2.15～2.55mを測る。面積は11.2㎡である。柱穴は方形で、規模は一辺0.67～1.28m、深さ48～106cmである。埋土は概ね黄灰色砂質土で、一部に暗灰黄色小礫混砂質土を含む。柱穴跡埋土中からは弥生土器片が出土した。

129はSP2から出土した弥生土器甕口縁部である。口縁端部には2条の凹線が巡る。130はSP1から出土した弥生土器甕底部である。

遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期末～後期初頭と考えられる。

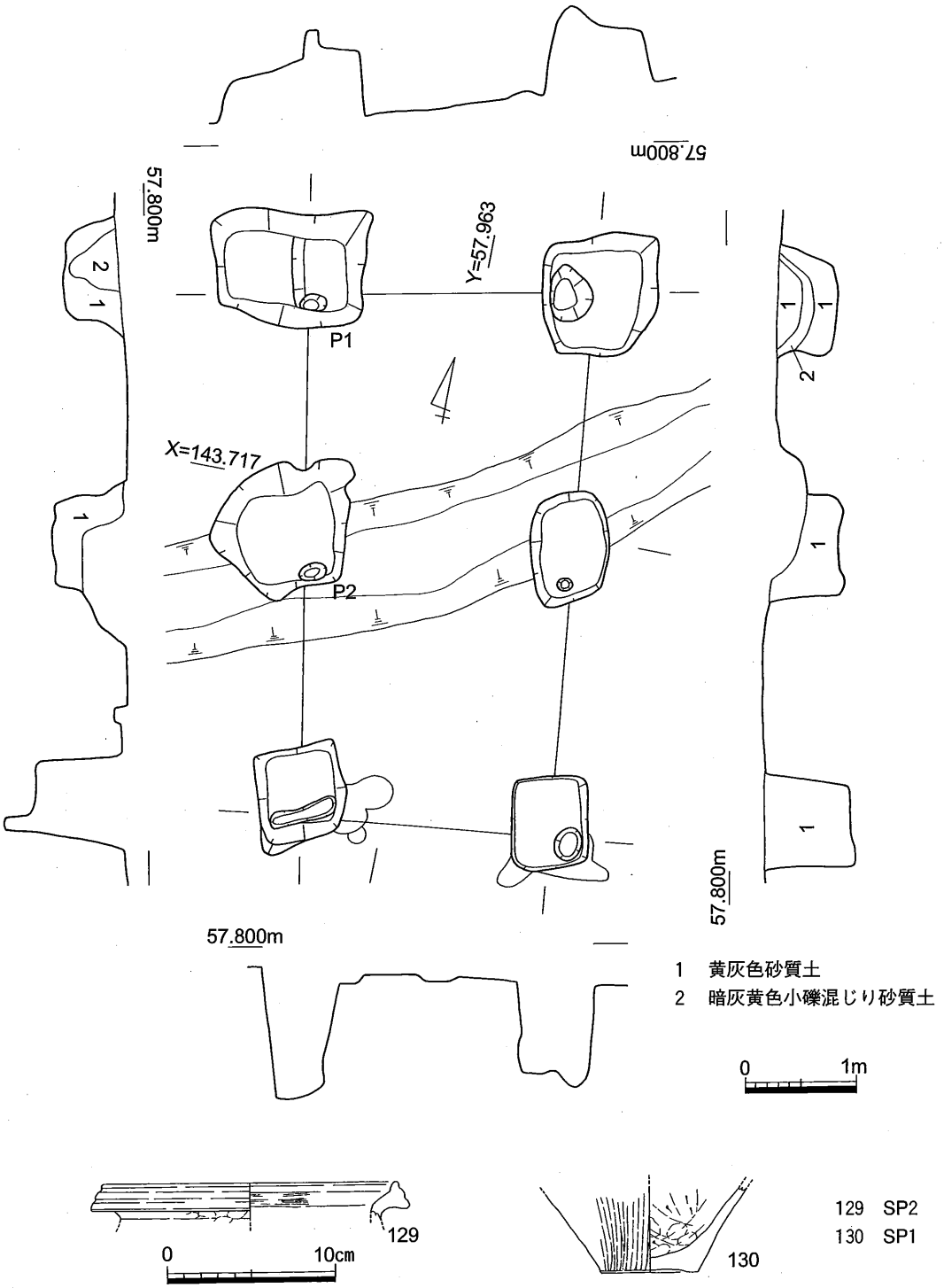
SB02A（第42図）

丘陵頂部北側縁辺で検出した掘立柱建物跡である。標高57.7m付近に立地する。等高線にやや斜交する。桁行2間（3.55～3.75m）、梁間は西側のやや低いほうが2間、東側のやや高いほうが1間（2.00～2.70m）で、柱間は桁行が1.60～2.15m、梁間は1.30～1.40m、面積は約8.5㎡を測る。柱穴は概ね円形で、直径42～50cm、深さ26～70cmである。

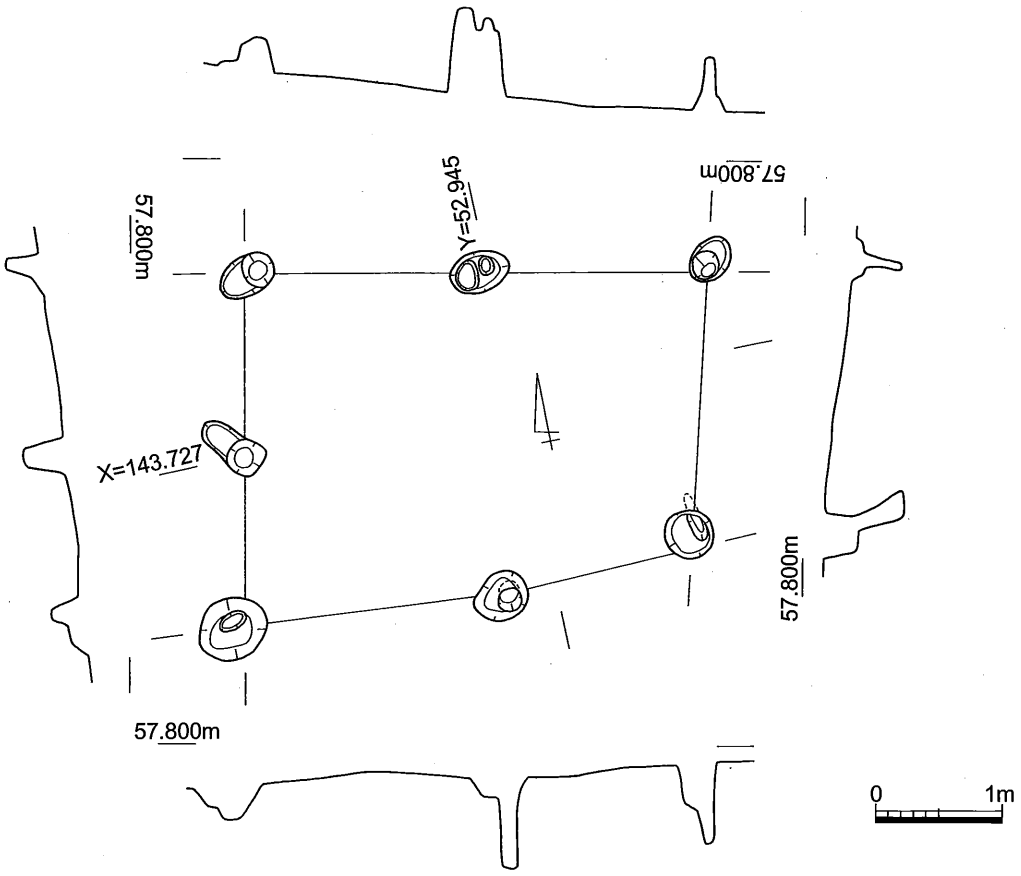
柱穴跡からの出土遺物はなく、遺構の時期は明確ではない。

SB03A（第43図）

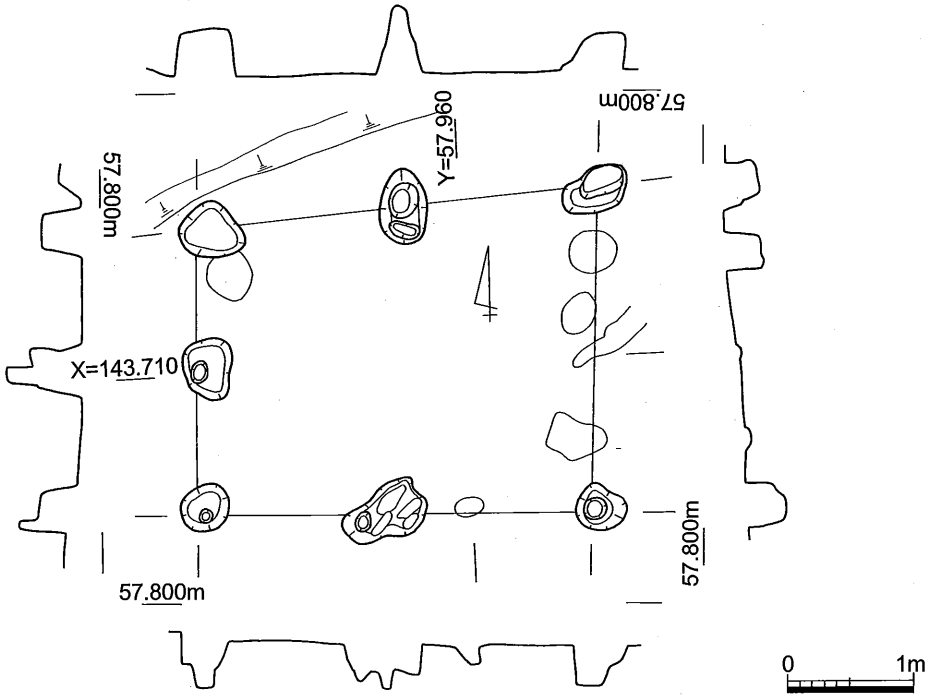
丘陵頂部南側縁辺部、SB01Aの南西に隣接して検出した掘立柱建物跡である。概ね平坦な位置で、標高57.6m付近に立地する。桁行2間（3.10～3.20m）、梁間1～2間（2.25～2.55m）で、東側の柱列には中央部分の柱穴跡がない。柱間は桁行が1.25～1.90m、梁間は1.10～1.15m、面積は約7.6



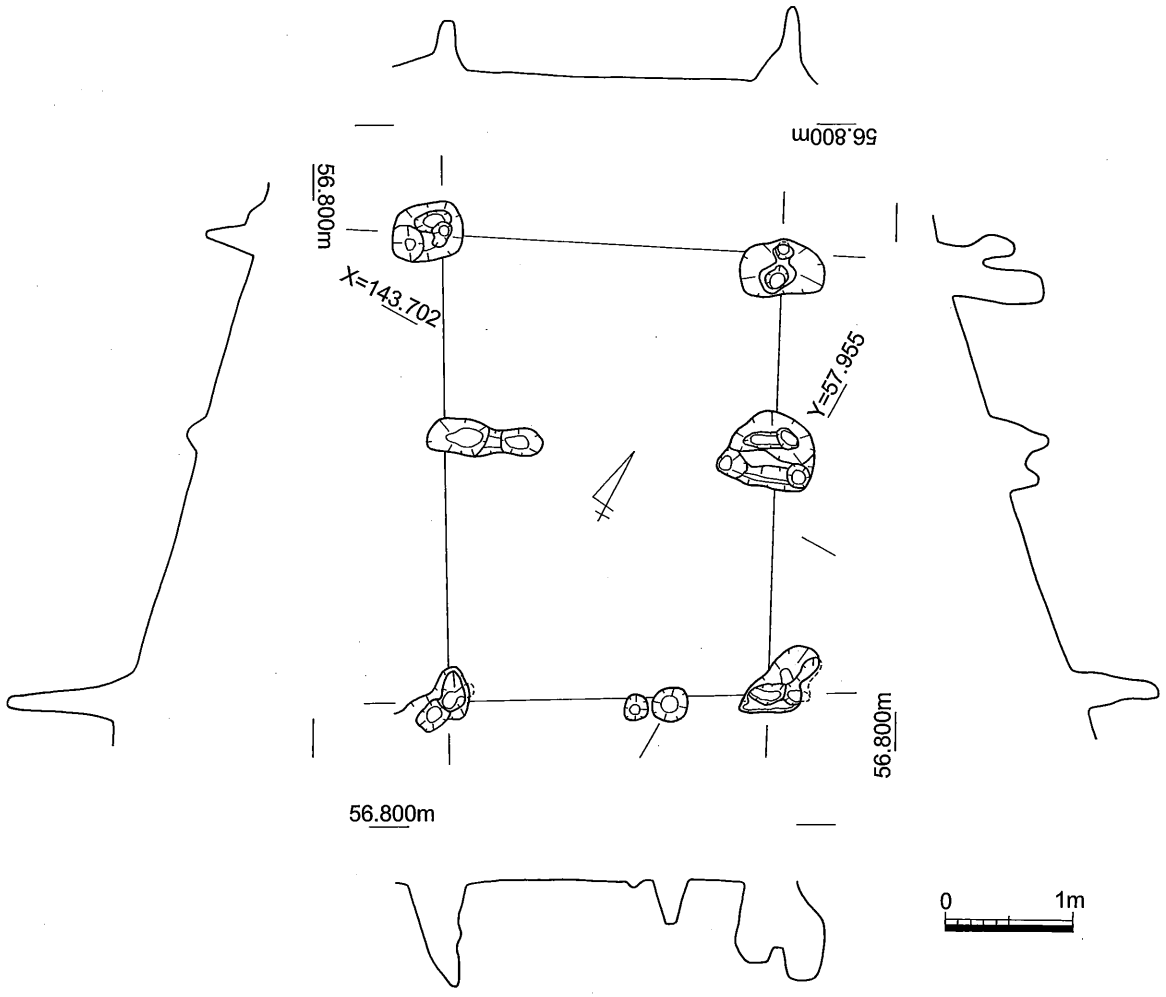
第41図　SB01A平・断面図（1/60）、出土遺物（1/4）



第42図　SB02A平・断面図（1/60）



第43図　SB03A平・断面図（1/60）



第44図　SB04B平・断面図（1/60）

㎡である。柱穴は円形または不整円形、楕円形で、規模は長軸0.39～0.70m、短軸0.31～0.41m、深さ31～61cmである。

柱穴跡からの出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

SB04B（第44図）

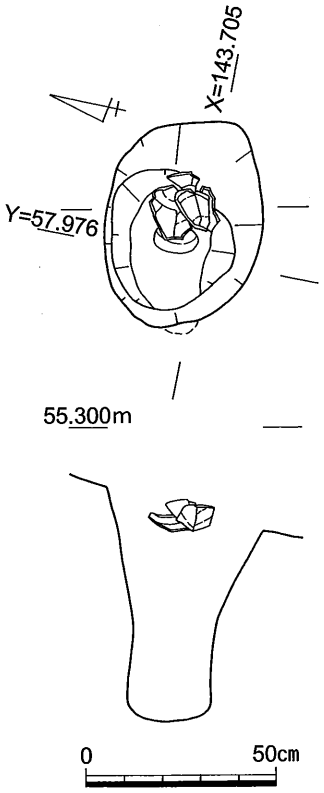
丘陵南斜面上で検出した掘立柱建物跡である。標高は55.25～56.45mで、かなり傾斜が強く、桁方向を斜面に直交させる。桁行は3.50～3.70m、梁間2.50～2.70m、面積は9.4㎡である。柱間は桁行が1.10～2.10m、柱穴は不整形で概ね長軸0.56～0.96m、短軸0.31～0.59m、深さは16～83cmである。掘立柱建物跡としたが、床面の傾斜が強く、やや疑問も残る。

柱穴からの出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

（3）ピット

SP20C（第45・46図）

丘陵南斜面上に立地する。SI02Cの西部で検出した。ピットが3穴が並ぶうちの最も東側のピットである。楕円形を呈し、長径0.55m、短径0.42m、深さは概ね58cmで、ピットの底は西側へやや抉り込んでいる。ピットの上部からは叩き石、弥生土器壺片が出土した。



第45図　Ⅳ区SP20遺物出土状況平・断面図(1/20)

131は弥生土器壺で、肩の張る器形である。132・133は砂岩製の叩き石である。両面と周囲に敲打痕がある。

遺構の時期は弥生時代後期初頭頃である。

SP30（第47図）

丘陵南斜面上に立地する。SI03Cの東側に接し、SK211Cの南西隅で検出した。楕円形を呈し、規模は長径0.29m、短径0.22m、深さは24cm以上を測る。ピット内からは弥生土器高杯脚部が出土した。SK221Cとの前後関係は不明である。

134は弥生土器高杯で、充填していた底部は剥離している。脚部にはヘラ描き沈線文と山形文を配し、端部には凹線文を施す。

遺構の時期は弥生時代中期後半～末頃と考えられる。

その他ピット出土遺物（第48図）

135はⅠ－1区SP07出土遺物である。サヌカイト製の凹基式石鏃で、縁辺だけを加工する。136はⅢ－2区SP28出土遺物である。弥生土器壺体部小片で、肩部に櫛描沈線文と櫛描波状文が残る。中期前半頃まで遡る。137・138はⅢ－2区SP31出土遺物で、ともに弥生土器高杯である。137は杯部で、外面には緩い凹線を巡らせ、底部内外面に放射状のヘラミガキを施す。中期末頃のものである。138は高杯の杯部と脚部の接合部である。139はⅣ区SP31出土の弥生土器甕である。140はⅤ区SP1008出土の弥生土器甕で、口縁端部に凹線を巡らせる。141はⅤ区SP1020出土弥生土器のサヌカイト製の尖頭器である。

（4）段状遺構及びその中の遺構群

SI01C（第50図）

丘陵頂部南斜面の尾根と尾根に挟まれた斜面上で検出した遺構である。標高53m付近で延長14.2m、幅1.8～3.0mにわたって、深さ4cmの規模で検出した。標高約52.5～52.8mで平地面を形成し、埋土は黄灰色砂質土である。東から約5mの位置で別の段状遺構がある。段状遺構内では土坑が長方形の土坑の長辺を等高線にほぼ平行にして一列に配される。その他ピットも検出された。

SK004C（第49・50図）

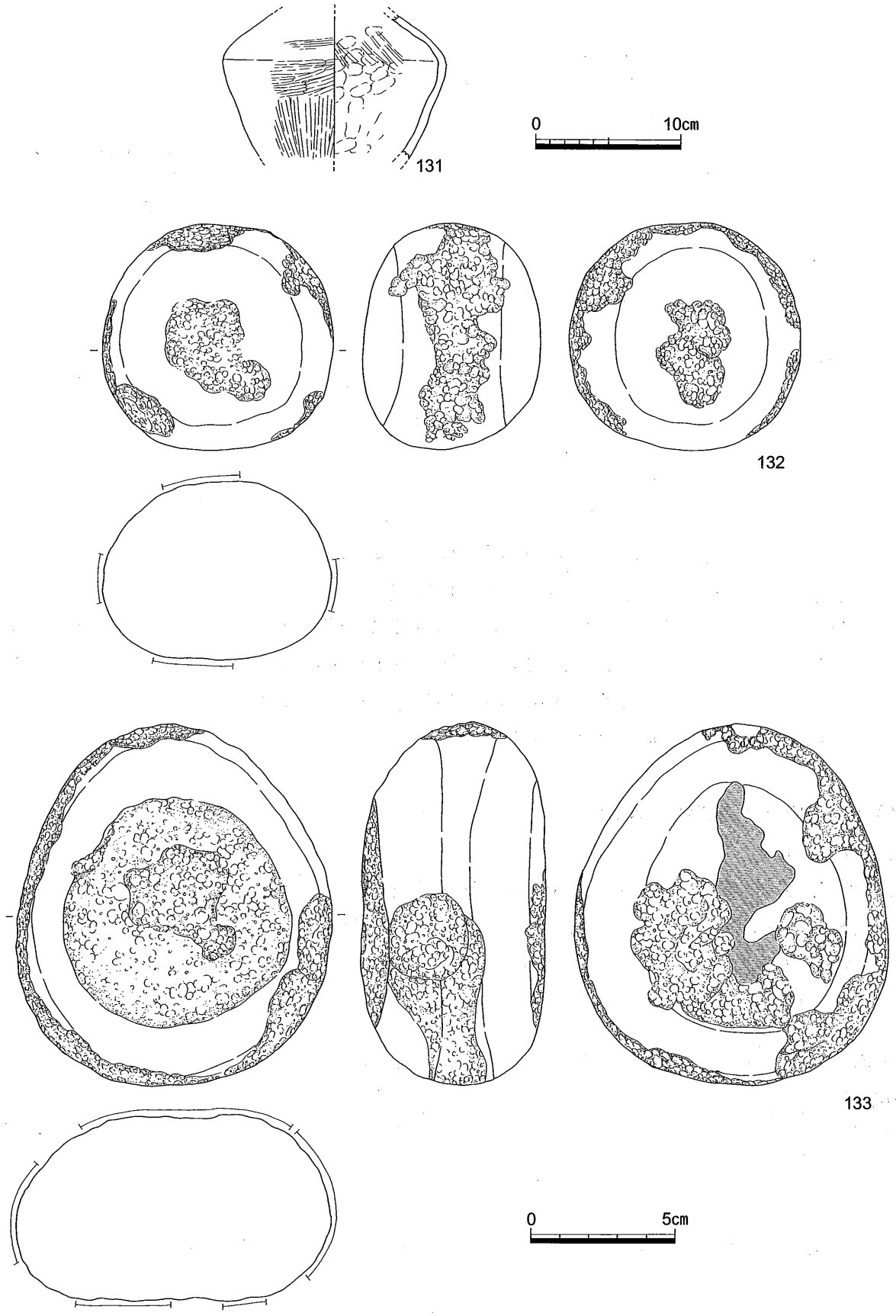
SI01C内の東側の段状遺構の西端で検出した。隅丸方形を呈するが、東側は遺構の肩が崩れ、不整形を呈する。長軸は肩の崩れた部分を含めると2.16mであるが、本来の規模では1.77m、短軸1.25m、深さは斜面の上部で88cmを測る。断面形状は逆台形である。土坑の底部から高杯脚部が出土した。

142・143は弥生土器高杯脚部である。143は端部に凹線を巡らせ、脚部にはヘラ描きによる文様を施す。144はサヌカイト製の石庖丁である。側縁部には抉りがみられる。2/3程度は欠損している。

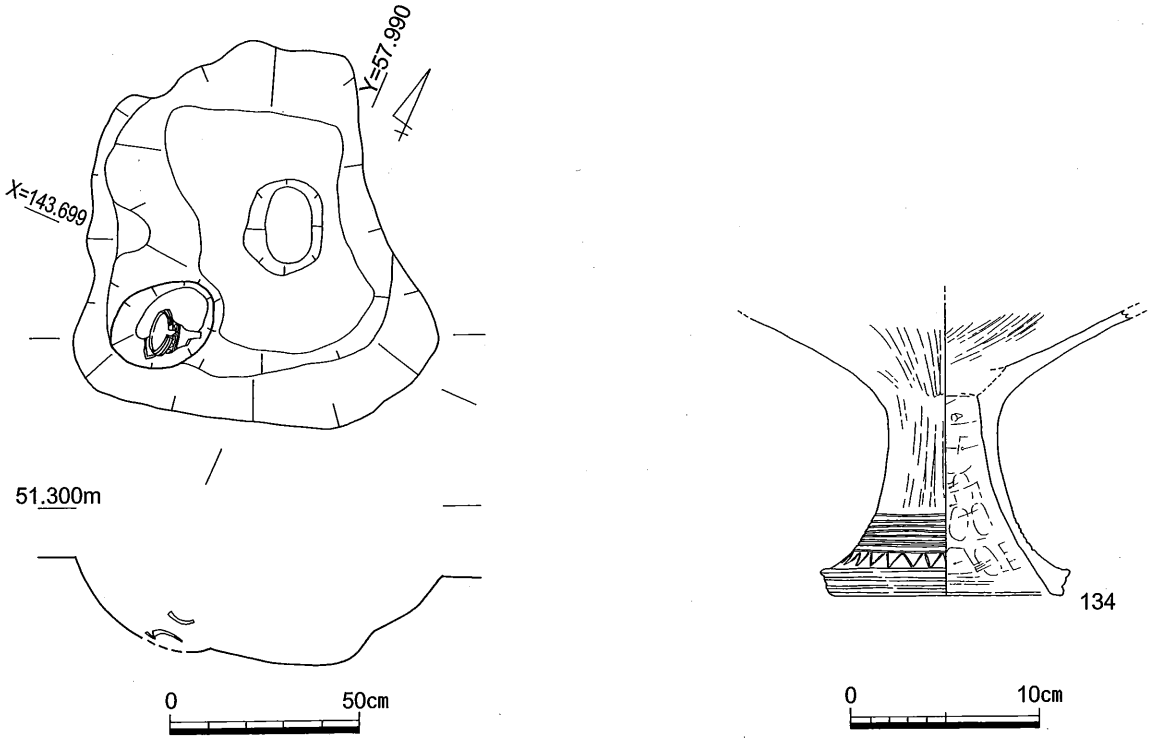
遺構の時期は弥生時代中期末頃と考えられる。

SP22（第49・50図）

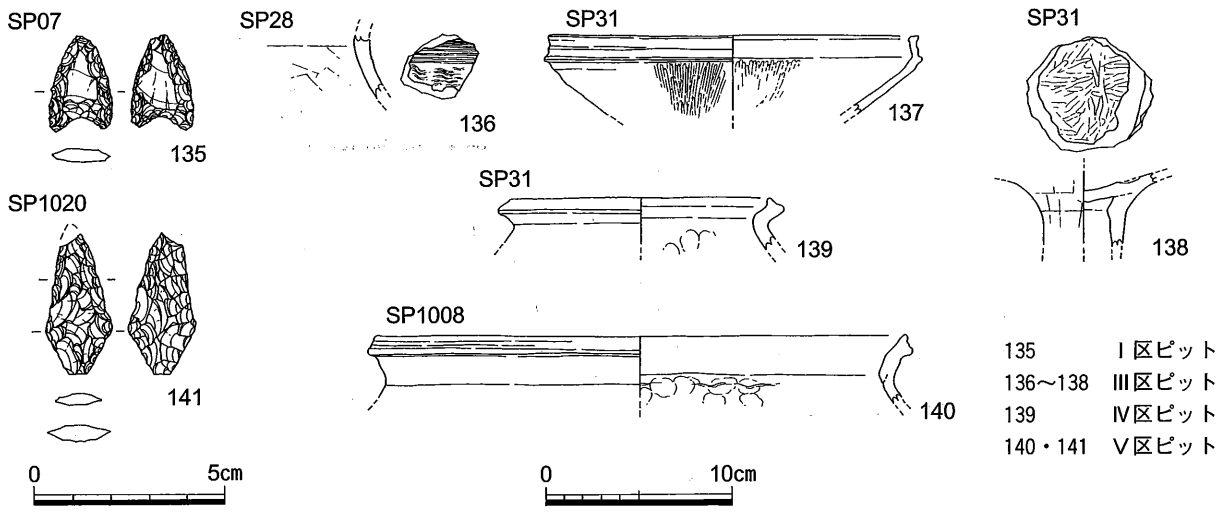
SK004Cの東側で検出したピットである。楕円形を呈し、規模は長径70cm、短径61cm、深さ39cm、



第46図　Ⅳ区SP20出土遺物（1/4・1/2）



第47図　III-2区SP30遺物出土状況平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）



第48図　ピット出土遺物（1/2・1/4）

断面形状はＶ字型を呈する。ピットの肩部中位の位置で、弥生土器体部と底部片が出土した。

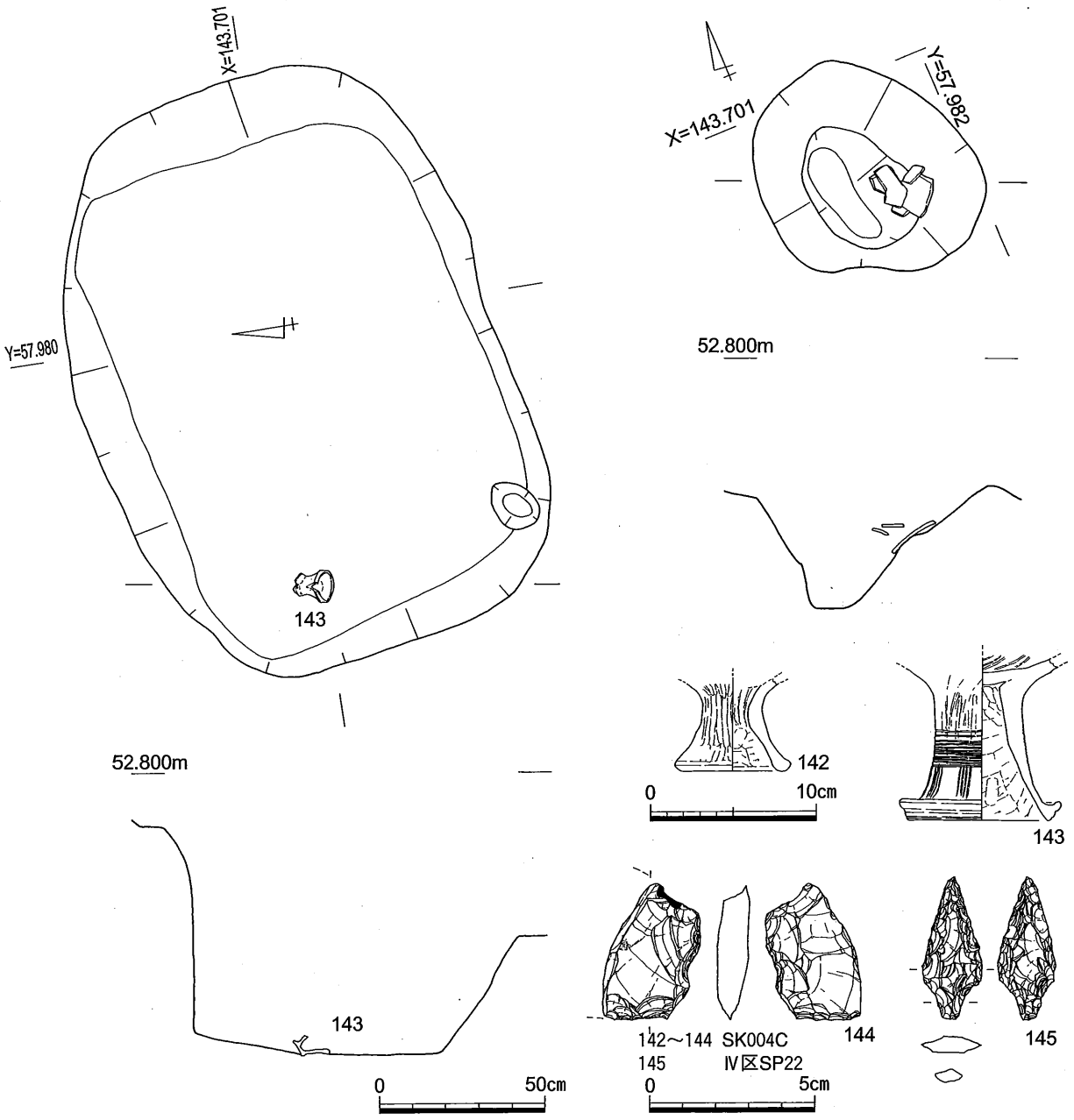
145は有茎式のサヌカイト製石鏃である。

SK001C（第50・51図）

SI01C内の最も西側で検出した遺構である。概ね長方形を呈し、規模は長軸1.43m、短軸0.90m、深さ77cmである。埋土は黄灰色・灰黄色小礫混砂質土で、中位では花崗土が混じる。断面形状は逆台形である。埋土中からは弥生土器甕が出土した。

146～149は弥生土器である。146～148は甕で、146・147は口縁端部に凹線文を施し、147はさらに縦方向の刻み目を施す。148は口縁部に１箇所孔が残る。149は高杯接合部である。

SK001Cからの出土遺物には弥生時代中期後半～後期初頭で、やや時期幅が見られる。



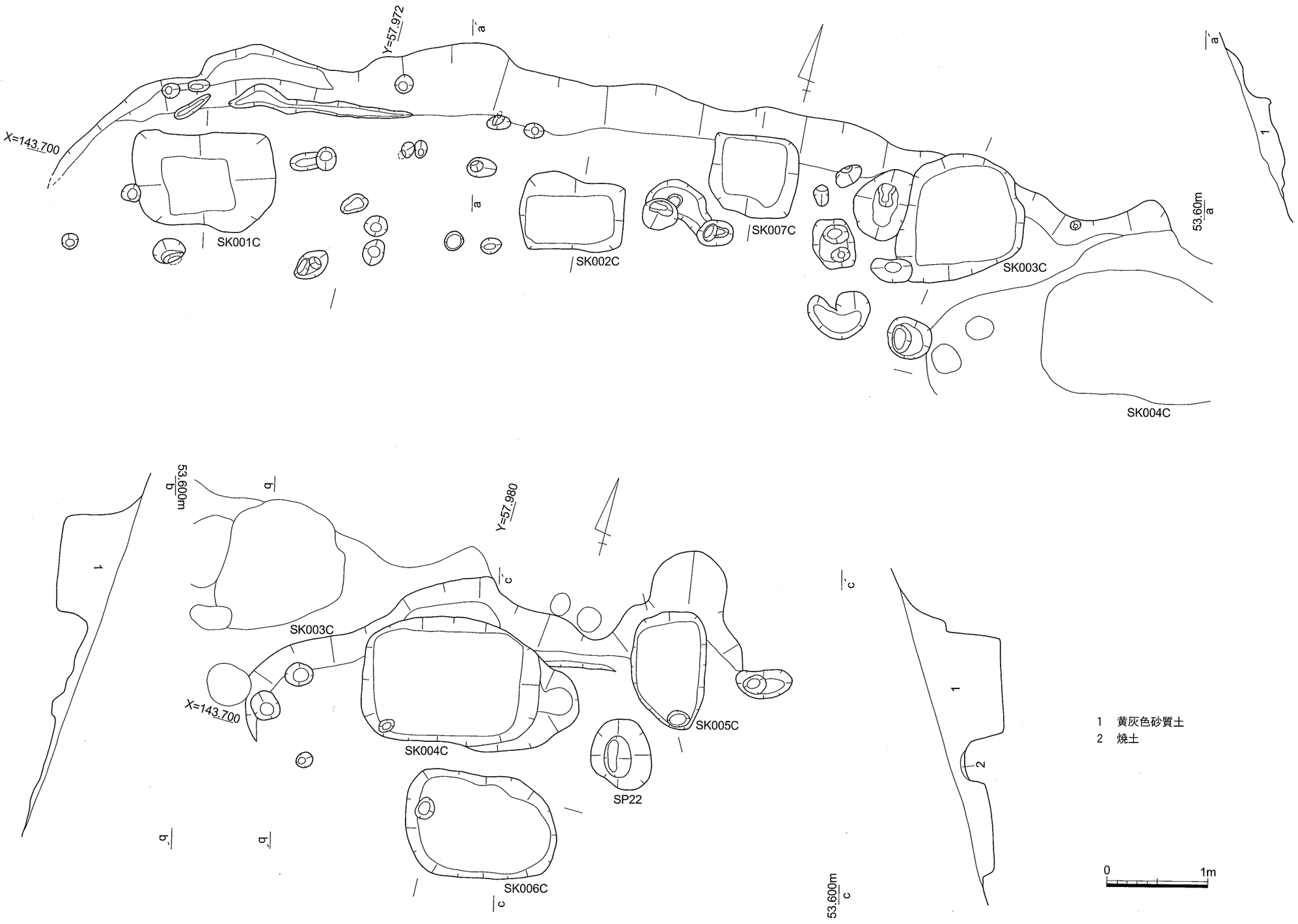
第49図　SK004C、Ⅳ区SP22遺物出土状況平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4・1/2）

SK002C（第50・51図）

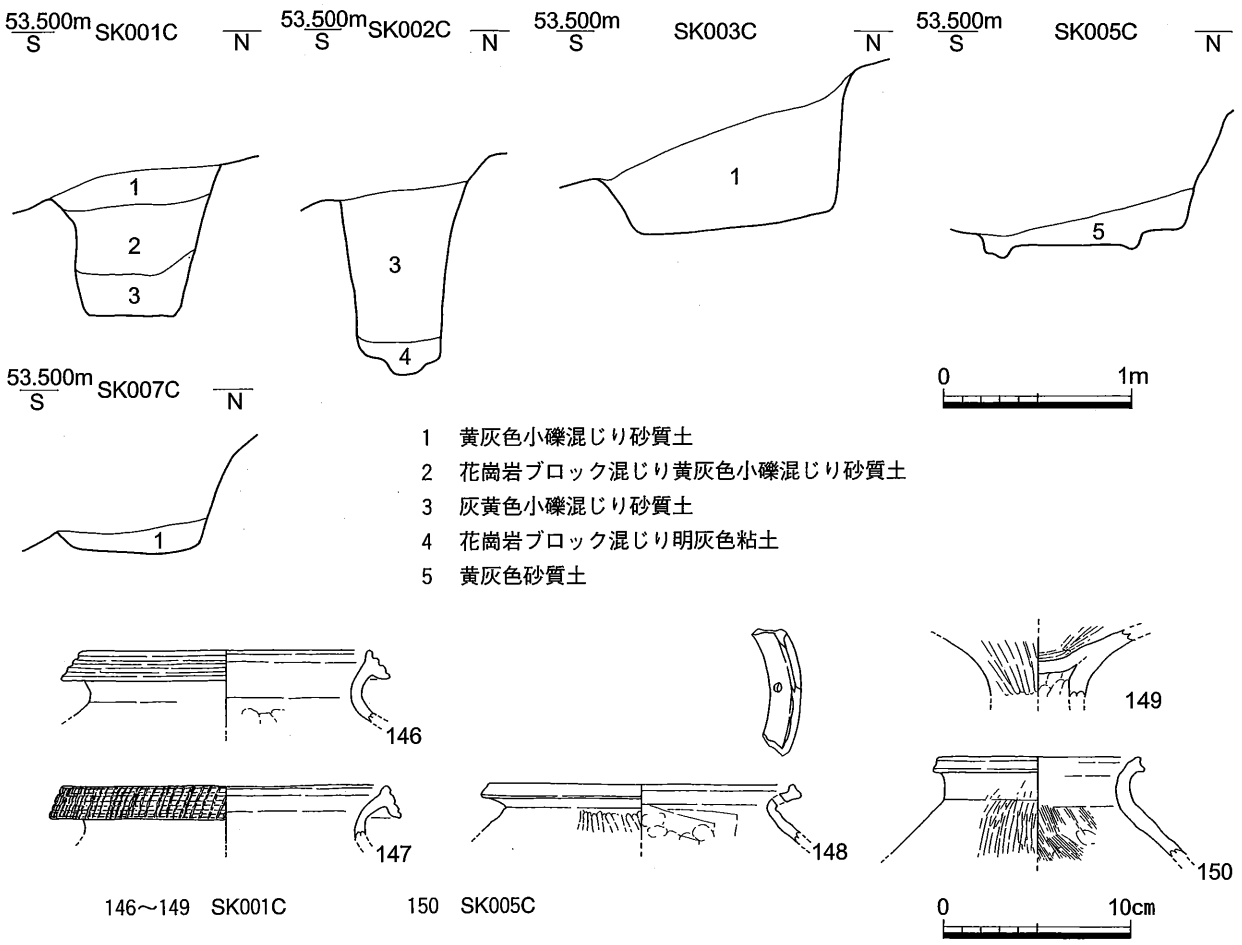
SI01Cで、SK001Cの東側約2.47mの位置で検出した土坑である。長方形を呈し、規模は長軸1.05m、短軸0.67m、深さ98cmで、埋土は灰黄色小礫混砂質土である。断面は逆台形で中央部付近に凹みが見られる。埋土中からは弥生土器小片が出土した。

SK003C（第50・51図）

SI01Cで、SK002Cの2.80m東側で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、一辺1.20m、深さは山側で60cm、麓側で38cm断面形状は逆台形、埋土は黄灰色小礫混砂質土である。埋土中からは弥生土器甕片、サヌカイト剥片が出土した。



第50図　SI01C、SK001C～007C、Ⅳ区SP22平・断面図（1/40）



第51図　SK001C～003C・005C・007C断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

SK005C（第50・51図）

SI01Cの最も東側で検出した土坑である。麓側中央付近には小ピット状の落ち込みが認められた。長楕円形を呈するが、もともとは方形の土坑の南辺中央部付近のピット状の落ち込みの影響で南側が楕円状になったようである。規模は長軸1.18m、短軸0.76m、深さ16cm程度、埋土は黄灰色砂質土で、落ち込み状ピットの直径は16～24cm、深さは土坑の底部から6cmで、土坑と埋土の区別はない。埋土中からは弥生土器甕が出土した。

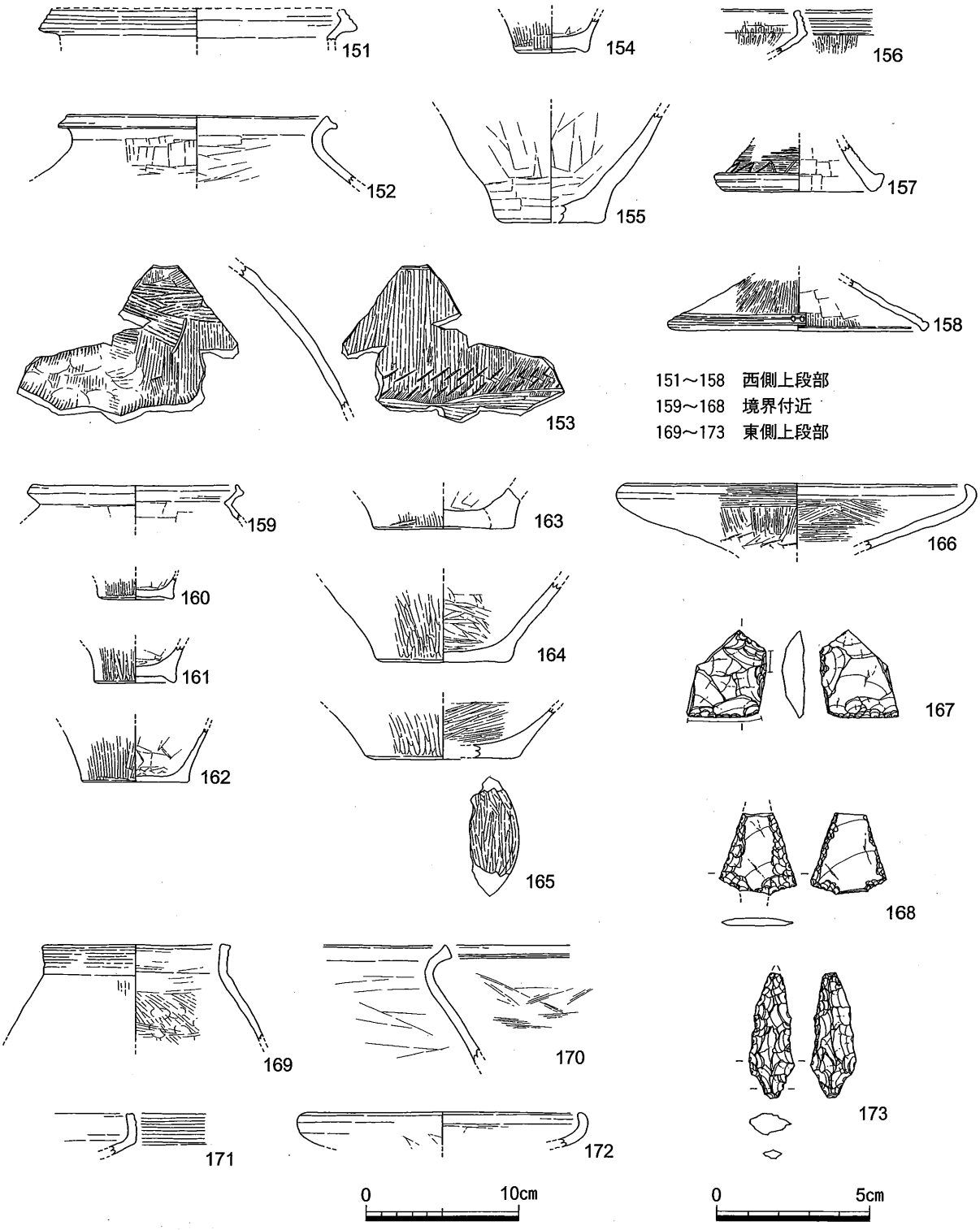
150は弥生土器甕で、弥生時代後期初頭頃である。

SK006C（第50図）

SI01Cの東側の段、SK004Cの約25cm南側で検出した土坑である。楕円形を呈し、規模は長軸1.54m、短軸1.02m、深さ24cmである。断面形状は逆台形で、埋土はSK004Cと同じ黄灰色砂質土である。平面的な検出状況ではSK004Cとは分かれているが、これらの土坑を含むSI01Cの断面図によれば、SI01C、SK004C、SK006Cに埋土の差はなく、SK004CとSK006Cの境には焦土が堆積していた。埋土中からは弥生土器高杯片が出土した。

SK007C（第50・51図）

SI01Cの西側の段の、SK002CとSK003Cのほぼ中間の位置で検出した土坑である。隅丸長方形を呈し長軸0.87m、短軸0.81m、深さ14cmである。埋土は黄灰色小礫混砂質土である。埋土中からは出土遺物はなかった。

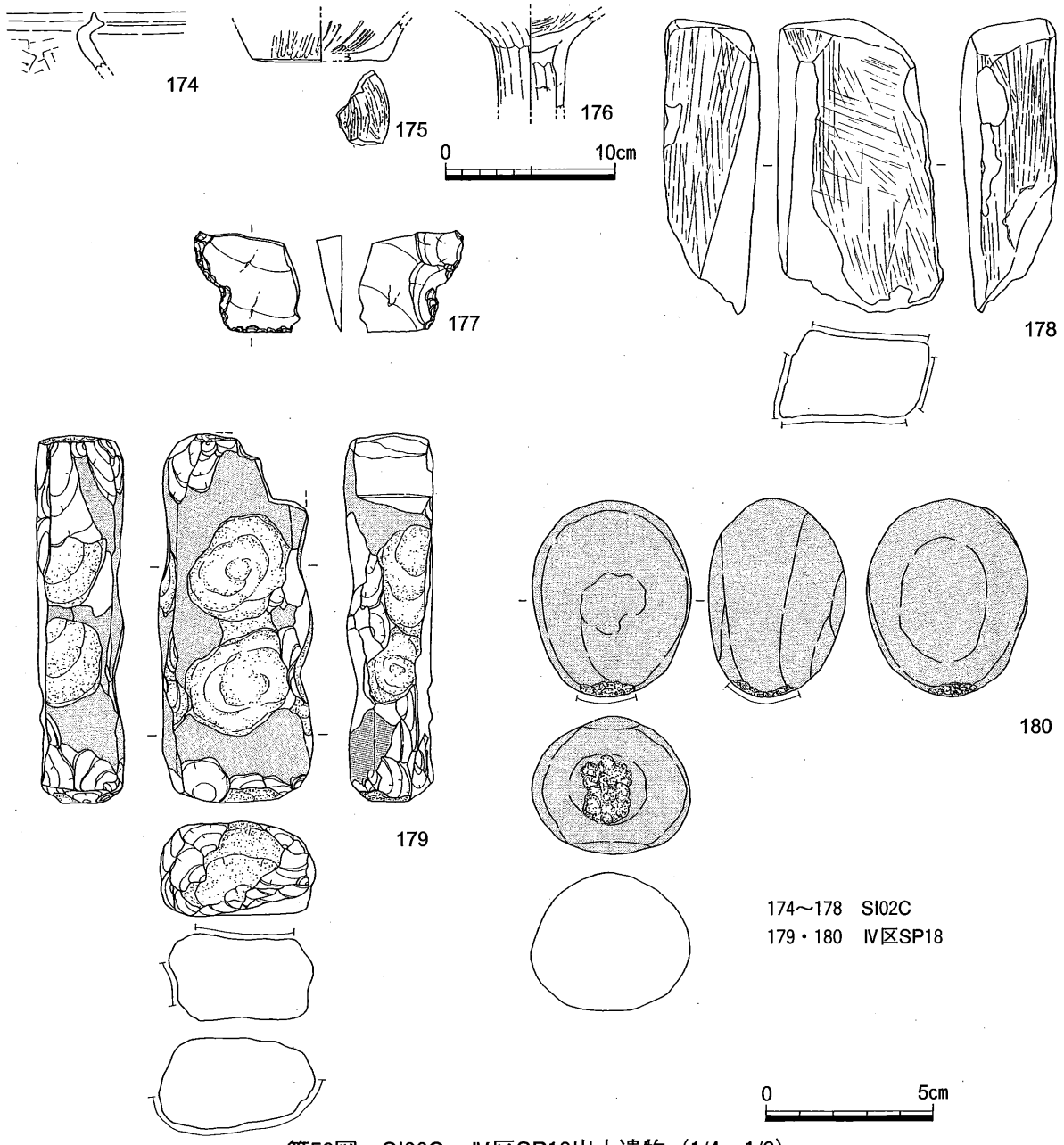


第52図　SI01C出土遺物（1/4・1/2）

SI01C出土遺物（第52図）

151～158は西側の段から出土した遺物で、すべて弥生土器である。151～153は甕で、151は口縁端部に凹線を2条巡らせる。153は体部中位で、ヘラ状工具による刻み目を2段に巡らせる。154・155は底部である。156は高杯杯部で、口縁部外面に3条の凹線を巡らせる。157・158は脚部である。157はヘラ描きによる沈線と山形文を施す。158は脚端部に2孔1対の円孔が見られる。

159～168は西側の段と東側の段の境界付近で出土した遺物である。159～166は弥生土器である。



第53図　SI02C、Ⅳ区SP18出土遺物（1/4・1/2）

159は甕、160～162は甕底部、163～165は壺底部である。163は体部と底部に接合部跡が残る。166は高杯杯部である。167・168はサヌカイト製石器である。167は楔形石器で、下部に敲打痕が残る。168は有茎式と考えられる石鏃で、上・下部とも欠損している。加工は縁辺部にしか及ばない。

169～173は東側の段から出土した遺物で、169～172は弥生土器である。169は直口壺で、直立する口縁の外面に凹線を巡らせる。170は甕である。171・172は高杯杯部で、171は外面に凹線を巡らせる。173はサヌカイト製の有茎式石鏃である。

158がやや後出する可能性があるものの、遺物の時期は概ね弥生時代中期末～後期初頭であり、遺構の時期もその時期と考えられる。

SI02C（第53・54図）

SI01Cの山側約5.3mで検出した段状遺構である。SI01Cとの標高差は約２mである。延長約20m、

幅約1.3mを測る。埋土は黄灰色砂質土、平坦面の標高は約54.8mである。段状遺構はSH17Cを挟んで2つに分かれるようである。

西側の段状遺構は延長4.45m、幅1.3m、深さは山側で30cmを測る。段上にはピットが3穴並んでいた。ピットは概ね直径26～52cm、深さ19～58cmを測り、柱間距離は約1.8mである。延長3.6mの柵列跡と考えられる。東側の段状遺構は延長11.3m、幅2.2m、深さは最も深い部分で23cmで、埋土は黄灰色砂質土である。段上では土坑1基とピットを多数検出したが、掘立柱建物跡を復元するには至らなかった。

SH17C内からはSK008・009C・010Cを検出した。竪穴住居跡埋土を除去後にSK008C～SK010Cの埋土を検出しておりこれらの方が古いことがわかる。

174～178はSI02C出土遺物である。174～176は弥生土器である。174は甕で、口縁端部には面を持たせる。175は甕底部である。176は高杯で、内外面にヘラミガキがある。177はサヌカイト製の石庖丁と考えられる。側縁部に抉りがみられるが、加工は、縁辺部にみられるだけである。1/2程度折損している。178は砥石で、3面を使用しているが、磨耗度は少ない。遺構の時期は弥生時代後期初頭頃と考えられる。

179・180は西側の段状遺構で検出した柵列跡の中央のピット（SP18）から出土した遺物である。ともに叩き石で、179は割れている1面を除く、長辺側の3面にそれぞれ縦に2箇所ずつ、計6箇所の敲打痕を残す。180は球に近い石で、1個所に敲打痕が残る。

SK008C（第54図）

SI02Cの中央付近に位置する。SH17Cの西端付近で検出した。SH17C掘り下げ後に検出しており、これより古い遺構と考えられる。隅丸長方形を呈し、長軸1.57m、短軸1.23m、深さはSI02Cの底面から40cmである。断面形状は逆台形、埋土は灰黄色砂質土である。埋土中からは弥生土器小片が出土した。遺構の詳細な時期は不明である。

SK009C（第54図）

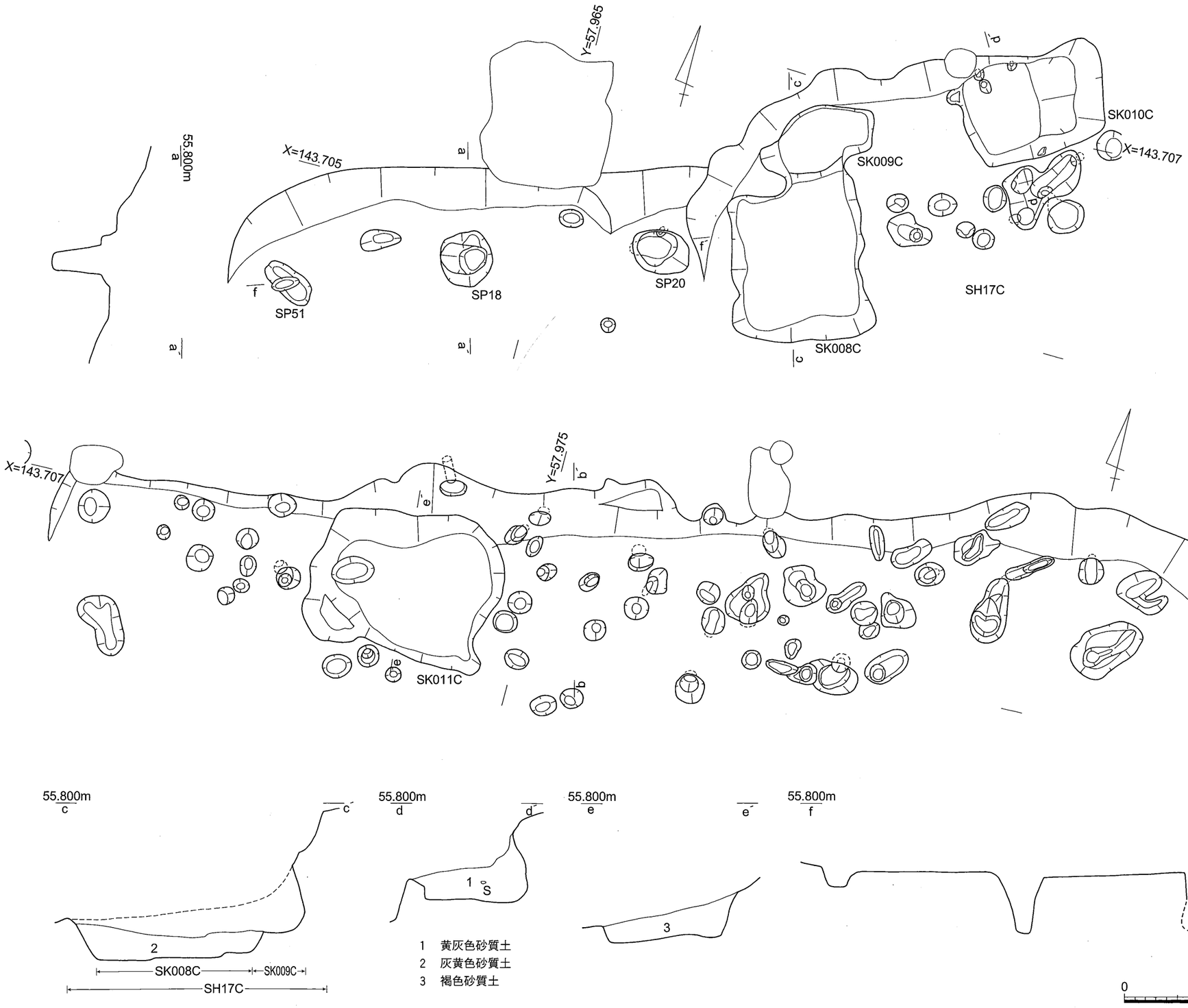
SH17Cの北西隅で、SK008Cの北側で検出した。楕円形で、長軸1.12m、短軸0.66mを測る。遺構の底の標高はSH17Cとほぼ同じで、断面形状は北側で袋状を呈する。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK010C（第54図）

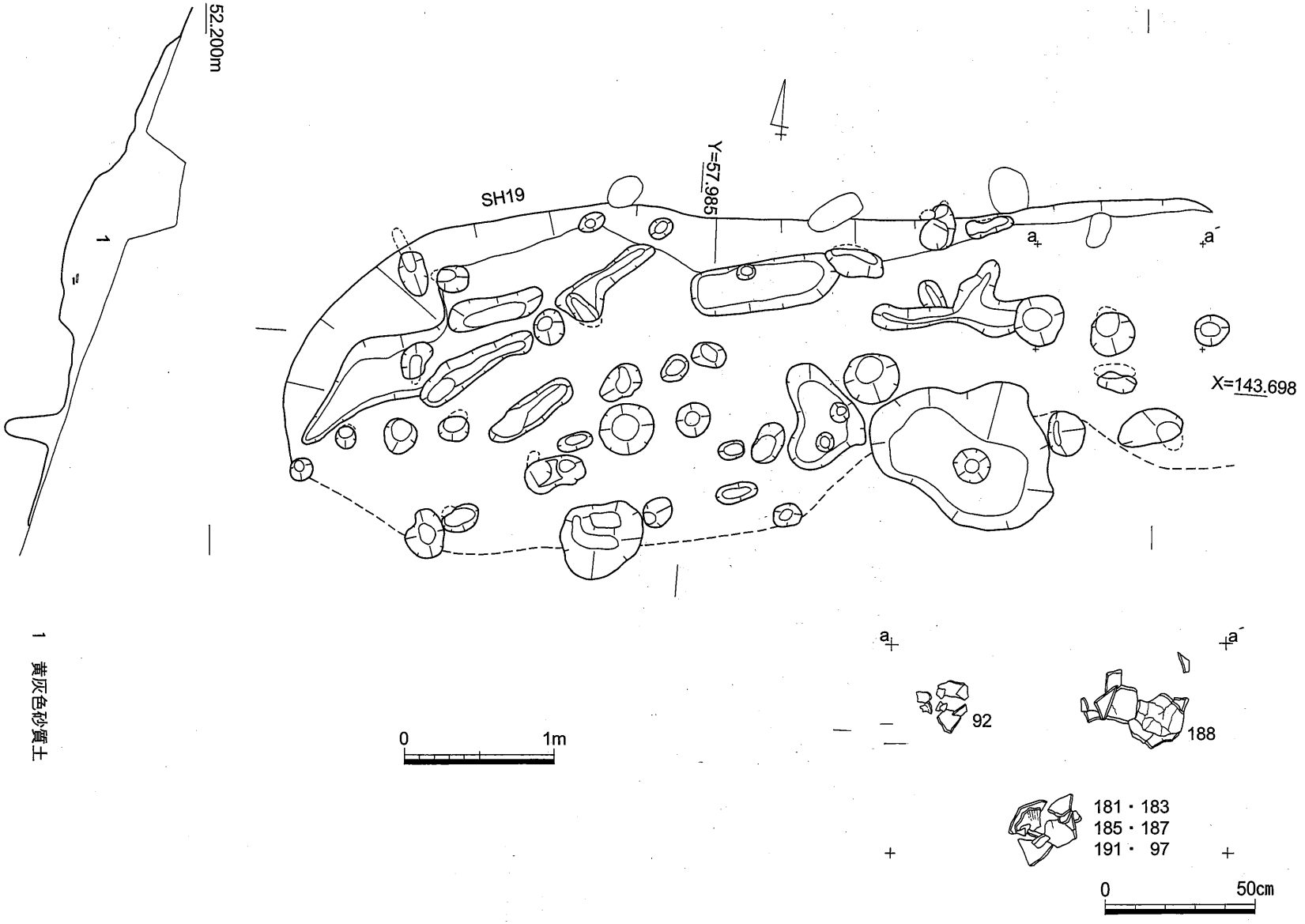
SH17Cの北東隅付近で検出した。隅丸方形で、長辺1.34m、短辺1.00m、深さは30cm程度である。埋土は黄灰色砂質土、断面形状は、SK009Cと同様、SH17Cの北肩と重なる部分は袋状に抉りこまれている。また、遺構の東側法面は崩れたようになだらかになっており、本来は1.00m×0.88m程度の土坑であったと考えられる。土坑掘り下げ後、北側付近で直径10cm程度の小ピットを3穴検出したが、遺構に関連するかどうかは不明である。

SK011C（第54図）

SI02C東部の西側で検出した土坑である。隅丸方形に近い形状で、長軸1.74m、短軸1.30m、深さ18～36cmである。埋土は褐色砂質土、断面形状は逆台形である。埋土中からは焼土が出土している。遺構の詳細な時期は不明である。



第54図　SI02C、SK008C～011C、Ⅳ区SP18・20・51平・断面図（1/40）



第55図　SI03C平・断面図（1/40）、遺物出土状況平面図（1/20）

SI03C（第55・56図）

SI01Cから約2.5m南東、標高で1.5m麓側で検出した段状遺構である。延長約6.3m、幅約2.0m、深さ40cm程度、平坦面の標高は約52.1mである。埋土は黄灰色砂質土である。SI03Cの西端部分でSH19Cが検出されたほか、ピット、土坑等を検出した。

SI03C東端部では弥生土器壺・甕等が集中して出土した。

181～193は弥生土器である。181～185は壺である。181～183は広口壺で、181は口縁部内面に円形の刺突文を2列に施す。182は頸部にヘラ状工具による斜め方向の刺突文を巡らせる。186～188は甕である。186は口縁端部に3条の凹線文を施す。188は胴部最大径付近に斜め方向の刻み目を施す。189～191は甕底部である。平底を呈し、外面はハケまたはヘラミガキ、内面はヘラケズリする。192・193は高杯で、192は外面に3条の凹線文を巡らせる。193はやや大型のもので、外面に2条の凹線文を巡らせる。

遺構の時期は弥生時代中期末頃以降と考えられる。

SI04C（第57図）

SI01Cより約6m北東側の、標高で60cm程度上がった場所で検出した。延長約5m、幅1.1m、深さ20cm、平坦面の標高は約53.4mである。埋土は黄灰色砂質土である。段状遺構内ではピットを数穴検出した。遺構の西端付近では弥生土器壺片が集中して出土した。

194～198は弥生土器である。194は壺で、算盤形の体部をもつ。胴部最大径の直上部分に沈線を1条巡らせる。細頸壺の体部片である。195は甕底部である。196～198は高杯で、196は口縁部の立ち上がりが高く直線的である。197・198は口縁部外面に凹線が2～3条巡らされる。

遺構の時期は弥生時代中期末頃と考えられる。

SI05C（第59図）

SI04Cの約7～8m南東側の、標高で約2m下がった位置で検出した。SH18C部分を除いた延長約3.8m、幅約2.5m、深さ17cmを測る。平坦部の標高は約51.2mである。SI05Cの西端部でSH18Cを検出した他、土坑、ピット等を検出した。埋土中からは弥生土器小片が出土した。

SK012C（第59図）

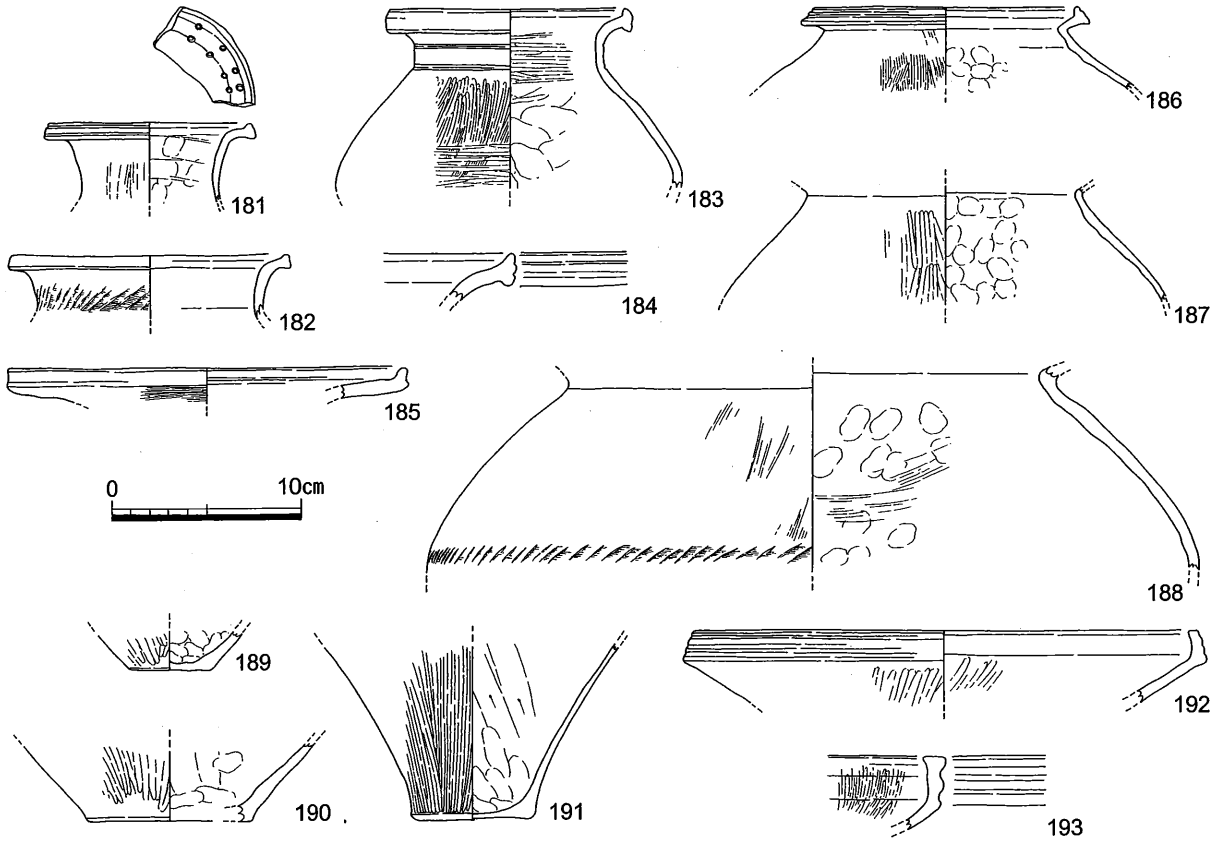
SI05C中央付近、SH18Cの東側に隣接して検出した土坑である。土坑の軸はSI05Cと同じである。不整円形で長軸1.64m、短軸1.10m、深さは概ね44cm程度であるが、土坑の底部には小ピットが多く見られた。埋土は下層が花崗岩ブロック混褐灰色砂質土、上層が褐灰色小礫混砂質土である。埋土中からは遺物は出土しなかった。

SI06C（第58図）

SI05Cの約3m南側の、標高では1.7m程度下がった位置で検出した。延長9.75m、幅約2m、深さ10cm程度を測る。平坦面の標高は約49.5mである。SI06Cからは土坑・ピットを検出した。埋土中からは弥生土器小片、サヌカイト片が出土した。

SI07C（第58図）

SI03Cの約18m南側、標高では8m程度下がった位置で検出した。南側は調査区外へ延びる。延



第56図　SI03C出土遺物（1/4）

長11m、幅２m、深さ40cm、平坦面の標高は44.1mである。SI07Cからは土坑・ピットを検出した。埋土中からは炭が出土した。

199は土師質土器足釜体部小片である。

（５）土坑

土坑は全体で135基検出した。その内約90基が南側斜面と、西側と東側に延びる尾根線上の斜面に立地する。段状遺構をつくったのちに土坑を規則的に配置する場合も多く見られる。

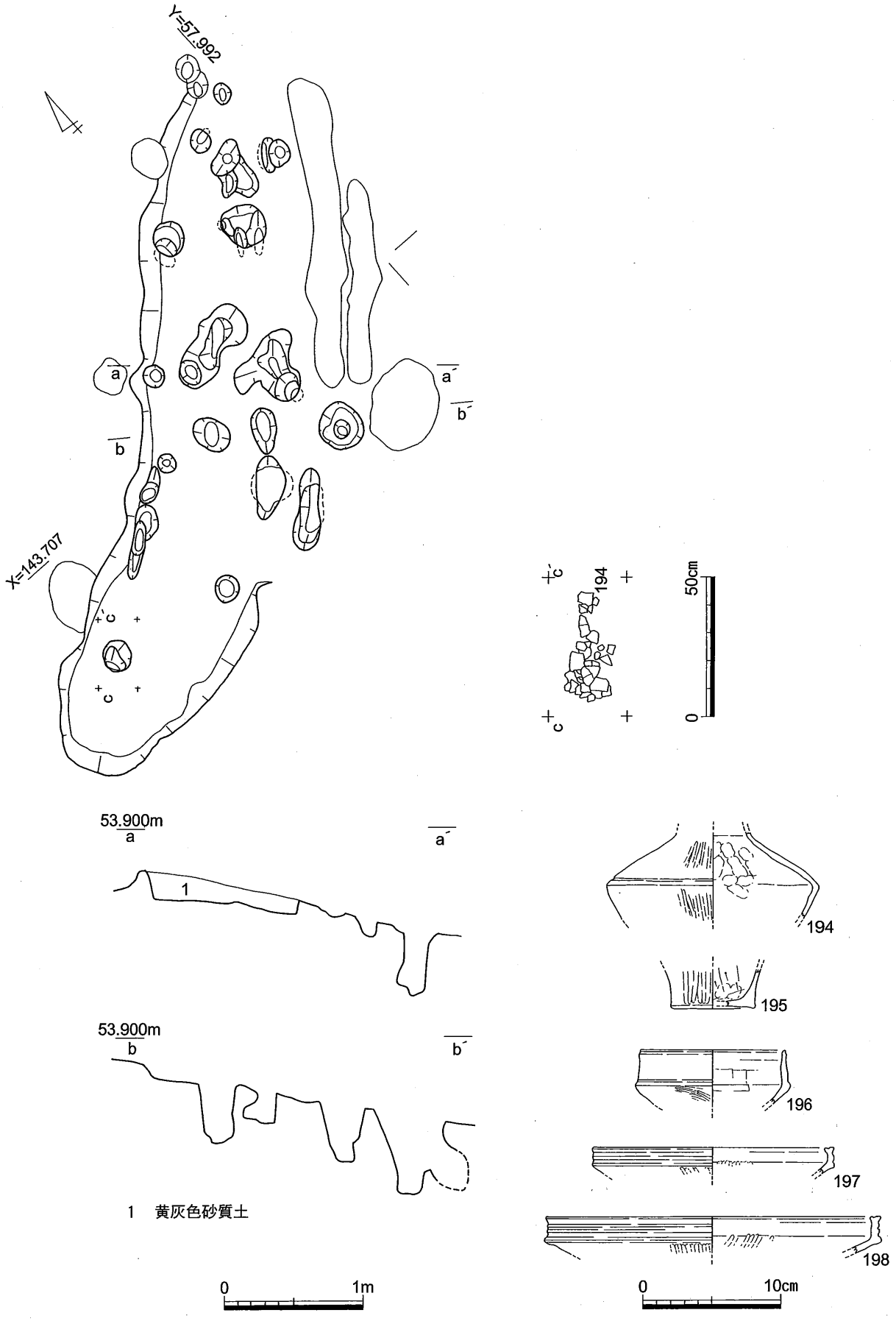
土坑は検出数が多く、形態や立地等で分類できると考えられるが、ここでは立地に基づいた分類より記述する。

（丘陵頂部）

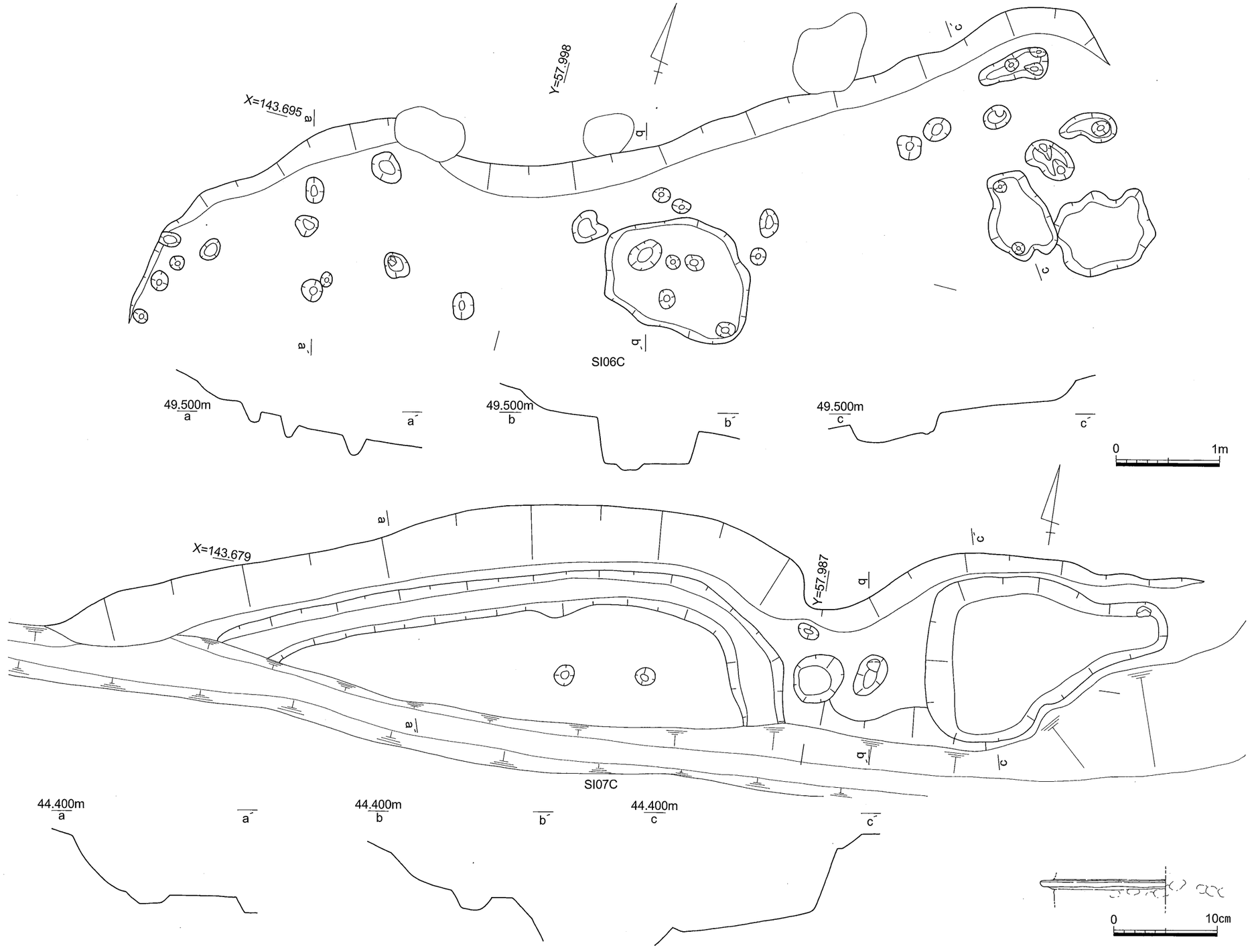
SK013A（第60図）

丘陵頂部付近で検出した土坑である。SH13A内で検出した。長方形を呈し、南辺が張り出す形状で、その部分の立ち上がりは緩やかである。長辺1.60m、短辺0.90m、深さ64cmで、標高は57.8mである。埋土は灰黄色砂質土、断面形状は長方形に近い逆台形である。南側の張り出し状の部分は遺構の法面がなだらかなことから、この部分は型崩れしたものと思われ、本来の長辺は1.26m程度と考えられる。底付近からは長径0.28m、短径0.16m程度の小ピットを２穴検出した。埋土中からは弥生土器底部の他、サヌカイト剥片が出土した。

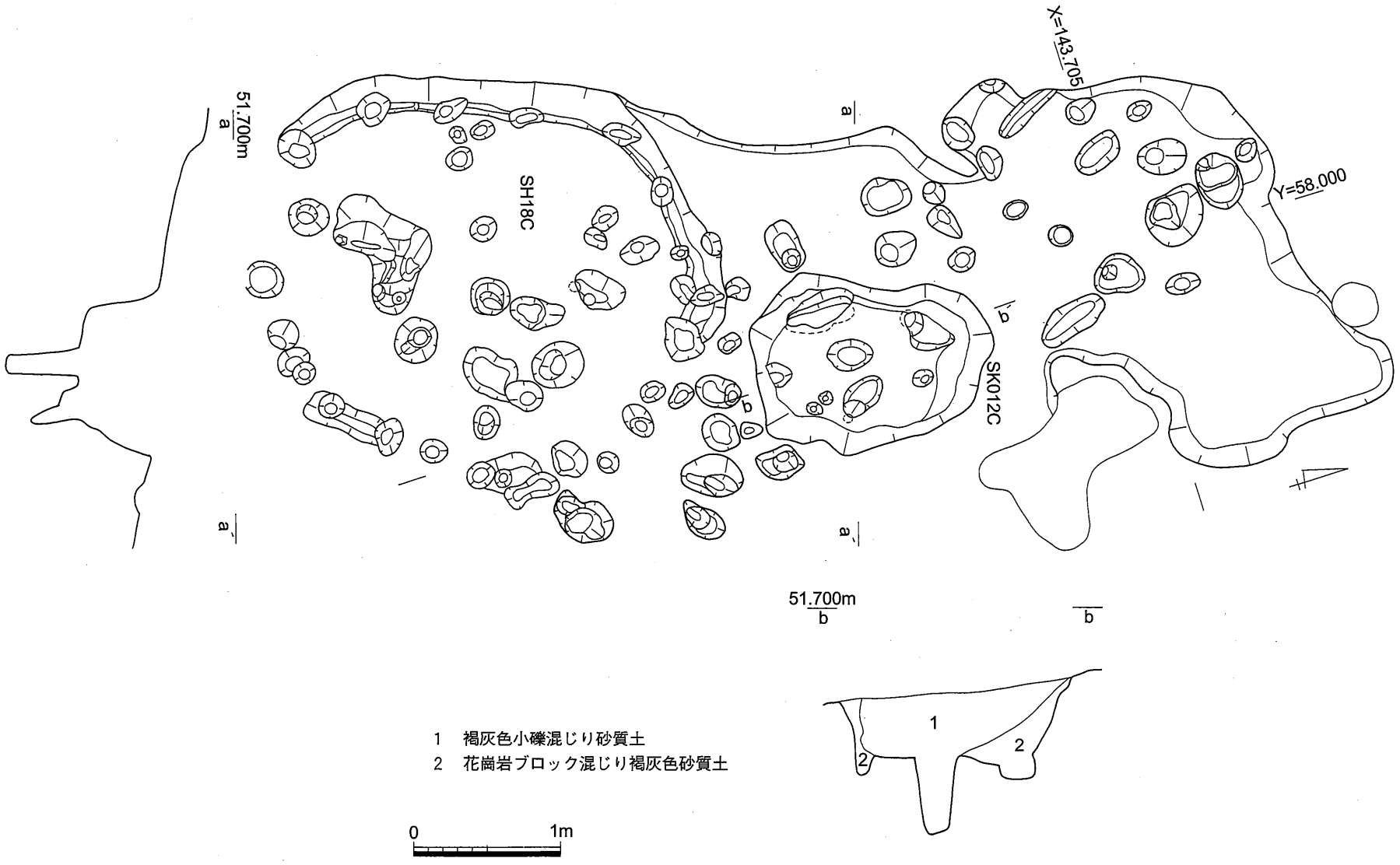
200は弥生土器の底部である。



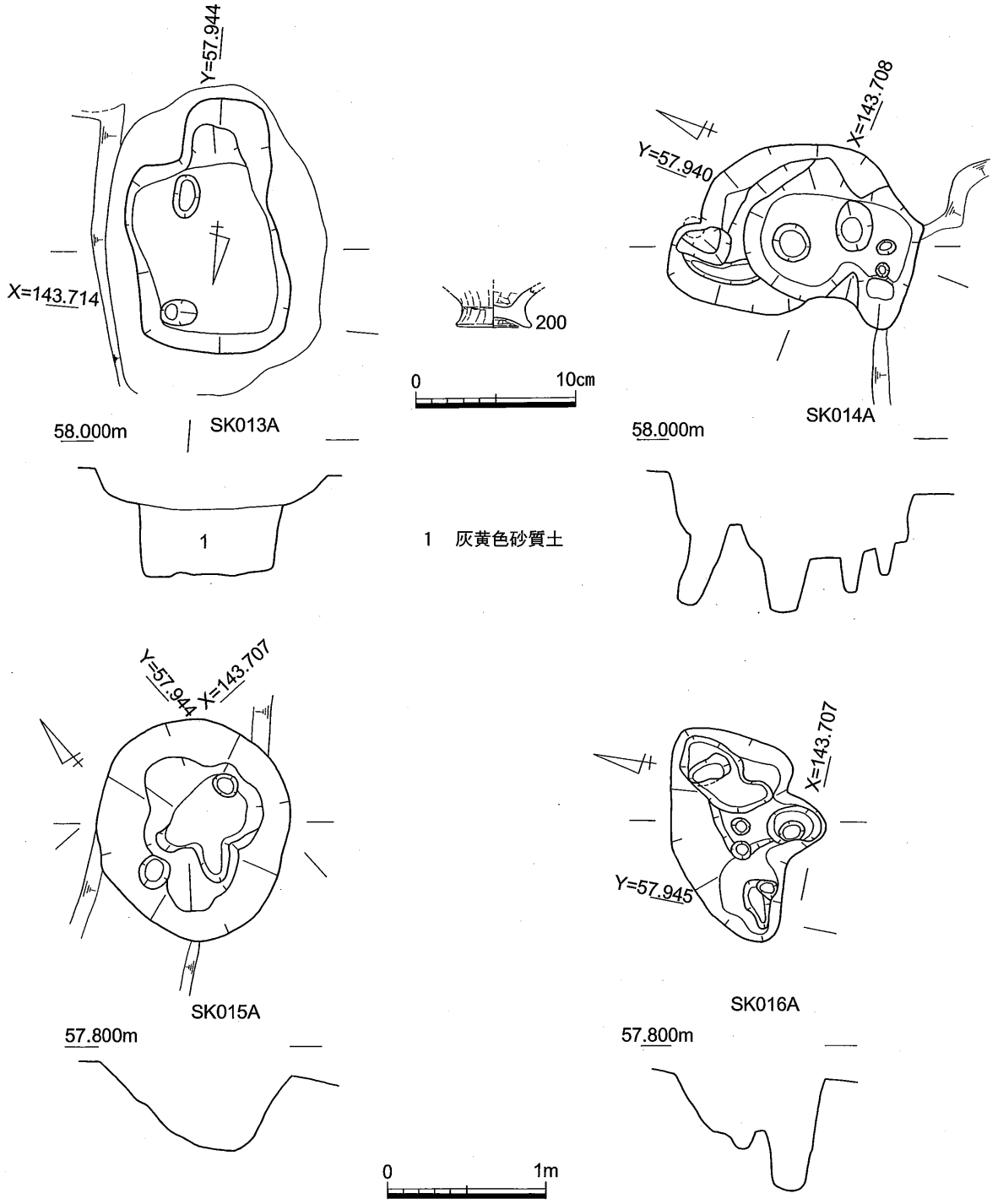
第57図　SI04C平・断面図（1/40）、遺物出土状況平面図（1/20）、出土遺物（1/4）



第58図　SI06C・07C平・断面図（1/40）、SI07C出土遺物（1/4）



第59図　SI05C、SK012C平・断面図（1/40）



第60図　SK013A～016A平・断面図（1/40）、SK013A出土遺物（1/4）

SK014A（第60図）

丘陵頂部付近で検出した土坑である。不整形を呈し、長軸1.54m、短軸1.06mを測る。断面形状は、北側でやや段落ちが認められ、底部からは直径８～22cm、深さ20～40cmの小ピットを５穴検出した。深さは小ピット以外の部分は44cm、標高は57.8m前後である。埋土中からは遺物は出土しなかった。

SK015A（第60図）

丘陵頂部で検出した土坑である。円形を呈し、直径1.20～1.40mである。深さは50cm程度、標高は57.7m、断面形状は摺鉢状を呈し、底部からは直径14～20cm、深さ25cm程度の小ピットを２穴検出した。埋土中からは遺物は出土しなかった。

SK016A（第60図）

丘陵頂部で検出した土坑である。不整形を呈し、長軸1.32m、短軸0.73m、深さ37cm、標高は57.6mを測る。断面形状は摺鉢状であるが、底部北東隅と西隅に不整形の落ち込みが見られる他、直径10cm～36cmの小ピットを３穴検出した。埋土中からは遺物は出土しなかった。

SK021A（第61図）

丘陵頂部西側縁辺部で検出した土坑である。楕円形に近い隅丸方形で、長軸1.51m、短軸1.44mを測る。深さは108cm、標高は概ね57.2m、埋土は灰黄色砂質土、断面形状は概ね逆台形である。土坑の底面の形状は隅丸方形であることと、断面形状から遺構の上面の肩は崩れたものであろう。底部からは長径52cm、短径20cm、深さ15cmの小穴を１穴検出した。杭状のものを立てて後に北東側へ倒された可能性があろう。埋土中からはサヌカイト剥片が出土した。

SK022A（第61図）

丘陵頂部西側縁辺部で検出した土坑である。土坑の北西部と南東部で遺構の上面の肩が崩れた様子が見られる。隅丸方形で長軸1.50m、短軸1.18mを測る。深さは98cm、標高は56.5mである。埋土は灰黄色砂質土、断面形状は、上部はやや形崩れしているが、ほぼ逆台形で、底部に小穴を１穴もつ。埋土中からはサヌカイト剥片が出土した。

SK023A（第61図）

丘陵頂部北側縁辺部で検出した土坑である。不整形で、長軸2.40m、短軸1.18mを測る。深さは約40cm、標高は56.0m、断面形状は浅い皿型である。底部に直径28cm、深さ12cmの小ピットを１穴検出した。埋土中からは弥生土器壺、サヌカイト剥片が出土した。

201は弥生土器壺の口縁部である。

SK024A（第61図）

丘陵頂部北側縁辺部付近で検出した。不整形を呈するが、原形は隅丸方形であったと考えられる。長軸1.78m、短軸1.65mを測る。深さ58cm、標高は55.6m、断面形状は逆台形である。底部から長軸22～50cm、短軸20～32cm、深さ10～20cmの小ピットを５穴検出した。埋土中からはサヌカイト剥片が出土した。

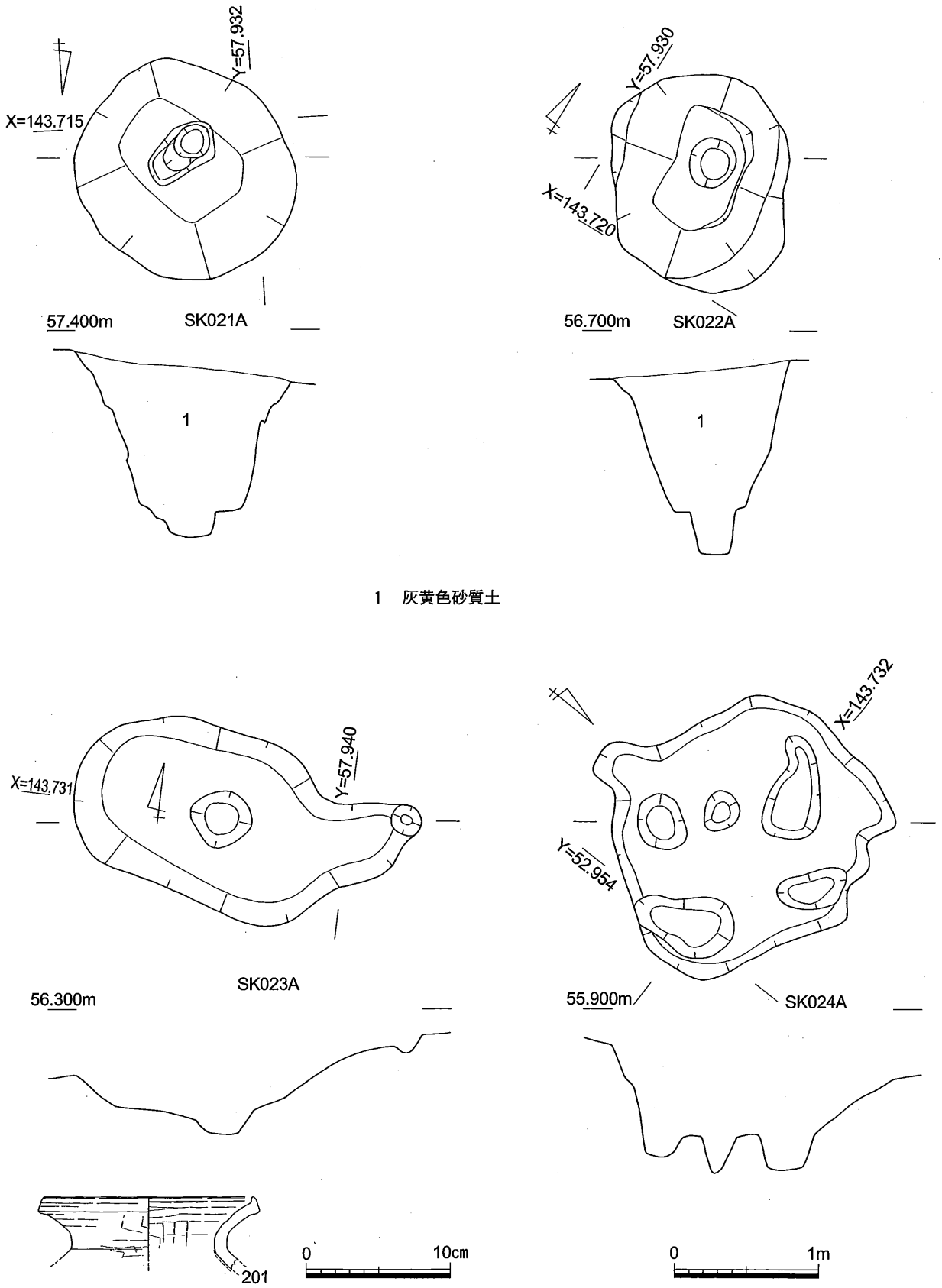
SK031A（第62図）

丘陵頂部北側縁辺部付近で検出した。不整形で長軸2.10m、短軸1.74mを測る。深さ77cm、断面形状は段掘り状で、北側が深い。標高は56.4～57.1m、埋土は浅い部分が暗灰色砂質土、深い部分が黄灰色砂質土である。埋土中からは出土遺物はなかった。

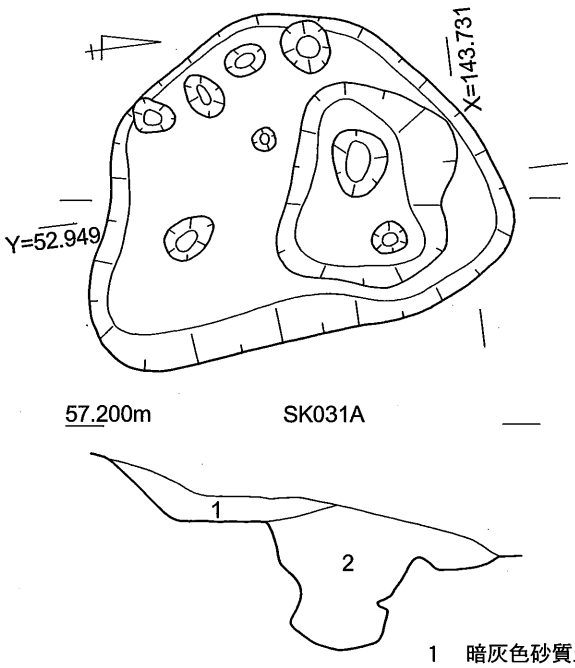
SK032A（第62図）

丘陵頂部北側縁辺部付近で検出した土坑である。概ね円形で、直径1.34～1.40mを測る。深さは70cm、標高は57.4mである。断面形状は上半部はなだらかで、下半部は逆台形を呈し、上半部は崩れたことがわかる。埋土の下位から上位にかけては炭化物と思われる黒色ブロックが含まれていた。土坑の底部近くからは弥生土器甕底部が出土した他、弥生土器壺片が出土した。

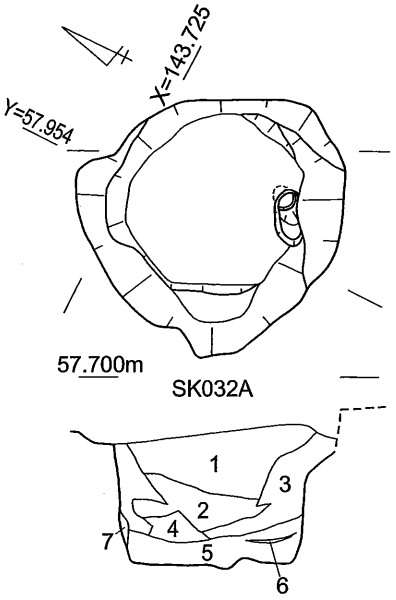
202・203とも弥生土器である。202は壺で、口縁端部に沈線を巡らせる。203は甕底部で、外面は



第61図　SK021A～024A平・断面図（1/40）、SK023A出土遺物（1/4）

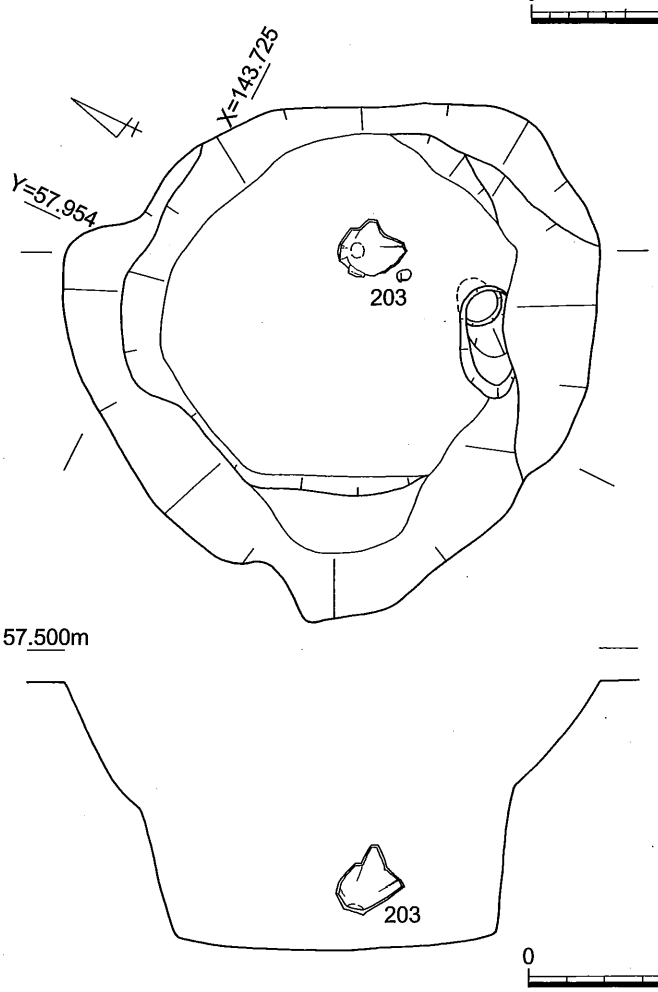


1　暗灰色砂質土
2　黄灰色砂質土

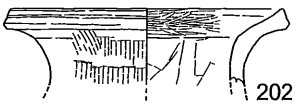


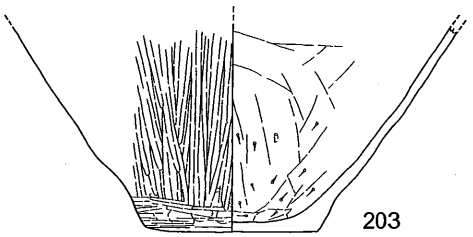
1　黒色ブロック混じり(少量)褐灰色砂質土
2　黒色ブロック混じり(やや多量)褐灰色砂質土
3　褐灰色砂質土
4　黒色ブロック混じり(1＜4＜2)褐灰色砂質土
5　灰褐色砂質土(3に似る)
6　褐灰色粘質土砂質土
7　暗灰褐色砂質土

0　1m



0　50cm





0　10cm

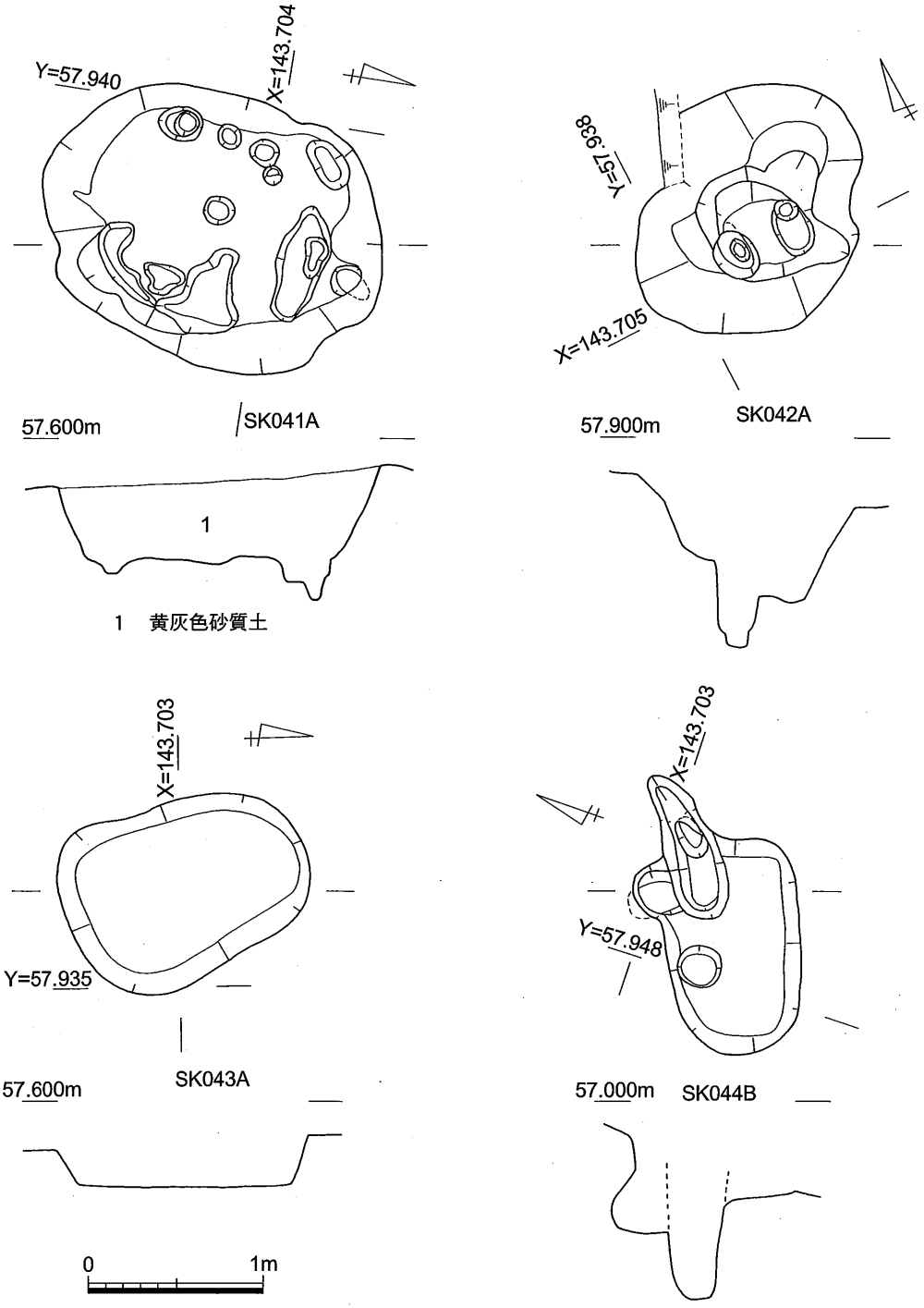
第62図　SK031A・032A平・断面図（1/40）、SK032A遺物出土状況平・断面図（1/20）、出土遺物（1/4）

密なヘラミガキ、内面はヘラケズリを施す。

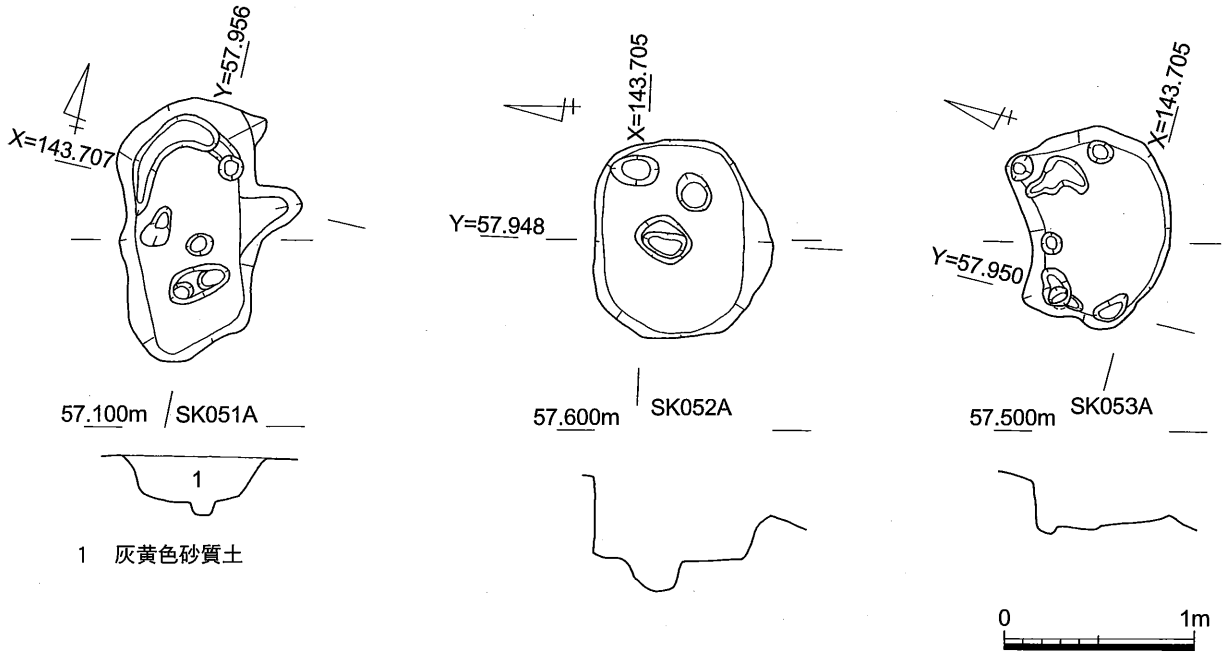
遺構の時期は弥生時代後期初頭頃である。

SK041A（第63図）

丘陵頂部南側付近で検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸1.98m、短軸1.56mを測る。標高は57.3mである。深さは48cm、断面形状は逆台形であるが、底部の縁辺部と中心部で直径10～25cm、深さ5～20cm程度の小ピットを数穴検出した。埋土は黄灰色砂質土である。中央部の小ピットは杭等を立たせた痕跡の可能性がある。埋土中からは遺物は出土しなかった。



第63図　SK041～043A・044B平・断面図（1/40）



第64図　SK051A～053A平・断面図（1/40）

SK042A（第63図）

丘陵頂部南側縁辺部付近で検出した土坑である。不整形で長軸1.45m、短軸1.18mを測る。標高は57.7mである。深さは60cm、断面形状は段落ち状を呈し、底部からは長径30cm、短径20cm、深さ15.5cm～29.0cmの小ピットを２穴検出した。杭等を立てた痕跡の可能性がある。埋土中からは弥生土器と思われる小片が出土した。

SK043A（第63図）

丘陵頂部南側縁辺付近で検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸1.41m、短軸0.98m、深さ20cmを測る。標高は57.3m、断面形状は逆台形である。埋土中からは弥生土器小片とサヌカイト剥片が出土した。

SK044B（第63図）

丘陵頂部よりやや南側へ下がった位置で検出した土坑である。隅丸長方形を呈し、北東側で溝状に突出する。長軸1.22m、短軸0.77mを測る。標高は56.8mである。深さは山側では50cm、麓側では２cm程度である。断面形状は逆台形であるが、底部から小ピットを２穴、溝状の掘り込みを１条検出し、そのうち１穴は西側で土坑上面の下側へ入り込んでいる。溝状の掘り込みは、他の部分で等高線に平行した同様な遺構が多く見られるので、後世の切り込みの可能性もある。埋土中からは弥生土器底部とサヌカイト剥片が出土した。

SK051A（第64図）

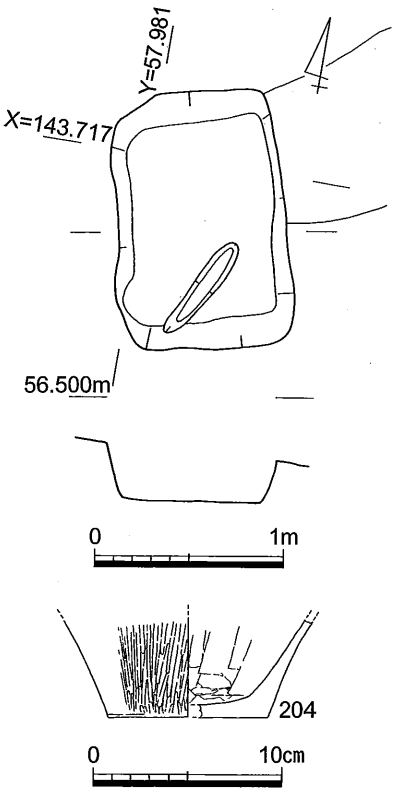
丘陵頂部よりやや南側へ下がった位置で検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸1.30m、短軸0.68mを測り、軸は等高線に直交する。標高は57.0m、東側の一部では法面が崩れたような張り出しがあった。深さは山側では38cm、麓側では７cmである。断面形状は逆台形で、底部縁辺部や中央付近からは直径15cm程度、深さ５～27cmの小ピットや溝状の窪みが見られた。埋土は灰黄色砂質土である。埋土中からは弥生土器小片が出土した。

SK052A（第64図）

丘陵頂部よりやや南側へ下がった位置で検出した土坑である。隅丸方形で、長軸1.05m、短軸0.93mを測る。標高は57.3m、深さは山側で43cm、麓側で25cmを測る。断面形状は逆台形であるが、南側では遺構の法面がやや崩れる。底部中央付近からは直径18～30cm、深さ13～16cmの小ピットを３穴検出した。埋土中からは遺物は出土しなかった。

SK053A（第64図）

丘陵頂部よりやや南側へ下がった位置で検出した土坑である。不整円形で、長軸は等高線に平行である。長軸1.06m、短軸0.75mを測る。標高は57.3mである。深さは山側で23cm、麓側で２cmを測る。断面形状は北側では壁面の立ち上がりが急であるが、南側はほとんど立ち上がりがなかった。底部の縁辺付近に沿って直径10～15cm、深さ３～８cmの小ピットを数穴検出した。埋土中からは出土遺物はなかった。



第65図 SK061A平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

SK061A（第65図）

丘陵頂部よりやや東側へ下がった位置で検出した土坑である。隅丸長方形で、長軸1.37m、短軸0.89mを測る。深さは山側が28cm、麓側が21cm、標高は56.3mである。断面形状は逆台形、底部からは溝状の窪みを検出した。埋土中からは弥生土器甕底部、サヌカイト剥片が出土した。溝状の窪みは深く、調査地の各所でよく見られることから、木の根の跡の可能性が高い。

204は弥生土器甕底部で、外面はヘラミガキ、内面は板ナデと指押さえで調整する。

（南斜面西側尾根の東斜面）

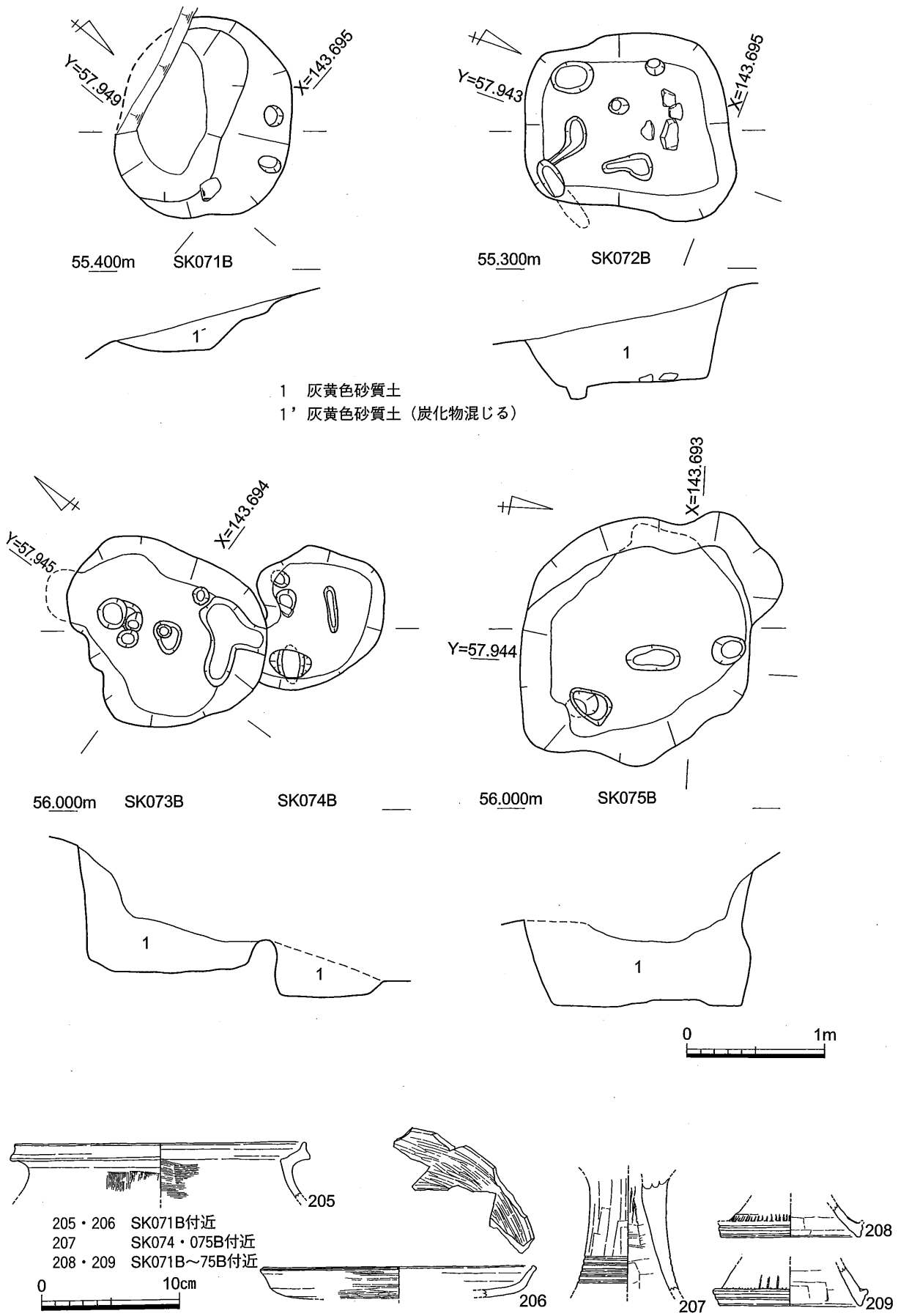
SK071B～SK075B付近上面精査（第66図）

SK071B～SK075Bはほぼ同一等高線上に近接して位置するものである。当初は各遺構の輪郭がはっきりしていなかったためにこれら５基の土坑を一まとまりとして捉えて掘り下げたが、その後５基の土坑に分かれることが判明した。

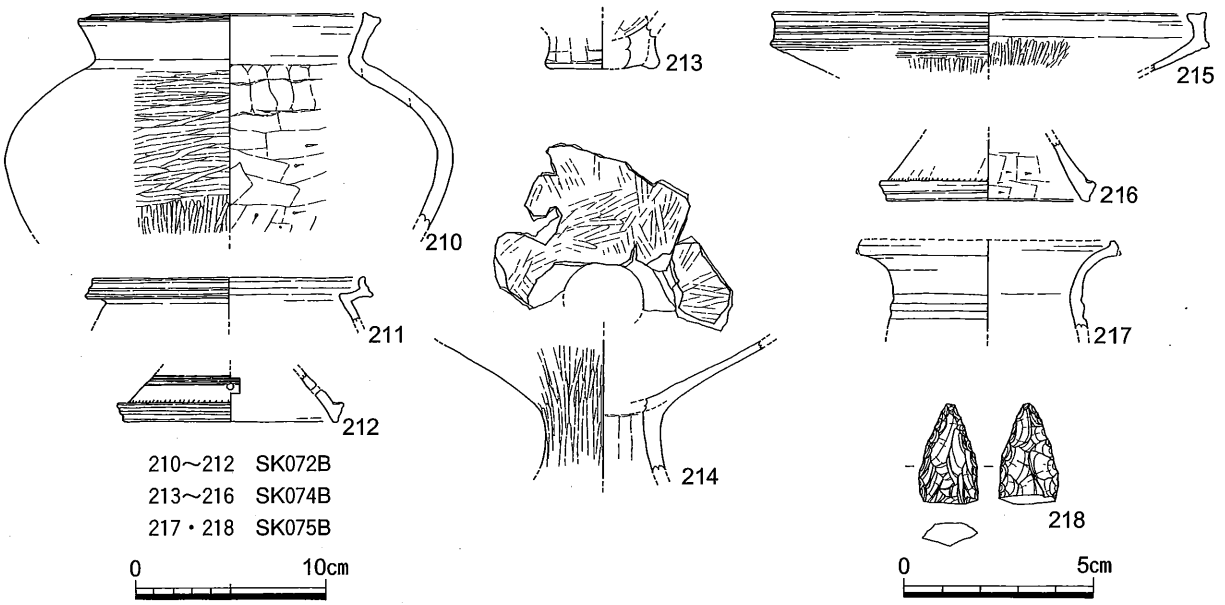
205～209はこれらの５基の土坑を検出するまで掘り下げた際に出土した弥生土器である。205・206はSK071B上面付近で出土した。205は弥生時代後期初頭～前半頃の甕である。206は８世紀代の土師器皿で、口縁端部を玉縁状にし、内外面は横方向にヘラミガキを施す。207はSK074B・075B付近、208・209はSK071B～075B全体付近から出土した土器である。207～209は弥生土器高杯脚部で、207は脚部中央付近に５条の沈線文を施す。208・209は裾部にヘラ状工具による刺突文があり、脚端部には凹線文が巡らされる。弥生時代中期末～後期初頭と考えられる。

SK071B（第66図）

丘陵南西尾根の東斜面上上部で検出した土坑である。SK072Bの東側に接して検出した。麓側の外形線は一部壊されている。楕円形で長軸1.48m、短軸1.27mを測る。標高は55.2mである。やや



第66図　SK071B～075B平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第67図　SK072B・074B・075B出土遺物（1/4・1/2）

傾斜の強い斜面上にあるため、斜面の高いところでは深さ24cmを測るが、低い部分では検出面と同じ高さである。埋土は灰黄色砂質土で炭化物が混じる。断面形状は北側で２段掘状を呈する。北側肩付近に直径12cm、深さ14cm程度の２穴の小ピットが見られるが、ピットの底面のレベルは土坑の底面のレベルより30cm程度は浅い。遺物の出土はなかった。

SK072B（第66・67図）

SK071Bの西側に隣接して検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸1.46m、短軸1.25mで、長軸は等高線に直交する。標高は55.2mである。深さは山側で54cm、麓側で42cm、断面形状は逆台形を呈し、埋土は灰黄色砂質土である。底部からは直径12cm、深さ13～14cmの小ピットを２穴と、礫を検出した。

210～212は弥生土器である。210は壺で、口縁部は直立し、外面はヘラミガキを施す。211は甕で、口縁端部には２条の凹線文がある。212は高杯脚部で、円孔が１箇所に認められるが、全体で何孔あったかは不明である。ヘラ描き沈線文と脚端部にはヘラ描きの刺突文が見られた。

遺構の時期は弥生時代中期末～後期初頭と考えられる。

SK073B（第66図）

SK072Bの西側に接して検出した土坑である。平面形態ではSK074Bの上面で検出しているようであるが、断面観察では両者の前後関係は不明である。標高は55.8mである。不整形で長軸1.50m、短軸1.27mを測る。長軸は等高線と直交する。深さは山側で80cm、麓側では25cmで、断面形状は逆台形、埋土は灰黄色砂質土である。底部からは直径12～20cm、深さ18～30cmの小ピットを５穴検出した。

SK074B（第66・67図）

SK073Bの南東部に接して検出した土坑である。不整円形を呈し、長軸1.00m、短軸0.91mを測る。標高は55.0mである。深さは山側が34cm、麓側が14cm、埋土はSK073Bと同じ灰黄色砂質土である。断面形状は逆台形で、底部には直径15cm、深さ15cm程度のピット状の窪みがある。埋土中からは弥

生土器高杯等が出土した。

213～216は弥生土器である。213は底部、214～216は高杯である。214は杯部から脚部にかけて残り、外面は残存部分では縦方向のヘラミガキ、内面は放射状にヘラミガキした後底部のみ横方向にヘラミガキを施す。底部に充填されていた粘土板は剥離していた。215は杯部で、内外面とも縦方向にヘラミガキをし、外面には凹線３条を巡らせる。216は脚部で、脚裾部にはヘラ状工具による刺突文を施す。端部外面には凹線文を１条施す。

遺構の時期は弥生時代中期末頃と考えられる。

SK075B（第66・67図）

SK073B・074Bの西側で検出した土坑である。不整形を呈し、長軸2.15m、短軸1.63mを測る。標高は55.2mである。長軸は等高線に直交する。深さは93cm、断面形状は逆台形であるが、場所によっては上位の壁面より奥へ入り込む。埋土は灰黄色砂質土で、底部には軸の長さが12～32cm、深さ20～59cmの小ピット状の窪みが見られる。埋土中からは弥生土器壺や石鏃が出土した。

217は弥生土器壺で、頸部に緩い凹線を２条巡らせる。218はサヌカイト製の石鏃である。下部が欠損している。

SK091B（第68図）

SK071B・072Bより50cm程度上がった場所で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸1.63m、短軸1.20mを測る。標高は55.7m、深さは38cmで、断面形状は逆台形、埋土は黄灰色砂質土で炭化物を含む。底部からは深さ14～35cmの小溝状かピット状の窪みが縁辺に沿って検出された。埋土中からは弥生土器小片や磨製石斧片が出土した。

219は磨製石斧片である。大部分は割れているが、残っている部分は研磨している。割れた部分の一部に敲打痕が認められ、再利用したと見られる。

遺構の時期は弥生時代中期末～後期初頭と考えられる。

SK092B（第68図）

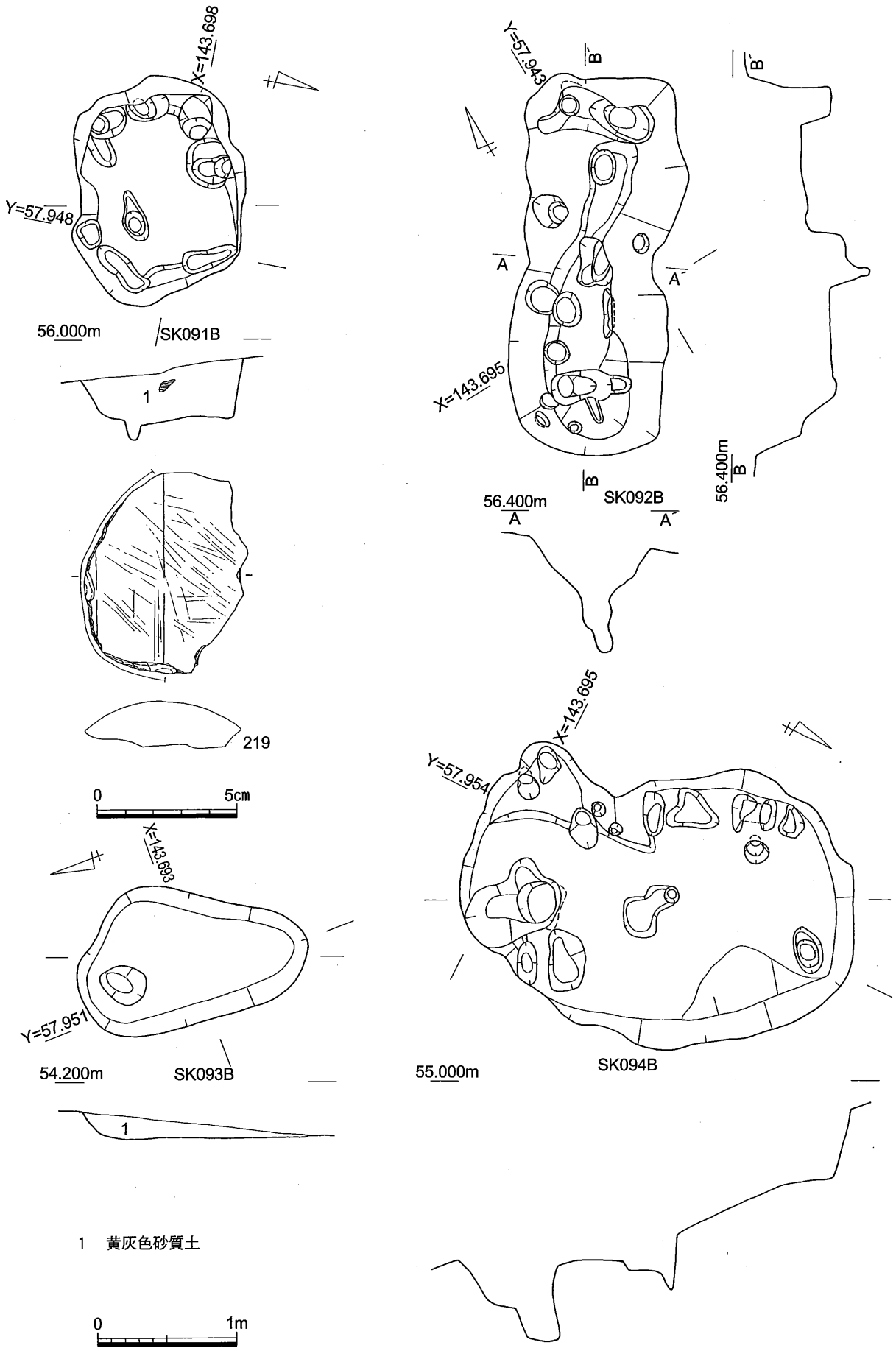
SK073B・075Bより50cm程度上がった場所で検出した土坑である。隅丸長方形状を呈し、長軸2.72m、短軸0.88mを測る。長軸は等高線に平行する。標高は56.2m、深さは54cmである。断面形状は短軸側はＶ字形、長軸側は逆台形を呈するが、底部には直径15～42cm、深さ32～51cmの楕円形の小ピットが10穴程度あり、複雑な断面形状を示す。埋土中からはサヌカイト剥片が出土した。

SK093B（第68図）

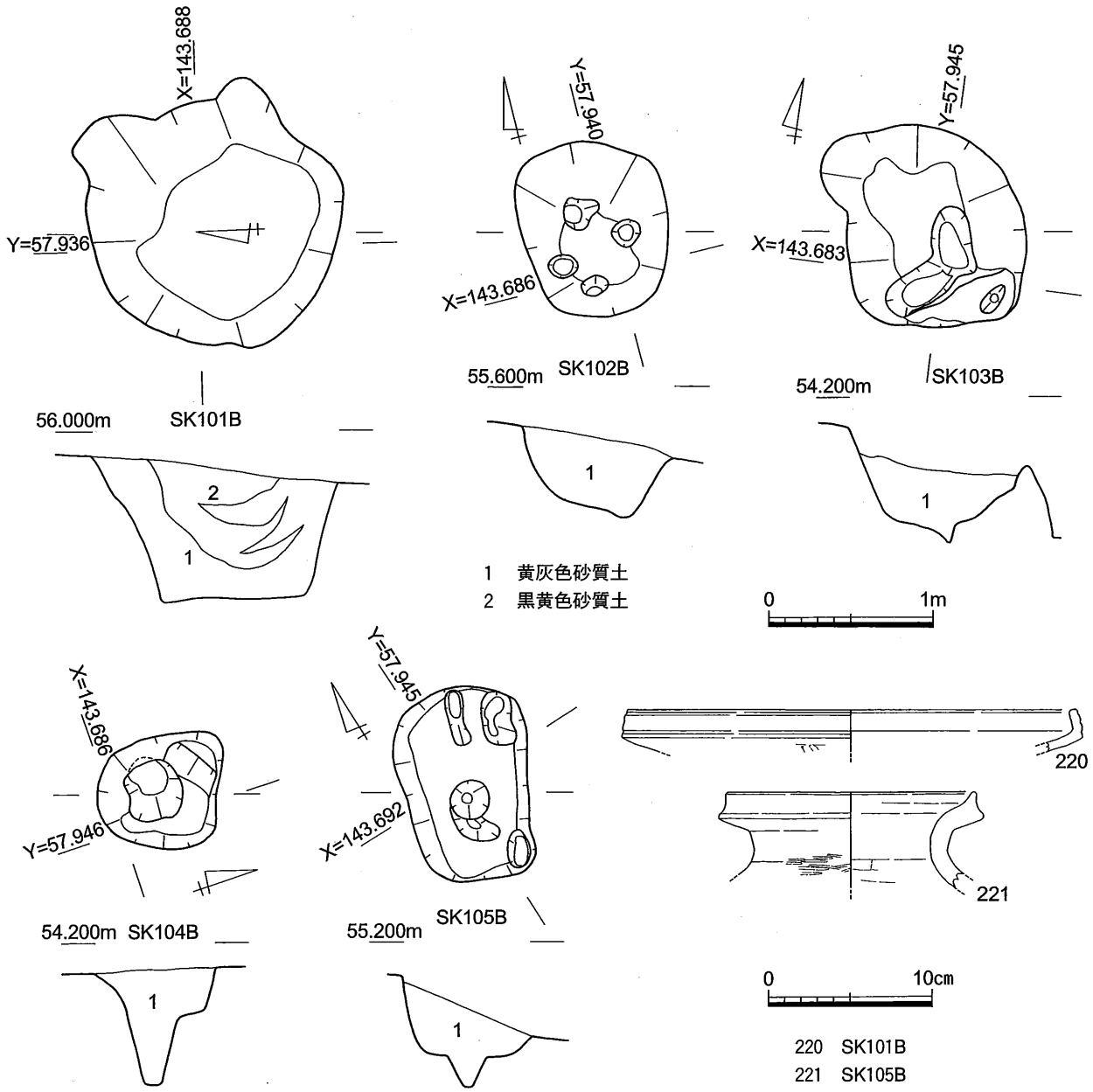
SK071Bより1.2m程度下がった場所で検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸1.68m、短軸1.06m、深さは山側で18cm、麓側では０cmである。埋土は黄灰色砂質土、底部には小ピットを１穴検出した。標高は54.0m、長軸は等高線と斜交する。埋土中からは土器小片が出土した。

SK094B（第68図）

SK093Bとほぼ同一等高線上のやや東側で検出した土坑である。不整円形で長軸2.86m、短軸1.91mを測る。深さは標高の高い北側では50cm程度であるが、南側では検出面とほとんど同じ高さで、土坑の底面自体にも傾斜がある。標高は54.8mである。底部では直径15～40cm、深さ16～60cmの楕円形の小ピット状の窪みが多く検出した。埋土中からは遺物は出土しなかった。



第68図　SK091B～094B平・断面図（1/40）、SK091B出土遺物（1/2）



第69図　SK101B～105B平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

SK101B（第69図）

丘陵頂部から南西へ延びる尾根線上のほぼ頂部で検出した土坑である。不整円形で、直径は概ね1.50m、深さ77cm、断面形状は逆台形である。北東側の遺構の法面は崩れてなだらかになっている。埋土は黄灰色砂質土で、黒黄色砂質土が混ざる。標高は55.9mである。埋土中からは弥生土器片が出土した。

220は弥生土器高杯である。口縁部外面には凹線が巡っていたと思われるが、摩滅が著しく凹線は残っていない。

遺構の時期は弥生時代中期末頃と考えられる。

SK102B（第69図）

SK101Bから標高で0.5m程度下がった場所で検出した土坑である。隅丸方形で長軸1.07m、短軸0.87m、深さ42cmで、標高は55.4mである。底部からは直径17cm、深さ4～38cmの小ピット状の窪みを4穴検出した。埋土は黄灰色砂質土である。埋土中からは土器小片とサヌカイト小片が出土した。

SK103B（第69図）

SK102Bから1.5m程度低い位置で検出した土坑である。隅丸方形がやや変形した形と考えられる不整形で、長軸1.24m、短軸1.08m、深さ50cmである。埋土は黄灰色砂質土、断面形状は逆台形に近いボウル状を呈する。標高は54.0mである。底部では深さ20～27cmの不整形の窪みを検出した。埋土中からは弥生土器壺片が出土した。

SK104B（第69図）

SK103Bと同一等高線上のやや北東側に位置する土坑である。隅丸方形で、長軸0.71m、短軸0.68m、深さ29cmである。埋土は黄灰色砂質土、断面形状は2段掘り状で、中央付近では直径30cm、深さ40cmの円形のピットを検出した。標高は54.0mである。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK105B（第69図）

SK073B・074Bとほぼ同一等高線上で検出した土坑である。隅丸方形で、長軸1.17m、短軸0.74mである。深さは山側が36cm、麓側が18cm、断面形状は逆台形で、埋土は黄灰色砂質土である。標高は55.0mである。底部からは直径24cm、深さ20cm程度の小ピット状の窪みを検出した。SH21Bとは重複関係にある。埋土中からは弥生土器壺片が出土した。

221は弥生土器壺である。

SK111B（第70図）

丘陵頂部から南西に延びる尾根線上の、SK101Bより標高で2m程度下がった場所で検出した。隅丸方形で、一辺0.90～0.94m、深さ30cmである。埋土は黄灰色砂質土で、断面形状は逆台形に近いボウル状である。標高は53.9mである。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK112B（第70図）

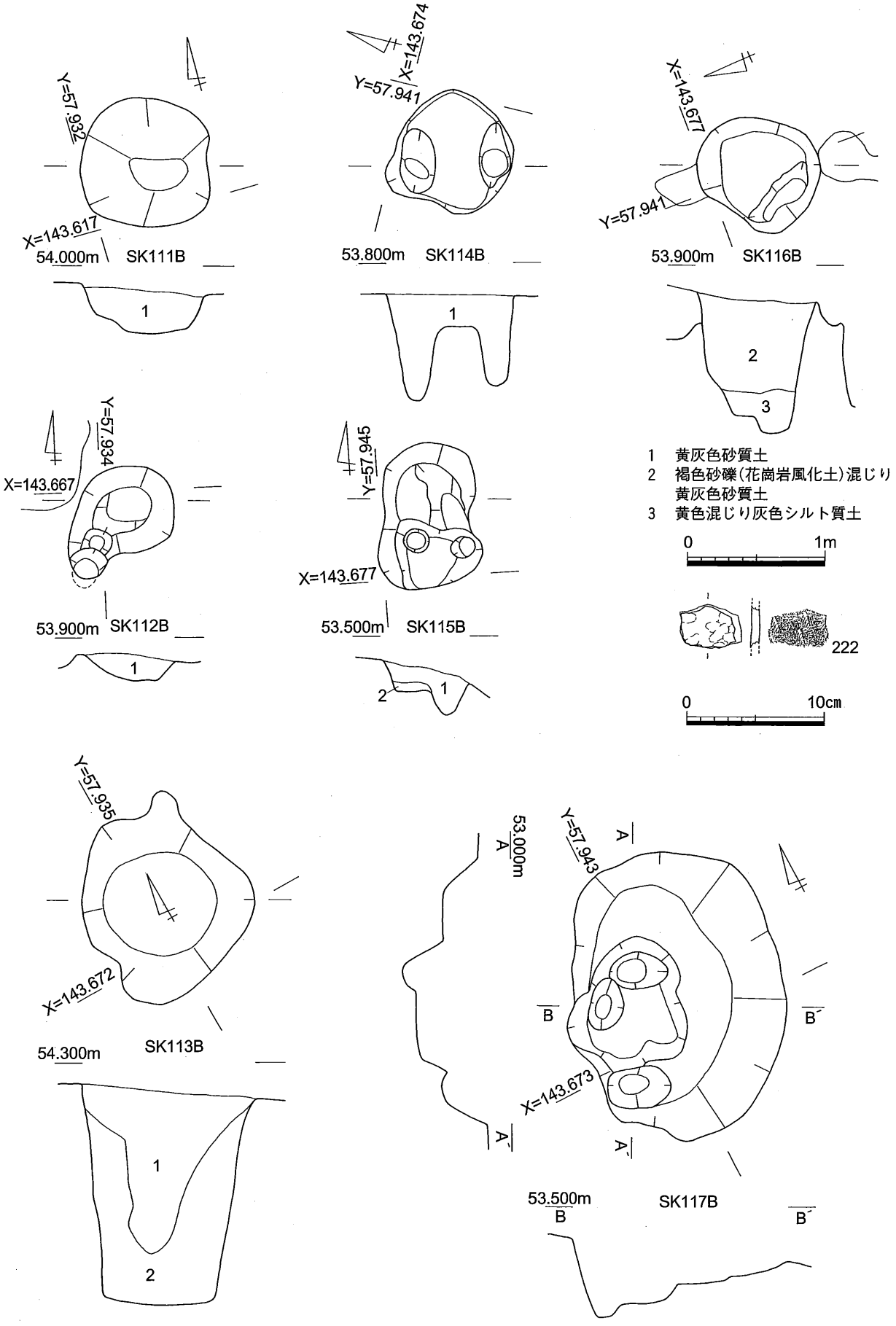
SK111Bの南東に接して検出した土坑である。不整円形で、長軸0.96m、短軸0.68m、深さは20cmである。断面形状は皿形で、埋土は黄灰色砂質土である。標高は53.8mである。土坑の南西側にピットが連なっているように見えるが、土坑と一体のものかどうかは不明である。埋土中からの出土遺物はなかった。

SK113B（第70図）

SK111Bより0.5m標高が高い位置で検出した土坑である。不整円形に見えるが、北東側と南西側の壁面が崩れしているようで、もとは直径1.25m程度の円形の土坑と考えられる。深さは154cm、断面形状は逆台形で、埋土は上層が黄灰色砂質土、下層が褐色砂礫（花崗岩風化土）混黄灰色砂質土である。標高は54.2mである。埋土中からは弥生土器小片が出土しただけであった。平成8年度概報では井戸跡として報告しているが、湧き水の痕跡もなく今回は土坑として報告した。

SK114B（第70図）

SK112Bと同一等高線上で北東部に位置する土坑である。概ね円形で、直径0.91～0.96m、深さ22cm、標高は53.6mである。底部からは南側と北側で長軸48cm、短軸25cm、深さ45～54cmの楕円形の落ち込みを2穴検出した。埋土は黄灰色砂質土である。埋土中からは土器の小片が出土した。



第70図　SK111B～117B平・断面図（1/40）、SK115B出土遺物（1/4）

SK115B（第70図）

SK111Bの北東部で、50cm程度低い位置で検出した土坑である。隅丸方形で、長軸1.04m、短軸0.60m、断面形状では東側が20cm程度、南側は45cm程度低い段掘り状を呈する。深さは山側が21cm、麓側が28cm、埋土は主に黄灰色砂質土である。標高は53.3mである。埋土中からは土器片、サヌカイト剥片が出土した。

222は体部土器片で、外面には刺突文が施される。実測図は向き、傾きとも任意である。

SK116B（第70図）

丘陵南斜面西側尾根線上からやや東斜面の、SH23B上段付近で検出した。検出面は比較的平坦である。楕円形で長軸0.89m、短軸0.72m、底部は縁辺部の１箇所のみが溝状に深く、段掘り状を呈する。深さは深い部分が96cm、浅い部分が85cm、標高は53.7mである。埋土は上層が褐色砂礫（花崗岩風化土）混黄灰色砂質土、下層は黄色混灰色シルト質土である。埋土中からは土器小片が出土したが、時期は不明である。

SK117B（第70図）

SH23B下段よりやや下がった位置で検出した。楕円形で長軸2.10m、短軸1.54m、標高は53.3mである。底部には長軸92cm、短軸66cm、深さ32cmのやや大きめの落ち込みの中に長径40～42cm、短径23～27cm、深さ13cmの楕円形のピットを２穴検出した。深さは浅い部分が28cm、最も深いピットの部分で56cmである。埋土中からは土器小片が出土した。

（丘陵南斜面　西－東尾根間）

SK121C（第71図）

丘陵頂部より南斜面へ下がった場所で検出した土坑である。隅丸方形で、長軸1.59m、短軸1.28m、深さは山側が57cm、麓側が28cmである。埋土は灰黄色砂質土で、断面形状は逆台形である。標高は57.0mである。底部には小ピットが３穴見られたが、２穴は斜め方向へ入り込み、残りの１穴は深さ10cm程度である。埋土中からは弥生土器壺、サヌカイト製石庖丁が出土した。

223は弥生土器甕である。226はサヌカイト製石庖丁である。

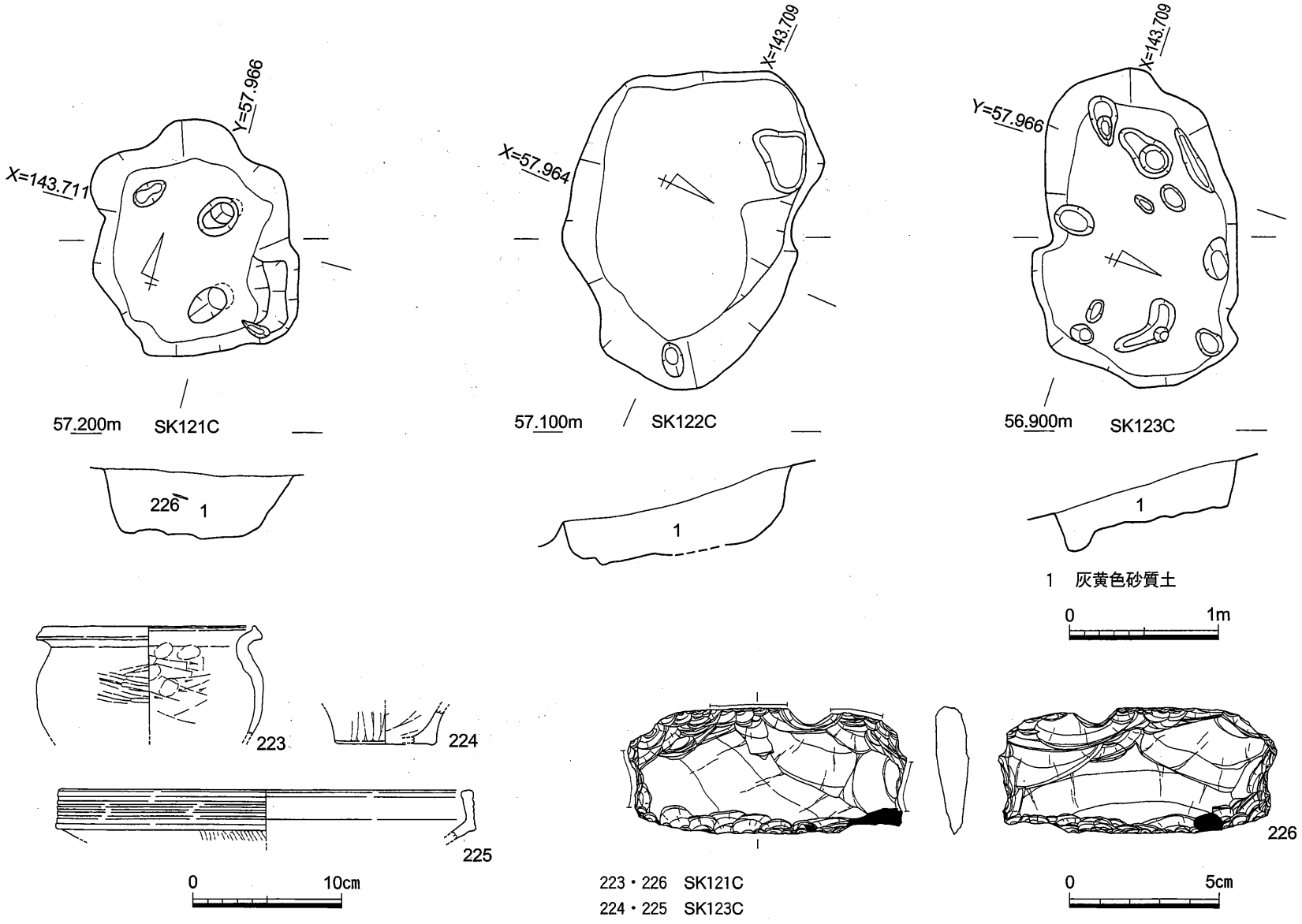
遺構の時期は弥生時代後期初頭頃と考えられる。

SK122C（第71図）

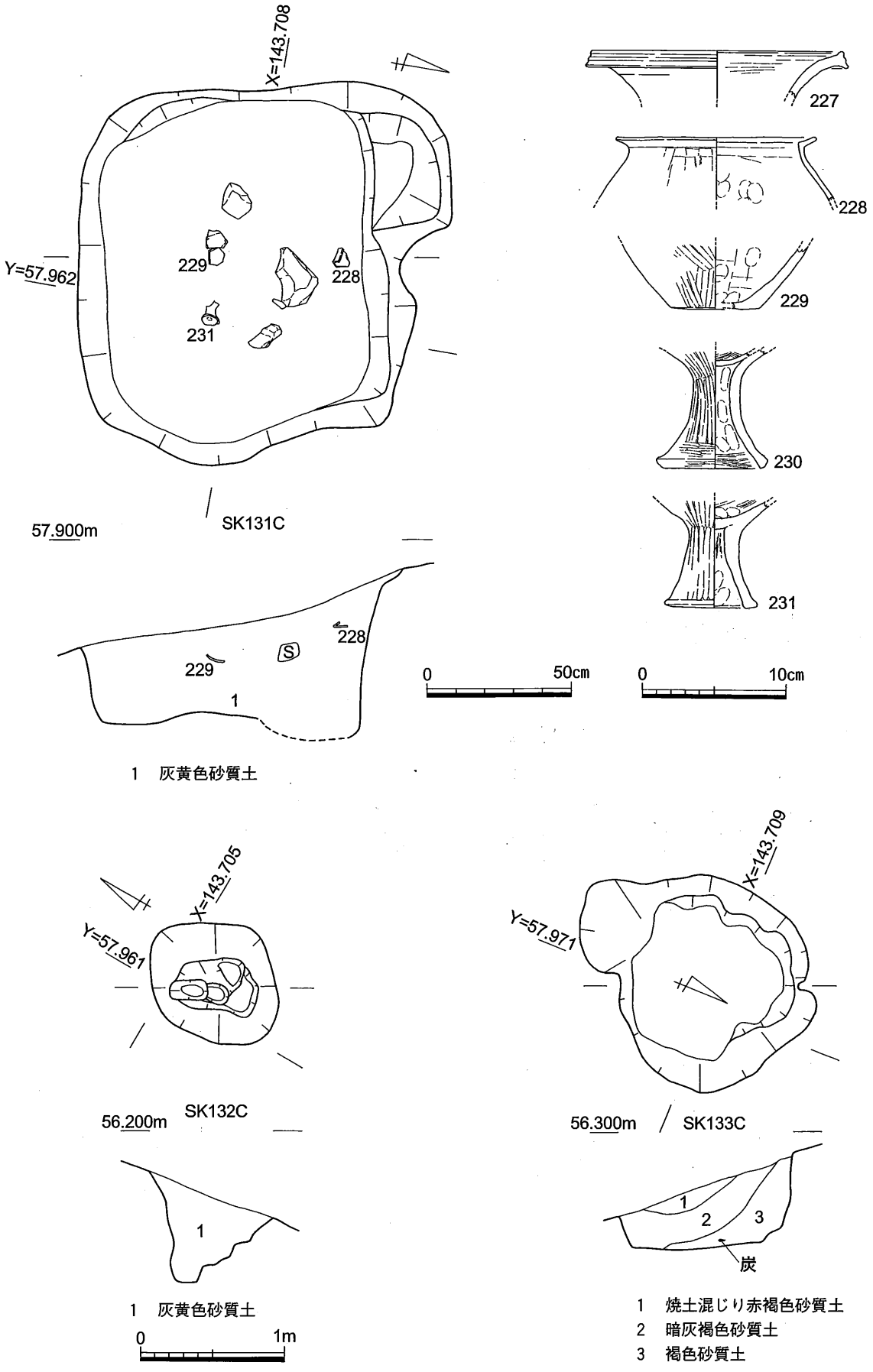
SK121Cから少し下がった位置で検出した土坑である。楕円形に近い形状で、長軸2.12m、短軸1.52m、深さは山側が44cm、麓側が26cmである。断面形状は逆台形で、標高は56.9mである。底部には10cm程度の浅い窪みがある他はほぼ平坦で、埋土は灰黄色砂質土である。埋土中からは土器小片が出土した。

SK123C（第71図）

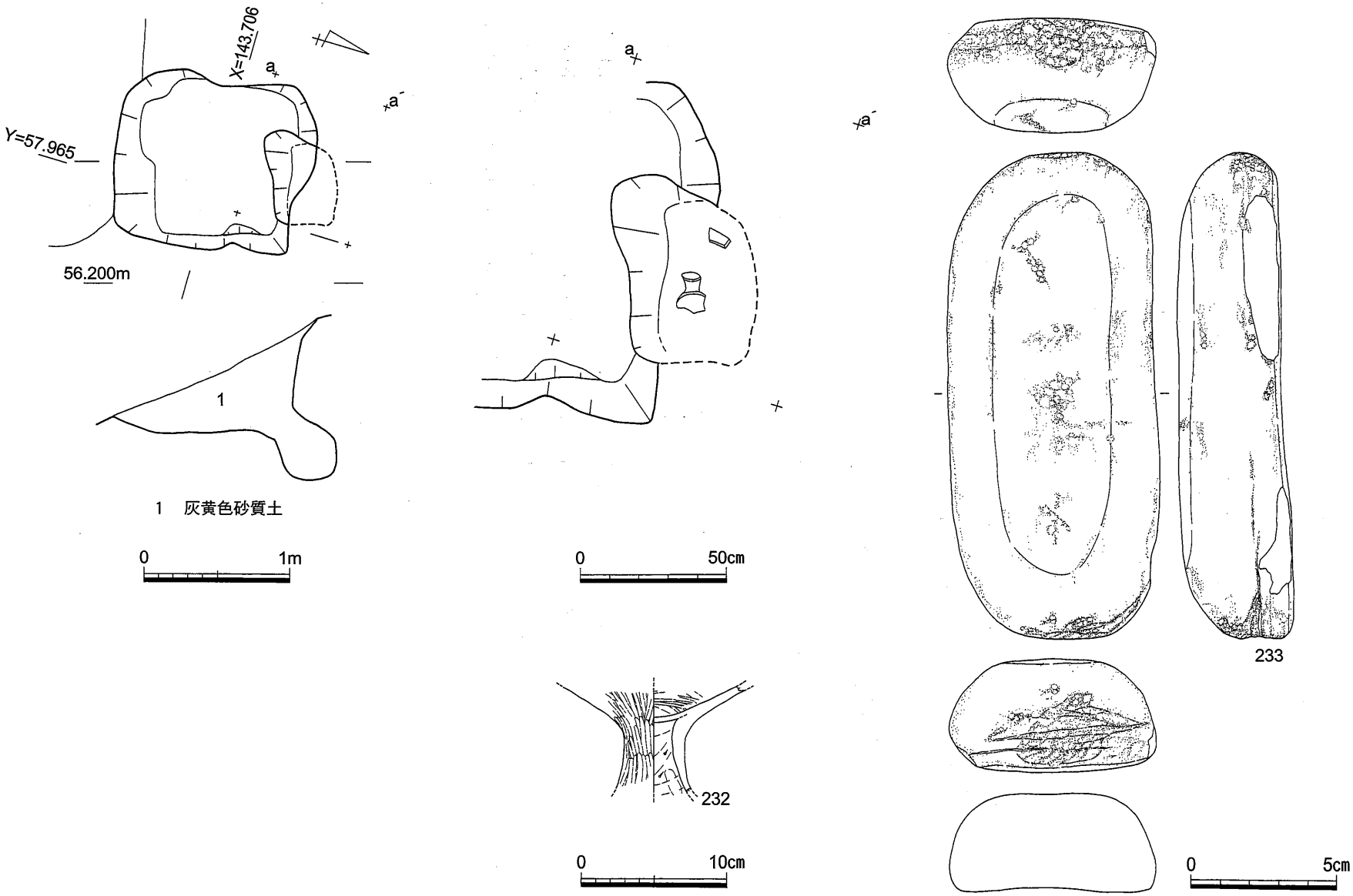
SK122Cの東側約30cmの位置で、ほぼ面を揃えて検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸2.14m、短軸1.27m、深さは山側で31cm、麓側で20cmで、埋土は灰黄色砂質土である。標高は56.7mである。底部はやや傾斜をもち、縁辺部を中心に深さ10～20cm程度の小ピットを検出した。埋土中からは弥生土器高杯等が出土した。



第71図　SK121C～123C平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4・1/2）



第72図　SK131C遺物出土状況平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）、SK132C・133C平・断面図（1/20）



第73図　SK141C平・断面図（1/40）、遺物出土状況平面図（1/20）、出土遺物（1/4・1/2）

224・225は弥生土器である。224は甕底部で、外面にヘラケズリがある。225は高杯杯部で、外面には５条の凹線文が認められる。

遺構の時期は弥生時代中期末頃と考えられる。

SK131C（第72図）

SK122Cの西側約40cmの位置で、ほぼ面を揃えて検出した土坑である。隅丸方形で、北側が少し張り出す形状である。一辺1.12～1.24m、深さは山側で51cm、麓側で29cmである。埋土は灰黄色砂質土、底部は概ね平坦であるが、縁辺部は３～５cm程度窪む。また、北側の張り出す部分はなだらかに傾斜する。標高は57.8mである。埋土中からは礫に混じって弥生土器壺・甕・高杯やサヌカイト剥片が多く出土した。貯蔵穴又は廃棄土坑と考えられる。北側の張り出し部は法面が崩れたか、土坑内へ入るステップとも考えられる。

227～231は弥生土器である。227は広口壺である。228は甕で、摩滅が進む。229は壺底部である。230・231は高杯脚部で、いずれも外面は縦方向のヘラミガキを施す。230は底部を充填した様子が観察できる。

遺構の時期は弥生時代後期初頭頃と考えられる。

SK132C（第72図）

SK131Cから標高で1.9m程度下がった位置で検出した。隅丸方形で、一辺0.82～0.86m、深さは65cm程度である。埋土は灰黄色砂質土で、断面形状はＶ字形に近い。標高は55.9mである。底部では長径50cm、短径13cm、深さ５～15cmの楕円形の小ピットを検出した。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK133C（第72図）

SK123Cから南東方向へ標高で0.5m程度下った位置で検出した。不整円形を呈するが、南側が不整形に張り出すことから、原形は直径1.40～1.46mの円形であったと考えられる。深さは山側で50cm、麓側で24cmで、埋土の下層には炭、上層には焼土を含む。断面形状は逆台形で、底部は平坦である。標高は56.2mである。埋土中からは弥生土器小片が出土した。南側の張り出しは法面が崩れたか、進入のためのステップであった可能性がある。

SK141C（第73図）

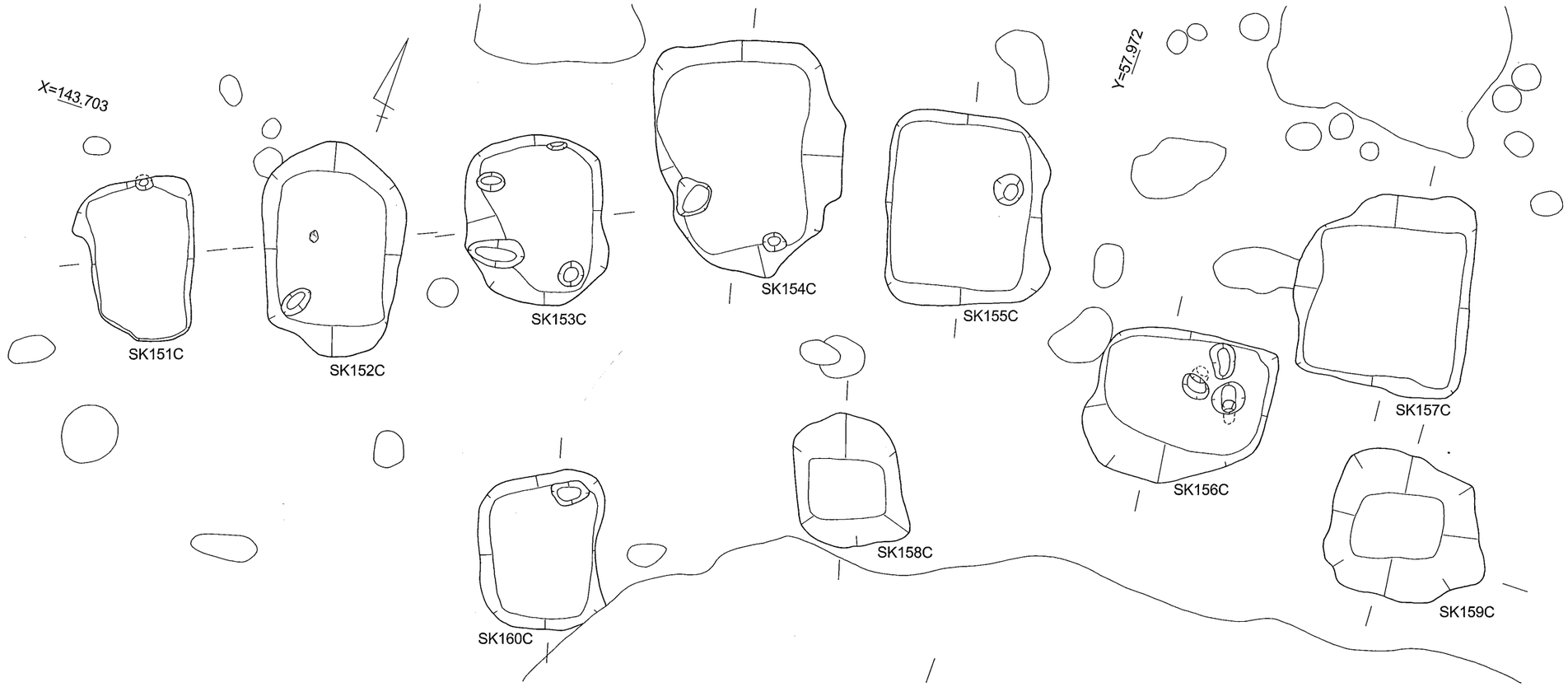
SK122Cから標高で１m程度下がった位置で検出した。隅丸長方形で、長軸1.40m、短軸1.12m、深さは山側が60cm、麓側が24cmである。埋土は灰黄色砂質土で、標高は55.9mである。土坑の北辺側では袋状にピットが土坑の下側にまで入り込んでいる。両者には埋土の差異はなく、新旧関係は不明である。このピットは土坑の底よりさらに35cm程度深い。埋土中からは弥生土器甕、サヌカイト剥片等が出土した。また、ピット状の部分からは弥生土器高杯が出土した。貯蔵穴として機能したものと考えられる。

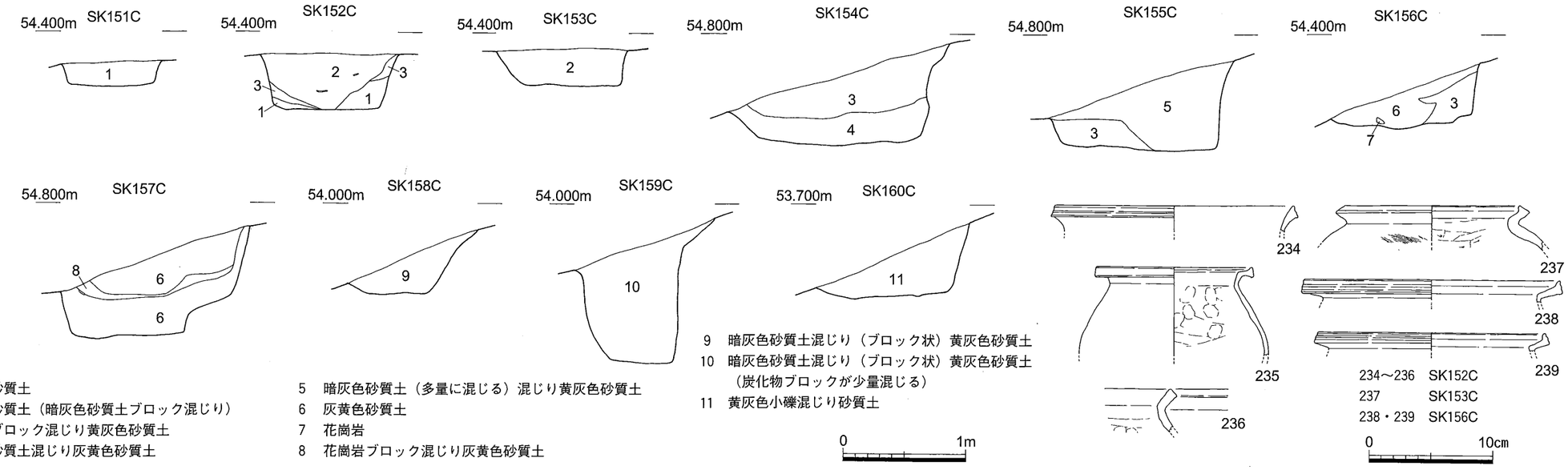
232は弥生土器高杯である。233は叩き石で、両端部に敲打痕が残る。

遺構の時期は弥生時代中期末～後期初頭と考えられる。

SK151C（第74図）

SI01CとSI02Cに挟まれた位置で検出した土坑である。SK151C～SK154Cまで37～60cmの間隔で





1　黄灰色砂質土
2　灰黄色砂質土（暗灰色砂質土ブロック混じり）
3　花崗岩ブロック混じり黄灰色砂質土
4　暗灰色砂質土混じり灰黄色砂質土
5　暗灰色砂質土（多量に混じる）混じり黄灰色砂質土
6　灰黄色砂質土
7　花崗岩
8　花崗岩ブロック混じり灰黄色砂質土
9　暗灰色砂質土混じり（ブロック状）黄灰色砂質土
10　暗灰色砂質土混じり（ブロック状）黄灰色砂質土（炭化物ブロックが少量混じる）
11　黄灰色小礫混じり砂質土

234～236　SK152C
237　SK153C
238・239　SK156C

第74図　SK151C～160C平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

等高線に平行する方向で並ぶ。標高は54.1mである。隅丸方形で、長軸1.28m、短軸0.82mで、長軸は等高線に直交する。深さは山側では52cm、麓側では0cmである。埋土は黄灰色砂質土で、北端部分にピット状の落ち込みがあるが、土坑の底より深くはならない。埋土中からは出土遺物はなかった。配置や形状から貯蔵穴として使用されたものと考えられる。

SK152C（第74図）

SK151Cの56cm東側で検出した隅丸方形の土坑である。長軸1.72m、短軸1.10mで、深さは山側で78cm、麓側で6cmである。埋土は灰黄色砂質土（暗灰色砂質土ブロック混じり）、花崗岩ブロック混黄灰色砂質土等である。埋土中からは弥生土器甕やサヌカイト剥片等が出土した。貯蔵穴として使用したものと考えられる。

234～236は弥生土器で、234は壺、235・236は甕である。

遺構の時期は弥生時代後期初頭と考えられる。

SK153C（第74図）

SK152Cの東側約50cmの位置で検出した土坑である。隅丸方形で、長軸1.35m、短軸1.07mである。深さは山側では57cm、麓側では10cm、標高は54.3mである。埋土は灰黄色砂質土（暗灰色砂質土ブロック混）である。土坑の底面で小ピットを4穴検出した。埋土中からは弥生土器甕が出土した。

237は弥生土器甕である。

遺構の時期は弥生時代後期初頭頃と考えられる。

SK154C（第74図）

SK153Cの東側約57cmの位置で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸1.88m、短軸1.49mである。深さは山側が77cm、麓側が26cm、標高は54.7mである。断面形状は逆台形で、埋土は花崗岩ブロック混黄灰色砂質土、暗灰色砂質土混灰黄色砂質土である。埋土中からは弥生土器甕片等が出土した。

遺構の時期はSK152C・153Cと同じ弥生時代後期初頭頃であろう。

SK155C（第74図）

SK154Cの東側約37cmの位置で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸1.53m、短軸1.24m、深さは山側で63cm、麓側で26cmである。断面形状は逆台形、埋土は暗灰色砂質土混黄灰色砂質土で、麓側は地山ブロックで埋められる。土坑の東端付近からは直径23cm、深さ10cm程度のピットを検出した。埋土中からは弥生土器小片が出土した。

SK151C～155Cは一体となって貯蔵穴群を形成したと考えられ、遺構の時期もそれらと同じ、弥生時代後期初頭頃と考えられる。

SK156C（第74図）

SK155Cの約50cm南東側で検出した土坑である。SK151C～SK155Cより若干主軸方位を東へ傾ける。隅丸方形を呈し、長軸1.36m、短軸1.22m、深さは山側で39cm、麓側で5cmを測る。標高は54.1mである。埋土は主に灰黄色砂質土で、山側の一部は基盤土ブロックが混じる。断面形状は逆台形、土坑の底部東半部分には3箇所で直径25cm、深さ20cm程度の小ピットを検出したが、ピットの底部分が遺構の検出面より奥へ入り込んでおり、木の根の痕跡の可能性がある。埋土中からは弥生

土器片が出土した。貯蔵穴であったと考えられる。

238・239は弥生土器甕口縁部で、いずれも口縁端部に二重の凹線文を巡らせる。

遺構の時期は弥生時代中期末頃と考えられる。

SK157C（第74図）

SK156Cの約10cm北東部で検出した土坑である。SK156Cとほぼ軸を揃える。長軸1.52m、短軸1.40mで、断面形状は山側が2段掘りの形状である。山側の浅い部分で55cm、中央付近で67cm、麓側で42cmを測る。標高は54.6mである。埋土は概ね灰黄色砂質土であるが、中位付近で花崗岩ブロックを含む。埋土中からは弥生土器小片が出土した。貯蔵穴と考えられる。

SK158C（第74図）

SK155Cの約1m南側で検出した土坑である。SK151C～SK155Cと軸を揃える。長軸1.04m、短軸0.84m、深さは山側が36cm、麓側が16cmである。断面形状は逆台形で、埋土は暗灰色砂質土ブロック混黄灰色砂質土である。標高は53.8mである。埋土中からは弥生土器壺・高杯等が出土した。貯蔵穴と考えられる。

遺構の時期は弥生時代中期末頃と考えられる。

SK159C（第74図）

SK157Cの約45cm南側で検出した土坑である。SK157Cと軸を揃える。隅丸方形を呈し、一辺1.16m、深さは山側が100cm、麓側が86cmである。断面形状は逆台形、埋土はSK158Cとほぼ同じであるが、炭化物ブロックが少量混じる。標高は53.9mである。上面の遺構の法面がやや崩れているようで、本来はもう少し小さかったと思われる。埋土中からは遺物は出土しなかったが、貯蔵穴と考えられる。

遺構の時期は弥生時代後期初頭前後と考えられる。

SK160C（第74図）

SK158Cの1.55m西側で検出された土坑である。概ねSK153Cと軸を揃える。隅丸方形を呈し、長軸1.21m、短軸0.92m、深さは山側が48cm、麓側が10cmである。埋土は黄灰色小礫混砂質土である。標高は53.5mである。北端の小ピットの窪みは深さ3cm程度の浅いものである。埋土中からは出土遺物はなかったが、貯蔵穴群と考えられ、弥生時代後期初頭前後のものと考えられる。

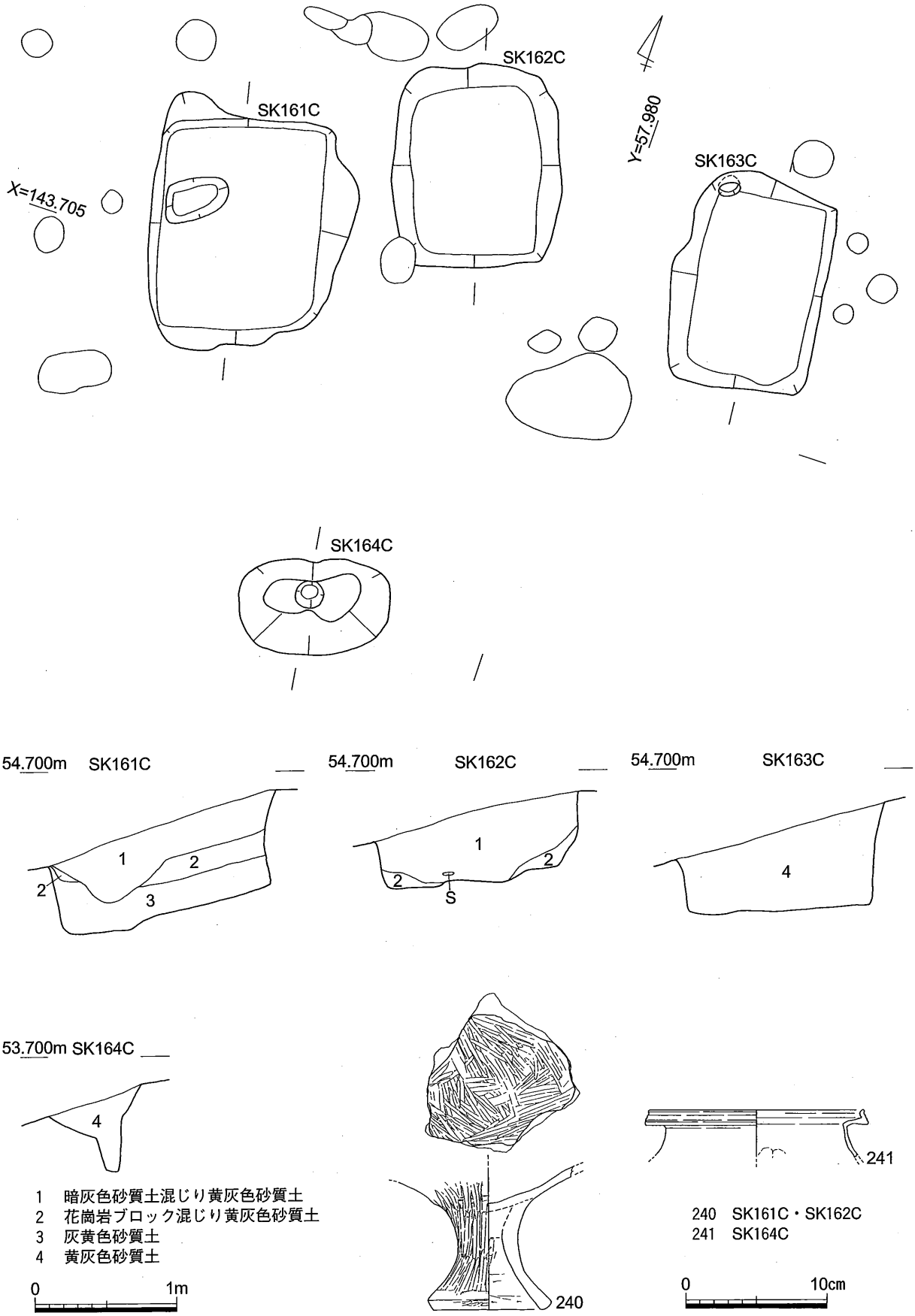
SK161C（第75図）

SK157Cの東側約1.4mの位置で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸1.60m、短軸1.40m、深さは山側で68cm、麓側で52cmである。断面形状は逆台形で、埋土は上層が暗灰色砂質土混黄灰色砂質土、中層が花崗岩ブロック混黄灰色砂質土、下層が灰黄色砂質土である。標高は54.5mである。土坑の底部西寄りからは深さ8cm程度の小ピットを検出した。埋土中からは弥生土器高杯等が出土した。

240は弥生土器高杯脚部で、SK162C出土の破片と接合した。弥生時代後期初頭頃と考えられる。

SK162C（第75図）

SK161Cの約22cm東側で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸1.44m、短軸1.15m、深さは山側が50cm、麓側が36cmである。断面形状は逆台形で、埋土は概ね暗灰色砂質土混黄灰色砂質土で、



第75図　SK161C～164C平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

底部にわずかに花崗岩ブロック混黄灰色砂質土が堆積する。標高は54.4mである。埋土中からは弥生土器小片やサヌカイト剥片が出土した。このうち弥生土器片はSK161C出土の高杯と接合した。

遺構の時期はSK161Cと同じ弥生時代後期初頭と考えられる。

SK163C（第75図）

SK162Cの約95cm東側で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸1.48m、短軸1.08m、深さは山側が68cm、麓側で41cmを測る。標高は54.4mである。断面形状は逆台形、埋土は黄灰色砂質土で、底部東北端では奥へ入り込む、深さ７cm程度の小ピットを検出している。埋土中からは弥生土器甕、底部片等が出土した。

SK164C（第75図）

SK161Cの南側約1.5mの位置で検出した土坑である。楕円形で、長軸1.06m、短軸0.64m、深さは24cm、埋土は黄灰色砂質土である。標高は53.3mである。断面形状は、底に向かってなだらかに落ちるが、ほぼ中央部分では深さ28cmの小ピットが認められる。埋土中からは弥生土器甕、加工痕のあるサヌカイト剥片が出土した。

241は弥生土器中期末頃の弥生土器甕で、口縁端部に凹線を二重に巡らせる。

SK171C（第76図）

丘陵頂部の東部から南東へ延びる尾根線上のわずかに下がった西斜面上で検出した。近接して検出した土坑はない。不整方形で、長軸1.48m、短軸1.18m、深さは65cm程度である。埋土は灰黄色砂質土で、最も深い部分に灰黄色粘質土が堆積する。標高は54.7mである。底部北端部に深さ４cmの溝状の、中央付近には深さ34cmのピット状の窪みを検出した。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK181C（第77図）

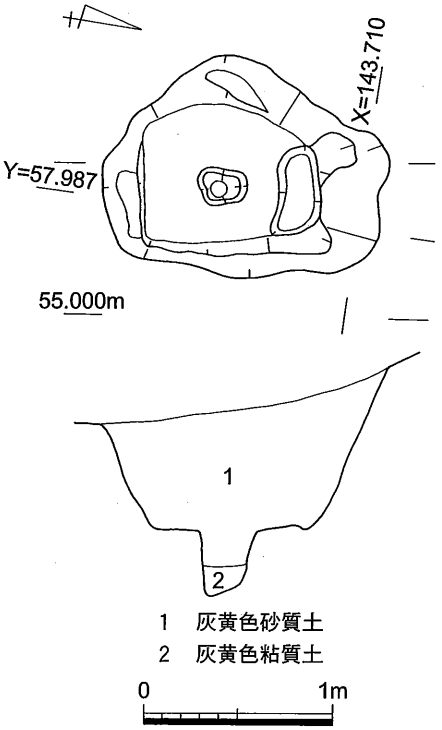
SI01Cの南側約１mで検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸1.82m、短軸1.28mである。深さは山側では48cmであるが、麓側は０cmであることから、地面が流出したと考えられる。標高は52.1mである。埋土は黄灰色砂質土で、底部からは溝状の窪みを検出したが、形状と配置から土坑の一部とは考えがたく、木の根の痕跡であろう。埋土中からは弥生土器小片が出土した。貯蔵穴と考えられる。

SK182C（第77図）

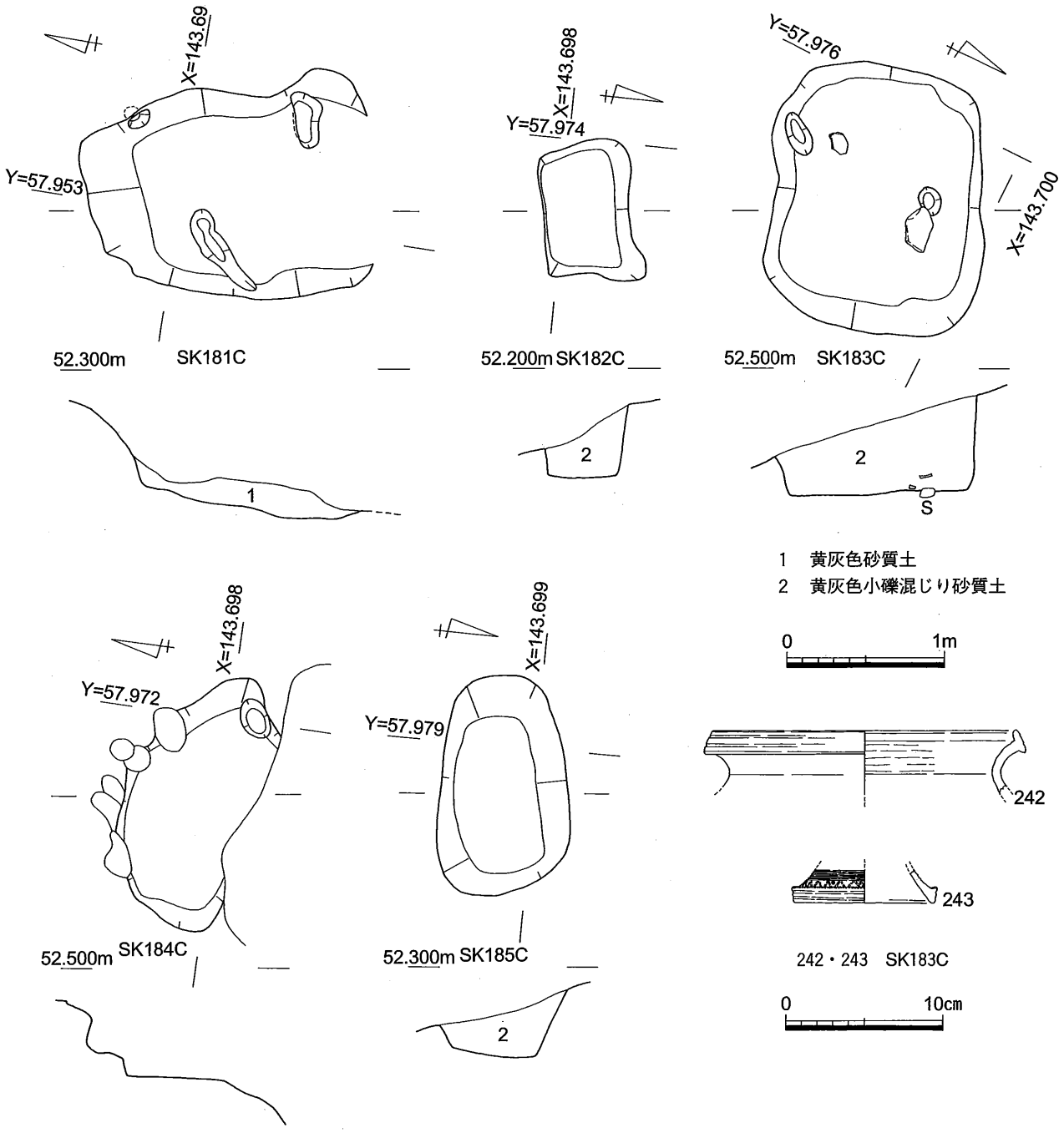
SK181Cの約20cm東側で検出した土坑である。やや小型の方形で、長軸0.84m、短軸0.52mである。深さは山側で41cm、麓側では18cmで、断面形状は逆台形、埋土は黄灰色小礫混砂質土である。標高は52.0mである。埋土中からは遺物は出土しなかった。

SK183C（第77図）

SK182Cの約20cm東側で検出した土坑である。隅丸方形を



第76図　SK171C平・断面図（1/40）



第77図　SK181C～185C平・断面図（1/40）、SK183C出土遺物（1/4）

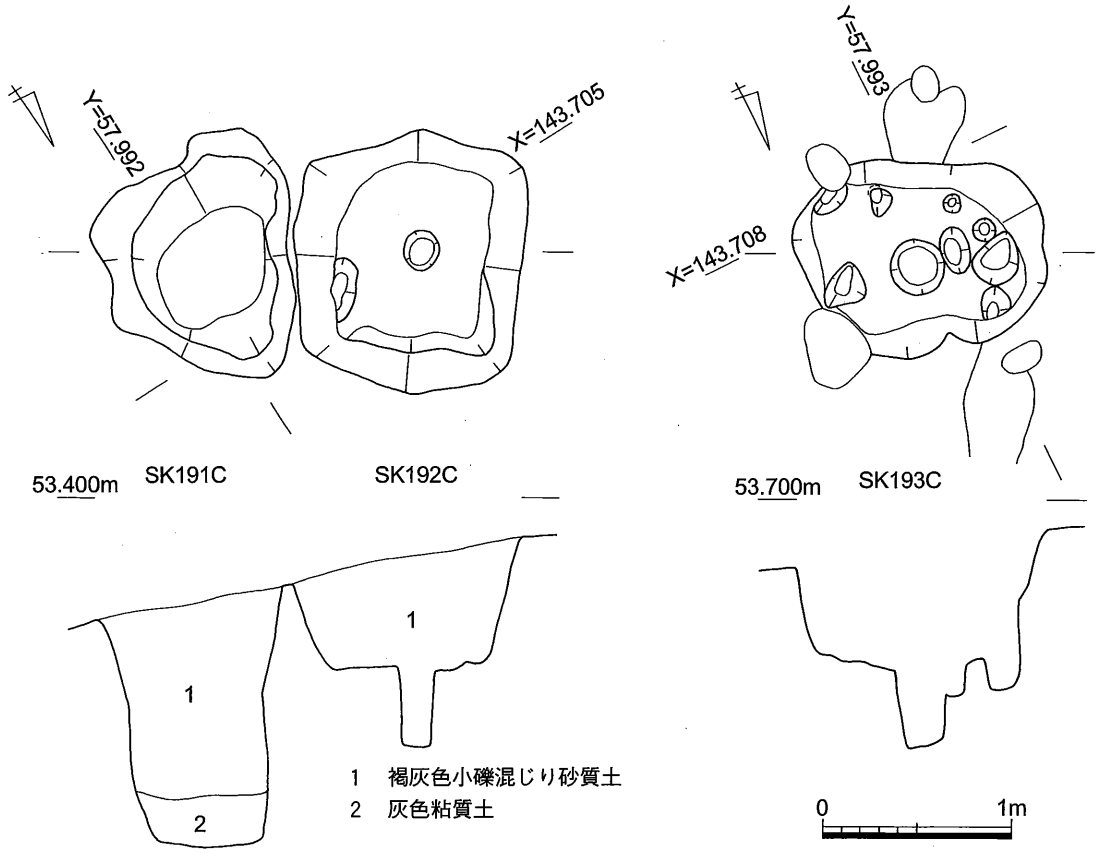
呈し、長軸1.68m、短軸1.30mである。深さは山側で58cm、麓側で30cm、標高は52.3mである。断面形状は逆台形で、埋土は黄灰色小礫混砂質土である。埋土中からは弥生土器、サヌカイト剥片等が出土した。貯蔵穴と考えられる。

242・243は弥生土器である。242は壺口縁部で、口縁端部に凹線文を巡らせる。243は高杯脚部で、端部には凹線文、下部にはヘラ描きによる沈線文と山形文を施す。

遺構の時期は弥生時代中期末頃と考えられる。

SK184C（第77図）

SK181Cの西側約26cmの位置で検出した土坑である。楕円形を呈し、南側は後世の落ち込みにより消失する。長軸1.64m、短軸0.82m以上、深さは山側の深いところで30cm程度で、断面形状は概



第78図　SK191C～193C平・断面図（1/40）

ね逆台形であったと考えられる。標高は52.3mである。埋土中からは弥生土器小片が出土した。

SK185C（第77図）

SK183Cの東側約２mの位置で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸1.38m、短軸0.82mである。深さは山側が34cm、麓側が16cmで、断面形状は逆台形、埋土は黄灰色礫混砂質土である。標高は52.1mである。埋土中からは出土遺物はなかった。貯蔵穴と考えられる。

SK191C（第78図）

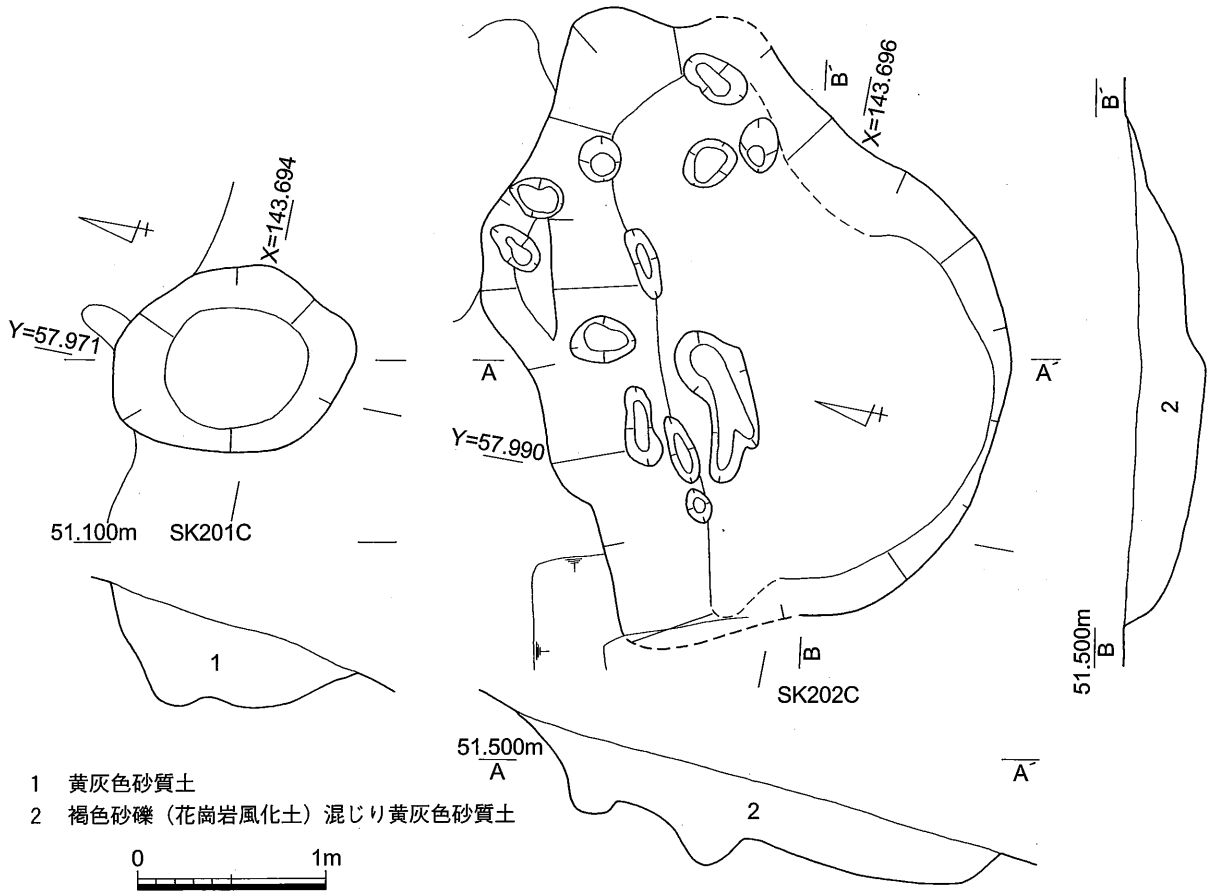
丘陵頂部から南東へ延びる尾根線上を少し下がった西斜面で検出した。不整形を呈し、長軸1.34m、短軸0.95m、深さ130cmである。断面形状は逆台形に近く、埋土は上層に褐灰色小礫混砂質土、下層に灰色粘質土が堆積する。標高は52.9mである。SK192Cと接するが、重複関係はない。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK192C（第78図）

SK191Cの北西に接して検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸1.40m、短軸1.20mである。深さは山側で63cm、麓側で50cm、埋土は褐灰色小礫混砂質土である。標高は53.2mである。土坑中央部からは直径22cm、深さ42cmの小ピットを検出した。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK193C（第78図）

SK192Cの北東約2.7mの位置で検出した土坑である。楕円形で長軸1.32m、短軸1.03mである。深さは山側で53cm、麓側で33cm、断面形状は概ね逆台形である。標高は53.5mである。底部から直径10～30cm、深さ20～42cmのピットを９穴検出した。埋土中からは出土遺物はなかった。



第79図　SK201C・202C平・断面図（1/40）

SK201C（第79図）

SH24Cの上面で検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸1.30m、短軸0.97mである。深さは山側で53cm、麓側で37cmで、埋土は黄灰色砂質土、断面形状はボウル型に近い。標高は50.9mである。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK202C（第79図）

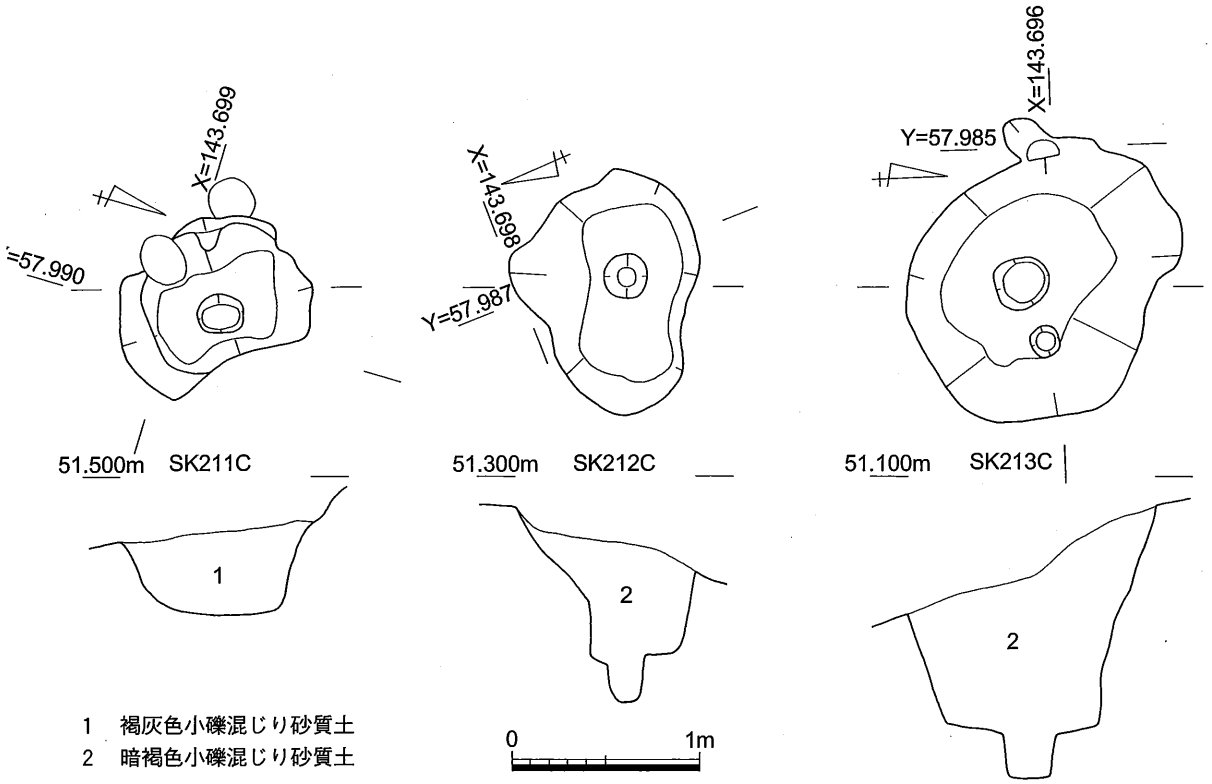
SK181Cの西側約20cmの位置で検出した土坑である。不整形を呈し、長軸3.22m、短軸2.54mである。深さは山側で40cm、麓側で24cmを測り、地表面の傾斜に沿って、土坑の底面も傾斜する。標高は51.7mである。土坑の底部からは直径20cm程度の小ピットや小型の溝状遺構を検出したが、後者は木の根の痕跡であろう。埋土は褐色砂礫（花崗岩風化土）混黄灰色砂質土で、埋土中からは焼土が出土しただけである。

SK211C（第80図）

SI03Cの東端付近で検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸1.04m、短軸0.74mである。深さは山側が45cm、麓側が35cm、断面形状は逆台形で、埋土は褐灰色小礫混砂質土である。標高は51.2mである。底部からは直径20～25cm、深さ19cmのピットを検出した。埋土中からは弥生土器体部片が出土した。

SK212C（第80図）

SI03Cのやや南側で検出した土坑である。北東にやや広がった不整円形に見えるが、これは崩落によるもので、原形は楕円形であったと思われる。長軸1.29m、短軸0.75mで、深さは山側で64cm、



第80図　SK211C～213C平・断面図（1/40）

麓側で54cmである。埋土は暗褐色小礫混砂質土で、標高は51.1mである。底部中央付近からは直径23cm、深さ25cmの小ピットを検出した。埋土中からの出土遺物はなかった。

SK213C（第80図）

SK212Cの約80cm南西側で検出した土坑である。遺構の外形は不整円形を呈するが、底部分は隅丸方形に近い形状で、法面が全般に崩れた形状である。長軸1.51m、短軸1.31mで、深さは山側で106cm、麓側で67cm、標高は50.7mである。埋土は暗褐色小礫混砂質土である。底部中央付近で直径27cm、深さ23cm程度の、東辺付近で直径15cm、深さ42cm程度の小ピットを検出した。埋土中からの出土遺物はなかった。

SK221C（第81・82図）

SI03Cの南側約３mの位置で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸1.94m、短軸1.74m、深さは山側で38cm、麓側で２cm、断面形状は逆台形で、埋土は黄灰色砂質土である。標高は49.8mである。土坑北半部分の埋土中からは土器片が多数出土した。南半部分については流出した可能性が高い。貯蔵穴と考えられる。

244～255は弥生土器である。244は壺で、口縁端部には凹線を２条巡らせる。245～248は甕である。245・247・248は端部に凹線を巡らせ、247は凹線を巡らせた後に縦方向の刻み目を施す。249は壺の底部、250～252は甕の底部である。253・254は高杯杯部で、外面には凹線を巡らせる。255は高杯脚部である。

遺構の時期は弥生時代中期末頃と考えられる。

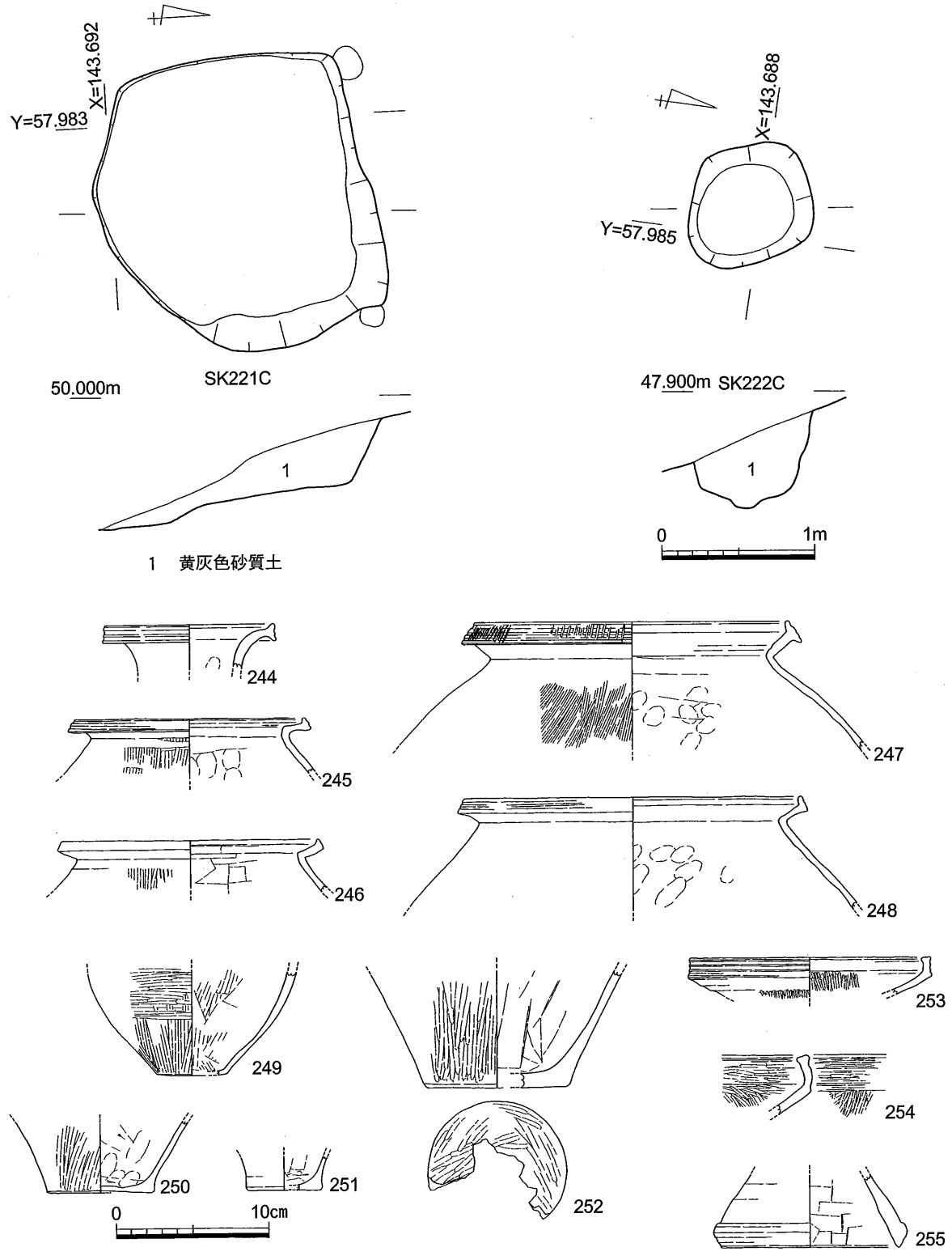
SK222C（第81図）

SK221Cから４m程度南へ下がった位置で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸0.82m、

短軸0.77mである。深さは山側で47cm、麓側で20cm、断面形状は逆台形に近く、中央付近はわずかに凹む。埋土は黄灰色砂質土である。標高は47.8mである。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK241C（第83図）

丘陵南斜面の西側尾根線上東斜面で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸1.01m、短軸0.7

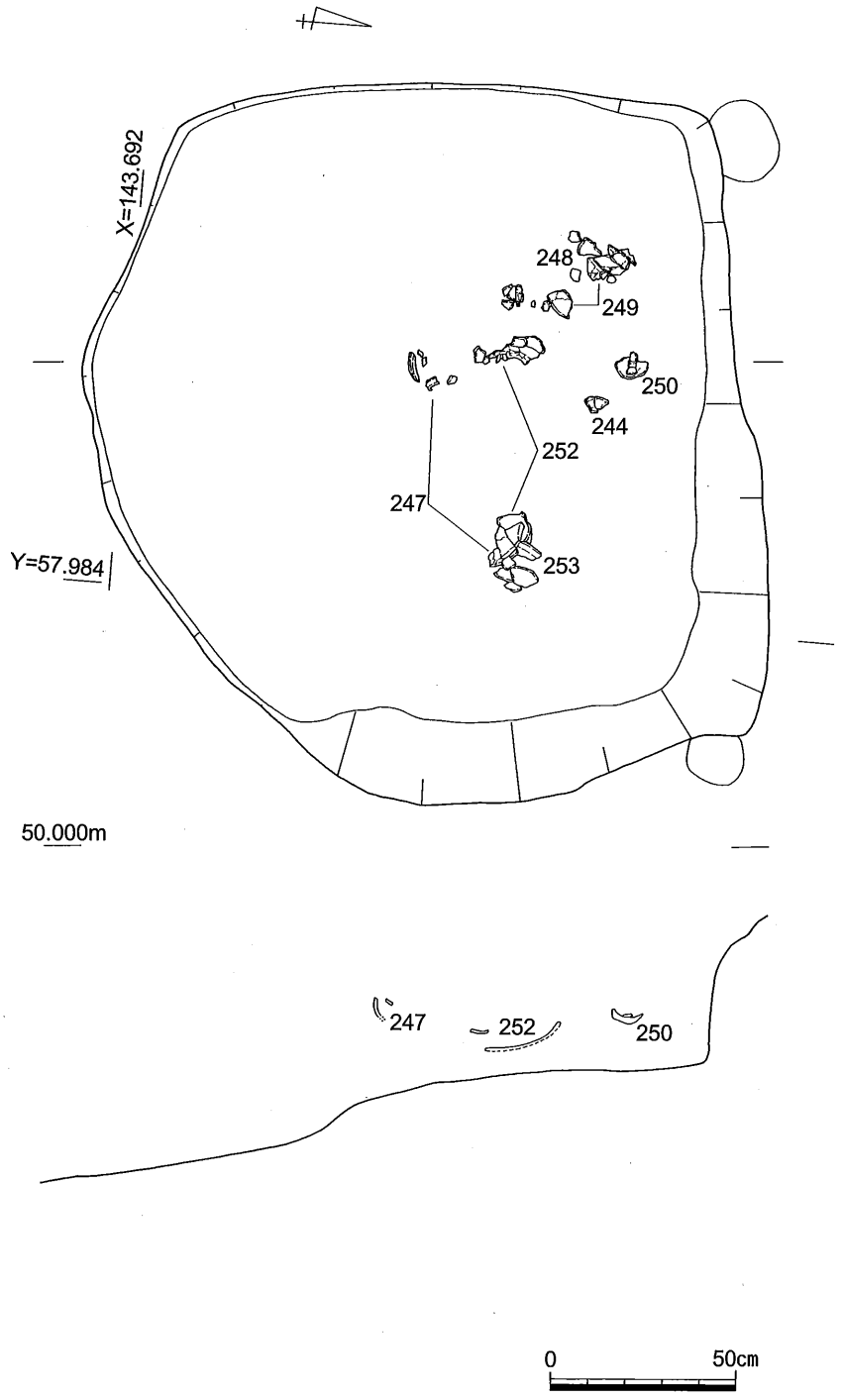


第81図　SK221C・222C平・断面図（1/40）、SK221C出土遺物（1/4）

3mである。深さは山側で41cm、麓側が25cm、埋土は黄灰色砂質土である。標高は50.9mである。断面形状はV字に近いことから、壁面が崩れたようである。土坑の底部からは直径35cm、深さ46cm程度の小ピットを検出した。埋土中からの出土遺物はなかった。

SK242C（第83図）

丘陵南斜面で検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸1.80m、短軸0.96mである。深さは中央付近で15cm程度、断面形状は浅い皿型、土坑の底部は地形の傾斜方向と同様に傾斜している。標高は47.7mである。埋土中からは出土遺物はなかった。自然地形の落ち込みの可能性もある。



第82図　SK221C遺物出土状況平・断面図（1/20）

SK243C（第83図）

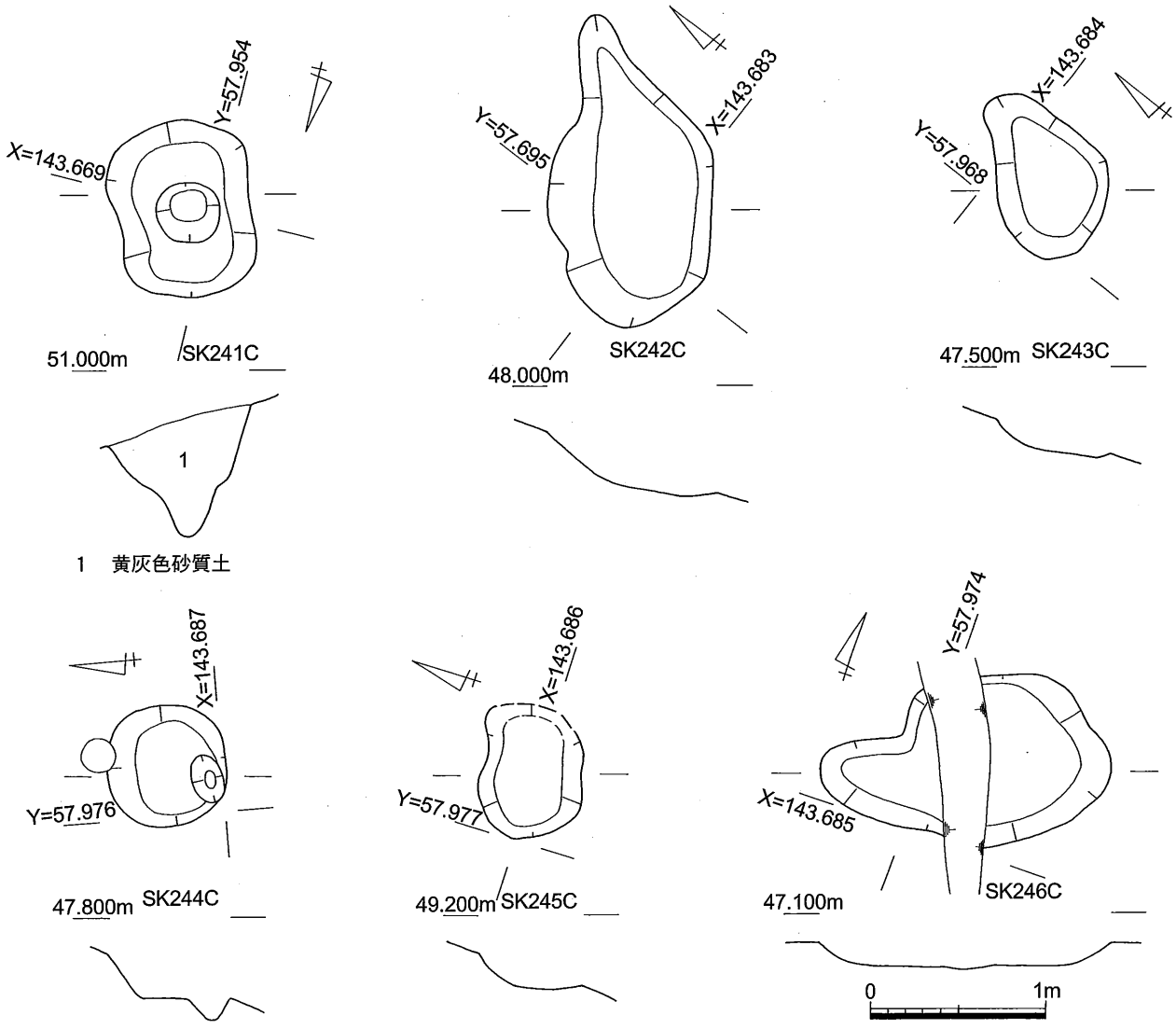
SK242Cの1.6m東側で検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸1.00m、短軸0.66mである。深さは中央付近で10cm、断面形状は浅い皿型である。標高は47.3mである。埋土中からは出土遺物はなかった。形状はSK242Cと類似しており、性格も同様のものと考えられる。

SK244C（第83図）

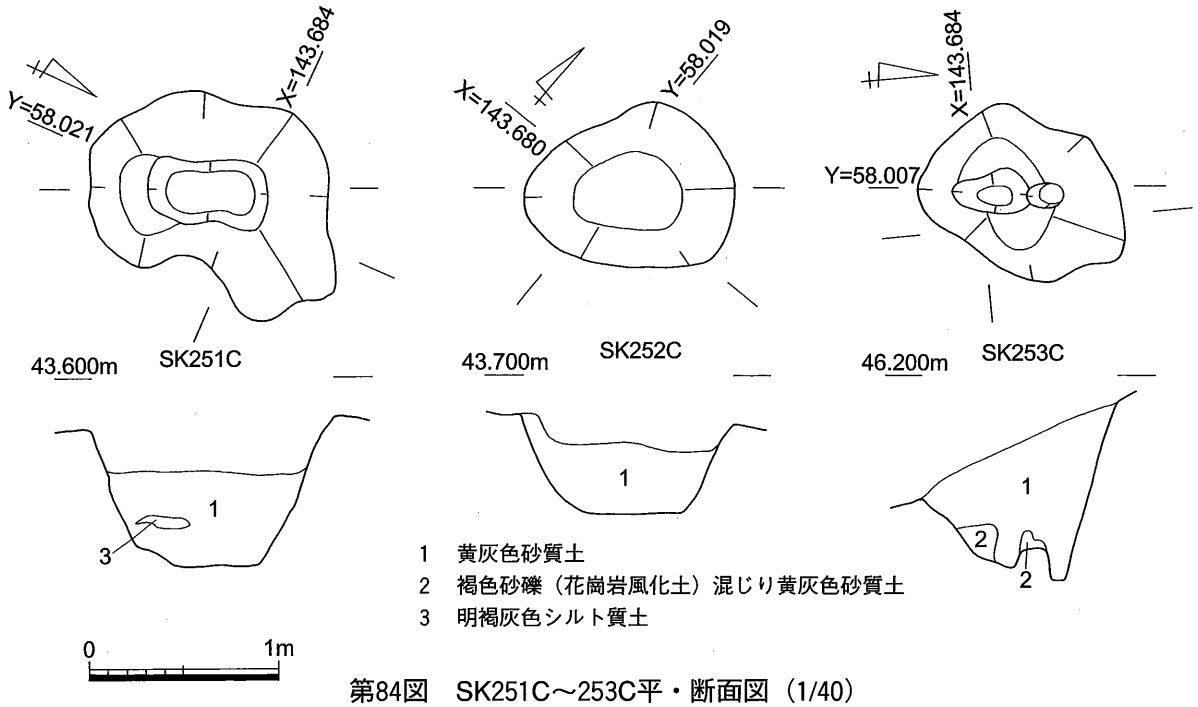
SK243Cの東側約８mの位置で検出した土坑である。ほぼ円形で、直径0.66～0.71mである。深さは山側で19cm、麓側で10cm、断面形状は逆台形である。標高は47.6m、土坑の南端部分の底部から直径18～30cm、深さ12cm程度の小ピットを検出した。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK245C（第83図）

SK244Cの南約0.8mの位置で検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸0.78m、短軸0.57mである。深さは中央付近で12cm、断面形状は浅い皿型である。標高は49.0mである。埋土中からは土器小片が出土しただけであった。遺構の性格はSK242Cと同様であろう。



第83図　SK241C～246C平・断面図（1/40）



第84図　SK251C～253C平・断面図（1/40）

SK246C（第83図）

SK245Cの西側約2.1mの位置で検出した土坑である。不整形を呈し、長軸1.66m、短軸0.98mである。深さは中央付近で14cm、断面形状は浅い皿型である。標高は46.9mである。埋土中からは土器小片が出土しただけであった。遺構の性格はSK245Cと類似するものであろう。

SK251C（第84図）

丘陵南斜面東尾根線上で検出した土坑である。遺構上面の外形線は不整形を呈するが、底部は隅丸方形で、遺構の法面は北側が大きく崩れたと考えられる。長軸1.26m、短軸0.88m、深さは80cm程度で、底部の深さは北側が10cmほど低い。埋土は黄灰色砂質土で、明褐灰色シルト質土を挟む。標高は43.3mである。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK252C（第84図）

SK251Cの南西約2.4mで検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸1.11m、短軸0.87m、深さは54cmである。埋土は黄灰色砂質土、断面形状は逆台形を呈する。標高は43.5mである。埋土中からは遺物は出土しなかった。

SK253C（第84図）

丘陵南斜面東側尾根線上の西斜面で検出した土坑である。不整円形を呈し、長軸1.05m、短軸0.78m、深さは50～62cmで、標高は46.0mである。埋土は概ね黄灰色砂質土で、底部では褐色砂礫（花崗岩風化土）混黄灰色砂質土が混ざる。底部からは直径16～36cm、深さ23～27cmの小ピットを２穴検出したが、形状から木の根の痕跡の可能性がある。埋土中からの出土遺物はなかった。

（丘陵東斜面）

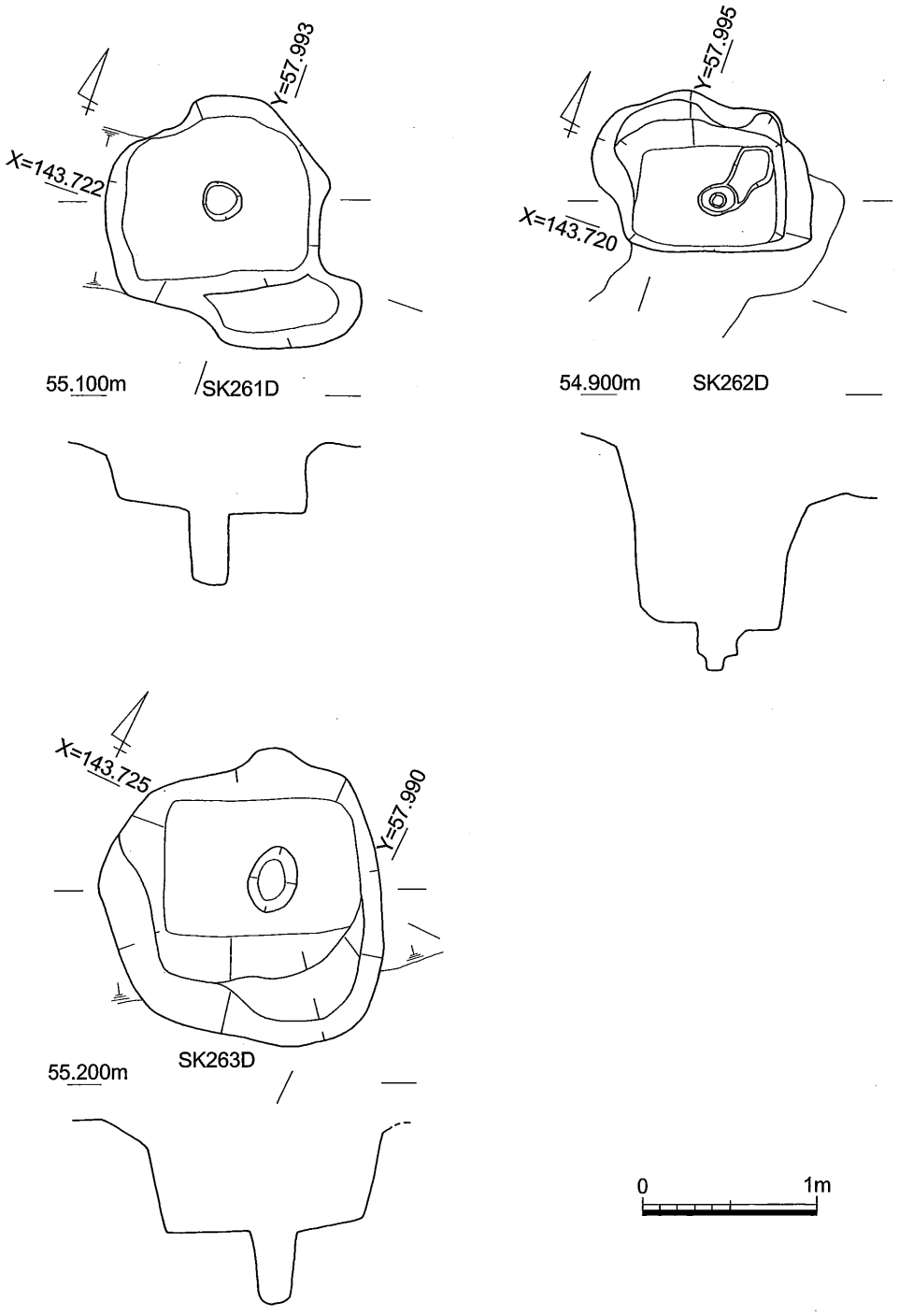
SK261D（第85図）

丘陵頂部から東斜面へわずかに下がった場所で検出した土坑である。概ね隅丸方形であるが、南東部で壁面が崩れたような形状で広がっている。その部分を除けば、長軸1.20m、短軸1.05m、深

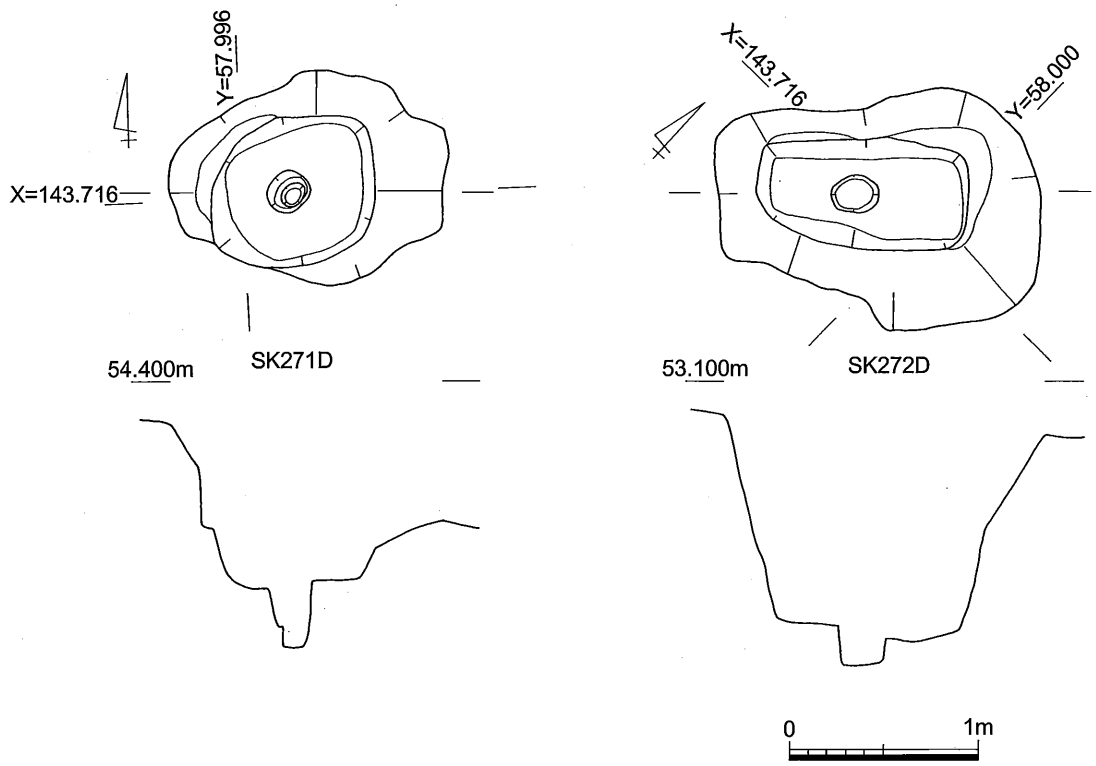
さは40cm程度で、標高は54.8mである。底部中央付近で底から直径23cm、深さ40cm程度の小ピットを検出した。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK262D（第85図）

SK261Dの約１mの南東部で検出した土坑である。遺構の輪郭は不整形であるが、土坑の東隅と西隅が崩れたような形状であるため、原形は隅丸方形であったと考えられる。長軸1.22m、短軸0.90mで、深さは山側が95cm、谷側が85cmである。断面形状は逆台形で、標高は54.6mである。底部中央付近からは直径22cm、深さ25cm程度の小ピットを検出した。埋土中からは出土遺物はなかった。



第85図　SK261D～263D平・断面図（1/40）



第86図　SK271D・272D平・断面図（1/40）

SK263D（第85図）

SK261Dの北東約2.2mで検出した土坑である。隅丸方形で、長軸1.68m、短軸1.58m、深さ61cmで、断面形状は概ね逆台形である。標高は55.0m、遺構の南東辺と南西辺は壁面が崩れたようで、なだらかな傾斜になっている。底部の中央付近で底から直径35cm、深さ40cm程度の小ピットを検出した。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK271D（第86図）

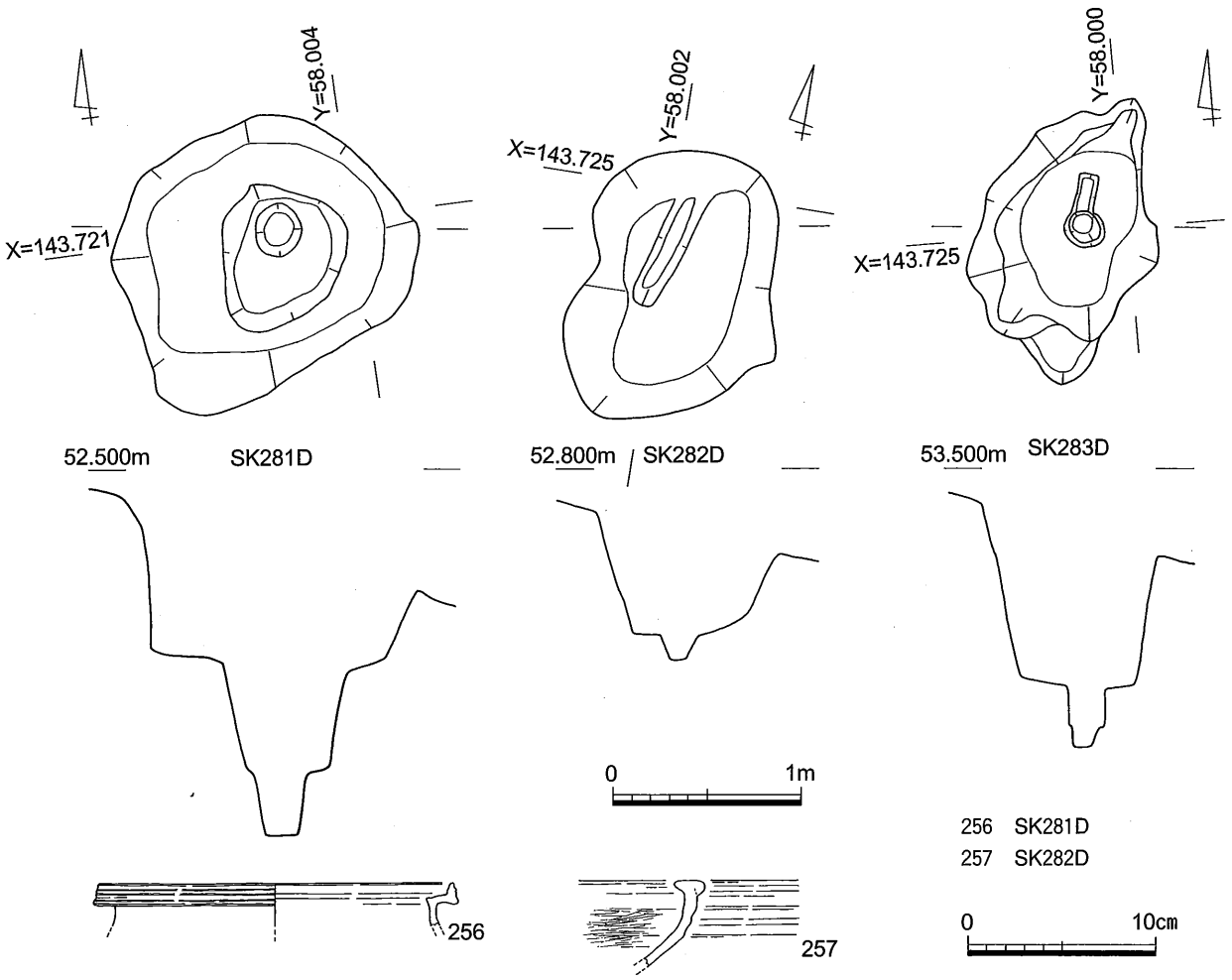
SK262Dの南約2.9mの位置で検出した土坑である。不整形を呈するが、遺構の底は隅丸方形を呈し、特に東側の法面が崩れたものと思われる。長軸1.44m、短軸1.11m、深さは山側で73cm、麓側で50cm、断面形状は遺構の中位までは逆台形であるが、それより上位はなだらかである。標高は54.2mである。底部の中央付近からは直径25cm、深さ36cm程度の小ピットを検出した。埋土中からは遺物は出土しなかった。

SK272D（第86図）

SK271Dから約1.5m東側へ下がった位置で検出した土坑である。概ね隅丸方形であるが、東半部分ではやや法面が崩れている。長軸1.71m、短軸0.98m、深さは108cm程度で、標高は53.0mである。底部の中心付近で直径20～28cm、深さ20cm程度の小ピットを検出した。埋土中からは遺物は出土しなかった。

SK281D（第87図）

SK272Dの約4.2m北東側で検出した土坑である。隅丸方形で、概ね直軸1.53m、短軸1.34mである。断面形状は２段掘り状を呈し、中央付近では直径25cm、深さ30cm程度の小ピットを検出した。深さは１段目が52～76cm、２段目は116～126cm、標高は52.4mである。埋土中からは弥生土器片、



第87図　SK281D～283D平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

サヌカイト剥片が出土した。

256は弥生土器甕で、口縁端部に凹線が２条巡る。

遺構の時期は弥生時代中期末頃と考えられる。

SK282D（第87図）

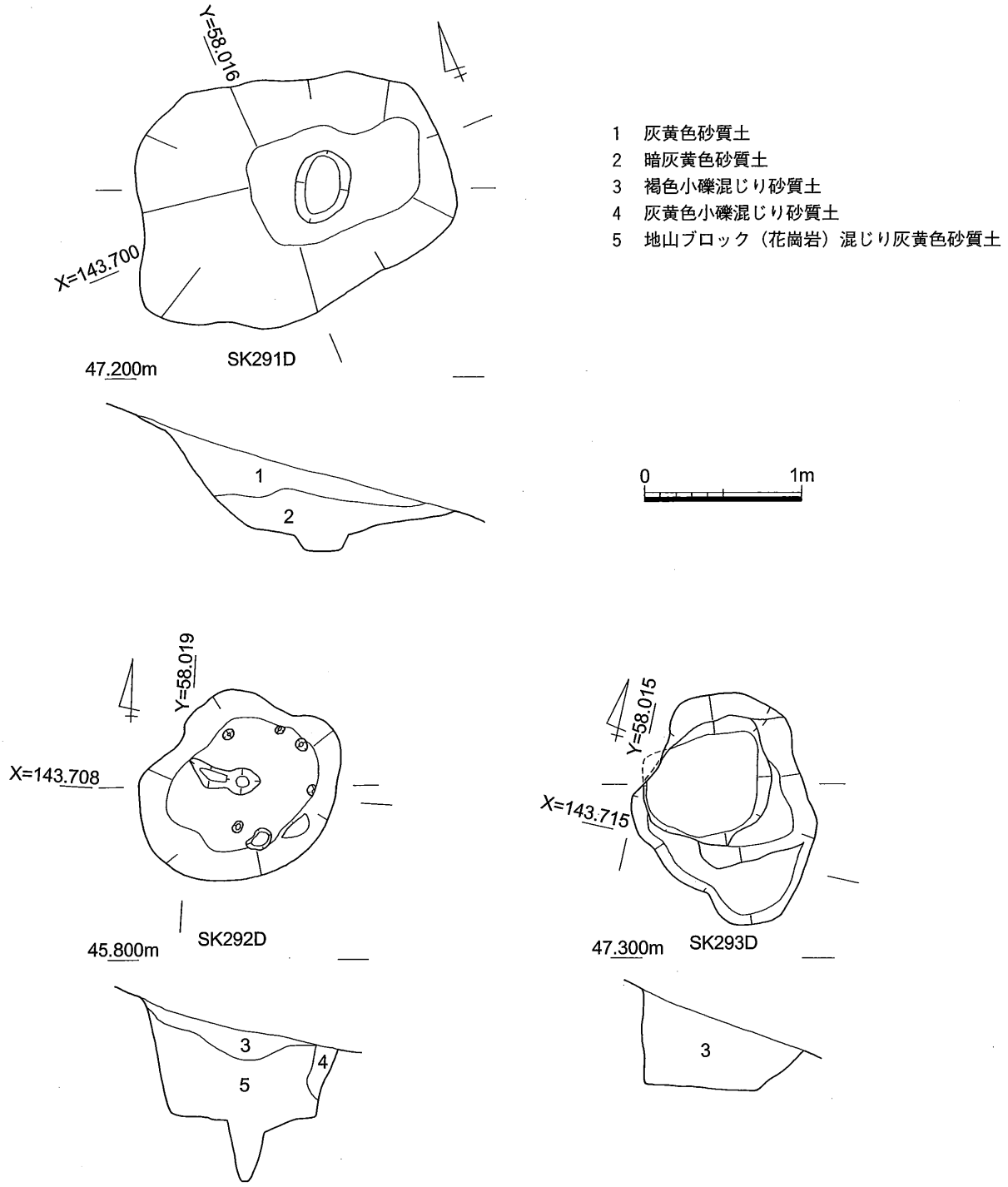
SK281Dの約２ｍ北側で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸1.46ｍ、短軸0.95ｍである。断面形状は逆台形で、深さは山側で60㎝、麓側で42㎝で、標高は52.6ｍである。土坑の底部で検出した小孔状の落ち込みは木の根の痕跡と考えられる。埋土中からは弥生土器鉢片、サヌカイト剥片が出土した。

257は弥生土器鉢で、外面には３条の凹線が巡る。

遺構の時期は弥生時代中期末頃と考えられる。

SK283D（第87図）

SK282Dの約1.1ｍ西側で検出した土坑である。不整形を呈し、長軸1.57ｍ、短軸0.94ｍである。深さは山側で86㎝、麓側で75㎝、断面形状は逆台形で、標高は53.3ｍである。底部中央付近に直径20㎝、深さ30㎝程度の小ピットと、それに続く溝状遺構を検出した。溝状遺構は木の根の痕跡の可能性もあるが、この延長上の遺構の輪郭も同じ方向へ張り出しているので、小ピットに据えられた杭が北方向へ倒された痕跡の可能性もある。埋土中からは遺物は出土しなかった。



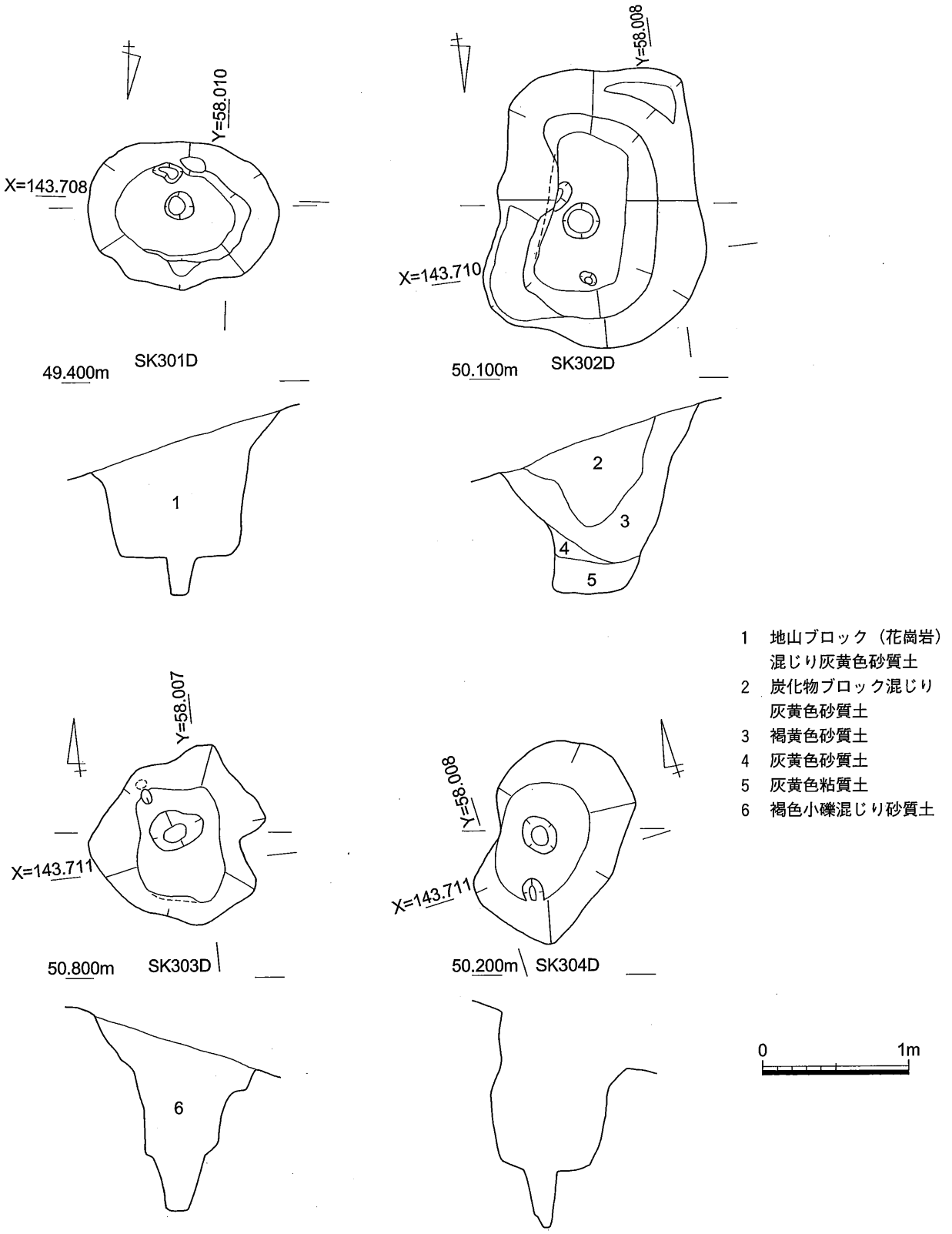
第88図　SK291D～293D平・断面図（1/40）

SK291D（第88図）

丘陵東側斜面で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸1.96m、短軸1.45m、深さは山側で46cm、麓側で3cm程度である。断面形状は鈍角をなす三角形状で、埋土は上層が灰黄色砂質土、下層が暗灰黄色砂質土である。標高は47.0mである。中央付近では直径34cm、深さ10cm程度の小ピットを検出した。埋土中からは遺物は出土しなかった。

SK292D（第88図）

SK291Dの約7.2m北側で検出した土坑である。不整円形を呈し、直径1.21～1.26m、深さは山側で68cm、麓側で48cmである。断面形状は逆台形で、標高は45.6mである。底部の中央付近からは直径20cm、深さ33cm程度の小ピットを検出した。縁辺部からは直径7cm、深さ6～17cmの小ピットや



第89図　SK301D～304D平・断面図（1/40）

溝状の落ち込みも見られるが、これらは木の根の痕跡と考えられる。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK293D（第88図）

SK292Dの北側約6.4mの位置で検出した土坑である。不整形を呈し、長軸1.50m、短軸1.12m、深さは山側が58cm、麓側が36cmである。断面形状は逆台形を呈するが、南北方向は3段に落ちている。標高は47.1mである。埋土は褐色小礫混砂質土である。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK301D（第89図）

丘陵東斜面、SI05Cの8.5m東側で検出した土坑である。楕円形で、長軸1.32m、短軸1.02mである。断面形状は逆台形に近いが、上部では壁面が崩れている。深さは山側で88cm、麓側で66cmで、埋土は地山ブロック混灰黄色砂質土、標高は49.2mである。土坑の底部からは直径20cm、深さ27cm程度の小ピットを検出した。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK302D（第89図）

SK301Dの約0.9m北西側で検出した土坑である。隅丸方形を呈するが、上面の形状から遺構の壁面がかなり崩れた様子がわかる。長軸1.91m、短軸1.38mである。深さは山側で110cm、麓側で97cm、埋土は灰黄色粘質土・砂質土、褐黄色砂質土で、標高は49.9mである。上部に炭化物のブロックが混じる。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK303D（第89図）

SK302Dの北西約0.6mの位置で検出した土坑である。上面では不整形を呈するが、底部では隅丸方形を呈し、壁面が崩れた可能性がある。長軸1.16m、短軸1.06mである。深さは山側では85cm、麓側で68cm、標高は50.6mである。埋土は褐色小礫混砂質土、底部中央付近からは直径28～36cm、深さ36cm程度の小ピットを検出した。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK304D（第89図）

SK303Dの約0.5m東側で検出した土坑である。概ね楕円形を呈し、長軸1.37m、短軸0.82mである。深さは山側で102cm、麓側で77cm、標高は49.9mである。底部中央付近からは直径25cm、深さ40cm程度の小ピットを検出した。埋土中からの出土遺物はなかった。

SK311D（第90図）

丘陵東斜面北側尾根線上で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸1.53m、短軸1.35mである。深さは山側で46cm、麓側で41cm、断面形状は逆台形、埋土は淡灰色砂質土混灰黄色砂質土である。標高は47.7mである。土坑の中央部及び4隅に直径15～25cm、深さ9～14cmの小ピットを検出した。埋土中からは弥生土器甕片と桃核が出土した。

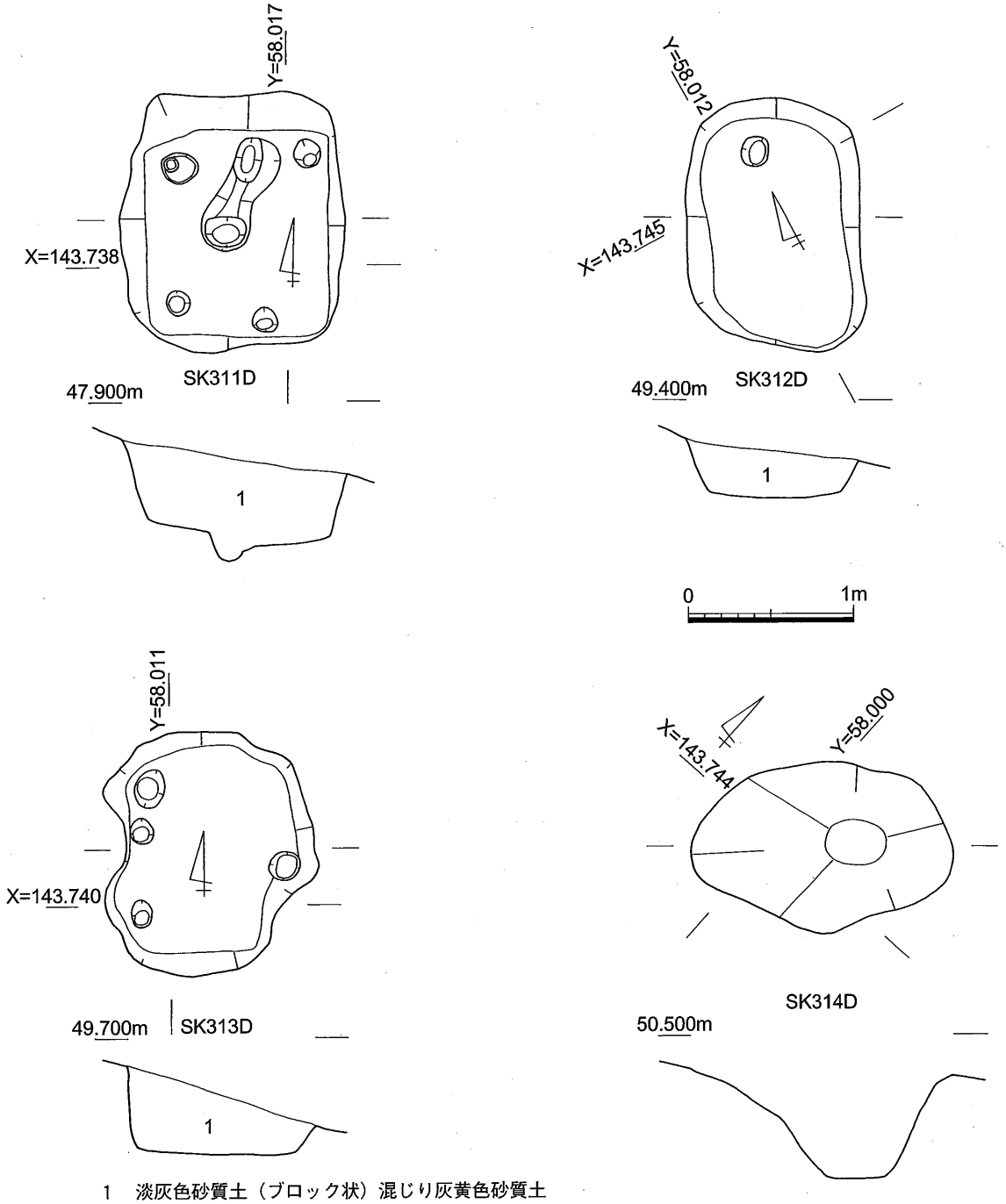
遺構の時期は弥生時代中期末～後期初頭と考えられる。

SK312D（第90図）

SK311Dの北西側約6.3mの位置で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸1.49m、短軸1.05mである。断面形状は逆台形で、深さは山側が29cm、麓側が21cm、標高は49.2mである。埋土は淡灰色砂質土（ブロック状）混灰黄色砂質土である。北寄りの位置で直径19cm、深さ20cm程度の小ピットを検出した。埋土中からは土器小片が出土した。

SK313D（第90図）

SK312Dの南側約3.0mの位置で検出した土坑である。不整形を呈し、長軸1.48m、短軸1.12mである。深さは山側で48cm、麓側で21cm、断面形状は逆台形で、埋土は淡灰色砂質土混灰黄色砂質土である。標高は49.6mである。土坑の底部東端付近と西端付近では直径16～33cm、深さ13～30cmの小ピットを4穴検出した。埋土中からは土器小片が少量出土した。



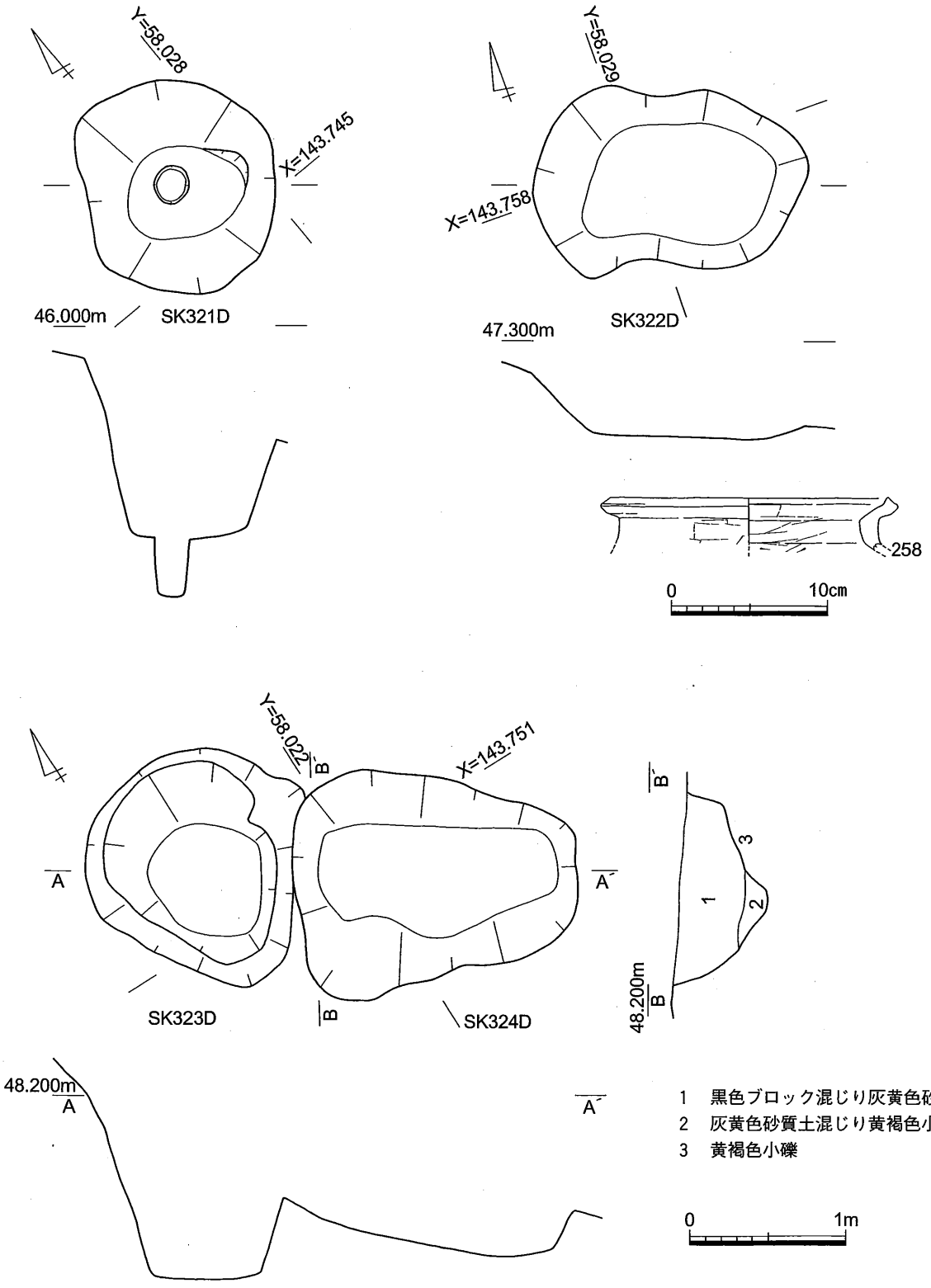
第90図　SK311D～314D平・断面図（1/40）

SK314D（第90図）

SK313Dの尾根を挟んだ北斜面側で検出した土坑である。楕円形で、長軸1.61m、短軸1.06m、深さは67cmである。遺構の法面はなだらかに落ちる。標高は50.3m、埋土中からは弥生土器底部が出土した。

SK321D（第91図）

丘陵東斜面の東側尾根線上で検出した土坑である。隅丸方形で、長軸1.36m、短軸1.20mである。断面形状は逆台形、深さは山側で98cm、麓側で66cmである。標高は45.8mである。土坑の底部中央付近から、直径22cm、深さ38cm程度の小ピットを検出した。埋土中からは遺物は出土しなかった。



第91図　SK321D～324D平・断面図（1/40）、SK322D出土遺物（1/4）

SK322D（第91図）

SK321Dの北東側約11.2mの位置で検出した土坑である。楕円形で、長軸1.76m、短軸1.06mである。深さは山側で30cm、麓側では11cm、断面形状は鈍角をなす三角形に近い。標高は47.1mである。埋土中からは弥生土器甕、サヌカイト剥片が出土した。

258は弥生土器甕である。

遺構の時期は弥生時代後期初頭頃と考えられる。

SK323D（第91図）

SK321Dの約7.8m北西で検出した土坑である。SK324Dと重複して検出した。不整円形で、直径1.50～1.55m、深さは山側で111cm、麓側で88cmである。標高は48.2mである。断面形状は概ね逆台形であるが、法面上部付近からは崩れたようで、なだらかである。埋土中からは弥生土器小片が出土した。遺構の検出状況からSK324Dより古い時期のものである。

SK324D（第91図）

SK323Dと重複して検出した土坑である。遺構の検出状況からSK323Dより新しい時期のものである。隅丸方形を呈し、長軸1.83m、短軸1.23mである。深さは山側が46cm、麓側が28cm、断面形状は逆台形で埋土は概ね黒色ブロック混灰黄色砂質土で、下部に灰黄色砂質土混黄褐色小礫が混じる。標高は48.1mである。埋土中からは土器は出土しなかった。

SK331D（第92図）

丘陵東斜面、南側尾根線付近で検出した。SD10Dより古い時期のものと考えられる。不整円形で長軸1.10m、短軸0.78m、深さは108～115cmである。埋土は黄灰色砂質土で、底に灰色粘質土が少し堆積する。断面形状は北西側で段落ち状を呈する。標高は40.1mである。土坑中央付近からは直径20～25cm、深さ25cm程度の小ピットを検出した。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK332D（第92図）

SK331Dの北西側約5.0mの位置で検出した土坑である。不整形を呈するが、遺構の北西側の法面が崩れた様子が平面形から明瞭であるために、原形は隅丸方形であったと考えられる。現在は長軸1.71m、短軸1.40mであるが、本来は長軸1.40m、短軸1.20mであったことがわかる。深さは山側で65cm、麓側で48cm、埋土は概ね黄灰色砂質土で、底部分に灰色粘質土がわずかに堆積する。標高は42.2mである。本来の土坑底部中央付近で直径28cm、深さ44cm程度の小ピットを検出した。遺構の埋土中からは出土遺物はなかった。

SK333D（第92図）

SK332Dの南側約3.0mの位置で検出した土坑である。やや歪な円形を呈し、直径1.45m、深さは35cmを測る。標高は41.5mである。上面の平面形態は円形であるが、中位では深さ50cmの隅丸方形の落ち込みとなり、その中央付近で直径23cm、深さ38cmの小ピットを検出した。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK334D（第92図）

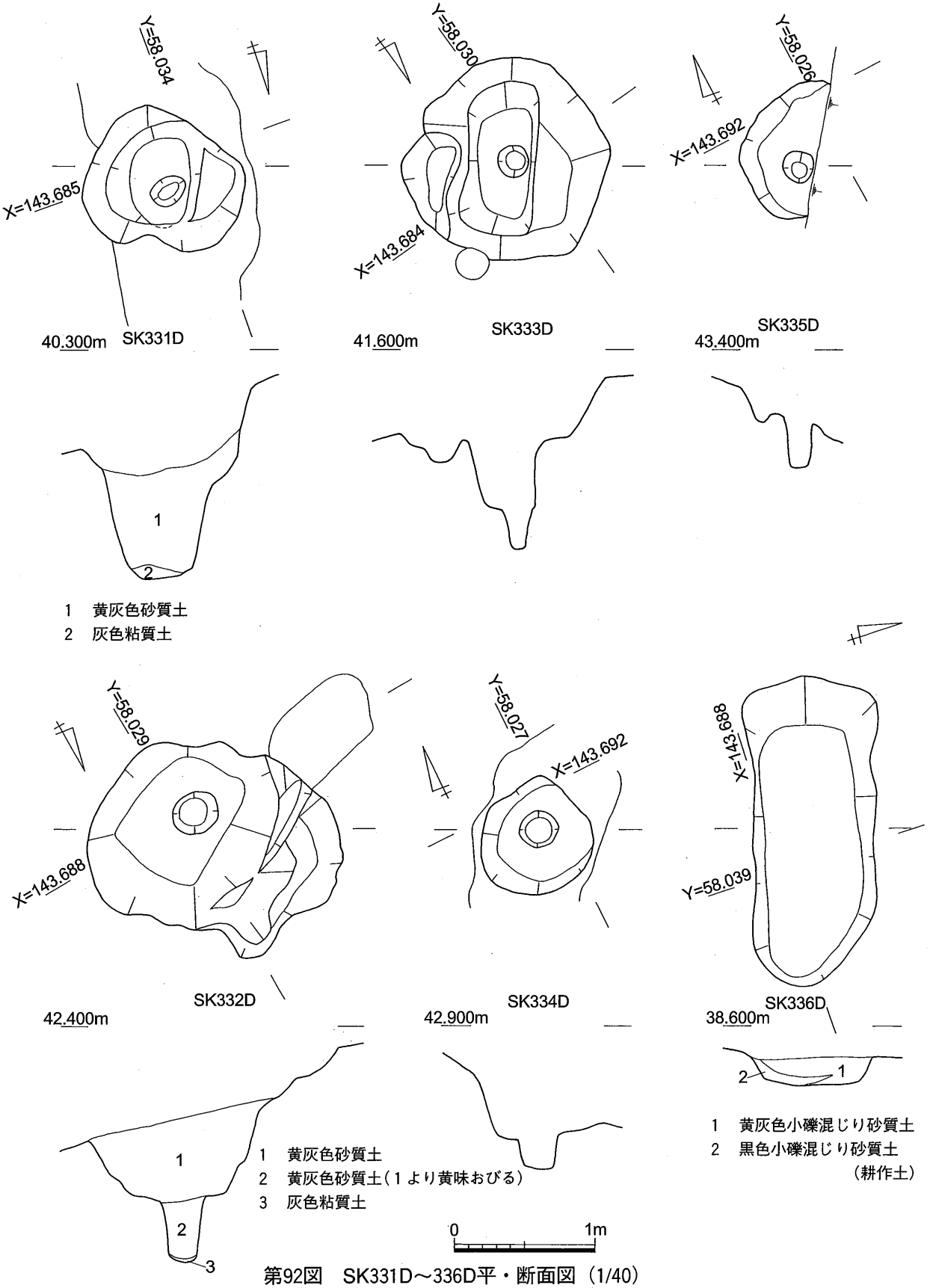
SK332Dから北へ約3.3mの位置で検出した土坑である。ほぼ円形で、直径0.80m、深さは山側で38cm、麓側で３cmである。断面形状は鈍角をなす三角形で、標高は42.6mである。中央付近で直径26cm、深さ24cm程度の小ピットを検出した。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK335D（第92図）

SK334Dの約0.2m西側で検出した土坑である。東半部は後世の削平により消失する。平面形は概ね直径１m程度の円形と思われ、深さは15cm程度、標高は43.2mである。底部の中央付近と思われる位置で直径22cm、深さ38cmの小ピットを検出した。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK336D（第92図）

SK331Dの東側約4.0mの位置で検出した土坑である。楕円形で、長軸2.22m、短軸0.86mである。深さは20cm、断面形状は浅い皿状、埋土は黄灰色小礫混砂質土で、下部には現耕作土の土を含む。



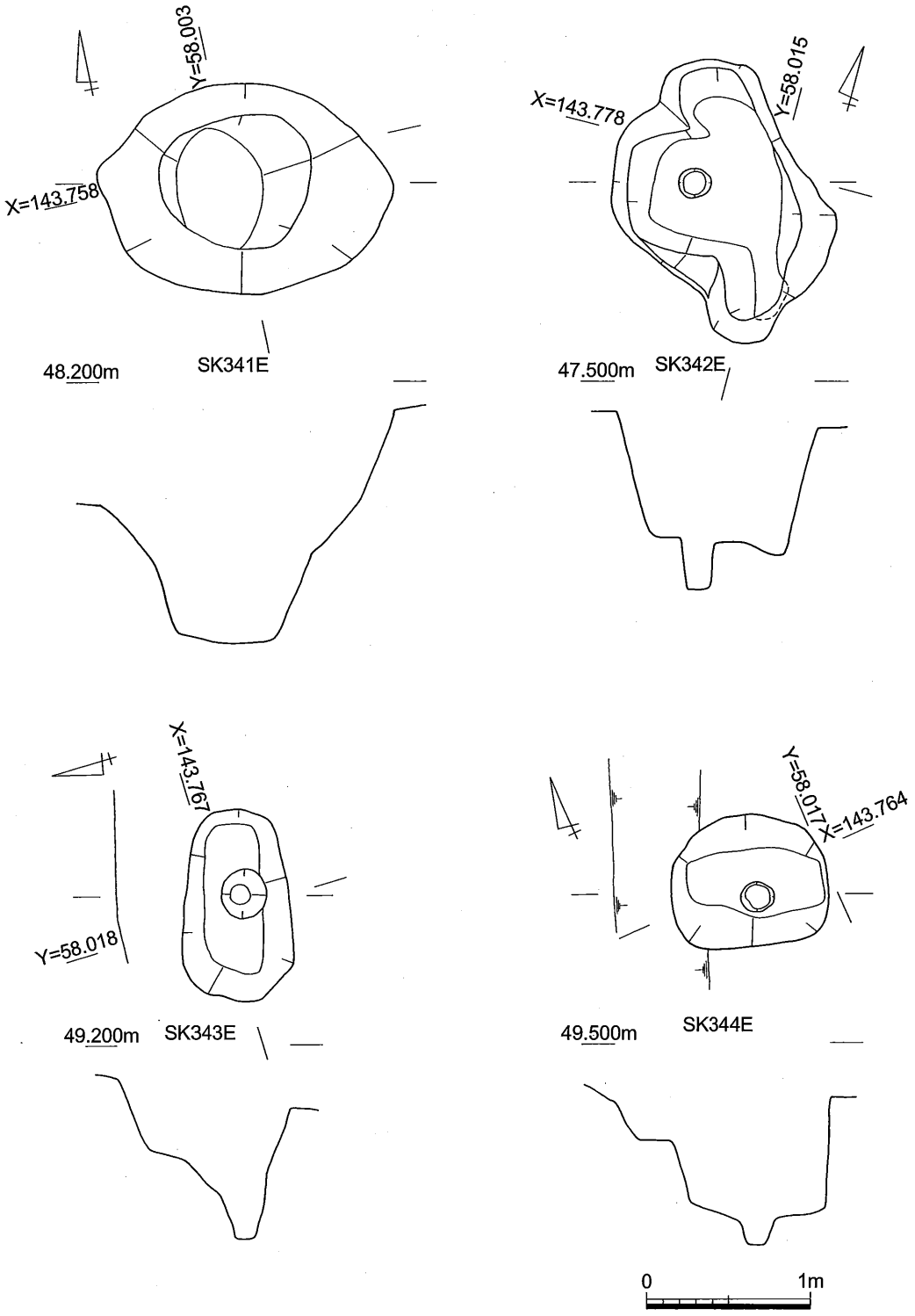
第92図　SK331D～336D平・断面図（1/40）

標高は38.4mである。埋土中からは出土遺物はなかった。埋土に現耕作土を含むことから、時期は近世以降である。

（丘陵北東部尾根線付近）

SK341E（第93図）

丘陵北斜面、東側尾根線上の西斜面で検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸1.79m、短軸1.26



第93図　SK341E～344E平・断面図（1/40）

m、深さは山側で116cm、麓側で90cm、断面形状は、下半部は逆台形を呈するが、上半部の壁面はなだらかで、崩れたような形状である。標高は48.0mである。埋土中からの出土遺物はなかった。

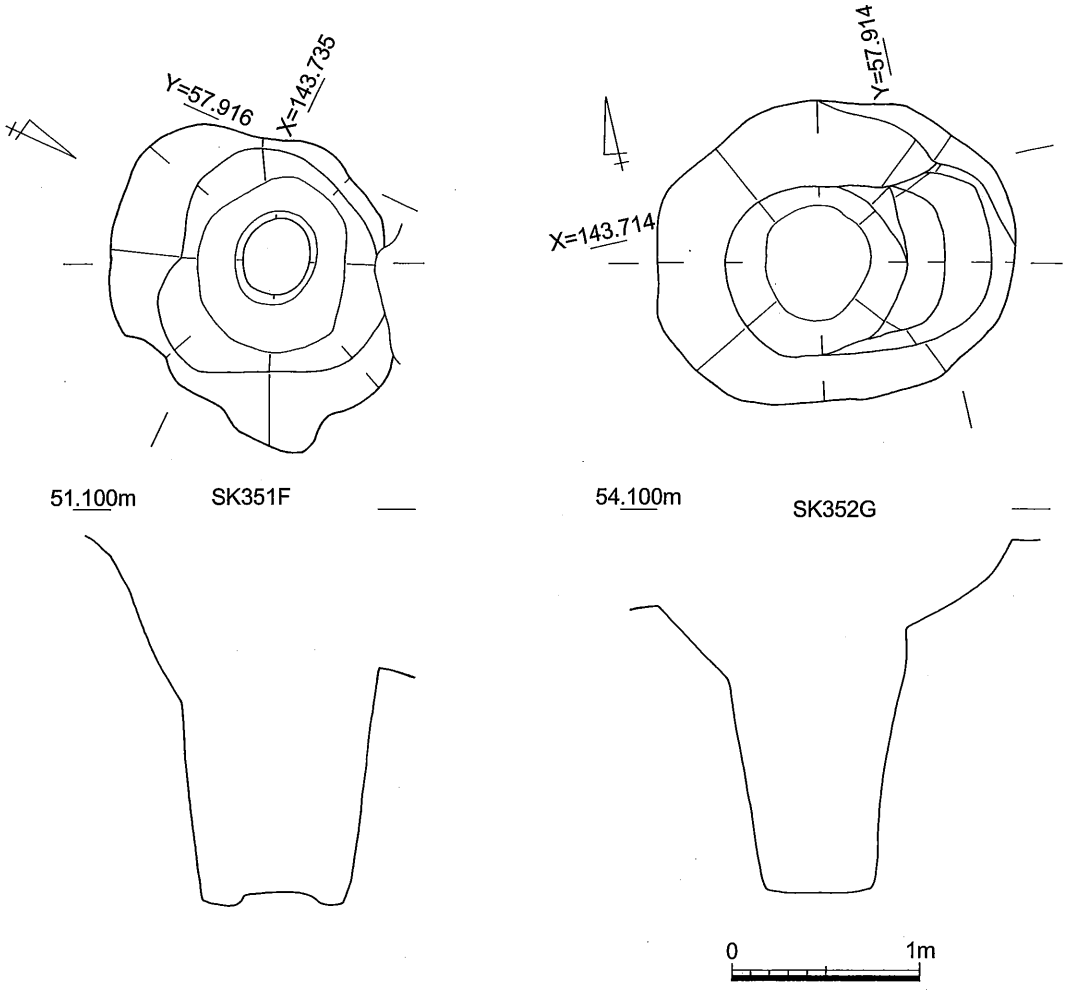
SK342E（第93図）

丘陵北斜面、東側の尾根線上である検出した土坑である。長軸1.74m、短軸1.04m、深さは72～80cmの不整円形を呈するが、北側と南側へ張り出した形状であることから、法面が崩れたと考えられ、原形は長軸1.20m、短軸0.80m程度の隅丸方形と考えられる。断面形状はほぼ逆台形で、標高は47.3mである。底部中央付近から直径18cm、深さ30cm程度の小ピットを検出した。埋土中からは出土遺物はなかった。

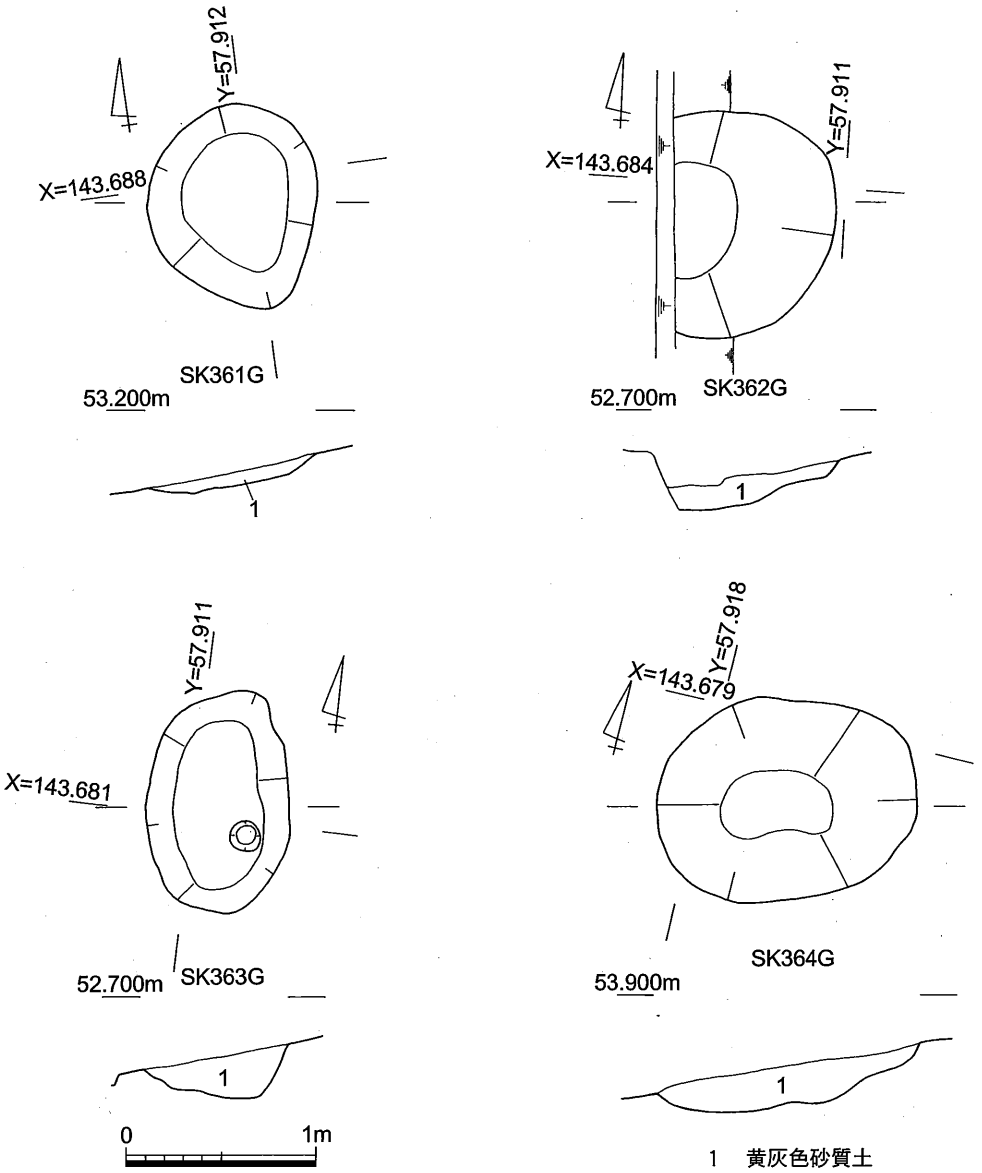
SK343E（第93図）

丘陵東斜面北側尾根線上、西浦谷１号墳の下部で検出した土坑である。隅丸方形を呈し、長軸1.16m、短軸0.68m、深さは山側で54cmである。土坑の底部からは直径30cm、深さ30cm程度の小ピットを検出した。土坑の上面は西浦谷１号墳により破壊されているので、本来はもう少し大きかったと思われる。小ピットの底部から厚さ２cm程度で灰色粘土（細砂含む）がつき固められた状態で堆積していた。標高は49.0mである。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK344E（第93図）



第94図　SK351F・352G平・断面図（1/40）



第95図　SK361G～364G平・断面図（1/40）

SK343Eから2.3m程度南西に位置する。西浦谷１号墳の下部で検出した遺構である。隅丸方形を呈し、長軸0.96m、短軸0.80mである。深さは概ね71cm、断面形状は逆台形である。標高は49.2mである。底部中央付近からは直径22cm、深さ16cm程度の小ピットを検出した。小ピットから厚さ２cm程度で灰色粘土(細砂含む)がつき固められた状態で堆積していた。埋土中からは出土遺物はなかった。

（丘陵北西部尾根線東側斜面）

SK351F（第94図）

丘陵北斜面西端部付近で検出した土坑である。楕円形を呈し、概ね長軸1.75m、短軸1.36m、深さは132～158cmである。土坑の底部は中央付近が５cm程度盛り上がっている。標高は50.8mである。埋土中からは出土遺物はなかった。

（丘陵北西部尾根線西側斜面）

SK352G（第94図）

丘陵西側斜面で検出した土坑である。遺構の平面形は楕円形を呈するが、底部は円形を呈し、山

側である東側ではかなり法面が崩れた形状であるため、原形はほぼ円形であったと考えられる。長軸1.90m、短軸1.58m、深さ162～173cmである。断面形状は上部はなだらかであるが、下半部は逆台形である。標高は53.9mである。埋土中からは弥生土器小片と考えられる破片が出土した。

SK361G（第95図）

丘陵西斜面南端付近で検出した土坑である。楕円形を呈し、長軸1.10m、短軸0.91m、深さは８cmである。埋土は黄灰色砂質土、断面形状は浅い皿状である。標高は53.0mである。埋土中からは出土遺物はなかった。自然地形の落ち込みの可能性もある。

SK362G（第95図）

SK361Gの南西3.2mの位置で検出した土坑である。西半部は調査区外へ延びる。ほぼ円形を呈すると考えられ、直径1.20m、深さ17cm程度である。断面形状は浅い皿状、埋土は黄灰色砂質土、標高は52.5mである。埋土中からは出土遺物はなかった。自然地形の落ち込みである可能性がある。

SK363G（第95図）

SK362Gの南側約1.9mの位置で検出した土坑である。長軸1.16m、短軸0.77m、深さは山側が26cm、麓側が12cmである。埋土は黄灰色砂質土、断面形状は浅い皿状、標高は52.4mである。埋土中からは出土遺物はなかった。

SK364G（第95図）

SK363Gの約5.2m南東部で検出した土坑である。楕円形で、長軸1.38m、短軸1.06mである。深さは山側で20cm、麓側で12cmである。断面形状は浅い皿状、埋土は黄灰色砂質土、標高は53.6mである。埋土中からは出土遺物はなかった。

2　古墳時代の遺構・遺物

西浦谷１号墳（第96～107図）

墳丘

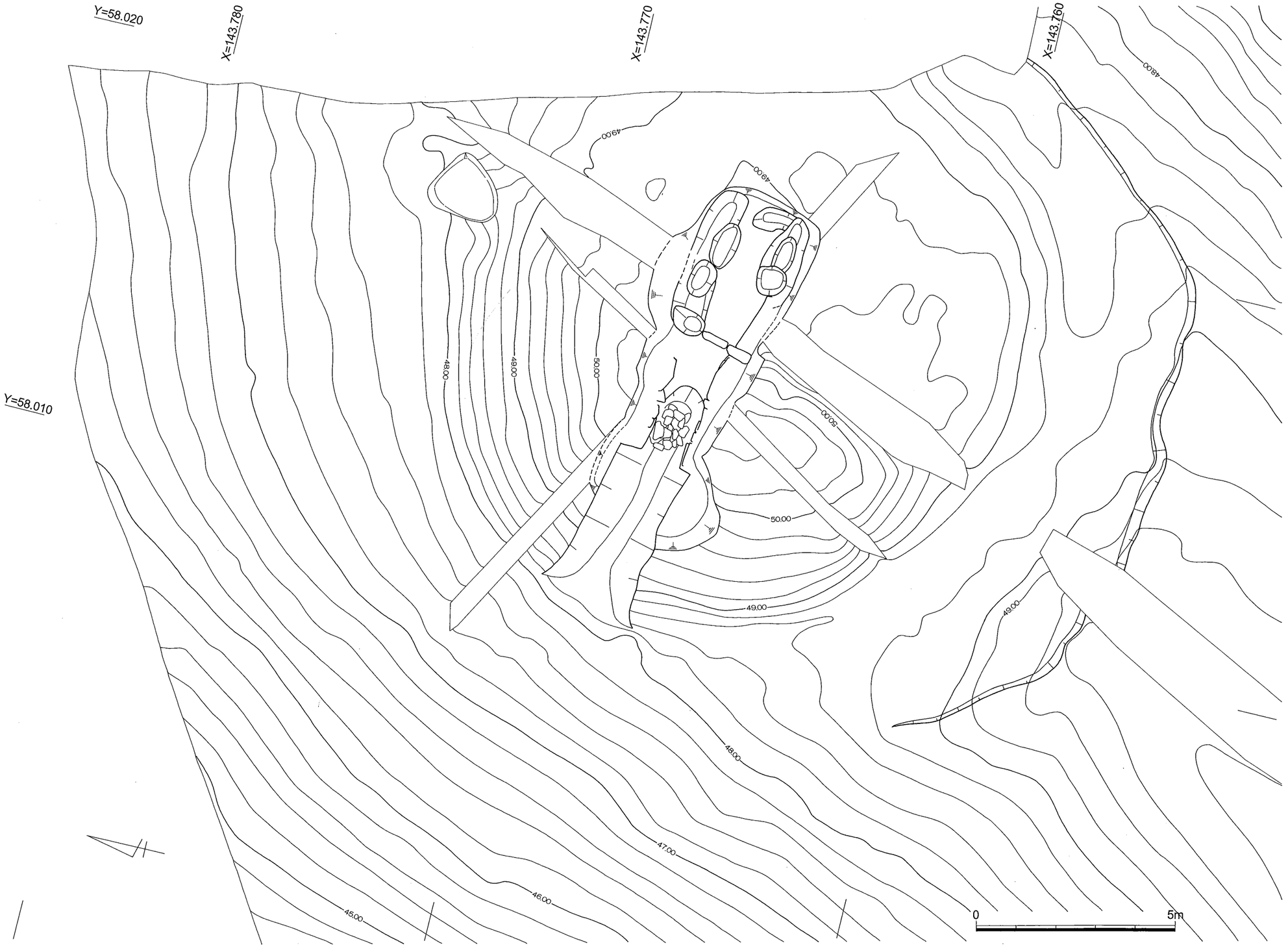
Ｉ－１・２区に跨って検出した。丘陵頂部から北東方向へ延びる尾根線上で検出した。円墳で直径15.4m、高さ約２mを測る。墳丘のほぼ中央部を北東から南西方向に傾斜に直交する方向で後世の水路があり、そこから東側は果樹園造成のための削平により墳丘は失われる。また、東端部付近は調査区外のため検出していない。墳丘は羨道上部付近に撹乱坑が認められた他、頂部付近はいずれも撹乱層で、本来の盛土はほとんど残されていなかったが、残っている部分については黄色砂質土で、所々黒色粘質土層が筋状に堆積する版築状の盛土である。

周溝

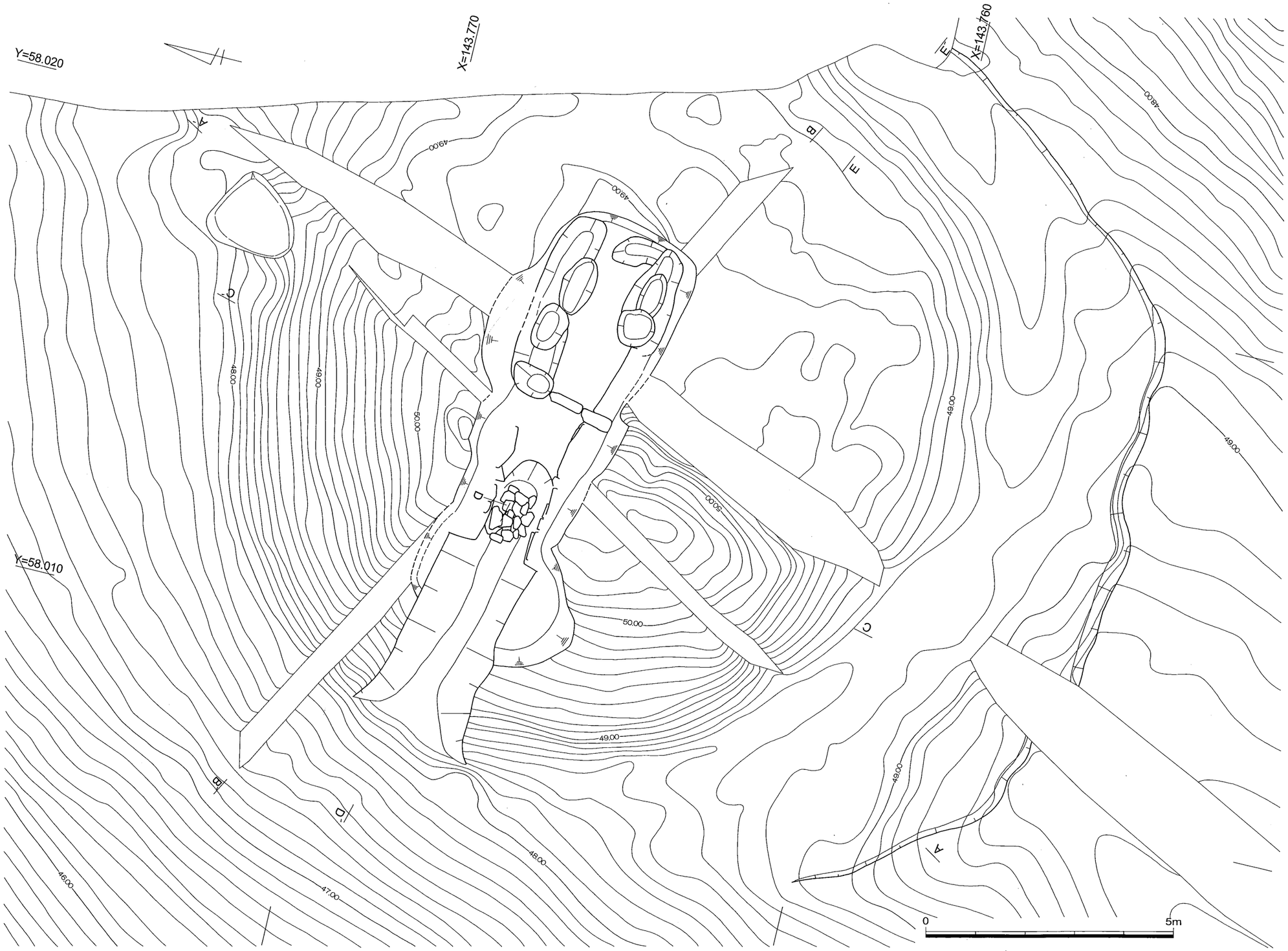
標高の高い南側では周溝を検出した。幅4.2m、深さ84cm、埋土は暗灰黄色砂質土、灰黄色砂質土等である。

石室の検出状況

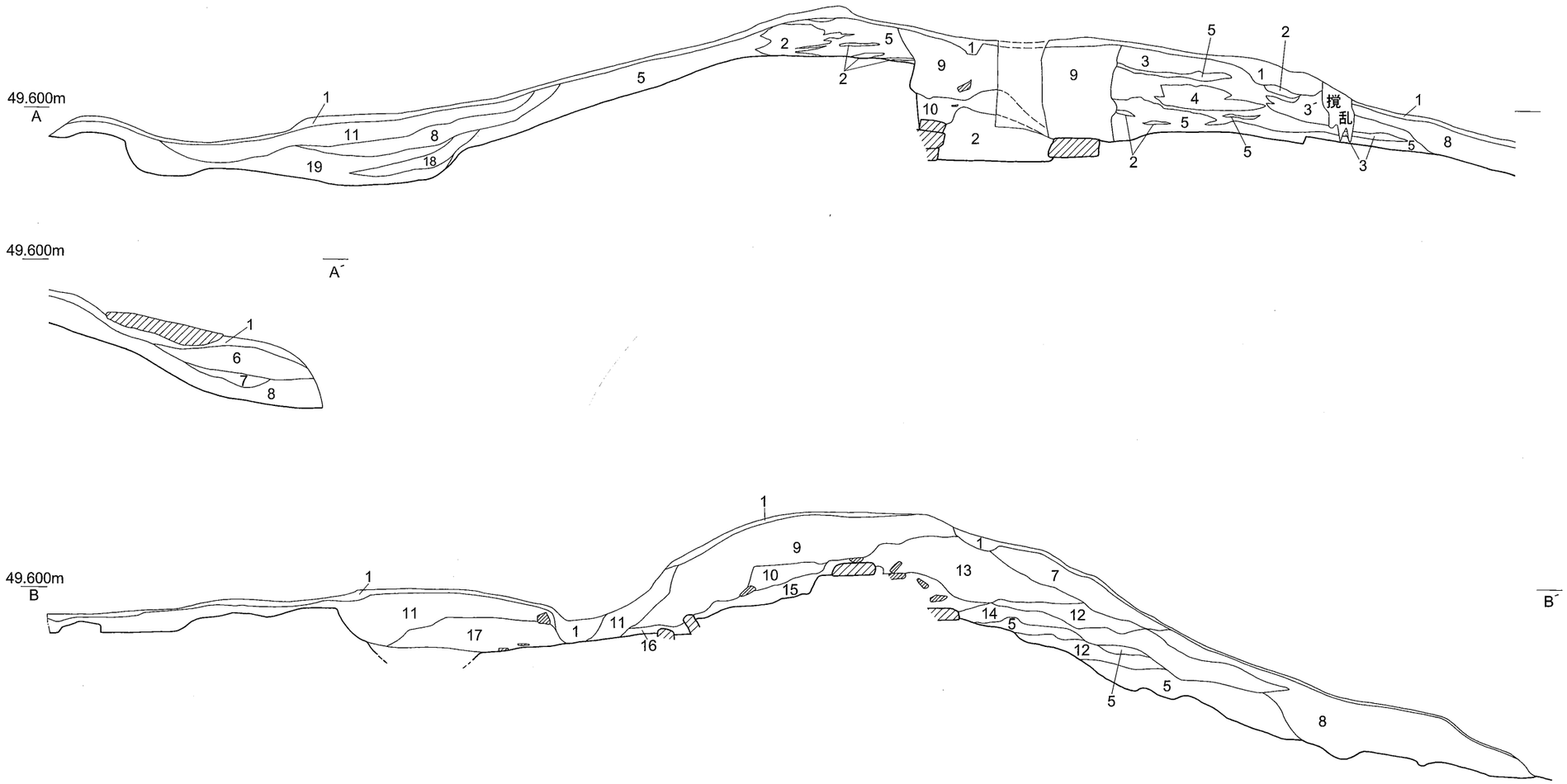
後世の削平が著しく、石室の天井石を始め、大半の石材は残されていなかった。また、羨道部上部付近には撹乱坑があり、墳丘盛土はほとんどのこされていなかった。残されていたのは玄室の基底石



第96図　1号墳地形測量図（1/100）

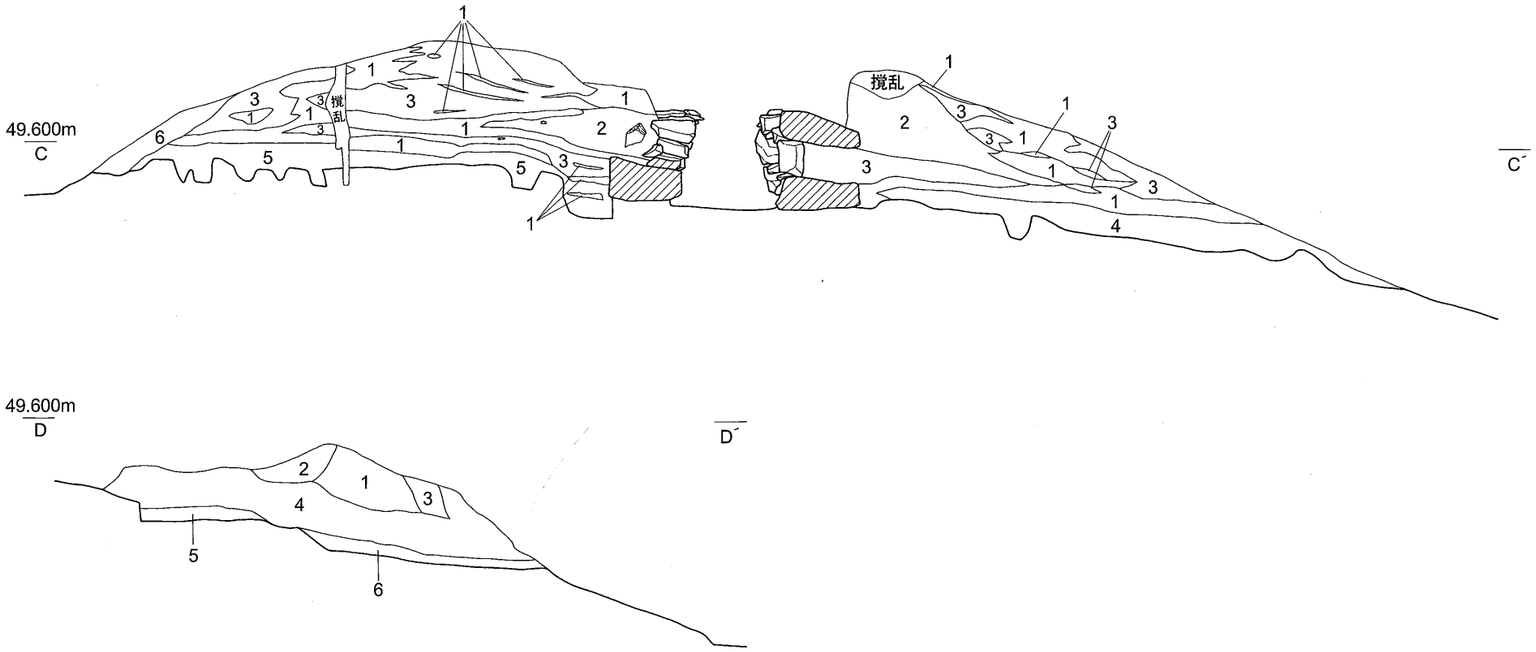


第97図　1号墳平面図（1/80）



1　黒色砂質土
2　黒色粘質土
3　黒色粘質土（黄色ブロック少量混じる）
3’ 3より黒い
4　黄色小礫混じり砂質土（黒色ブロック少量混じる）
5　黄色砂質土
6　黄色小礫・黒色粘質土ブロック混じり（多量）灰黄色砂質土
7　黄色砂質土
8　灰黄色砂質土
9　黄灰色砂質土（黒色ブロック少量混じる）
10　灰黄色砂質土（黒色ブロック少量混じる）
11　暗灰黄色砂質土
12　黒色砂質土
13　黄色ブロック混じり（少量）黒色砂質土（撹乱土層）
14　黄色ブロック混じり（多量）黒色砂質土
15　黒色粘質土（よくしまっている。一部黄色砂質土混じる）
16　黒色ブロック混じり黄色砂質土
17　黒色粘土ブロック混じり灰黄色砂質土
18　暗褐色ブロック混じり黄色砂質土
19　暗褐色小礫混じり粘質土

第98図　１号墳トレンチ土層断面図（1）（1/60）

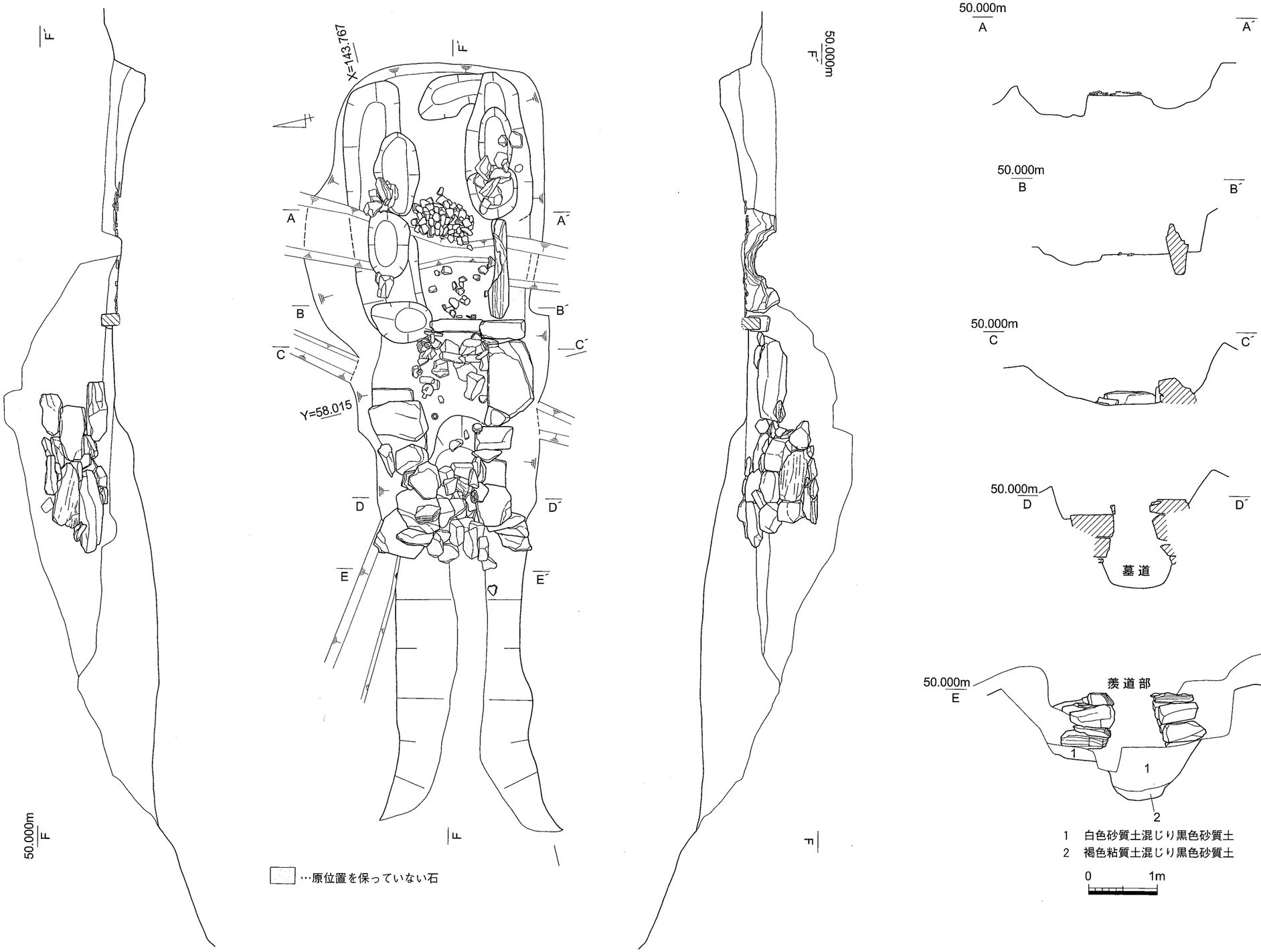


C-C'断面
1　黒色粘質土
2　黒色粘質土と黄色砂質土の薄い（３～５㎜）縞状
3　黄色砂質土
4　黄褐色粘質土
5　褐黄色粘質土
6　灰黄色砂質土

D-D'断面
1　黄色砂質土混じり（ブロック状）黒色砂質土、黄色味が強い
2　黒色砂質土混じり黄色砂質土（石室撹乱層）
3　黄色砂質土
4　黄色砂質土混じり（ブロック状）黒色砂質土
5　黄色粘質土
6　黄色粘質土（黒色砂質土混じり）

E-E'断面
1　黒色砂質土
2　暗灰黄色砂質土
3　黄色砂質土（盛土流出土）
4　暗灰黄色砂質土

第99図　１号墳トレンチ土層断面図（2）（1/60）



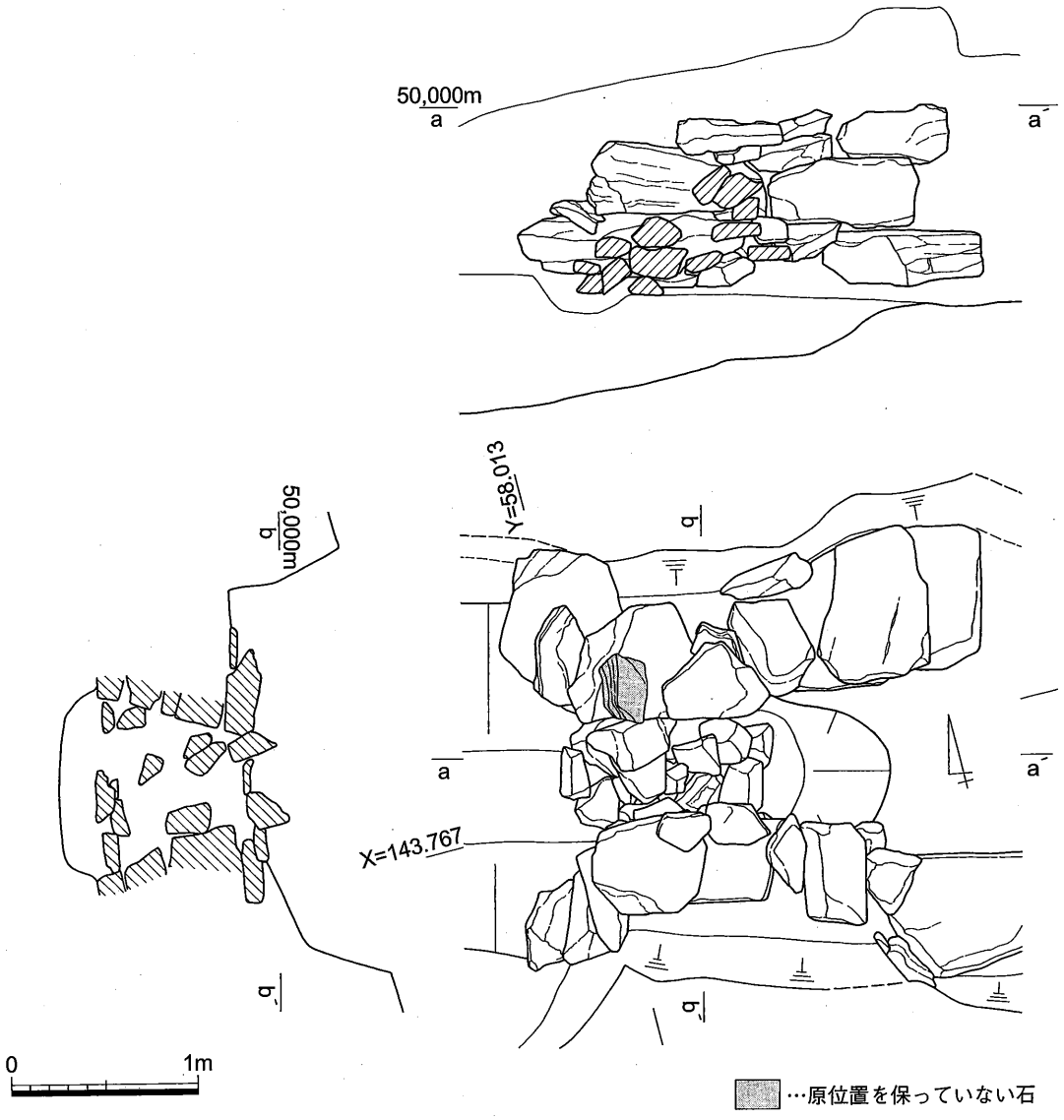
第100図　1号墳平・立・断面図（1/60）

が１石、敷石、敷居石、羨道部の壁石が２～３段、閉塞石であった。ただ、玄室の壁石、奥壁部分には石の抜き取り穴が残され、石室の規模を知る手がかりになる。

石室

主軸をＮ－80°－Ｗに向け、斜面にほぼ直交する方向に取り、斜面の上側へ向かって南南西の方向に開口する、両袖式の横穴式石室である。石室の規模は、玄室が長さ3.06ｍ、奥壁幅1.06ｍ、玄門側の幅で1.18ｍである。羨道は長さ3.13ｍ、幅1.04ｍ、開口部幅0.70ｍで、玄室と羨道を合わせた石室の長さは6.19ｍである。

玄室で本来の位置を保っていたのは、羨道から見て敷居石のすぐ右側に位置する基底石１石のみであった。しかも、この石の中央付近で後世に水路が作られた際に、石を除去できなかったためか、基底石を水路状に断面Ｕ字状に打ち欠いている。石の長さは140㎝、幅は31㎝、高さは44㎝以上である。他の石については、抜き取り痕と控えにしていたと思われる小礫しか残っていないが、概ね長さ55～120㎝前後の石材を、側壁で３列程度、奥壁で１～２石程度配置したと考えられる。



第101図　１号墳羨道閉塞石平・断面図（1/40）

横方向に置かれた袖石が墓道から見て右側に残されるが、左側には抜き取り痕がやはり横方向に残されており、同様の袖石があったと考えられる。また、羨道と玄室の間には敷居石が置かれていた。

床面には15cm大の扁平な礫が敷かれていた様子が一部に認められ、本来は全体に敷かれていたと考えられる。

墓道

敷居石から1.2m羨道側から掘り込みが認められ、6.0mにわたって検出した。墳丘裾部付近まで延びる。幅1.8mで埋土は白色砂質土混黒色砂質土で、最下部に褐色粘質土混黒色砂質土が堆積する。羨道部の側壁の構築は墓道を埋め戻した後に行っている。

閉塞施設

敷居石から1.8m羨道側で検出した。墓道を埋めた後に構築されており、20～40cm大の塊石が乱雑に積み上げられた状態であった。閉塞石の上部からは須恵器提瓶が1点出土している。

遺物の出土状況

玄室内は床面に敷かれた礫が残る程度で、遺物がまったく出土しなかったことから、埋葬の状況から大きく撹乱を受けていると考えられる。墳丘埋土中からは杯身16個体・杯蓋14個体分の須恵器が出土しており、これらはもとは石室内に埋納されたものと考えられる。羨道内からは敷居石に近い位置から鉄釘が1点、閉塞石の間の南側の側壁にもたせかけるように須恵器提瓶が1点出土した。敷居石と閉塞石の間からは須恵器提瓶と壺蓋が1点ずつ出土していたが、これは現位置を保っていないと考えられる。

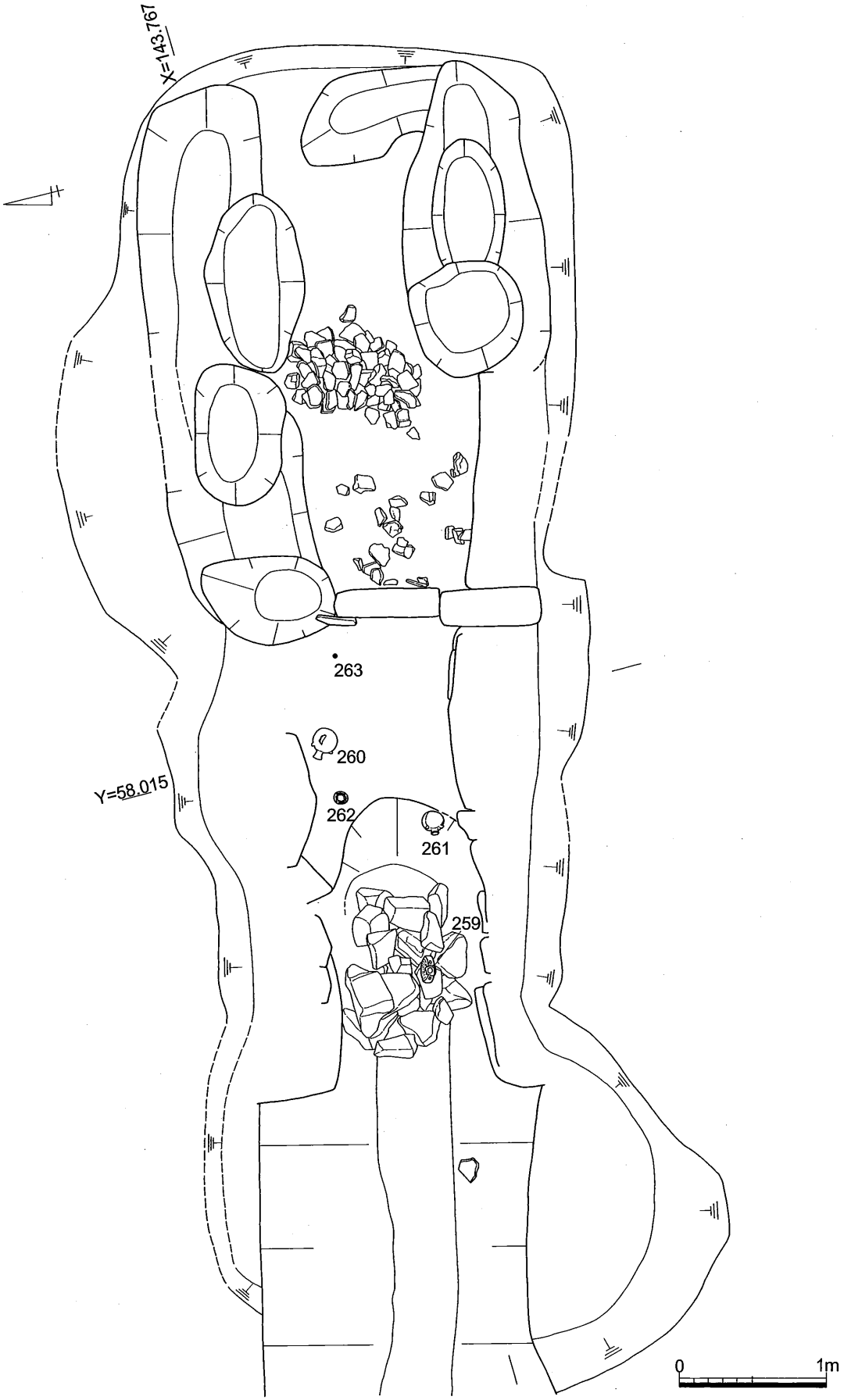
出土遺物（第103～107図）

259～263は羨道内から出土した遺物である。259～262は須恵器で、259～261は提瓶である。259・261は口縁端部を肥厚させ、肩部には退化した把手状の突起が付く。260は口縁端部は細くし、肩部には把手が付く。いずれも体部の片側にはカキ目を密に施し、片側にはヘラケズリを施す。ヘラケズリをする側の中央付近には円盤充填をした痕跡が残る。262は壺蓋である。頂部にはつまみ、口縁端部には返りが付く。263は鉄釘である。264・265は墓道から出土した鉄製品である。

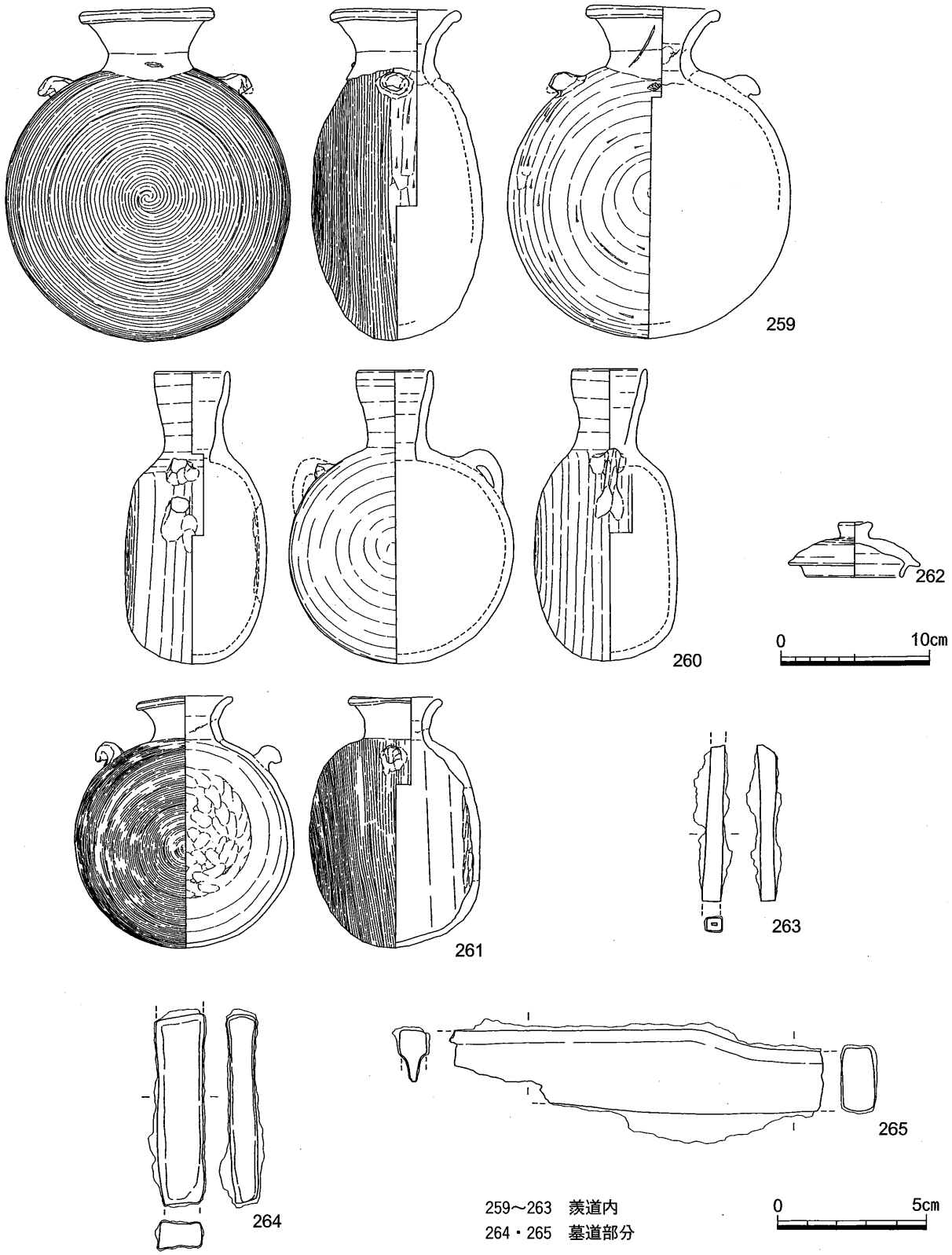
266～311は墳丘埋土から出土した遺物で、ほとんどが墳丘北西部から出土したものである。266～308は須恵器である。266～290は杯身で、口径12.1～15.0cmで、12～13cmのものが多い。底部にはヘラケズリを施す。口縁端部、返り部分ともに先端を丸くし、退化が進む。291～304は杯蓋で、口径は概ね13.0～16.0cm、頂部まで残るものにはいずれも頂部にヘラケズリが観察できる。口縁端部はほとんどの個体で丸くする。305は壺の蓋である。306・307は短頸壺で、306は体部が丸く、307は肩部が張る器形である。307は体部にカキ目を施す。308は提瓶で、体部は両側とも自然釉が掛かり、ともに回転ヘラケズリの後になでているようで、カキ目はない。309～311は鉄製品である。

312～315は周溝出土遺物である。312は弥生土器鉢で、体部に2条の凹線を施す。弥生時代中期後半のもので、混入品である。313～315は須恵器である。313は杯身、314は長頸壺、315は甕である。口縁端部はやや肥厚させる。体部外面には格子タタキの後カキ目を施す。

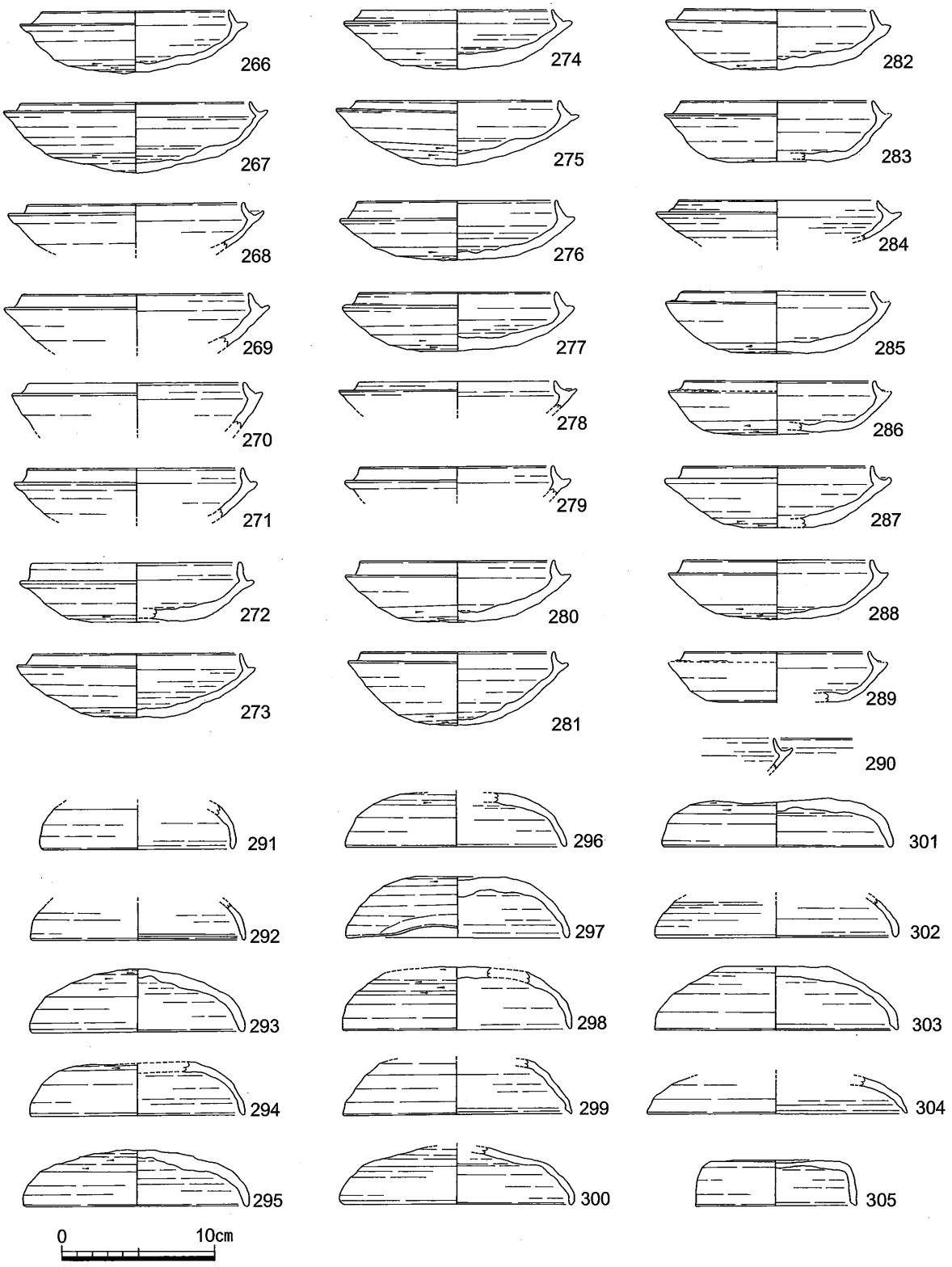
316～327は石室内の撹乱跡や表土中から出土した遺物である。316は弥生土器鉢で、体部には2条の凹線文を施す。弥生時代中期後半のもので、混入品である。317は土師器甕、318～323は須恵器で



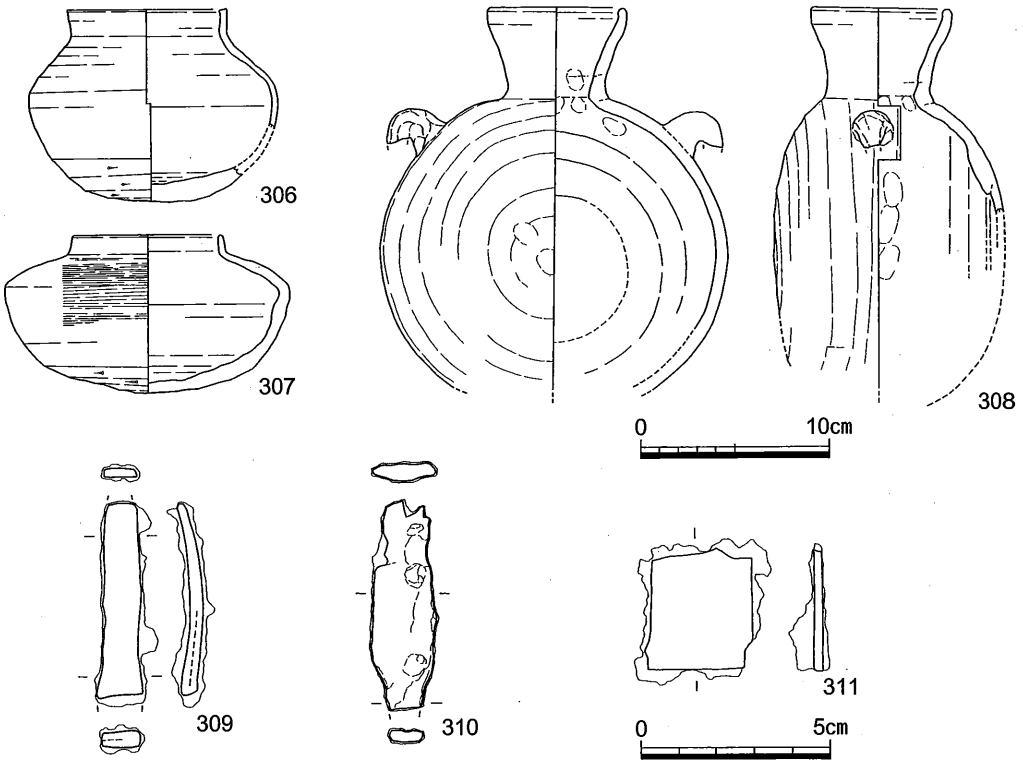
第102図　1号墳石室内遺物出土状況平面図（1/40）



第103図　1号墳石室内・羨道部出土遺物（1/4・1/2）



第104図　1号墳墳丘出土遺物（1）（1/4）



第105図　1号墳墳丘出土遺物（2）（1/4・1/2）

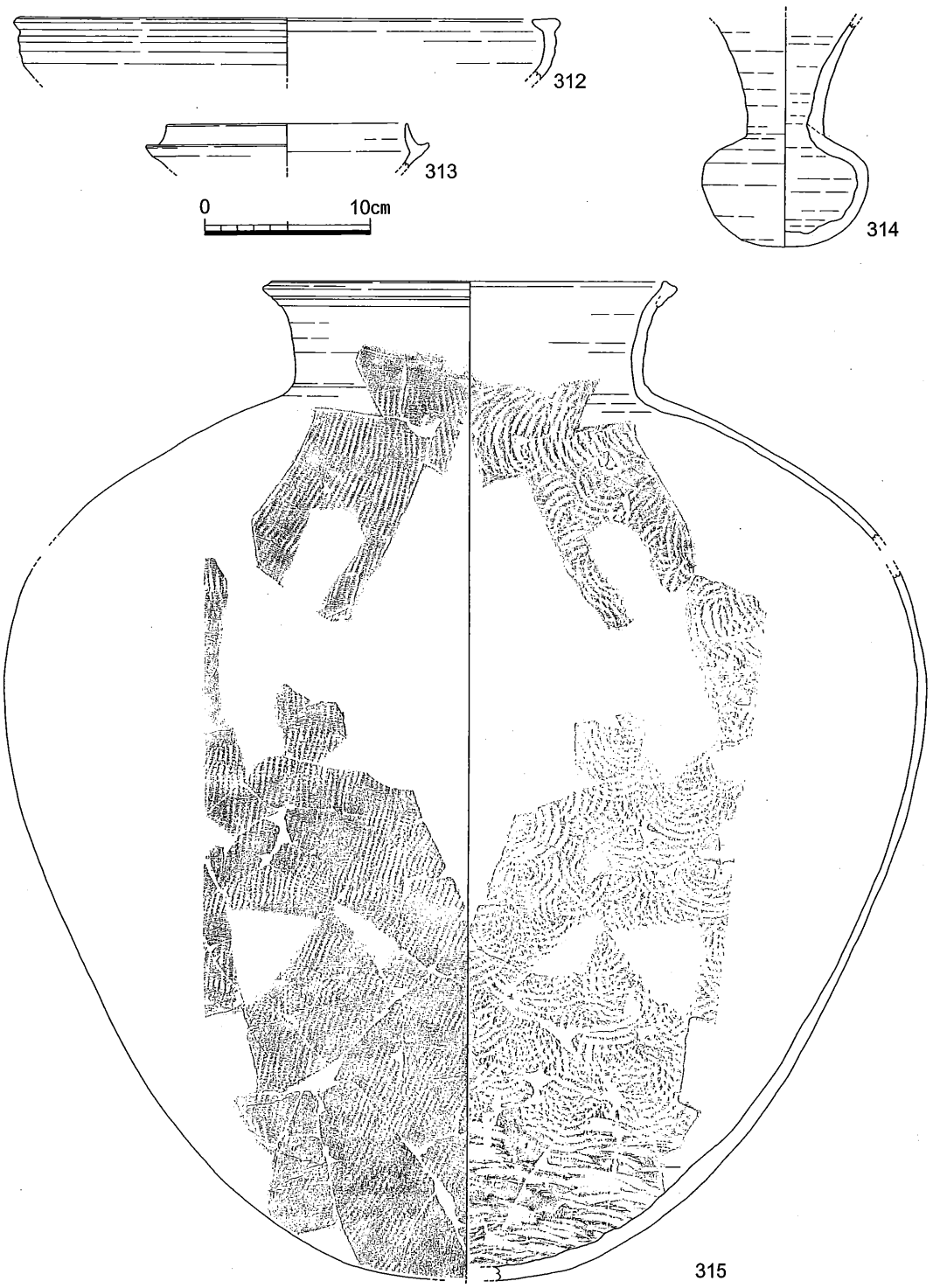
ある。318は杯底部で、319は皿である。317～319は9世紀代の遺物であることから、周囲に当該期の遺構がある可能性もある。320・321は杯蓋である。口径14.0～14.8cmで、頂部はヘラケズリを施す。323は甕で、頸部外面にヘラ描き文様を施す。324はサヌカイト製石鏃である。凹基式で、加工は縁辺部にしか及ばない。325は結晶片岩製の柱状片刃石斧で、刃部には擦痕が顕著に残る。先端部と側面に敲打痕が残る。326・327は鉄製品である。327は鉄釘である。

これらの遺物から古墳の時期は7世紀前半頃と考えられる。

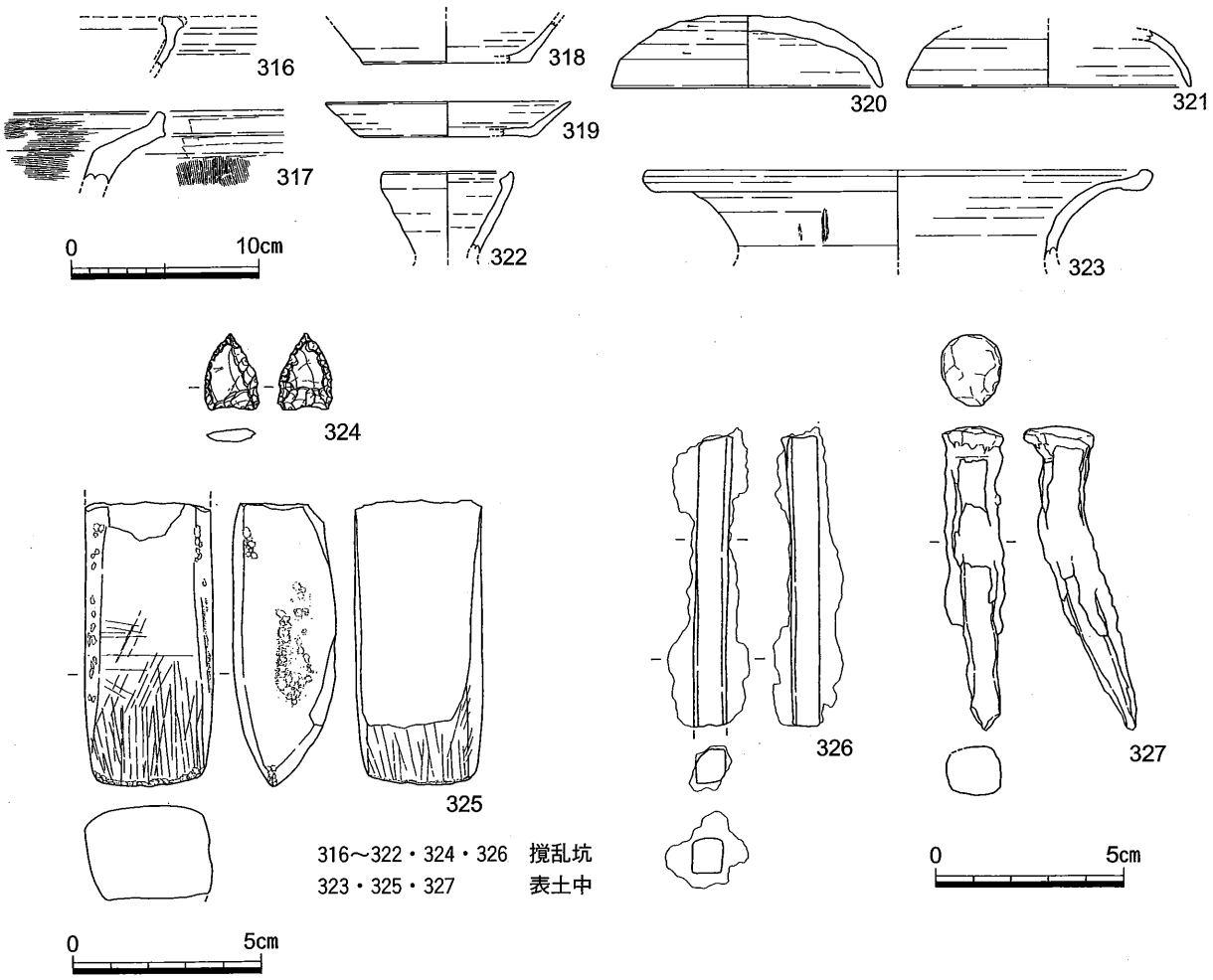
ST01（第108・109図）

Ⅰ－2区で検出した土坑である。丘陵頂部から北東に延びる尾根線上のやや北西に寄った地点、西浦谷1号墳の7.5m南西に立地する。標高約49.2mを測り、西浦谷1号墳の南西側裾部と標高はほぼ同じである。長方形を呈し、長軸をほぼ等高線に直交させる。長軸2.34m、短軸1.35m、深さは最も深い南東側で46cmである。埋土は暗灰色砂質土（基盤土ブロック）混灰黄色砂質土、断面は逆台形を呈する。土坑の底面は若干傾斜する。土坑の標高の最も高い東側のコーナーで、須恵器提瓶、杯身、杯蓋が出土した。土器の配置は土坑の南東辺に方向を揃えて、土坑の東隅から杯身に杯蓋を被せた状態のものが2個体ずつと杯身のみが1個体、さらに斜面下側には東から提瓶1個体と杯身に杯蓋を被せた状態のものが3個体ずつであった。また、部分的に炭化物が出土した。

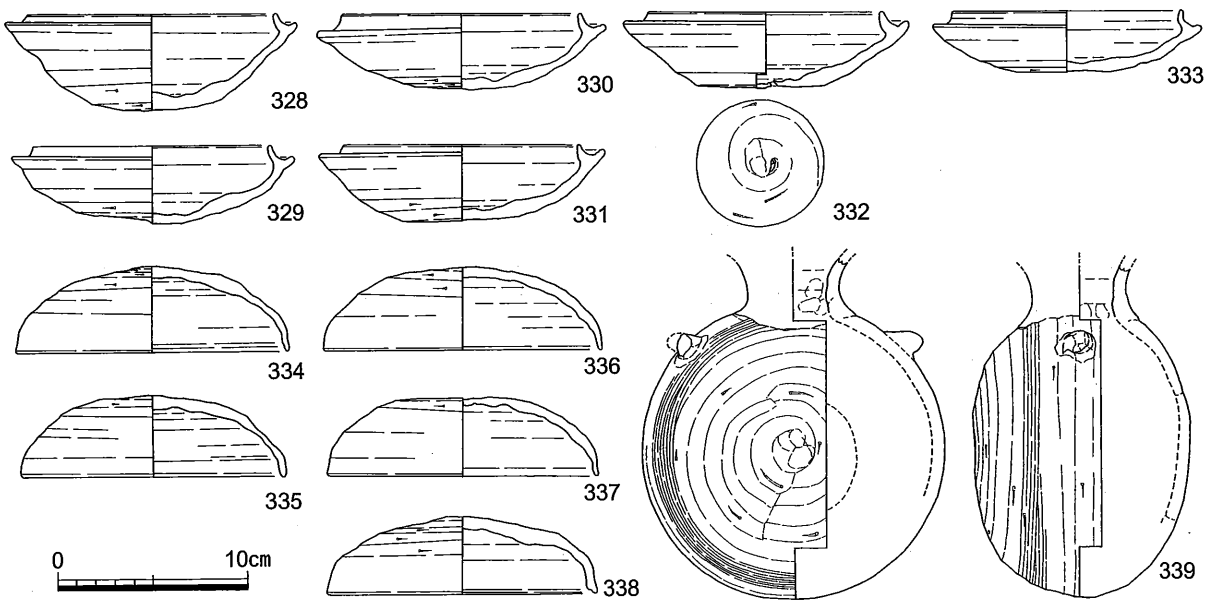
328～339は須恵器である。328～333は杯身で、いずれも底部にはヘラケズリを施す。口縁端部や返りの退化は著しい。334～338は杯蓋で、頂部にはヘラケズリを施す。339は提瓶で、体部両側ともにヘラケズリを顕著に残し、カキ目は片面の外側付近にわずかに施すだけである。肩部に付く把手は小突起状を呈する。



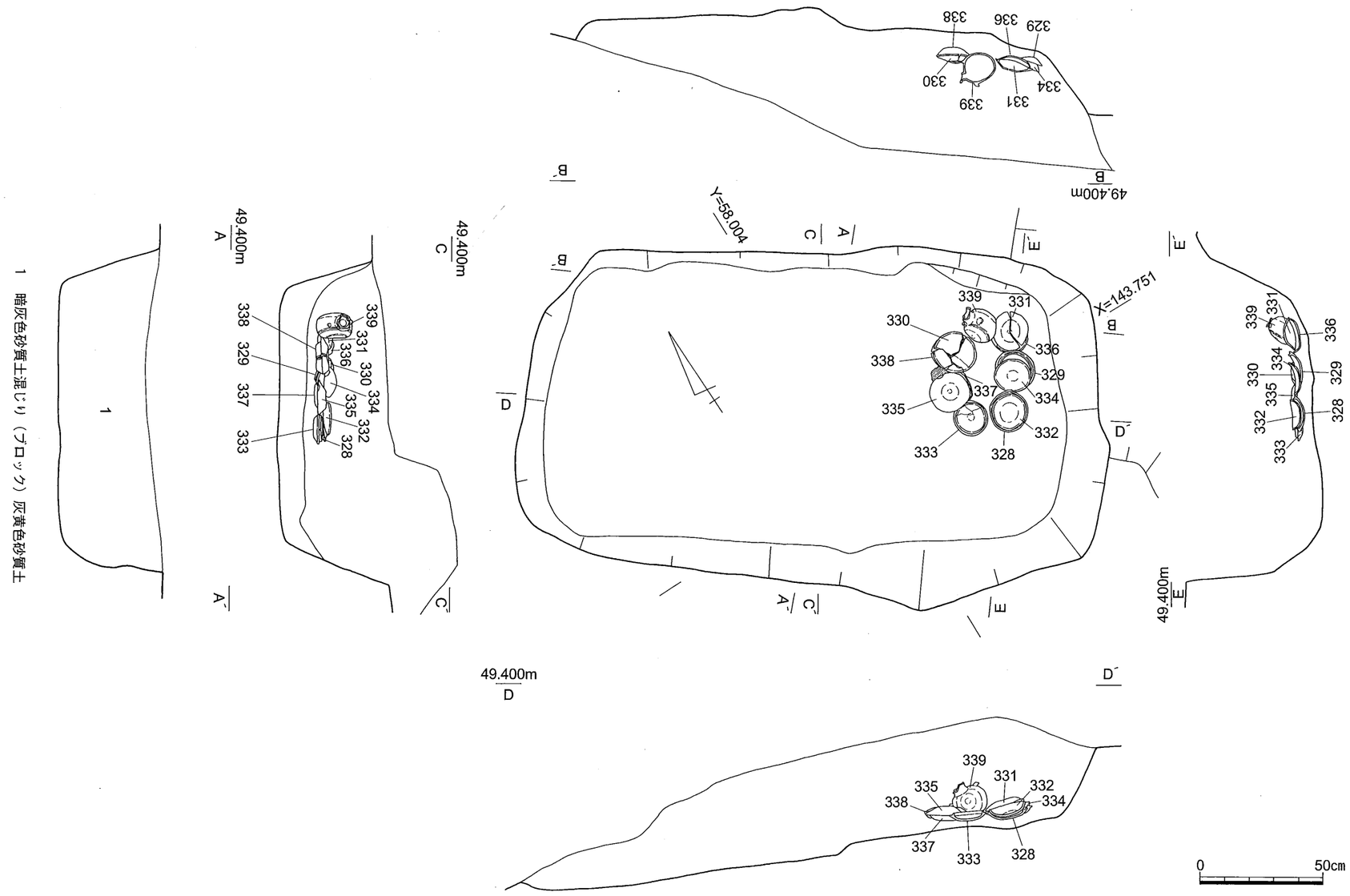
第106図　1号墳周溝出土遺物（1/4）



第107図　1号墳石室内撹乱・表土中出土遺物（1/4・1/2）



第108図　ST01出土遺物（1/4）



第109図　ST01平・断面図（1/20）

遺物の時期は７世紀前半頃と考えられるが、西浦谷１号墳の所属時期から、杯身の口縁端部や提瓶の体部調整、把手の形状からわずかに遅れると考えられる。

3　近世以降・時期不明遺構

（１）性格不明遺構

SX01D（第110図）

丘陵東斜面中央寄り付近で検出した。底部分には２箇所に直径30cm、深さ23cm程度の小ピットがある。底部は周囲の斜面に平行するような傾斜をもつ。長軸1.69m、短軸1.12m、深さは両端の浅い部分が15cmを測る。標高は50.0m、埋土中からは弥生土器小片が出土した。

SX02D（第110図）

丘陵東斜面中央寄り付近で検出した土坑である。SX01Dの約14m南側で検出した。長軸2.98m、短軸1.73m、深さは26cmで、標高は50.8mである。埋土中からは土器小片が出土しただけである。

SX03D（第111図）

丘陵部北東尾根の南側斜面上で検出した。長楕円形で、長軸5.80m、短軸2.43mである。深さは山側では40cm、麓側では10cmを測る。標高は45.7mである。底部は２段掘り状を呈する。埋土中からは土器小片とサヌカイト片が出土した。

SX04D（第112図）

丘陵北東尾根の南斜面上で検出した。不整形を呈し、長軸4.16m、短軸2.52m、底部は斜面の傾斜よりはややなだらかになっており、深さは山側では32cm、麓側では８cm、標高は42.7mである。埋土中からはサヌカイト製石鏃が出土した。

340はサヌカイト製の石鏃で、一部欠損するが、凹基式と考えられる。

（２）溝

SD01D・03D・08D～11Dは丘陵東斜面を開墾した際に掘削された溝と考えられる。出土遺物等からいずれも近世または近代以降のものである。

SD01D（第113図）

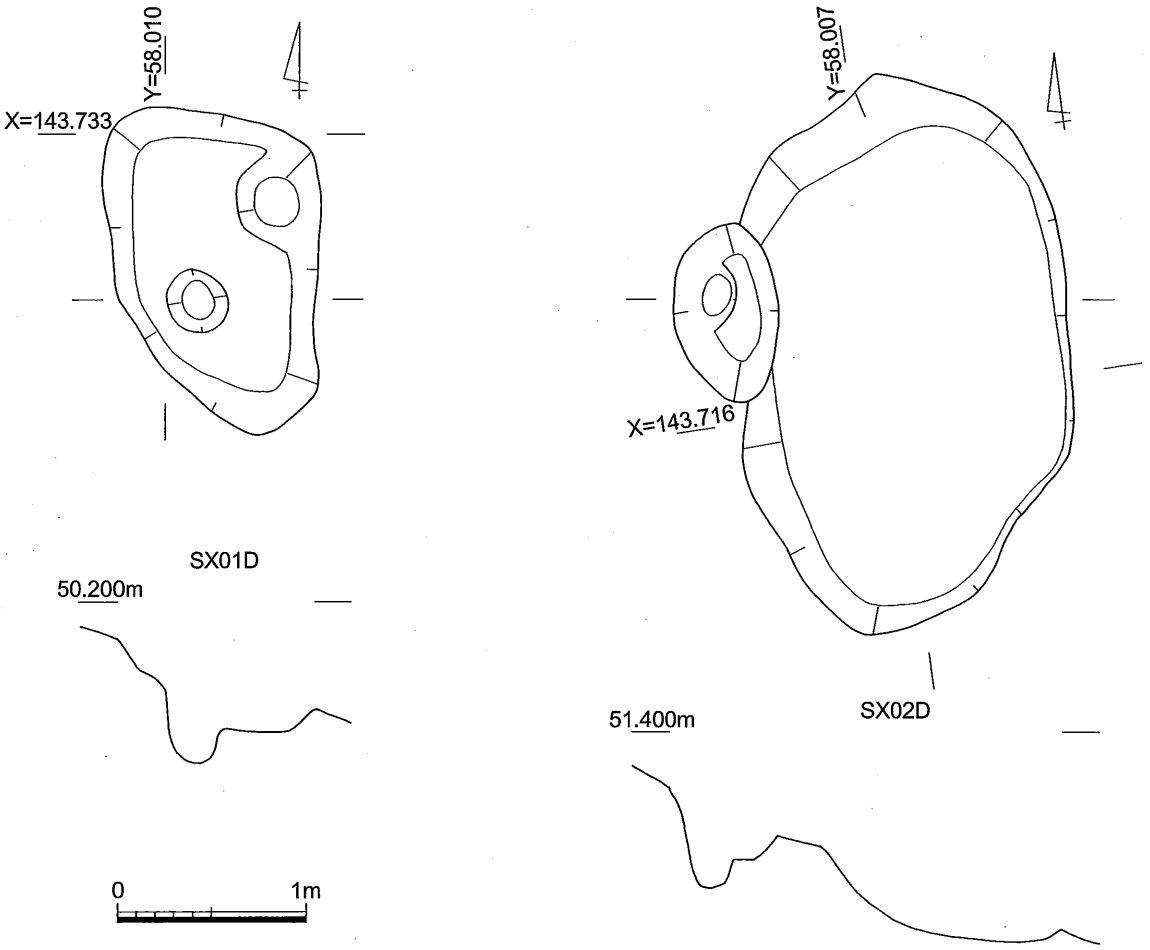
丘陵東側斜面で、等高線に平行の方向で検出した溝状遺構である。検出長は7.6m、幅は水平距離で66cmである。深さは22cm、山側と麓側の肩の高低差は27cm、断面形状はボウル形である。標高は46.9mである。

埋土中からは磨滅した弥生土器片や燻し瓦が出土した。近世以降のものと考えられる。

SD03D（第113図）

SD01Dの南端から約1.5m下がった位置で、等高線に沿って南へ延びる溝である。検出長が約45m、幅は水平距離で66～120cmである。深さは13～48cmで、標高の高い北側ほど狭く浅い。埋土中からは燻し瓦、磁器碗が出土した。SD01Dと同様近世以降と考えられる。

341は磁器碗である。外面には上絵付による文様を描いていたようだが、現在は色彩は残っておらず、顔料と考えられる痕跡が残っているだけであった。



第110図　SX01D・02D平・断面図（1/40）

SD08D（第113図）

SD03Dの南端より約３ｍ東側から等高線に斜交して北東へ下る溝である。検出長約9.5ｍ、幅0.63～1.40ｍ、深さは18～33㎝である。山側と麓側の高低差は58㎝で、麓に近くなるにしたがって幅が広がるが、深さは溝の中心寄り付近が最も深い。標高は41.2～42.6ｍである。埋土中からは磁器碗、羽釜等が出土した。磁器は型紙刷りのものが出土しており、遺構は近代以降のものと考えられる。

342は磁器小碗である。底部内面に赤絵が施される。343は磁器壺で、外面には呉須による染付が描かれる。高台部外面には砂が付着する。344は瓦質土器羽釜である。

SD09D（第113図）

SD08D南端部から標高で約１ｍ下がった位置から麓側へ向かって、等高線に直交する方向で検出した溝である。検出長2.4ｍ、幅66㎝、肩の標高差は10㎝で、深さは高い側が10㎝、低い側は５㎝程度である。標高は40.6ｍである。埋土中からは陶器小片が出土した。

遺構の時期は近世以降と考えられる。

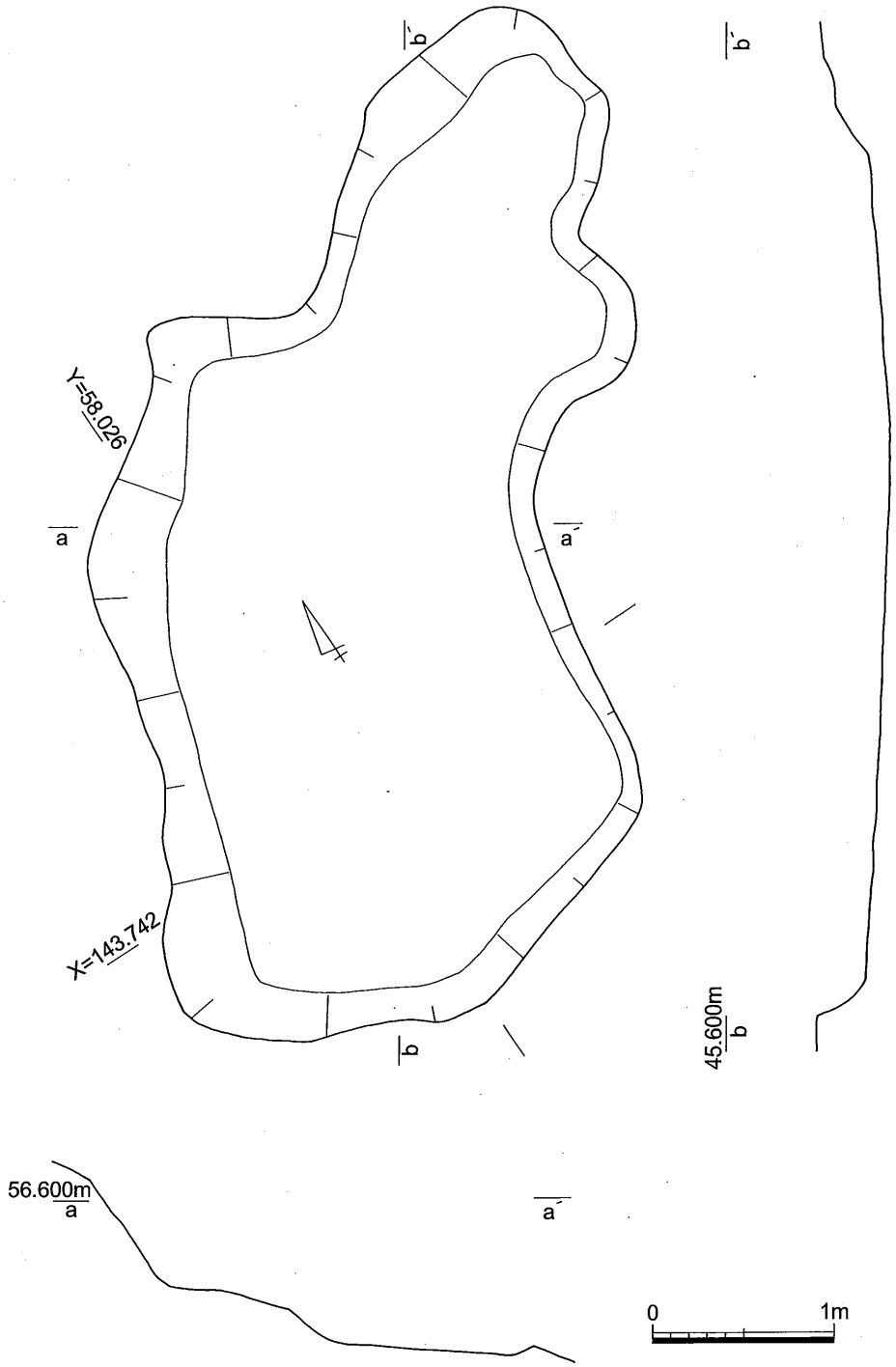
SD10D（第113図）

SD09Dから約2.5ｍ下がった位置で検出した溝である。等高線とほぼ平行である。南側で調査区外へ延びる。検出長11.3ｍ、幅3.68ｍ、肩の標高差は0.16～1.30ｍである。断面形状は浅い皿型で、深さは12～50㎝である。埋土中からは銅版転写による磁器片、陶器片、ガラス片が出土しており、近代

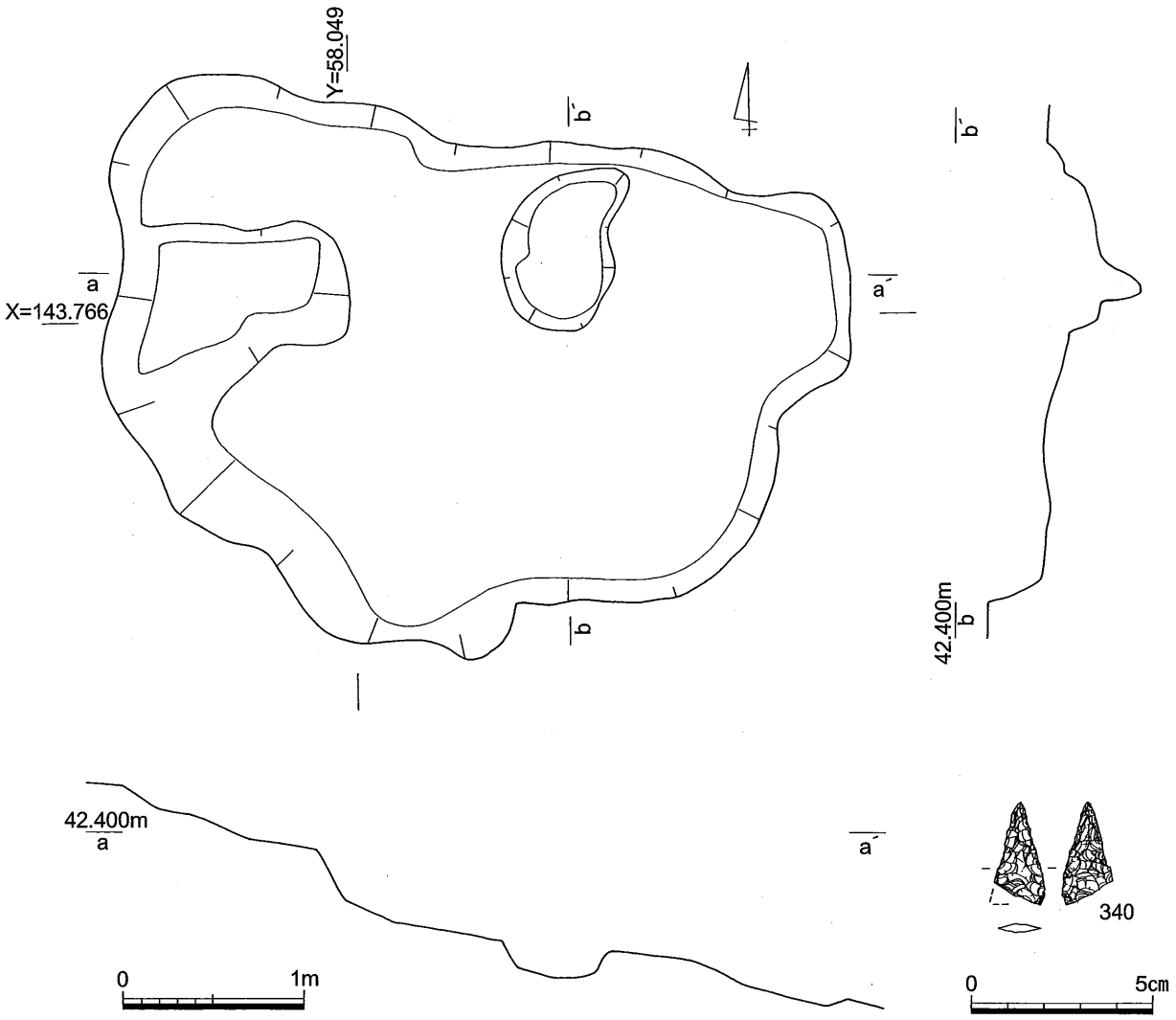
以降の所産と考えられる。

SD11D（第113図）

SD10Dから約４ｍ下がった位置で、ほぼSD10Dに平行して検出した。等高線ともほぼ平行である。南側は調査区外へ延びる。検出長6.3ｍ、幅2.3～2.9ｍである。検出面の標高差は80～95㎝、深さは山側で36～50㎝、麓側で16～23㎝である。埋土中からは磁器碗、焙烙、燻し瓦が出土した。溝の時期は近世以降と考えられる。



第111図　SX03D平・断面図（1/40）



第112図　SX04D平・断面図（1/40）、出土遺物（1/2）

SD02F（第114図）

丘陵北斜面の谷筋部分で検出した。北側は調査区外へ延びる。検出長9.5m、幅1.00～2.60m、深さ31cmで、概ね丘陵上部程幅が広く浅い。標高は41.0～43.8mである。断面形状は浅い皿状である。埋土中からは弥生土器小片、サヌカイト剥片が出土した。自然に形成された流路であろう。

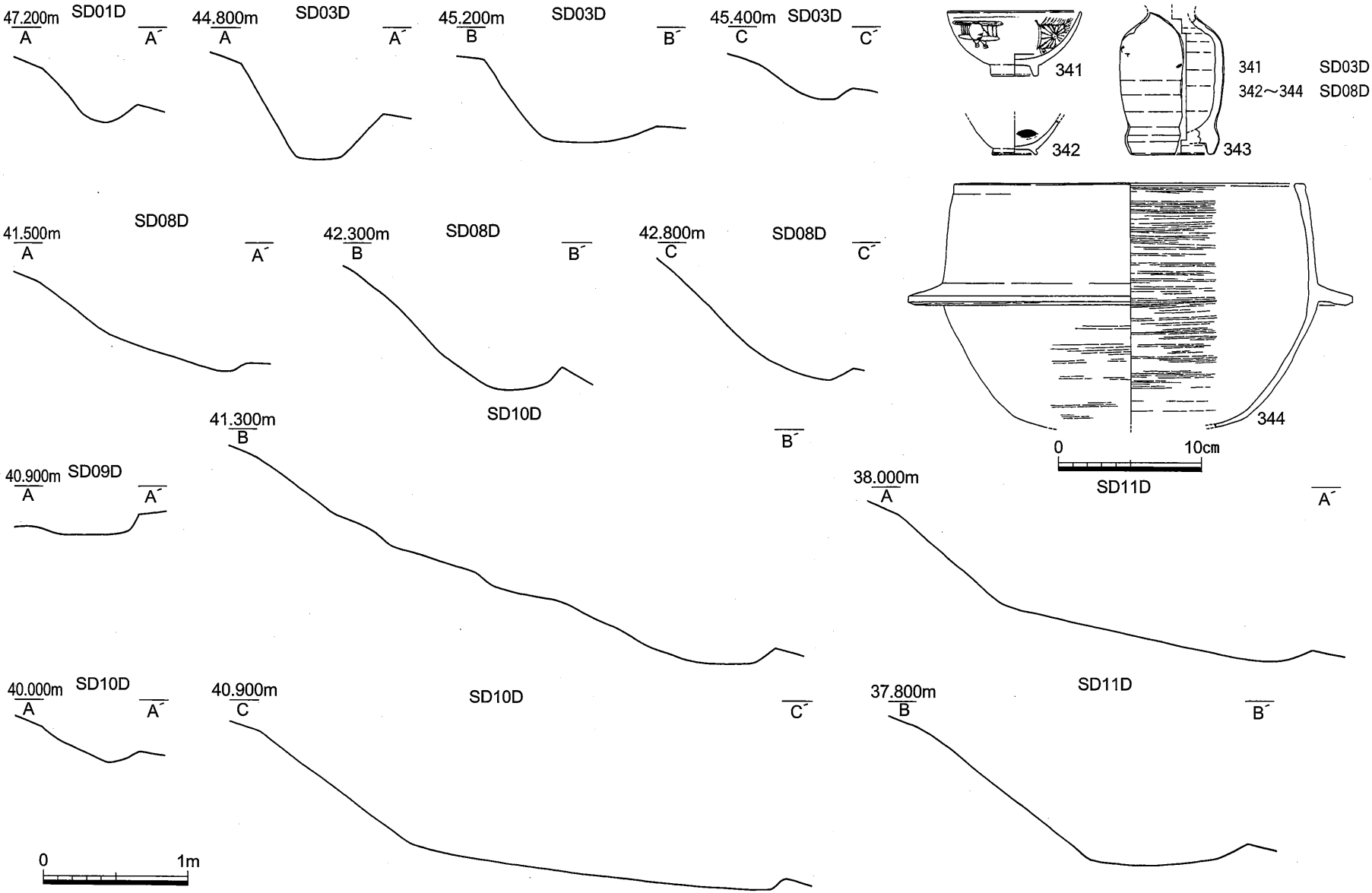
345・346ともに弥生土器である。345は甕小片で、全体に磨滅が進行している。346は壺底部である。いずれも弥生時代後期前半頃と考えられるが、丘陵上部からの流れ込みの可能性が高い。

SD04F（第114図）

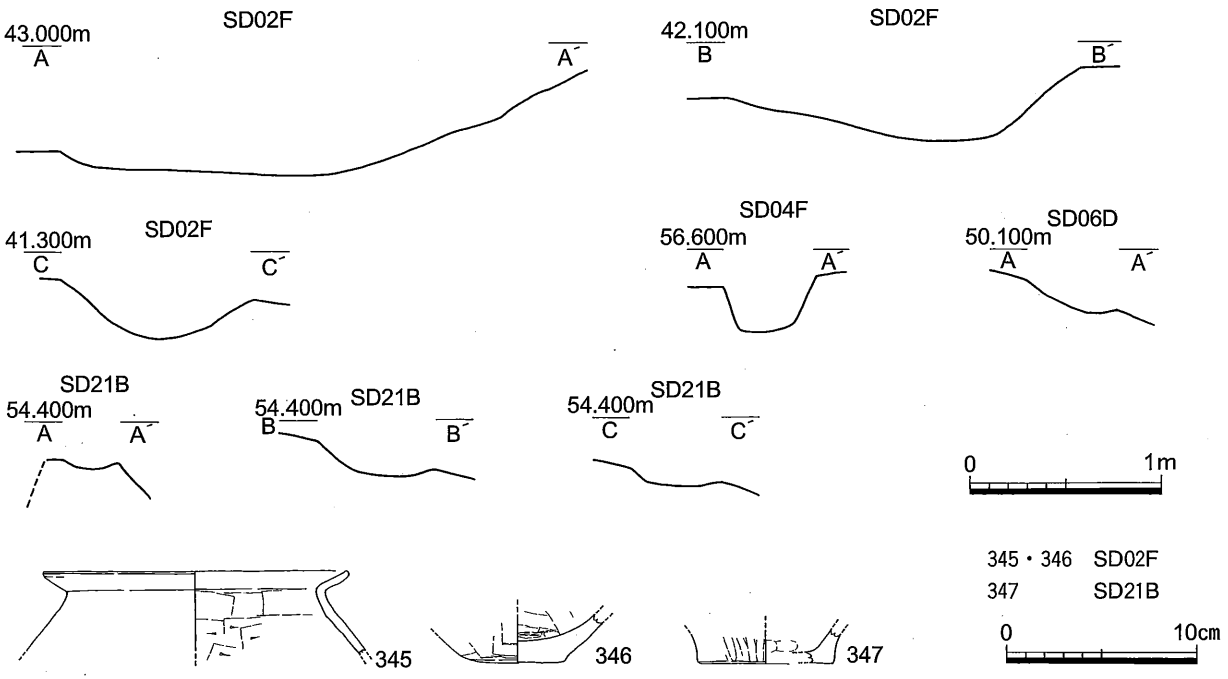
丘陵頂部より北西へ約１m下がった位置で、等高線に斜交して検出した溝である。検出長1.8m、幅48cm、深さ26cm、断面形状は逆台形である。埋土中からはサヌカイト剥片が出土した。遺構の時期は明らかではないが、SH05Fに付属する可能性のあるSD05Fと形状が類似していることから、これと同時期の可能性がある。

SD06D（第114図）

丘陵南斜面東側尾根線の東斜面で検出した。主軸方向が等高線とほぼ平行する。検出長5.3m、幅46cm、断面形状は浅い皿状である。検出面の標高差は16cm、深さは最大で８cmであるが、麓側ではほ



第113図　SD01D・03D・08D～11D断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第114図　SD02F・04F・06D・21B断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

とんど地表面と同じ標高である。埋土中からは弥生時代中期末～後期前半の弥生土器片が出土した。

SD21B（第114図）

丘陵南斜面西側尾根線の東斜面上で、等高線とほぼ平行して検出した。SH25B～SH27Bの上面で検出した。検出長5.8m、幅30～60cm、断面形状は浅い皿状である。検出面の高低差は２～８cm、深さ５～10cmである。埋土中からは弥生土器小片が出土したが、弥生時代後期初頭の竪穴住居跡の上面で検出しているので、混入品の可能性が高く、遺構の時期は明らかではない。

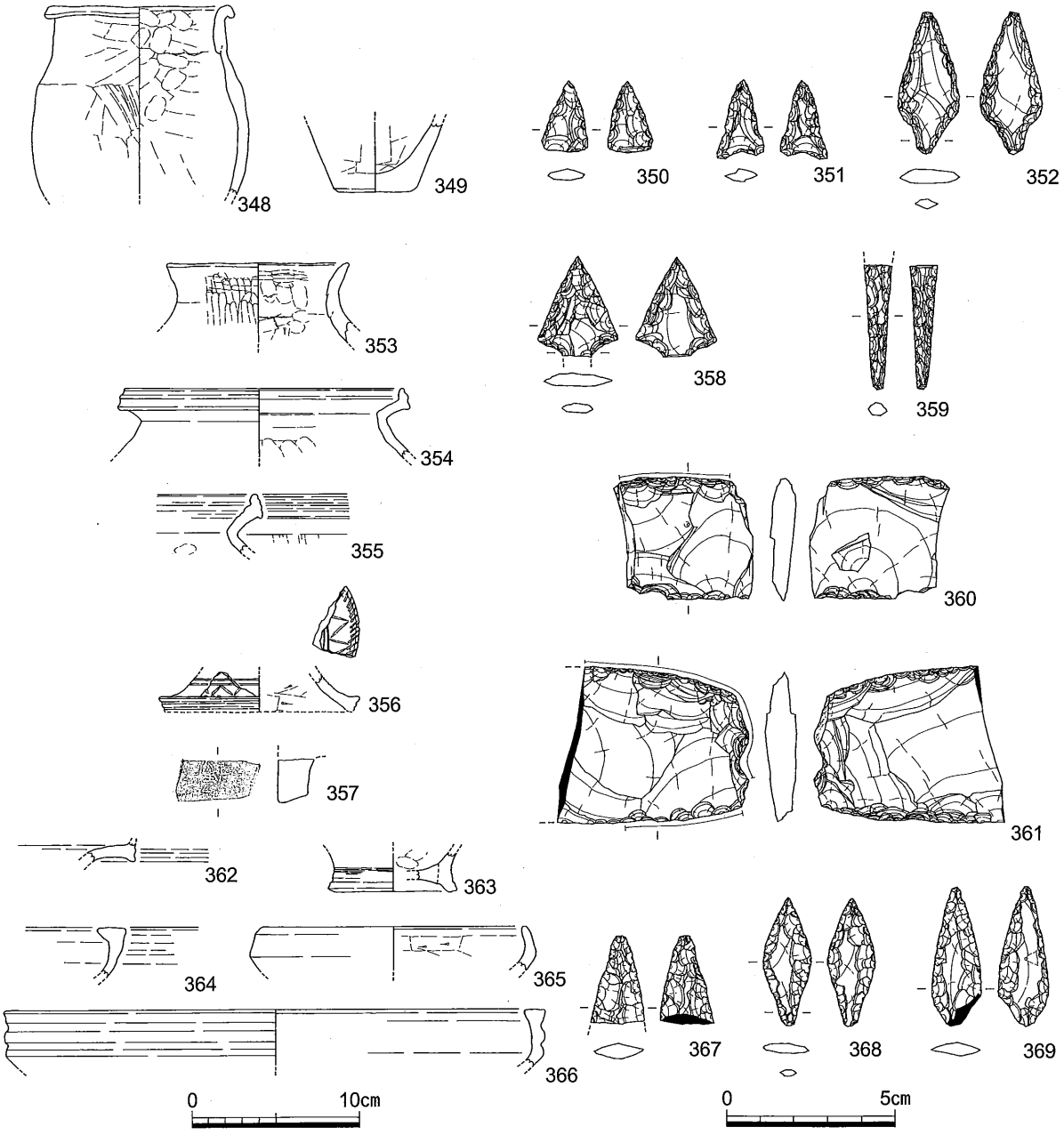
347は弥生土器甕底部小片で、外面はヘラミガキを施す。

4　その他の出土遺物（第115・116図）

348～351はⅠ区西半部（丘陵北東尾根線及びその西側の斜面）から出土した遺物である。348は弥生土器壺である。内面は調整が雑で、粘土の継ぎ目が観察できる。349は弥生土器壺底部で、348とほぼ同位置から出土した。350・351は上面精査中に出土したサヌカイト製石鏃で、350は平基式、351は凹基式である。いずれも１ｇ未満の小型のものである。

352はⅡ区南半中央部付近（丘陵頂部北部中央付近）から出土したサヌカイト製石鏃である。やや大振りの有茎式で、加工は縁辺部のみの簡単なものである。

353～361はⅢ区（丘陵南東部尾根線及びその両側）から出土した遺物である。353～356は弥生土器である。353は広口壺である。354・355は甕で、口縁端部に２～３条の凹線文を施す。356は高杯脚部で、端部には凹線を２条巡らせ、下部にはヘラ描きによる沈線と山形文を施す。357は軒平瓦片である。平瓦部分は剥離し、平瓦に足した粘土の部分のうち、瓦当面の左側の部分のみが残る。「高松　玉屋」の刻印が残る。358～361はサヌカイト製石器である。358は有茎式石鏃で、基部欠損し、裏面は縁辺部のみ加工する。359は石錐で、上部は欠損する。360は楔形石器で、上部には敲打痕を残す。361は石庖丁で、上・下部に敲打痕、側縁に抉りを残す。

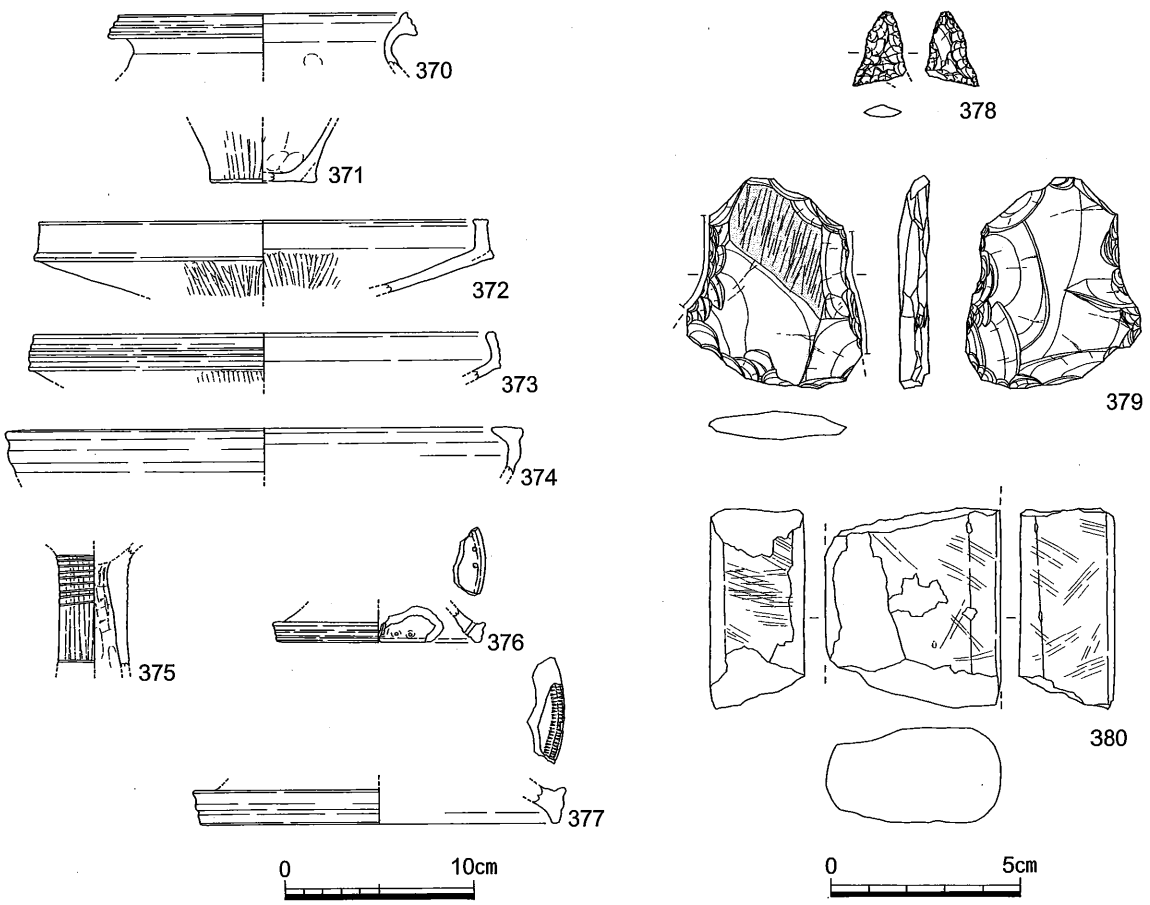


348～351　Ⅰ区
352　Ⅱ区
353～361　Ⅲ区
362～369　Ⅳ区

第115図　Ⅰ～Ⅳ区包含層出土遺物（1/4・1/2）

362～369はⅣ区（丘陵南斜面南西尾根線上及びその両側、尾根間の緩い谷筋）から出土した遺物である。362～366は弥生土器である。362は広口壺口縁部で、端部には凹線文を巡らせる。363は底部で、底部分を別の粘土で充填した様子が窺える。364～366は高杯である。364・366は口縁端部を平らにして、杯部には凹線文を巡らせる。ただし、364は外面の磨滅が著しく、明瞭には残らない。367～369はサヌカイト製石鏃である。367は下部が欠損している。368・369は有基式で、いずれも縁辺だけを加工する簡単なものである。

370～380はⅤ区（Ⅳ区南側）から出土した遺物である。370～377は弥生土器である。370は甕で、口縁端部に3重の凹線文を巡らせる。371は甕底部である。372～374は高杯杯部で、372・373は杯部



第116図　Ｖ区包含層出土遺物（1/4・1/2）

に放射状のヘラミガキを施し、373・374は外面に凹線を巡らせる。375～377は高杯脚部で、375は脚上端部近くに８条の沈線文、中程に１条の沈線文が見られる。底部は残っておらず、もとは充填していたと思われる。376・377は端部に凹線文を施す。376は脚部端に小孔が３孔残る。377はヘラによると思われる刺突文が２段に残される。378・379はサヌカイト製石器である。378は凹基式石鏃である。379は石鏃の破損品の可能性がある。上部に顕著な擦痕を残し、両側縁に敲打痕を残す。380は緑泥片岩製の柱状片刃石斧で、破損品の可能性がある。

これらの遺物は357を除けばいずれも弥生時代中期末～後期初頭のものと考えられ、遺構の時期とほぼ同じ時期の遺物である。

第4章　まとめ

弥生時代中期後半～後期前半の集落について

1．竪穴住居跡について（第3表）

西浦谷遺跡の立地する丘陵は北側にやや深い谷が入り、南は緩やかな谷地形となっている。丘陵頂部から南西・南東・北西・北東に尾根が延び、山頂から西・東側は斜面となっている。西浦谷遺跡では弥生時代中期末～後期前半頃までの竪穴住居跡を24棟検出した。

西浦谷遺跡の住居は、斜面の流出により全体の規模のわからないものも多いが、概ね①面積約34㎡、円形の竪穴住居（SH14B）、②面積20～28㎡程度、隅丸方形の竪穴住居（SH02D・05F・07A）、③面積6～12㎡程度、平地式住居（SH08A・09A・11A・12A）にわけられる。

この遺跡で最も中心的な建物と考えられるのはSH14Bである。山頂から南西の尾根線をやや下がった場所に位置し、面積34㎡程度のやや楕円気味の円形の竪穴住居跡である。焼失家屋で、炭化材の残存状況から壁溝部分に板を杭で留めて壁としていた様子がわかる。住居内からは石鏃が多く出土したが、土器の出土は少なく、失火ではなかったのであろう。同一の尾根線上にはSH21B・22B・25B～27Bが重複関係を持ちながら検出されている。山頂から南東へ延びる尾根線上では、検出した竪穴住居跡の中でSH14Bの次に規模の大きかったSH07Bを検出した。隅丸方形で約28㎡を測ると考えられるが、麓側である東側は流出のため消失している。この2棟の間を結ぶように、等高線に沿って平地式住居跡SH09A・11A～13A、SH07Aに隣接して、隅丸方形を呈する竪穴住居跡SH03D・04Dを検出した。建物面積は6㎡前後のものと12～14㎡程度のものに分かれる。検出された土坑の大部分がこれらの竪穴住居跡に囲まれるようにして検出されたことから、多少の時期差を持ちながらも山頂南西尾根線上と南東尾根線上に大きめの竪穴住居跡を配して、それらを結ぶように小規模な住居跡を配したと考えられる。また、北西尾根線上と北東尾根線上にそれぞれ1棟ずつ面積が20㎡程度の、西浦谷遺跡の中では中規模程度の隅丸方形を呈する竪穴住居跡が検出されている。

2．土坑について（第4表）

調査地からは136基の土坑を検出した。

形状は概ね隅丸方形、円形、不整形のものに分かれるが、不整形や円形の形状を示すものも、各遺構の下面の形状を考えれば、原型は隅丸方形であったものが、壁面が崩れて上面の形状を変えた場合が多くあると考えられ、隅丸方形のものが約7割を占める。底部の形状は平らなもの、直径20㎝程度の小ピットが1～2穴見られるもの、小ピットが多数見られるものに分類できる。規模は概ね短軸が0.5～2.1m、長軸が0.8～2.8m、面積は1～2㎡のものが多い。

土坑の配置としては、山頂南西尾根線と南東尾根線を結ぶように並ぶ竪穴住居跡に囲まれるように、丘陵南斜面の、比較的等高線の直線的な位置に集中し、約50基の土坑が検出された。段状遺構SI01C～SI07Cを造成し、それにあわせて長軸0.9～1.9m、短軸0.7～1.5m程度の隅丸方形の土坑をほぼ直線的に並べて配置する。特にSI01C・02C上およびその周辺では土坑が列を成して並ぶ。土坑の形状は、底の平らなものが最も多く、底部に小ピットが1穴あるものもある。これらの中には土坑内に土器が残されている場合もあり、これらの時期から竪穴住居跡とほぼ同時期と考えられ、集落内の貯蔵施設として機能していたと考えられる。

その他土坑の集中する位置としては、山頂南西および南東へ延びる尾根線上が上げられる。土坑の形状は大部分が隅丸方形で、底部に１～２穴の小ピットをもつ。この位置は竪穴住居跡が検出された位置とも概ね一致し、中には住居に近接するものもある。貯蔵穴の機能をもつものも考えられるが、建物跡を復元するにはいたらなかったものの柱穴跡などの機能も考えられよう。

土坑の中には落とし穴の機能を持つものもある可能性もあろうが、土坑内を始め、遺跡全体からの縄文土器は出土しなかったこと、土坑の位置が竪穴住居跡に近接することから、落とし穴とする確証はない。

３．最後に

西浦谷遺跡は高松平野の東部、立石山塊の西部に位置する標高約57ｍの丘陵上に位置する、弥生時代中期後半～後期前半頃に営まれた高地性集落と捉えられようが、検出された竪穴住居跡や土坑の数量から、一般集落としての性格を持っていたと考えられる。その一方、集落内の中心建物の面積が34㎡程度と、香川県全体から見れば中程度の規模しか備えていない(1)。西側へは高松平野が一望でき、南側へは三木町から白山までが見渡せる、高松市から三木町へかけての平野部への眺望を意識した立地と考えあわせ、平野部に母集団を持つ分村的な集落と考えられる。

森格也氏は、高地性集落を瀬戸内海への眺望が優れ、主に海洋を航行するものを見張る目的としたものと、周辺の平野への眺望に優れ、平野部に生活する母集団から分村し、山頂や尾根上に居を構えて、平野部に見張り情報伝達を目的としたものに分類しているが(2)、西浦谷遺跡は後者を目的としたものと考えられよう。

また、西浦谷遺跡周辺ではほぼ同時期の高地性集落として久米池南遺跡、白山２・３遺跡、平野部の遺跡として前田東・中村遺跡、鹿伏・中所遺跡が挙げられ、これらの遺跡とも深いかかわりをもつと考えられよう。最後にこれらの遺跡の概要を述べる。

久米池南遺跡(3)

西浦谷遺跡より３㎞西北西に位置する。大きく見れば立石山塊から西へ伸びる丘陵の西端部、標高約52ｍの丘陵上に立地する。北に瀬戸内海、西・南に高松平野の眺望がよく開ける立地である。

山頂付近からおもに丘陵北斜面にかけて竪穴住居跡９棟、掘立柱建物跡２棟、段状遺構２基のほか、これら居住区に近接して土坑墓が検出されている。

出土遺物では鉄器の出土量が多く、土坑墓の内の１基からは鉄剣が出土していることから、集落内には立場の強い人物がいたと想定され、また、高地性集落として著名な紫雲出山遺跡、心経山遺跡との類似点として指摘されている。また、有茎式石鏃の量の多さを挙げているが、これは西浦谷遺跡とも共通する。そのほか、掘立柱建物跡を描いたと考えられる絵画土器が出土している。

前田東・中村遺跡(4)

高松平野の東端部付近、三木町との境付近に位置する。東側には西浦谷遺跡が立地する立石山山塊が迫る。

縄文時代後期～古代までの集落が検出されているが、本格的な集落の出現は弥生時代中期後半頃である。この時期の遺構はまだ数少なく、方形周溝墓１基と竪穴住居跡、土坑、溝、旧河道が検出

されている。遺構は少ないが、旧河道からこの時期の土器が多量に出土しており、調査地の北側に集落が想定されている。この遺跡は弥生時代後期になると遺構数がかなり増加し、集落がさらに発展する様子が窺える。

鹿伏・中所遺跡(5)

西浦谷遺跡より約2.8km南東、平野部の北端付近、立石山山塊の南裾付近に位置する。南北160m、東西140mの範囲で確認されたが、遺跡の内容により集落はさらに東へ広がると考えられる。弥生時代中期から集落が出現し、後期～古墳時代前期まで拠点集落となっていたと考えられる遺跡である。また、弥生時代後期後半～後期末の段階では土器棺を埋葬施設とする墓域も確認された。

白山１・２・３遺跡(6)

白山３遺跡は白山山麓より南西方向に派生する丘陵頂部と急傾斜面上、谷筋を含む緩傾斜面部に所在する。標高50m前後で、白山の裾野付近に立地し、三木町内の眺望に優れると考えられる。竪穴住居跡、土坑墓、土坑などが検出されており、居住区と墓域が混在する様子が窺える。

白山２遺跡は標高203mの白山の山頂に位置し、竪穴住居跡と箱式石棺が調査されている。

白山の西麓に位置する白山１遺跡からは「六区袈裟襷文銅鐸」が出土しており、銅鐸、山頂の遺跡、やや高い場所にある集落の３者の有機的なつながりも指摘されている。

注

（１）香川県教育委員会ほか「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第32冊　中間西井坪遺跡Ⅱ」

（２）森格也「瀬戸内と高地性集落」『吉備の考古学的研究（上）』1992

（３）高松市教育委員会「久米池南遺跡発掘調査報告書」1989.3

（４）香川県教育委員会ほか「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　前田東・中村遺跡」1995.3

（５）香川県教育委員会ほか「高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成６年度　多肥松林遺跡　鹿伏・中所遺跡」1995.3
香川県教育委員会ほか「高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成７年度　鹿伏・中所遺跡」1996.3

（６）三木町教育委員会「香川厚生年金健康福祉センター建設用地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　白山３遺跡」2001.3
香川県教育委員会「新編香川叢書　考古編」1983.3

第３表　竪穴住居跡一覧表

区名	遺構番号	立地	形状	規模	面積	床面のレベル	主柱穴	壁溝	壁際ピット	主な出土遺物	特記事項
Ⅰ-2	SH02D	丘陵北東部尾根線上	隅丸方形	5.43×3.6～	19.55～	48.2	4（方形）	西	×	弥生土器高杯　有茎式石鏃	焼失家屋
Ⅰ-2	SH03D	丘陵東部尾根線上	隅丸方形	3.84×3.51	13.5	55.2	1穴のみ明確	×	×	弥生土器壺・甕　有茎式石鏃	
Ⅲ-1	SH04D	丘陵東部尾根線上	隅丸方形	3.78×3.2～	12.1～	52.9	3	西半	×	弥生土器壺・甕　扁平片刃石斧	中央付近に焼土集中あり炉跡か
Ⅱ-1	SH05F	丘陵北部尾根線上	隅丸方形	4.2×5.4	22.7	55.3	6	北・東断続的	○	平基式石鏃	
Ⅳ区	SH06A	丘陵東部尾根線上	方形	2.43×3	7.3	57.1	3穴	×	(○)	なし	
Ⅲ-1～Ⅳ	SH07A	丘陵東部尾根線上	隅丸方形	5.3×5.1	28.1	55.9	4	西部	○	弥生土器壺・甕　柱状片刃石斧	
Ⅱ-1～Ⅳ	SH08A	丘陵東部尾根線上	円形	直径4	12.6	56.8	4	南・東	(○)	石錐	平地式
Ⅱ-1～Ⅳ	SH09A	丘陵東部尾根線上	隅丸方形	2.8×2.2	6.2	57.1	2穴検出、4穴?	北・西	○	なし	平地式
Ⅳ区	SH11A	丘陵南部尾根線上	円形	直径3	5.9	57.5	4	北・西	○	なし	平地式
Ⅳ区	SH12A	丘陵南部尾根線上	円形	直径2.6	5.7	57.5	不明	×	(○)	なし	平地式
Ⅱ-1・2区	SH13A	丘陵頂部	隅丸方形	4.2×6.4	21.1	57.8	4または5	北西	○	なし	平地式
Ⅳ区	SH14B	丘陵南部尾根線上	円形	7×6.4	34.1	56.4	8～9	ほぼ全周	○	弥生土器甕　有茎式石鏃	焼失家屋
Ⅳ区	SH15B	丘陵南部尾根線上	隅丸方形	3.3×３	9.9	56.4	5	南・北	○	弥生土器壺	
Ⅳ区	SH16C	丘陵南斜面	隅丸方形	5.2～×1.7～	8.8～	49.6	不明	×	×	弥生土器壺・高杯	焼失家屋
Ⅳ区	SH17C	丘陵南斜面	隅丸方形	2～×4.1～	8.2～	55.2	不明	×	×	弥生土器壺　楔形石器	SI01内
Ⅲ-2	SH18C	丘陵南東斜面尾根線上	円形または隅丸方形	3.27×2.8	9.2	51.0	5	北	○	弥生土器壺・甕	SI05内
Ⅳ区	SH19C	丘陵南東斜面	隅丸方形	1.5～×4.2～	6.3～	51.2	不明	北	×	弥生土器壺・甕・高杯	SI03内
Ⅴ区	SH21B	丘陵南部尾根線上	方形	2.8～×0.86～	2.4～	54.6	2	×	×	弥生土器壺・甕・有茎式石鏃	
Ⅴ区	SH22B	丘陵南西部尾根線上	方形	3.07×0.8～	2.5～	51.9	1	×	×	鉄器	
Ⅴ区	SH23B(西)	丘陵南西部尾根線上	隅丸方形	5.4×1.3～		53.6		×	×	なし	
Ⅴ区	SH23B(東)	丘陵南西部尾根線上	不明	3.5×1.5～		53.5	不明	×	×	なし	
Ⅴ区	SH25B	丘陵南部尾根線上	隅丸方形	4.66×1.7～	8.0～	54.4	4	南	○	弥生土器壺　有茎式石鏃	焼失家屋
Ⅴ区	SH26B	丘陵南部尾根線上	隅丸方形	2.7～×1.7～	4.6～	54.5	4	×	×	なし	
Ⅴ区	SH27B	丘陵南部尾根線上	隅丸方形	2.7～×1.7～	4.6～	54.2	不明	北西	×	弥生土器壺・甕・高杯	

第４表　土坑一覧表

遺構番号	形状	長径（長軸）	短径（短軸）	深さ（cm）	埋土	断面形状	底部の状況	標高	出土遺物	備考
SK001C	隅丸方形	1.43	0.9	77	黄灰色・灰黄色小礫混じり砂質土、中位に花崗岩混じり	逆台形	—	52.8	弥生土器甕など	SI01C内
SK002C	隅丸方形	1.05	0.67	98	小礫混じり灰黄色砂質土、花崗岩ブロック混じり灰色粘土	逆台形	—	52.8	弥生土器小片	SI01C内
SK003C	隅丸方形	1.20	1.20	60	黄灰色小礫混じり砂質土	逆台形	—	53.3	弥生土器甕片、サヌカイト剥片	SI01C内
SK004C	隅丸方形、東側では肩崩れ	2.16	1.25	80・62	—	逆台形	—	52.8	弥生土器底部、器台、サヌカイト石庖丁、剥片	SI01C内
SK005C	長楕円形	1.18	0.76	16	黄灰色砂質土	逆台形	１～２穴の小穴	52.7	弥生土器甕	SI01C内
SK006C	長楕円形	1.54	1.02	24	黄灰色砂質土	逆台形	—	52.2	—	SI01C内
SK007C	隅丸方形	0.87	0.81	14	黄灰色小礫混砂質土	逆台形	—	52.9	—	SI01C内
SK008C	隅丸方形	1.57	1.23	40	灰黄色砂質土	逆台形	—	54.7	弥生土器小片	SH17C内
SK009C	楕円形	1.12	0.66	—	—	袋状	—	55.2	—	SH17C内
SK010C	隅丸方形、東側では肩崩れ	1.34	1.0	30	黄灰色砂質土	袋状	—	54.6	—	SH17C内
SK011C	隅丸方形	1.74	1.30	18～36	褐色砂質土	逆台形	—	54.8	焼土	SI02C内
SK012C	楕円形	1.56	1.13	20・25	褐灰色小礫混じり砂質土、花崗岩ブロック混褐灰色砂質土	逆台形	中央に１穴、周縁に５穴	51.2	—	
SK013A	長方形	1.60	0.9	64	灰黄色砂質土	逆台形	平ら	57.8	弥生土器底部、サヌカイト剥片	
SK014A	不整形	1.54	1.06	20～40	—	摺鉢状	小穴が５穴	57.8	なし	
SK015A	円形	1.20～1.40	—	50	—	摺鉢状	深さ10cm未満の小穴２穴	57.7	なし	
SK016A	不整形	1.32	0.73	37		擂鉢状	３穴程度	57.6	なし	
SK021A	隅丸方形	1.51	1.44	108	灰黄色砂質土	逆台形	中央に小穴１穴	57.2	サヌカイト剥片	
SK022A	隅丸方形	1.5	1.18	98	灰黄色砂質土	逆台形	中央に小穴１穴	56.5	サヌカイト剥片	
SK023A	不整形	2.4	1.18	40	—	浅い皿型	中央に小穴１穴	56.0	弥生土器壺、サヌカイト剥片	
SK024A	不整形	1.78	1.65	58	—	逆台形	不規則に小穴５穴	55.6	サヌカイト剥片	
SK031A	不整形	2.1	1.74	77	暗灰色砂質土、黄灰色砂質土	段掘り状	不規則に小穴８穴	56.4～57.1	—	
SK032A	円形	1.34～1.40	—	70	炭化物含む黒色ブロック	逆台形	—	57.4	弥生土器甕底部、壺片など	貯蔵穴
SK041A	楕円形	1.98	1.56	48	黄灰色砂質土	逆台形	中央小穴１穴、縁辺に6穴くらい	57.3	—	
SK042A	不整形	1.45	1.18	60	—	段落ち状	小穴が２穴	57.7	弥生土器小片	
SK043A	楕円形	1.41	0.98	20	—	逆台形	—	57.3	サヌカイト剥片	
SK044B	隅丸長方形	1.22	0.77	50・2	—	逆台形	小穴２穴、小溝１条	56.8	弥生土器底部、サヌカイト剥片	小溝は後世のもの
SK051A	楕円形	1.3	0.68	38・7	灰黄色砂質土	逆台形で東に型崩れあり	中央、縁辺から小穴	57.0	弥生土器小片	

遺構番号	形状	長径（長軸）	短径（短軸）	深さ（cm）	埋土	断面形状	底部の状況	標高	出土遺物	備考
SK052A	隅丸方形	1.05	0.93	43・25	—	逆台形で南に型崩れ	中央から縁辺に3穴	57.3	—	
SK053A	不整円形	1.06	0.75	23・2	—	逆三角形状	縁辺から小穴6穴	57.3	—	
SK061A	隅丸方形	1.37	0.89	28・21	—	逆台形	溝状窪み	56.3	弥生土器甕底部、サヌカイト剥片	
SK071B	楕円形	1.48	1.27	24・0	灰黄色砂質土	鈍角三角形、北に型崩れ	北肩付近2穴、浅い	55.2	—	貯蔵穴
SK072B	隅丸方形	1.46	1.25	54・42	灰黄色砂質土	逆台形	不規則に2穴程度の小穴	55.2	弥生土器壺・甕・高杯	
SK073B	不整形	1.50	1.27	80・25	灰黄色砂質土	逆台形	小穴5穴	55.8	—	
SK074B	不整円形	1.00	0.91	34・14	灰黄色砂質土	逆台形	小穴4穴程度	55.0	弥生土器高杯	
SK075B	不整形	2.15	1.63	93	灰黄色砂質土	逆台形	小穴状の窪み	55.2	弥生土器壺、石鏃	
SK091B	隅丸方形	1.63	1.20	38	黄灰色砂質土、炭化物含む	逆台形	縁辺から小溝状の窪み	55.7	弥生土器小片、磨製石斧	
SK092B	隅丸長方形	2.72	0.88	54	—	V字形	小穴10穴程度	56.2	サヌカイト剥片	
SK093B	楕円形	1.68	1.06	18・0	黄灰色砂質土	鈍角三角形	小穴1穴	54.0	土器小片	
SK094B	不整円形	2.86	1.91	50・0	—	鈍角三角形	小穴多数	54.8	—	
SK101B	不整円形	1.50	—	77	黄灰色砂質土、黒黄色砂質土混じり	逆台形	—	55.9	弥生土器小片	
SK102B	隅丸方形	1.07	0.87	42	黄灰色砂質土	逆台形に近いボウル状	小穴状の窪み4穴	55.4	土器小片	
SK103B	不整形	1.24	1.08	50	黄灰色砂質土	逆台形に近いボウル状	小穴状の窪み	54.0	弥生土器壺片	
SK104B	隅丸方形	0.71	0.68	29	黄灰色砂質土	2段掘り状	—	54.0	—	
SK105B	隅丸方形	1.17	0.74	36・18	黄灰色砂質土	逆台形	小穴状の窪み	55.0	弥生土器壺片	
SK111B	隅丸方形	0.94	0.90	30	黄灰色砂質土	逆台形に近いボウル状	—	53.9	—	
SK112B	不整円形	0.96	0.68	20	黄灰色砂質土	皿型	—	53.8	—	
SK113B	不整円形	1,25	—	154	（上層）黄灰色砂質土、（下層）褐色砂礫（花崗岩風化土）混シルト質土	逆台形、南と北で型崩れ	—	54.2	弥生土器小片	
SK114B	不整円形	0.91~0.96	—	22	黄灰色砂質土		両端にピット状の窪み	53.6	土器小片	
SK115B	隅丸方形	1.04	0.60	21・28	黄灰色砂質土	段掘り状	両端にピット状の窪み	53.3	土器小片、サヌカイト剥片	
SK116B	楕円形	0.89	0.72	96・85	（上層）褐色砂礫（花崗岩風化土）混黄灰シルト質土 、（下層）黄色混灰色シルト質土	段掘り状	1箇所に溝状の窪み	53.7	土器小片	
SK117B	楕円形	2.10	1.54	28・56	—	2段掘り状	楕円の窪みの中に小穴2穴	53.3	土器小片	
SK121C	隅丸方形	1.59	1.28	57・28	灰黄色砂質土	逆台形	不規則に3穴程度	57.0	弥生土器壺。サヌカイト石庖丁	貯蔵穴？
SK122C	楕円形	2.12	1.52	44・26	灰黄色砂質土	逆台形	11cmの浅い窪み	56.9	土器小片	121Cに似る
SK123C	楕円形	2.14	1.27	31・20	灰黄色砂質土		縁辺部に小穴9穴程度	56.7	弥生土器高杯	

遺構番号	形状	長径（長軸）	短径（短軸）	深さ（cm）	埋土	断面形状	底部の状況	標高	出土遺物	備考
SK131C	隅丸方形	1.12~1.24	—	51・29	灰黄色砂質土	逆台形、周縁が窪む。	—	57.8	弥生土器多数	北側に張り出しあり。貯蔵穴または廃棄土坑
SK132C	隅丸方形	0.82~0.86	—	65	灰黄色砂質土	V字形	2～3穴が連結した小ピット	55.9	—	
SK133C	不整円形	1.40~1.46	—	50・24	褐色砂質土、暗灰褐色砂質土、焼土混じり赤褐色砂質土	逆台形	—	56.2	弥生土器小片	南側に張り出し、貯蔵穴か。
SK141C	隅丸方形	1.40	1.12	60・24	灰黄色砂質土	北側で袋状	北側で袋状	55.9	弥生土器高杯、叩き石	貯蔵穴？
SK151C	隅丸方形	1.28	0.82	52・0	黄灰色砂質土	逆台形	—	54.1	—	151C～154Cまで等間隔で面を揃える。貯蔵穴か？
SK152C	隅丸方形	1.72	1.10	78・6	灰黄色砂質土（暗灰色砂質土ブロック混じり）、花崗岩ブロック混じり黄灰色砂質土	逆台形	—	54.2	弥生土器甕、サヌカイト剥片	151C～154Cまで等間隔で面を揃える。貯蔵穴か？
SK153C	隅丸方形	1.35	1.07	57・10	灰黄色砂質土（暗灰色砂質土ブロック混じり）	逆台形	ピット4穴	54.3	弥生土器甕	151C～154Cまで等間隔で面を揃える。貯蔵穴か？
SK154C	隅丸方形	1.88	1.49	77・26	花崗岩ブロック混じり黄灰色砂質土 暗灰色砂質土混じり灰黄色砂質土	逆台形	—	54.7	弥生土器甕小片	151C～154Cまで等間隔で面を揃える。貯蔵穴か？
SK155C	隅丸方形	1.53	1.24	63・26	暗灰色砂質土混じり黄灰色砂質土	逆台形	—	54.6	弥生土器小片	151C～154Cと規模形状似る。傾斜に合わせて方向も変化か。貯蔵穴か？
SK156C	隅丸方形	1.36	1.22	39・5	灰黄色砂質土	逆台形	底部に3穴の小穴あり	54.2	弥生土器小片	151C～154Cと規模形状似る。傾斜に合わせて方向も変化か。貯蔵穴か？
SK157C	隅丸方形	1.52	1.40	55・42	灰黄色砂質土	2段掘り状	—	54.6	弥生土器小片	151C～154Cと規模形状似る。傾斜に合わせて方向も変化か。貯蔵穴か？
SK158C	隅丸方形	1.04	0.84	36・16	暗灰色砂質土ブロック混じり黄灰色砂質土	逆台形	—	53.8	弥生土器壺、高杯	151C～155Cと規模形状似る。傾斜に合わせて方向も変化か。貯蔵穴か？
SK159C	隅丸方形	1.16	—	100・86	暗灰色砂質土ブロック混じり黄灰色砂質土、炭化物ブロック少量混じる	逆台形、全体に肩が崩れて広くなっている		53.9	—	151C～154Cと規模形状似る。傾斜に合わせて方向も変化か。貯蔵穴か？
SK160C	隅丸方形	1.21	0.92	48・10	黄灰色小礫混じり砂質土	逆台形		53.5	—	153Cと軸を揃える。貯蔵穴？
SK161C	隅丸方形	1.60	1.40	68・52	（上層）暗灰色砂質土混じり黄灰色砂質土 （下層）灰黄色砂質土	逆台形	北西部から小穴	54.5	弥生土器高杯	貯蔵穴？162Cとは接合関係
SK162C	隅丸方形	1.44	1.15	50・36	暗灰色砂質土混じり黄灰色砂質土、底部に花崗岩ブロック混じり黄灰色砂質土	逆台形	—	54.4	弥生土器高杯、サヌカイト剥片	貯蔵穴？161Cとは接合関係
SK163C	隅丸方形	1.48	1.08	68・41	黄灰色砂質土	逆台形		54.4	弥生土器甕、底部	貯蔵穴？
SK164C	楕円形	1.06	0.64	24	黄灰色砂質土	ボウル型で、中央部はピット状	中央部に小穴	53.3	弥生土器甕、サヌカイト	
SK171C	不整方形	1.48	1.18	65	灰黄色砂質土、最底部に灰黄色粘質土が堆積	逆台形	中央部に小穴、北端部に溝状	54.7	—	
SK181C	隅丸方形	1.82	1.28	48・0	黄灰色砂質土	逆台形		52.1	弥生土器小片	貯蔵穴
SK182C	方形	0.84	0.52	41・18	黄灰色小礫混じり砂質土	逆台形	—	52.0	—	
SK183C	隅丸方形	1.68	1.30	58・30	黄灰色小礫混じり砂質土	逆台形	—	52.3	弥生土器壺、サヌカイト剥片	貯蔵穴
SK184C	楕円形	1.64	0.82	30・0	—	逆台形	縁辺に小穴、無関係か	52.3	弥生土器小片	
SK185C	隅丸方形	1.38	0.82	34・16	黄灰色小礫混砂質土	逆台形	—	52.1	—	貯蔵穴
SK191C	不整形	1.34	0.95	130	褐灰色小礫混砂質土、灰色粘質土	逆台形	—	52.9	—	
SK192C	隅丸方形	1.40	1.20	63・50	褐灰色小礫混砂質土	逆台形	中央に1穴	53.2	—	
SK193C	楕円形	1.32	1.03	53・33	—	逆台形	底部に不規則に9穴	53.5	—	

遺構番号	形状	長径（長軸）	短径（短軸）	深さ（cm）	埋土	断面形状	底部の状況	標高	出土遺物	備考
SK201C	楕円形	1.30	0.97	53・37	黄灰色砂質土	ボール型	—	50.9	—	
SK202C	不整形	3.22	2.54	40・24	褐色砂礫（花崗岩風化土）混砂質土、焼土あり	浅い皿型	北で小穴多数、撹乱の可能盛大	51.7	—	
SK211C	楕円形	1.04	0.74	45・35	褐灰色小礫混砂質土	逆台形	中央付近で小穴1穴	51.2	弥生土器体部片	
SK212C	楕円形、北東で肩崩れ	1.29	0.75	64・54	暗褐色小礫混砂質土	逆台形	中央付近で小穴1穴	51.1	—	
SK213C	不整円形、肩が全体に崩れ、もとは隅丸方形	1.51	1.31	106・67	暗褐色小礫混砂質土	逆台形	中央付近で小穴1穴	50.7	—	
SK221C	隅丸方形	1.94	1.74	38・2	黄灰色砂質土	逆台形	—	49.8	弥生土器片多数	貯蔵穴
SK222C	隅丸方形	0.82	0.77	47・20	黄灰色砂質土	逆台形	—	47.8	—	
SK241C	隅丸方形	1.01	0.73	41・25	黄灰色砂質土	V字形	中央付近で小穴1穴	50.9	—	
SK242C	楕円形	1.80	0.96	15	—	浅い皿型	—	47.7	—	自然の落ち込み？
SK243C	楕円形	1.00	0.66	10・0	—	浅い皿型	—	47.3	—	自然の落ち込み？
SK244C	ほぼ円形	0.66~0.71	—	19・10	—	逆台形	端から小穴1穴	47.6	—	
SK245C	楕円形	0.78	0.57	12	—	浅い皿型	—	49.0	土器小片	自然の落ち込み？
SK246C	不整形	1.66	0.98	14	—	浅い皿型	—	46.9	土器小片	自然の落ち込み？
SK251C	不整形、北側が大きく崩れる、もとは隅丸方形	1.26	0.88	80	黄灰色砂質土、明褐灰色シルト質土を挟む	逆台形	—	43.3	—	
SK252C	楕円形	1.11	0.87	54	黄灰色砂質土	逆台形	—	43.5	—	
SK253C	不整円形	1.05	0.78	50～62	黄灰色砂質土、下部に褐色砂礫（花崗岩風化土）	逆台形	2穴の小穴	46.0	—	
SK261D	隅丸方形、南東部で肩崩れ	1.20	1.05	40	—	逆台形	中央付近で小穴1穴	54.8	—	
SK262D	不整形、東隅と西隅で肩崩れ、元は隅丸方形	1.22	0.90	95・85	—	逆台形	中央付近で小穴1穴	54.6	—	261Dと類似
SK263D	隅丸方形	1.68	1.58	61	—	逆台形	中央付近で小穴1穴	55.0	—	261Dと類似
SK271D	不整形、東側が肩崩れ、元は隅丸方形	1.44	1.11	73・50	—	逆台形	中央付近で小穴1穴	54.2	—	261Dと類似
SK272D	隅丸方形、東側では肩崩れ	1.71	0.98	108	—	逆台形	中央付近で小穴1穴	53.0	—	261Dと類似
SK281D	隅丸方形	1.53	1.34	116～126	—	2段掘り状	中央付近で小穴1穴	52.4	弥生土器片、サヌカイト剥片	
SK282D	隅丸方形	1.46	0.95	60・42	—	逆台形	溝状窪み、別遺構か	52.6	弥生土器鉢、サヌカイト剥片	
SK283D	不整形	1.57	0.94	86・75	—	逆台形	中央付近で小穴1穴	53.3	—	
SK291D	隅丸方形	1.96	1.45	46・3	灰黄色砂質土、暗灰黄色砂質土	鈍角三角形	中央付近で小穴1穴	47.0	—	
SK292D	不整円形	1.21~1.26	—	68・48	灰黄色砂質土、下半部は礫混じり	逆台形	中央付近で小穴1穴、周縁部で見つかったものは撹乱か	45.6	—	
SK293D	不整形	1.50	1.12	58・36	褐色小礫混じり砂質土	逆台形	3段落ち	47.1	—	
SK301D	楕円形	1.32	1.02	88・66	地山ブロック混じり灰黄色砂質土	逆台形	中央付近で小穴1穴	49.2	—	

遺構番号	形状	長径（長軸）	短径（短軸）	深さ（cm）	埋土	断面形状	底部の状況	標高	出土遺物	備考
SK302D	隅丸方形、肩がかなり崩れている	1.91	1.38	110・97	灰黄色粘質土・砂質土、褐黄色砂質土、上部に炭化物ブロック混	逆台形	—	49.9	—	
SK303D	不整形、肩崩れで、元は隅丸方形	1.16	1.06	85・68	褐色小礫混じり砂質土	逆台形	中央付近で小穴1穴	50.6	—	
SK304D	楕円形	1.37	0.82	102・77	—	逆台形	中央付近で小穴1穴	49.9	—	
SK311D	隅丸方形	1.53	1.35	46・41	淡灰色砂質土混じり灰黄色砂質土	逆台形	中央付近で小穴1穴、周縁部で4穴	47.7	弥生土器甕片、桃核	
SK312D	隅丸方形	1.49	1.05	29・21	淡灰色砂質土混じり灰黄色砂質土	逆台形	—	49.2	土器小片	
SK313D	不整形	1.48	1.12	48・21	淡灰色砂質土混じり灰黄色砂質土	逆台形	周縁部で4穴	49.6	土器小片	
SK314D	楕円形	1.61	1.06	67	—	なだらか	—	50.3	弥生土器底部	
SK321D	隅丸方形	1.36	1.20	98・66	—	逆台形	中央付近で小穴1穴	45.8	—	
SK322D	楕円形	1.76	1.06	30・11	—	鈍角三角形	—	47.1	弥生土器甕、サヌカイト剥片	
SK323D	不整形	1.50~1.55	—	111・88	黒色ブロック混じり灰黄色砂質土、灰黄色砂質土混じり黄褐色小礫	逆台形	—	48.2	弥生土器小片	
SK324D	隅丸方形	1.83	1.23	46・28	—	逆台形	—	48.1	—	
SK331D	不整円形	1.10	0.78	108～115	黄灰色砂質土、底に灰色粘質土	段落ち状	中央付近で小穴1穴	40.1	—	
SK332D	不整形、北肩が崩れ、元は隅丸方形	1.71	1.40	65・48	黄灰色砂質土、灰色粘土質	逆台形	中央付近で小穴1穴	42.2	—	
SK333D	歪んだ円形	1.45	—	35	—	段落ち状	中央付近で小穴1穴	41.5	—	
SK334D	ほぼ円形	0.80	—	38・3	—	鈍角三角形	中央付近で小穴1穴	42.6	—	
SK335D	円形	1.00	—	15	—		中央付近で小穴1穴	43.2	—	
SK336D	楕円形	2.22	0.86	20	黄灰色小礫混じり砂質土	浅い皿型	—	38.4	—	現耕作土を含み、近世以降の所産
SK341E	楕円形	1.79	1.26	116・90	—	逆台形	—	48.0	—	
SK342E	不整円形	1.74	1.04	72～80	—	逆台形	中央付近で小穴1穴	47.3	—	
SK343E	隅丸方形	1.16	0.68	54	—		中央付近で小穴1穴	49.0	—	
SK344E	隅丸方形	0.96	0.80	71	—	逆台形	中央付近で小穴1穴	49.2	—	
SK351F	楕円形	1.75	1.36	132～158	—	逆台形	—	50.8	—	
SK352G	楕円形、東側で肩崩れで、元は円形	1.90	1.58	162～173	—	逆台形	—	53.9	弥生土器小片	
SK361G	楕円形	1.10	0.91	8	黄灰色砂質土	浅い皿型	—	53.0	—	
SK362G	円形	1.20	—	17	黄灰色砂質土	浅い皿型	—	52.5	—	自然の落ち込み？
SK363G	楕円形	1.16	0.77	26・12	黄灰色砂質土	浅い皿型	—	52.4	—	
SK364G	楕円形	1.38	1.06	20・12	黄灰色砂質土	浅い皿型	—	53.6	—	—

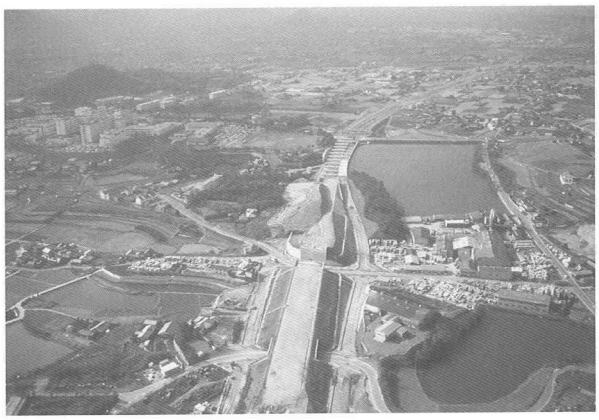
報告書抄録

ふりがな	にしうらたにいせき						
書名	西浦谷遺跡						
副書名	高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
巻次	第11冊						
編著者名	山元素子						
編集機関	香川県埋蔵文化財センター						
所在地	〒762－0024　香川県坂出市府中町字南谷5001－4　　電話0877－48－2191						
発行機関	香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局						
発行年月日	2007(平成19)年3月30日						

総頁数	目次等	本文	表	図版	挿図枚数	写真枚数	付図
190	19	157	7	4、CD	116	32	3

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町	遺跡番号					
にしうらだにいせき 西浦谷遺跡	香川県 木田郡 三木町 池戸	37341		34° 17′ 39″	134° 7′ 47″	19950401 ～ 19960331 19961001 ～ 19970131	12,672	高松東道路 建設に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西浦谷遺跡	集落	弥生時代中期末～後期前半	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、段状遺構、土坑	弥生土器、石器	焼失住居跡
	古墳	古墳時代後期	古墳、土坑	須恵器、鉄製品（釘）	



遠景（東から高松平野を望む）

Ⅰ区全景（南から）

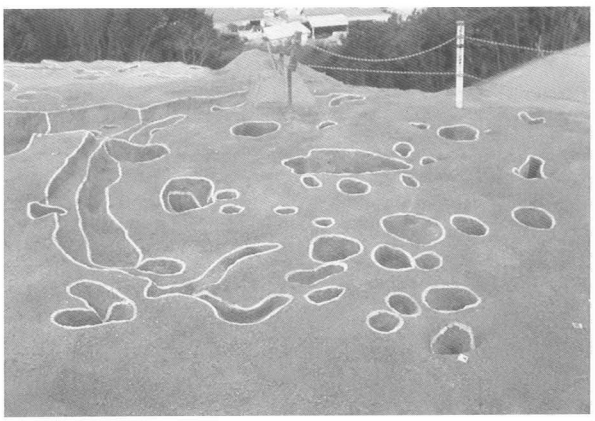
Ⅰ-1・2・Ⅲ-1区東斜面全景（北より）

Ⅲ-1区全景（西より）

Ⅰ-1・2区SH02D完掘状況北（東より）

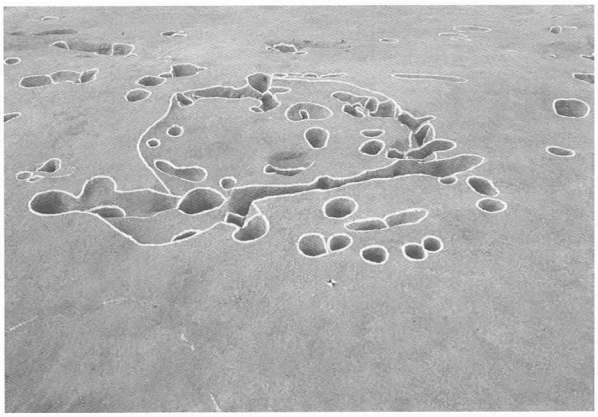
Ⅰ-2区SH03D完掘状況（西より）

Ⅱ-1区SH05F完掘状況北（西より）

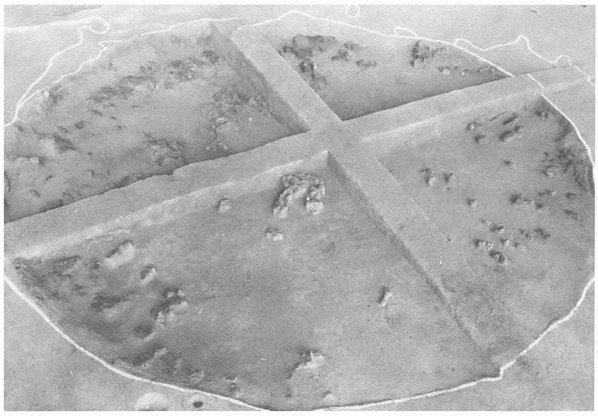


Ⅳ区SH07A完掘状況（南より）

図版2



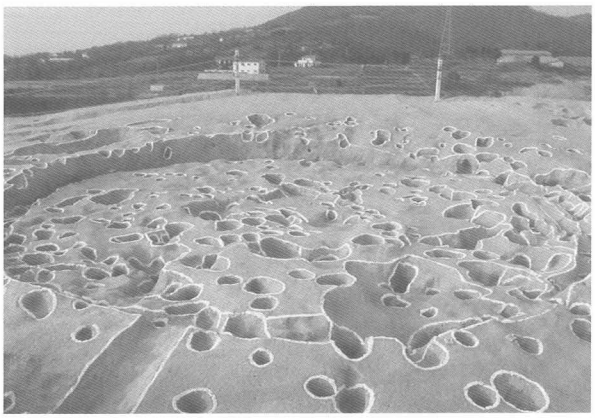
II-1区　SH11A完掘状況北（東より）



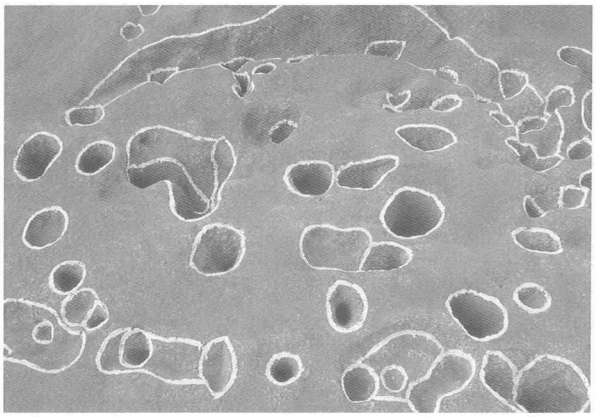
Ⅳ区SH14B 炭化材検出全景（南より）

Ⅳ区SH14B 北西区炭化材検出状況（北より）

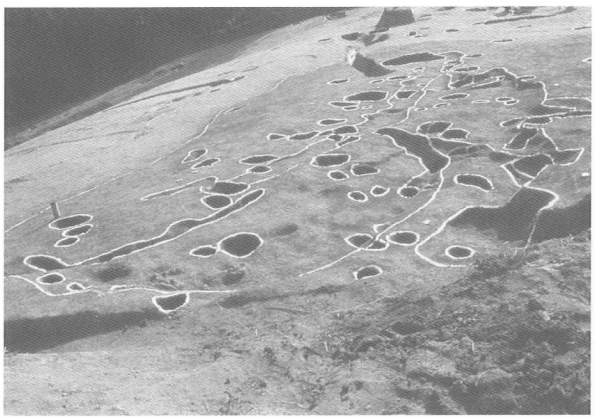
Ⅳ区SH14B 北西区炭化材検出状況（西より）



Ⅳ区SH14B全景（南より）



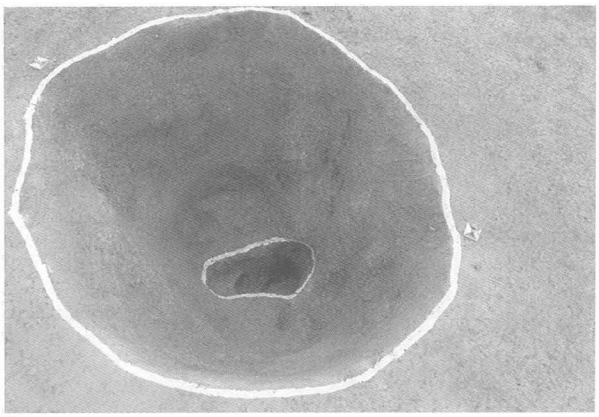
III-2区SH18C完掘状況（南東より）



Ⅴ区SH21B完掘全景（SH25B～27Bを含む）（北より）

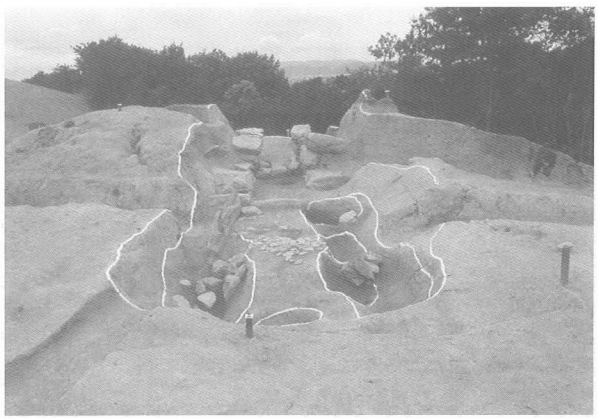
Ⅳ区SI01C・02C付近完掘全景（東より）

Ⅳ区SI01C・02C付近完掘全景（東より）



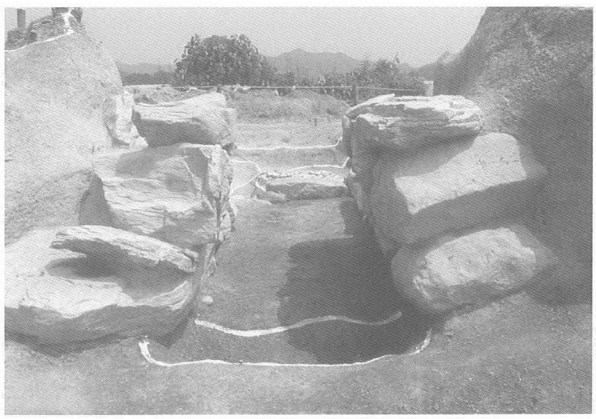
Ⅱ-2区SK021A完掘状況（北西より）

Ⅰ-1・2区1号墳全景（南より）

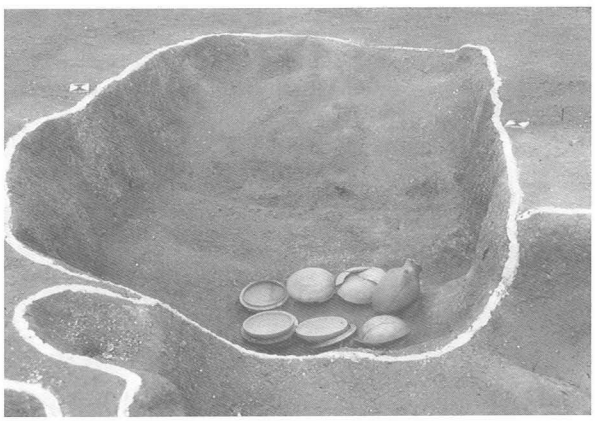


Ⅰ-1・2区1号墳石室検出状況（東より）

Ⅰ-1・2区1号墳羨道部検出状況（南より）



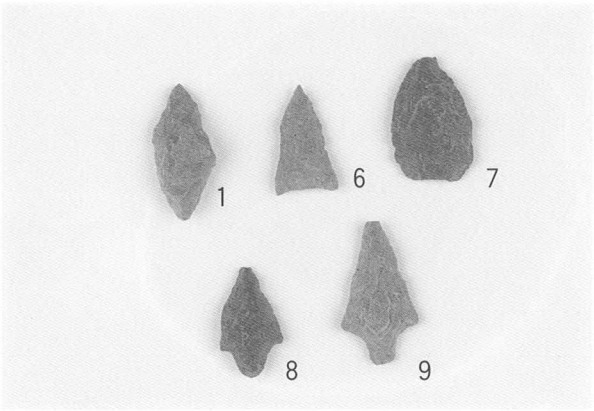
Ⅰ-1・2区1号墳羨道部検出状況（北西より）



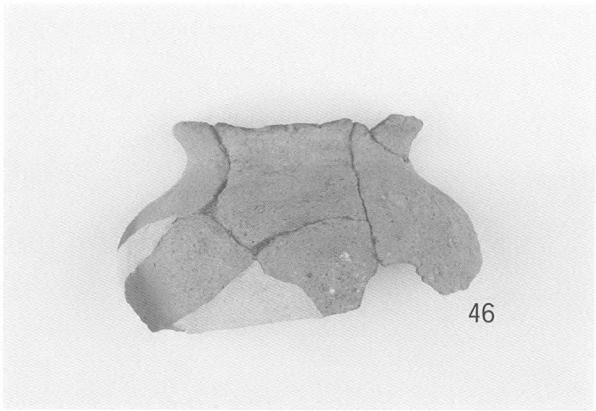
Ⅰ-2区ST01須恵器出土状況（南より）

Ⅰ-2区ST01須恵器出土状況（北より）

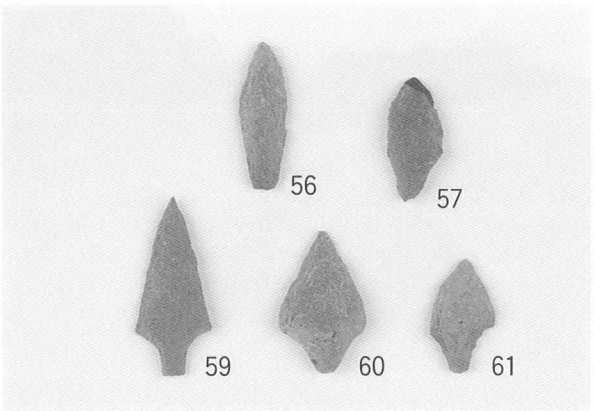
図版4



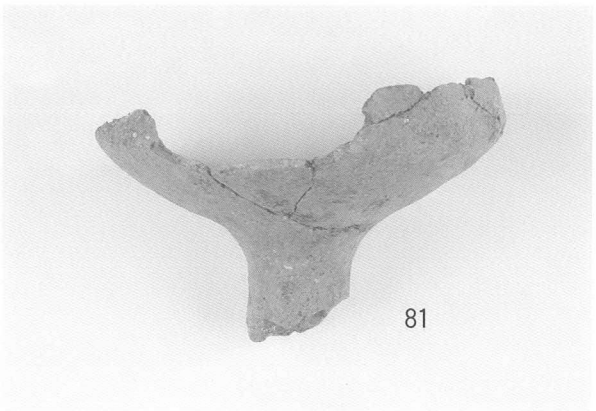
Ⅰ-1・2区SH02D



Ⅳ区SH14B



Ⅳ区SH14B



Ⅴ区SH16C

Ⅳ区SK004C

Ⅳ区SK161C

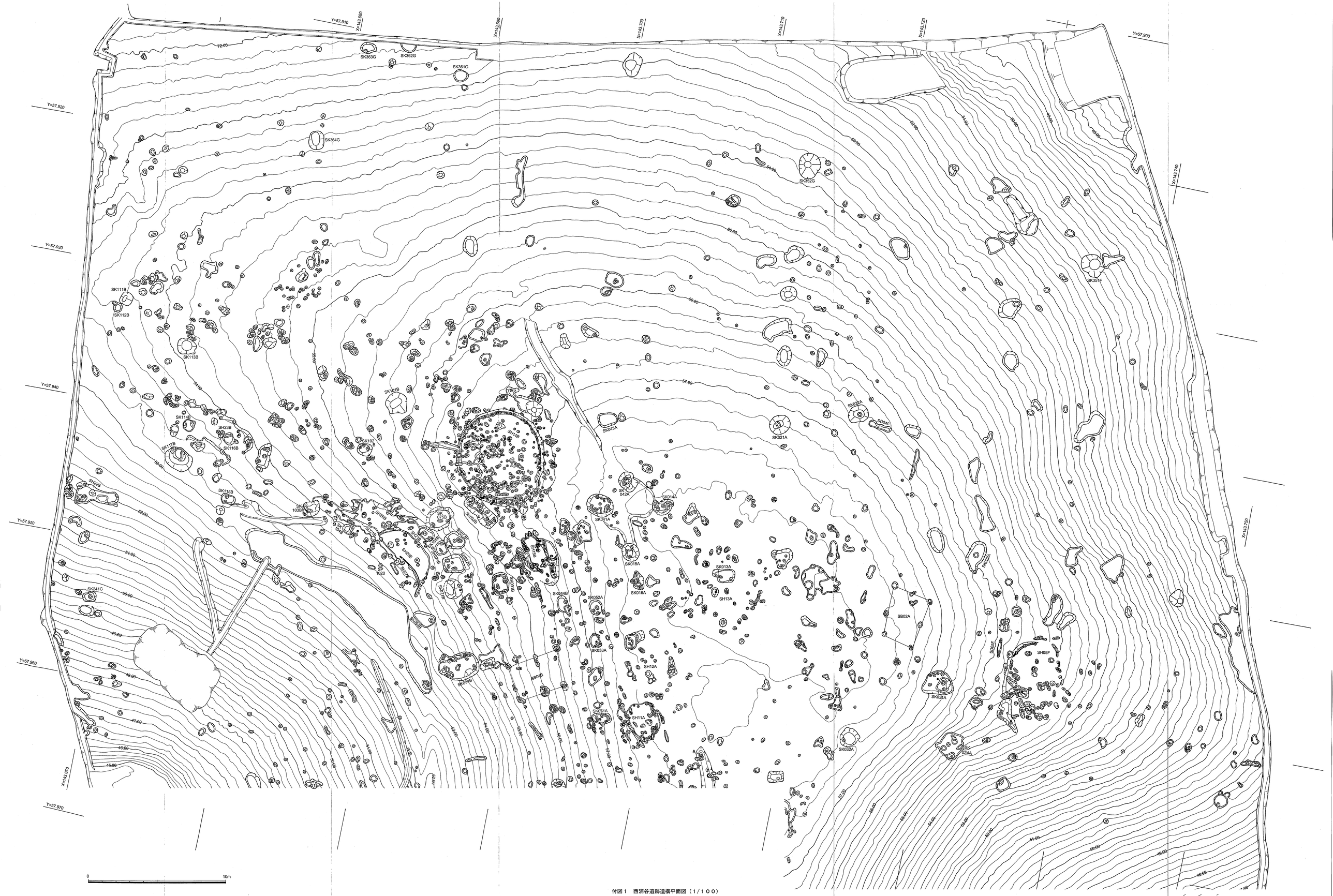
Ⅰ-2区ST01

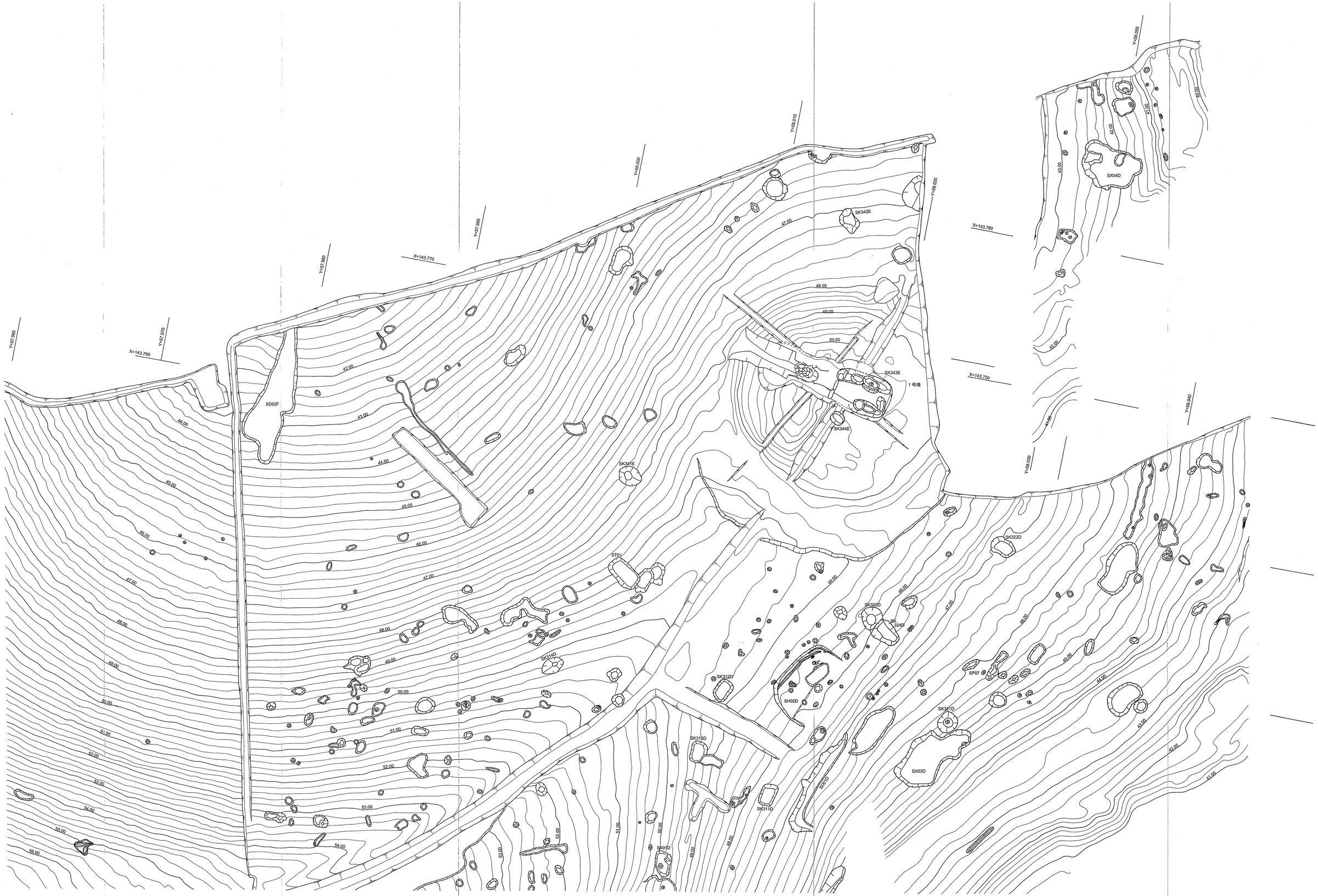
1号墳出土須恵器

高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第 11 冊

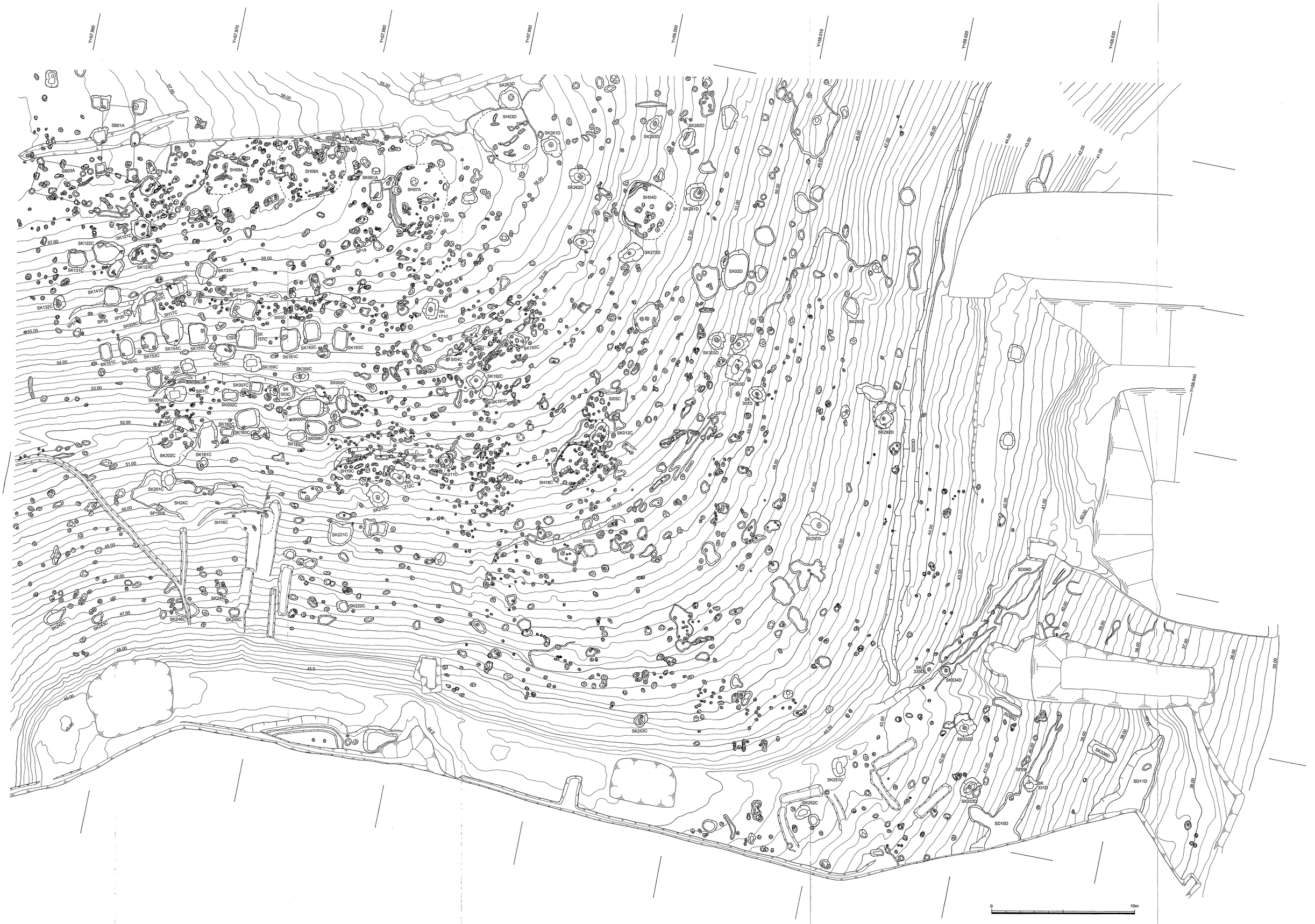
西 浦 谷 遺 跡

平成19年３月30日　発行
編集　香川県埋蔵文化財センター
〒762－0024　香川県坂出市府中町字南谷5001－４
電　話（0877）－48－2191
発　行　香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局
印刷　㈱中央印刷所


Y=57.910
X=143.680
X=143.690
X=143.700
X=143.710
X=143.720
Y=57.900
Y=57.920
Y=57.930
Y=57.940
Y=57.950
Y=57.960
Y=57.970
X=143.670
X=143.740
X=143.750
SK363G
SK362G
SK361G
SK364G
SK352G
SK351F
SK111B
SK112B
SK113B
SK114B
SH23B
SK116B
SK117B
SK115B
SK102B
SK103B
SK1020
SK1018
SK1019
SK241C
SK043A
SK021A
SK022A
SD04F
SK042A
SK014A
SK041A
SK015A
SK016A
SK013A
SH13A
SK044B
SK052A
SK053A
SH12A
SK051A
SH11A
SK032A
SK031A
SB02A
SH05F
SK024A
SD04B
SD05B
SH14B
SH15B
SH16B
SH17B
SH18B
SH19B
SH20B
SH21B
SH22B
SD02B
SD03B
SD04B
SD05B
SD06B
SD07B
SD08B
SD09B
SD10B
SD11B
SD12B
SD13B
SD14B
SD15B
SD16B
SD17B
SD18B
SD19B
SD20B
SD21B
SD22B
SD23B
SD24B
SD25B
SD26B
SD27B
SD28B
SD29B
SD30B
SD31B
SD32B
SD33B
SD34B
SD35B
SD36B
SD37B
SD38B
SD39B
SD40B
SD41B



付図２　西浦谷遺跡遺構平面図（１/１００）



付図３　西浦谷遺跡遺構平面図（１/１００）